田村遺跡

－Ⅴ－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集

1988

福岡市教育委員会

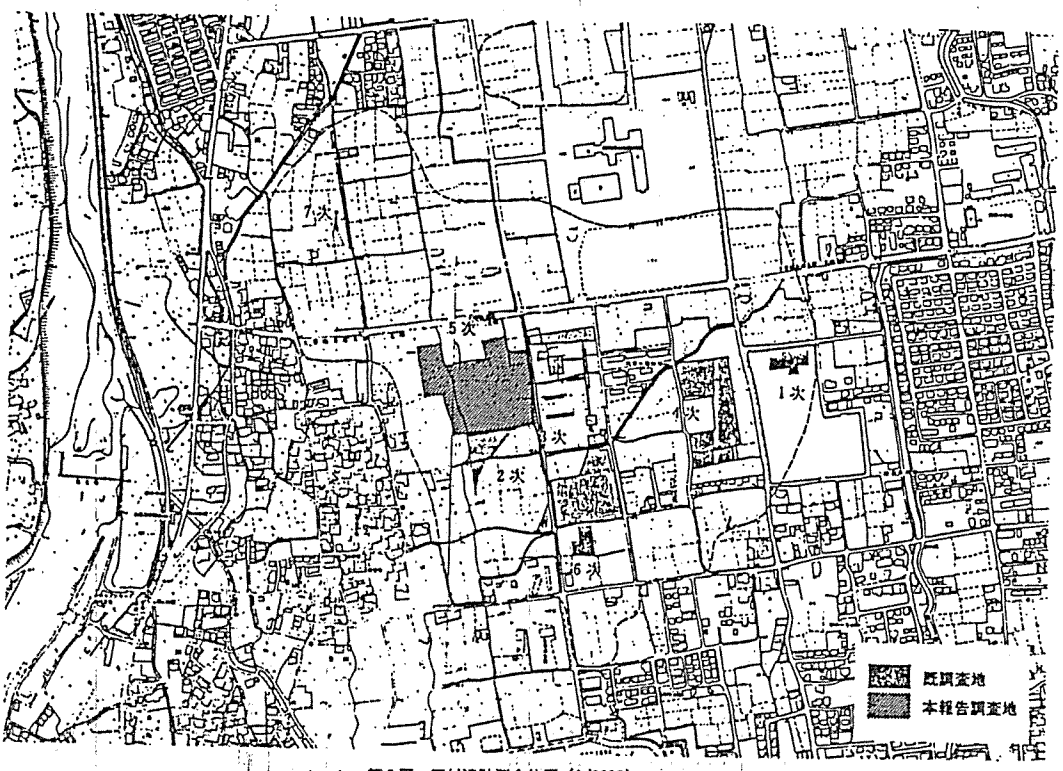
No.15840

正誤表

田村遺跡V　福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集

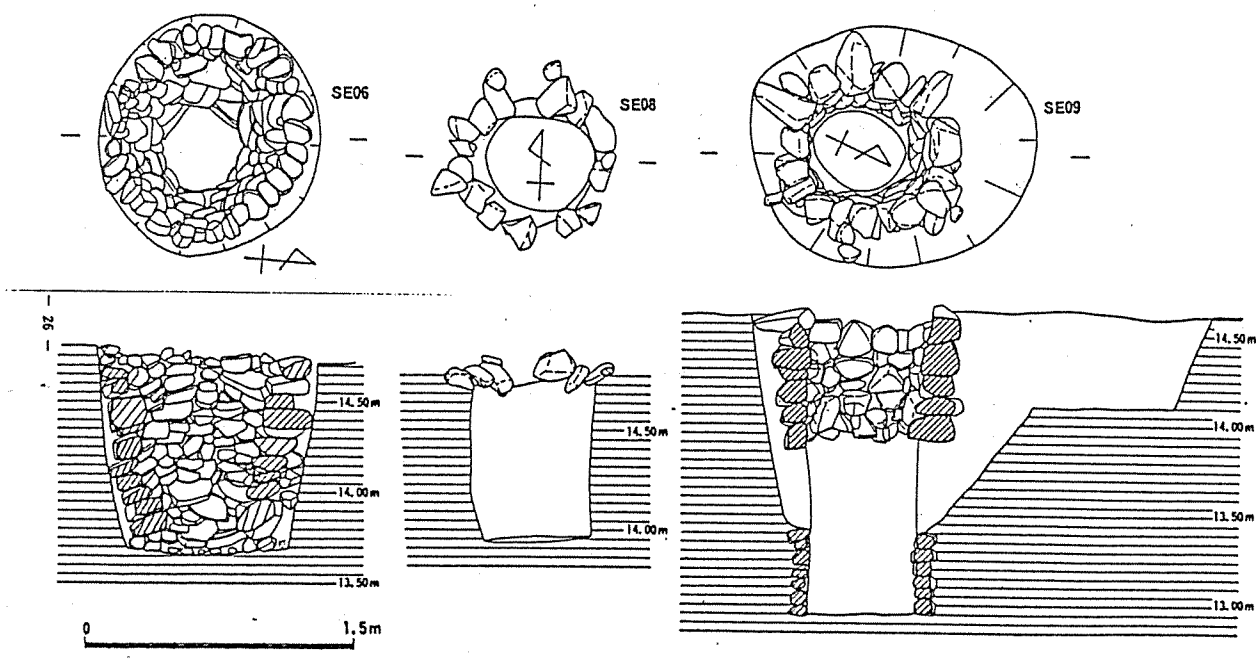
頁	行	正	誤	頁	行	正	誤
2	第1表	第一表	第1表	111	27	土師器.小皿・杯片	上師器小皿・杯片
		高柳	高柳	112	5	荘園領主土地	荘園領主が土地
52	8	長さ75m	長さ1．2m	図版54		183	184
72	20	小皿（15）	小皿（17）			184	185
	22	杯（16）	杯（18）			185	186
	24	椀（17）	椀（19）			186	187
	26	鍋（18）	鍋（20）			187	188
	33	土錘（19）	土錘（21）			188	189
105	20	小皿（5・6）	小皿（1・2）			189	190
	22	杯（8）	杯（4）			190	191
	24	丸底杯（7）	丸底杯（3）	図版58		273	237

遺構配置図（付図）に遺構番号の欠落がありましたので、別添図の通り訂正します。



P.5 第3図　田村遺跡群全体図（1/8000）

田村遺跡 V　福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集



P.26　第12図　井戸実測図 (2) (1/30)

No. 15840

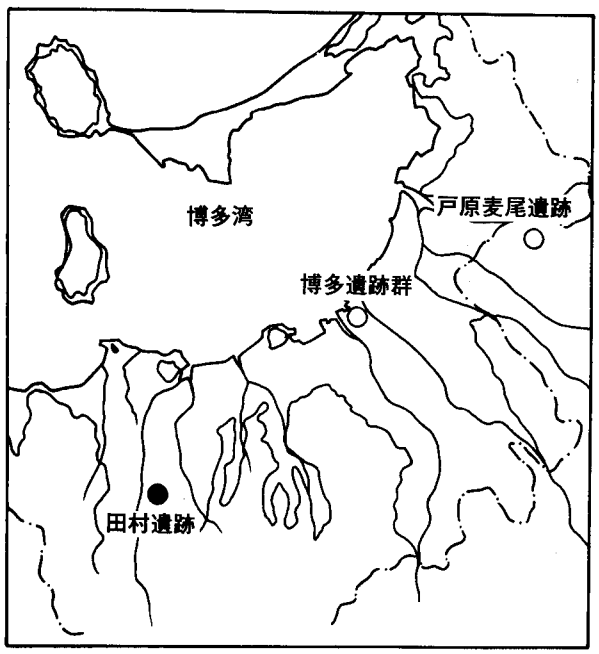
B
C
D
E
4
5
6
7
8
9
10
SX15
Pit 2721
SB70
SX31
SX42
Pit 01
SX35
SX28
SB61
Pit 2506
SX22
SX36
SE09
SX18
SX17
SX34
SE08
SX16
SX44
SX24
SX38
SX41
SX05
SD101
SX49
SX50
SX51
SB72
SB83
SX55
SE06
Pit 2582
Pit 2473
SX03
Pit 2586
SX47
SB62
SX48
SB86
SB77
SB87
SX52
SX53
SB63
SB88
SX56
SB64
SD112
SB65
SE04
SE11
SX57
SB79
SX58
SB67
SB80
SB66
SE02
Pit 2180
SB81
SB82
SE03
SB89
SB68
SB95
SB69
SB90
SB91
SB96

← 付図 →

田 村 遺 跡

－ V －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集



遺跡略号　TMR
遺跡調査番号　8408

1988年3月

福岡市教育委員会

4954

序　文

緑豊かな田園地帯が広がる早良平野のほぼ中央に位置する田村地区にも近年急速な宅地化の波が押し寄せています。それに伴い道路の整備、学校建設等の事業が数多く行われています。

福岡市教育委員会では田村団地内に建設される小学校予定地の埋蔵文化財発掘調査を昭和59年から60年にかけて行いました。この調査では、縄文時代晩期の遺構、弥生時代前期の甕棺墓、条里制遺構、平安時代から鎌倉時代にかけての溝・建物・井戸等が検出されました。本書はこの内の条里制遺構、平安時代から鎌倉時代にかけての調査成果をまとめたものです。

本書が市民の皆様の文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願うと共に研究資料の一つとなれば幸いです。

発掘調査から資料整理に至まで、地元関係者をはじめ多くの方々のご協力をいただきました。ここに心から謝意を表するものです。

昭和63年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤善郎

例　言

1．本書は福岡市建築局による田村小学校建設に伴ない、福岡市教育委員会が昭和59（1984）年度から昭和60（1985）年度にかけて発掘調査を実施した田村遺跡第５次調査の古代末から中世にかけての遺構の報告である。他のものについては次報告で行なう。

2．本書に掲載した遺構の実測は二宮忠司、浜石哲也、佐藤一郎、赤司善彦、岡部裕俊、撮影は二宮、浜石があたった。空中写真は空中写真稲富による。

3．本書に掲載した遺物の実測は金属製品を久保寿一郎、他は佐藤、撮影は二宮、松村道博があたった。

4．製図は佐藤、藤村佳公恵、大庭友子が行なった。

5．本書の執筆は、Ⅰを二宮、他は佐藤が行なった。

6．本書に使用する基準方位は磁北で、真北との偏差6°40′W である。

7．本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管される。

8．本書の編集は佐藤が行なった。

本　文　目　次

序

Ⅰ　はじめに…… 1
　1　調査にいたる経過…… 1
　2　調査の組織…… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境…… 2

Ⅲ　発掘調査の概要と経過…… 4

Ⅳ　遺構と遺物…… 6
　1　検出遺構…… 6
　　掘立柱建物…… 6
　　井戸…… 24
　　土坑…… 28
　　溝…… 47
　2　出土遺物…… 52
　　掘立柱建物・ピット状遺構出土遺物（柱穴）…… 52
　　井戸出土遺物…… 58
　　土壙出土遺物…… 62
　　溝出土遺物…… 69
　　SD100 出土遺物…… 74

Ⅴ　小　結…… 111

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡 …… 3
第２図　調査区の設定 …… 4
第３図　田村遺跡群全体図 …… 5
第４図　Pit・掘立柱建物実測図 (1) …… 17
第５図　掘立柱建物実測図 (2) …… 18
第６図　掘立柱建物実測図 (3) …… 19
第７図　掘立柱建物実測図 (4) …… 20
第８図　掘立柱建物実測図 (5) …… 21
第９図　掘立柱建物実測図 (6) …… 22
第10図　掘立柱建物実測図 (7) …… 23
第11図　井戸実測図 (1) …… 25
第12図　井戸実測図 (2) …… 26
第13図　井戸実測図 (3) …… 折り込み
第14図　土坑墓実測図 …… 29
第15図　土坑実測図 (1) …… 30
第16図　土坑実測図 (2) …… 31
第17図　土坑実測図 (3) …… 32
第18図　土坑実測図 (4) …… 33
第19図　土坑実測図 (5) …… 34
第20図　土坑実測図 (6) …… 35
第21図　土坑実測図 (7) …… 36
第22図　土坑実測図 (8) …… 37
第23図　土坑実測図 (9) …… 38
第24図　土坑実測図 (10) …… 39
第25図　土坑実測図 (11) …… 40
第26図　土坑実測図 (12) …… 41
第27図　土坑実測図 (13) …… 42
第28図　土坑実測図 (14) …… 43
第29図　溝配置図 …… 48
第30図　溝土層実測図 …… 49

第31図　杭列実測図 …… 51
第32図　掘立柱建物・Pit 出土遺物実測図 (1) …… 54
第33図　Pit 出土遺物実測図 (2) …… 55
第34図　Pit 出土遺物実測図 (3) …… 56
第35図　井戸出土遺物実測図 (1) …… 59
第36図　井戸出土遺物実測図 (2) …… 60
第37図　土坑墓出土遺物実測図 …… 63
第38図　土坑出土遺物実測図 (1) …… 65
第39図　土坑出土遺物実測図 (2) …… 66
第40図　土坑出土遺物実測図 (3) …… 67
第41図　SX51出土土器実測図 …… 68
第42図　SD01出土土器実測図 (1) …… 70
第43図　SD01出土土器実測図 (2) …… 71
第44図　溝出土土器実測図 …… 73
第45図　SD100下層出土土師器実測図 …… 75
第46図　SD100下層出土白磁実測図 …… 76
第47図　SD100下層出土青磁他実測図 …… 78
第48図　SD100下層出土須恵器実測図 …… 79
第49図　SD100出土土師器・小皿・杯実測図 …… 81
第50図　SD100出土土師器杯実測図 …… 82
第51図　SD100出土土師器丸底杯・瓦器小皿実測図 …… 83
第52図　SD100出土瓦器椀実測図 (1) …… 85
第53図　SD100出土瓦器椀実測図 (2) …… 86
第54図　SD100出土瓦器椀実測図 (3) …… 88
第55図　SD100出土瓦器椀実測図 (4) …… 89
第56図　SD100出土白磁椀実測図 (1) …… 90
第57図　SD100出土白磁椀実測図 (2) …… 91
第58図　SD100出土白磁・龍泉窯系青磁実測図 …… 93
第59図　SD100出土龍泉窯系青磁実測図 …… 94
第60図　SD100出土同安窯系青磁椀実測図 …… 95
第61図　SD100出土同安窯系青磁皿・越州窯系青磁実測図 …… 96
第62図　SD100出土黒釉陶器・白磁・青白磁・高麗青磁実測図 …… 98
第63図　SD100出土陶器実測図 (1) …… 99

第64図　SD100出土陶器実測図 (2) …… 100
第65図　SD100出土遺物実測図 …… 101
第66図　SD100出土滑石製石鍋実測図 …… 102
第67図　SD100出土石製品実測図 …… 103
第68図　SD100出土木製品実測図 …… 104
第69図　溝出土遺物実測図 …… 105
第70図　金属製品実測図・銅銭拓影 …… 106

表　目　次

第１表　田村遺跡発掘調査一覧表 …… 2
第２表　土坑一覧表 …… 43
第３表　出土土器計測表 …… 107
第４表　土師器　法量の変遷 …… 110

付　図

付　図　田村遺跡第10地点遺構配置図

図　版　目　次

図版１　１．ａ区西半空中写真　２．ａ区東半空中写真
図版２　１．ｃ区空中写真　２．ａ区東半空中写真
図版３　１．ｂ区北半空中写真　２．ｂ区南半空中写真
図版４　１．ｄ区全景（東から）　２．ｄ区SD01（南から）
図版５　調査区空中写真
図版６　ａ区西半とｂ区北半（東南から）
図版７　１．ａ区西半掘立柱建物群（南から）　２．ａ区西半掘立柱建物群（西から）
図版８　１．ａ区東半掘立柱建物群（南から）　２．ａ区西半掘立柱建物群（南東から）
図版９　１．ａ区北西掘立柱建物群（西から）　２．ａ区南東掘立柱建物群（南から）
図版10　１．ａ区西半中央掘立柱建物群(西から)　２．ａ区西半掘立柱建物群（西から）
図版11　１．ｂ区 SB79・SB80　２．ｂ区 SB89・SB95
図版12　１．ｂ区 SB82　２．ｂ区 SB77
図版13　１．ｂ区北側掘立柱建物群　２．ｃ区 SB118・SB119
図版14　１．ｃ区東北掘立柱建物群　２．ｃ区西半掘立柱建物群
図版15　１．ｃ区 SB104（北から）　２．ｃ区南西掘立柱建物群
図版16　１．SE03　２．SE03断面（北から）
図版17　１．SE04　２．SE06
図版18　１．SE05　２．SE05断面（南東から）
図版19　１．SE07　２．SE07断面（東から）
図版20　１．SE08・SE09　２．SE08断面（西から）
図版21　１．SE01　２．SE10断面（東から）
図版22　１．SE02（SD100内）　２．Pit01（西から）
図版23　１．SD100南側　２．SD100土層（南から）
図版24　１．ｂ区周辺（南上空から）　２．ｂ区周辺（北上空から）
図版25　１．SK01（南から）　２．SK01副葬遺物（北から）
図版26　１．SB47柱穴（西から）　２．SK05（東から）
図版27　１．SK17（東北から）　２．SK20（南から）
図版28　１．SX51　２．調査区域と周辺
図版29　掘立柱建物・Pit 出土遺物
図版30　Pit 出土遺物 (1)

図版31　Pit 出土遺物 (2)
図版32　井戸出土遺物
図版33　土坑出土遺物 (1)
図版34　土坑出土遺物 (2)
図版35　土坑出土遺物 (3)
図版36　SX51出土土師器
図版37　SD01出土土器
図版38　溝出土遺物
図版39　SD100下層出土土器
図版40　SD100下層出土陶磁器・石製品
図版41　SD100下層出土青磁椀・須恵器
図版42　SD100出土土師器小皿
図版43　SD100出土土師器杯 (1)
図版44　SD100出土土師器杯 (2)
図版45　SD100出土土師器杯・小皿・椀
図版46　SD100出土瓦器椀 (1)
図版47　SD100出土瓦器椀 (2)
図版48　SD100出土瓦器椀 (3)
図版49　SD100出土白磁椀 (1)
図版50　SD100出土白磁椀 (2)
図版51　SD100出土白磁皿・龍泉窯系青磁椀
図版52　SD100同安窯系青磁椀
図版53　SD100同安窯系青磁椀・越州窯系青磁
図版54　SD100出土陶磁器
図版55　SD100出土高麗青磁
図版56　SD100出土陶器・瓦質土器・鞴羽口
図版57　SD100出土石製品
図版58　SD100出土木製品 (1)
図版59　SD100出土木製品 (2)
図版60　溝出土遺物・金属製品

Ⅰ はじめに

1　調査に至る経過

1980(昭和55)年より市営住宅建築予定地内の埋蔵文化財の事前発掘調査が開始され、多くの遺構に伴って数多くの遺物が出土している。これは『田村遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集・第102集・第167集)としてすでに刊行されている。この田村遺跡発掘調査途中において小学校建設が計画され、福岡市建築局ならびに市教育委員会施設課から文化課(現埋蔵文化財課第1係)に埋蔵文化財の有無について照会があった。予定地は第1次調査地点の北側で最も遺構の残存状態がよいところであり、縄文時代から鎌倉時代の複合遺跡で田村遺跡の中心地であることが判明していた。このため試掘調査を行いその実態を調査した結果、予想どおりの遺構を3面検出したため建築局、施設課と協議をもち、全域(16,000㎡)を発掘調査対象面積とし、昭和59年7月から昭和60年4月までと6月に発掘調査を行った。

2　調査の組織

調査委託　福岡市教育委員会施設課

調査主体　福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財第1係(現埋蔵文化財課第1係)
生田征生(前課長)　柳田純孝(前係長・課長)　折尾学(係長)　岡嶋洋一(前庶務)
岸田隆(庶務)二宮忠司・浜石哲也・佐藤一郎(調査担当)

調査・整理補助　赤司善彦・岡部裕俊・大庭友子・田中稿二・村上かをり・藤村佳公恵

資料整理・調査協力者　牛尾豊・太田孝房・尾崎達也・鬼丸邦宏・榊太郎・榊光雄・柴田大正・広田義美・藤崎友記・結城弥澄・青柳恵子・有吉千栄子・伊藤みどり・牛尾秋子・牛尾シキヨ・牛尾奈美枝・牛尾二三子・牛尾睦子・大内文恵・大穂朝子・大穂栄子・尾崎八重・尾崎京子・太田頼子・金子ヨシ子・菊池栄子・菊池キミ・菊池ミツヨ・北島藤子・菰田洋子・斎藤美紀枝・榊スミ子・清水文代・正崎由須子・杉村文子・惣慶トミ子・多田映子・典略初・戸渡洋美・中牟田サカエ・鍋山千鶴子・西島タミエ・西島初子・西納テル子・西納トシエ・能美八重子・浜田澄美枝・林嘉子・平田政子・平田ミサ子・平野ミサヲ・藤タケ・藤崎洋子・細川ミサヲ・真名子順子・真名ユキエ・真鍋チエ子・八尋君代・山下サノエ・山西人美・結城君江・結城シズ・結城千賀子・結城信子・吉岡員代・吉岡タヤ子・吉岡蓮枝・米島ハツネ・脇坂ミサヲ

この他にも地元の方々をはじめとして数多くの人々のご理解とご協力に依って発掘調査ならびに資料整理が支障なく行われ、また多くの御指導、御助言を得た。記して感謝したい。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

田村遺跡は、福岡平野の西部、早良平野を流れる室見川の中流東岸福岡市早良区大字田に位置する。遺跡一帯は、江戸期から明治22(1889)年までは早良郡田村と称され、明治22年近隣の7か村と合併し田隈村の大字となり、昭和29(1951)年に福岡市に編入される。

「田村」の地名が文献上に初出するのは応永4(1397)年の飯盛宮行事帳[註1]であるが、大日本地名辞書は近世の田隈村を律令期の和名類聚抄にみられる早良郡能解(のけ)郷に比定している。その説に沿えば、当遺跡が時期は下って安元2(1176)年の八条院領目録に初出する野介荘に属する可能性が考えられる。これから述べていく当遺跡の調査の成果と併せて考えると興味深い。

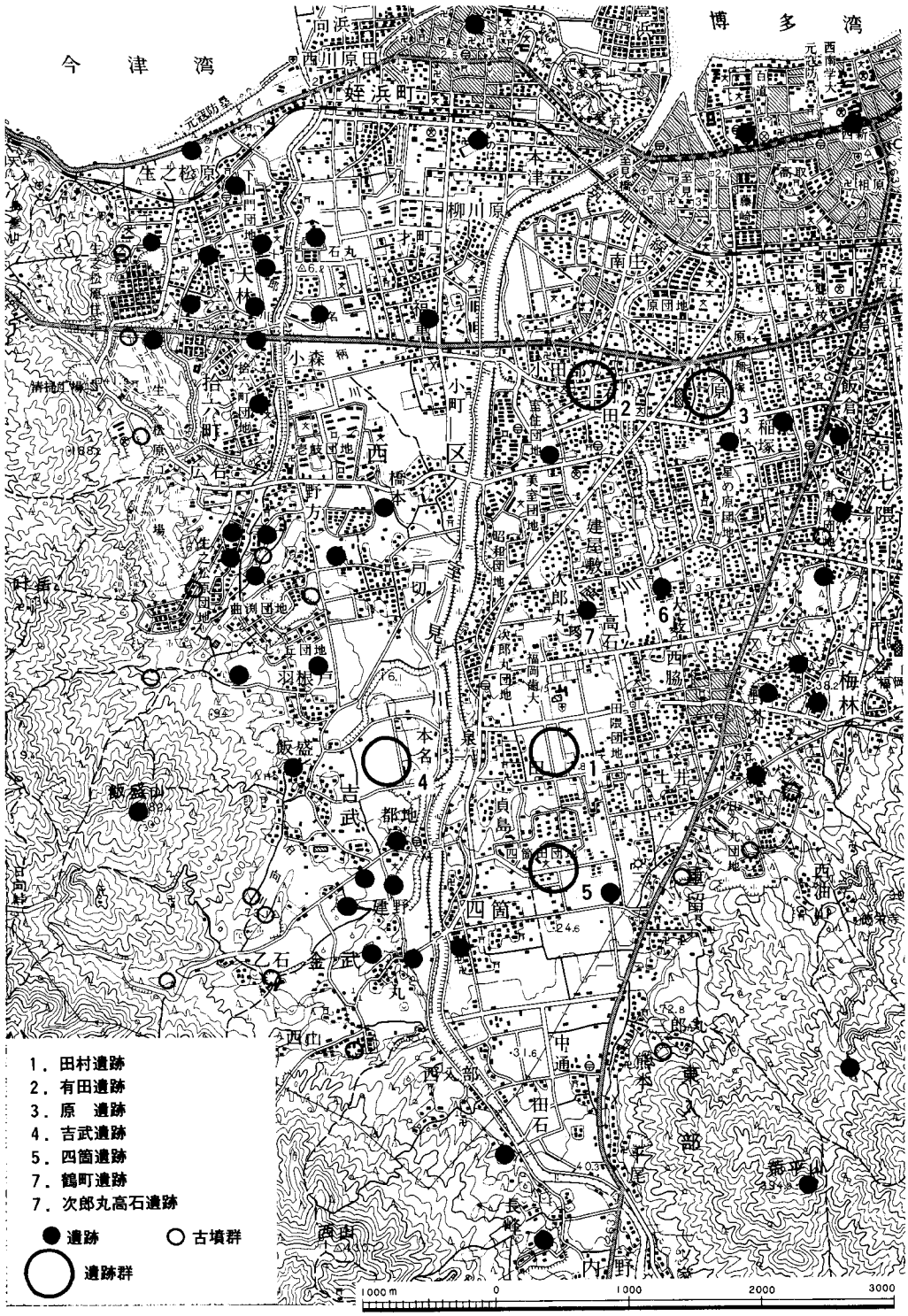
田村遺跡が位置する早良平野は広義の福岡平野の西部にあたり、西を背振山系から北へ派生する叶岳、長垂山塊、東を油山々系から北へ延びる平尾丘陵で限られる。室見川を中心とする河川の沖積作用によってその大部分を形成された平野中央部での発掘調査例は、近年の開発に伴ない増えてきている。田村遺跡のほか、原遺跡、鶴町遺跡、次郎丸高石遺跡、四箇遺跡等があげられる。微高地では集落や墓地、低湿地では杭列や柵状遺構等の水利に関する遺構が検出されている。丘陵や台地から沖積平野に定住するまでには、断えず水系をはじめとする自然環境を改変し、それとの調和をはかっていくために多大な労力を費やさねばならなかった。田村遺跡では、下表に示す通り、1978年来7次にわたって発掘調査を行ってきた。概要については、既刊の報告書を参照されたい。

註1)　福岡市教育委員会『飯盛神社関係史料集』1981　以下　川添昭二他編『福岡県地名大辞典』による。

第一表　田村遺跡発掘調査一覧表

調査次数	調査地区地点	調査面積(m²)	調査期間	備考
1	高柳[註2]	3,000	1978.10.11～1978.12.2	学校建設にともなう
2	第1・2地点[註2]	2,650	1980.12.5～1981.4.14	共住建設にともなう
3	第3・4・5地点[註3]	12,820	1981.4.22～1982.5.15	共住建設にともなう
4	第8地点	8,500	1983.1.20～1983.6.15	共住建設にともなう
5	第10地点	17,000	1984.7.1～1985.7.6	学校建設にともなう
6	第11地点	800	1984.8.1～1984.9.10	店舗建設にともなう
7	第12地点[註4]	1,800	1984.12.1～1984.12.29	道路建設にともなう

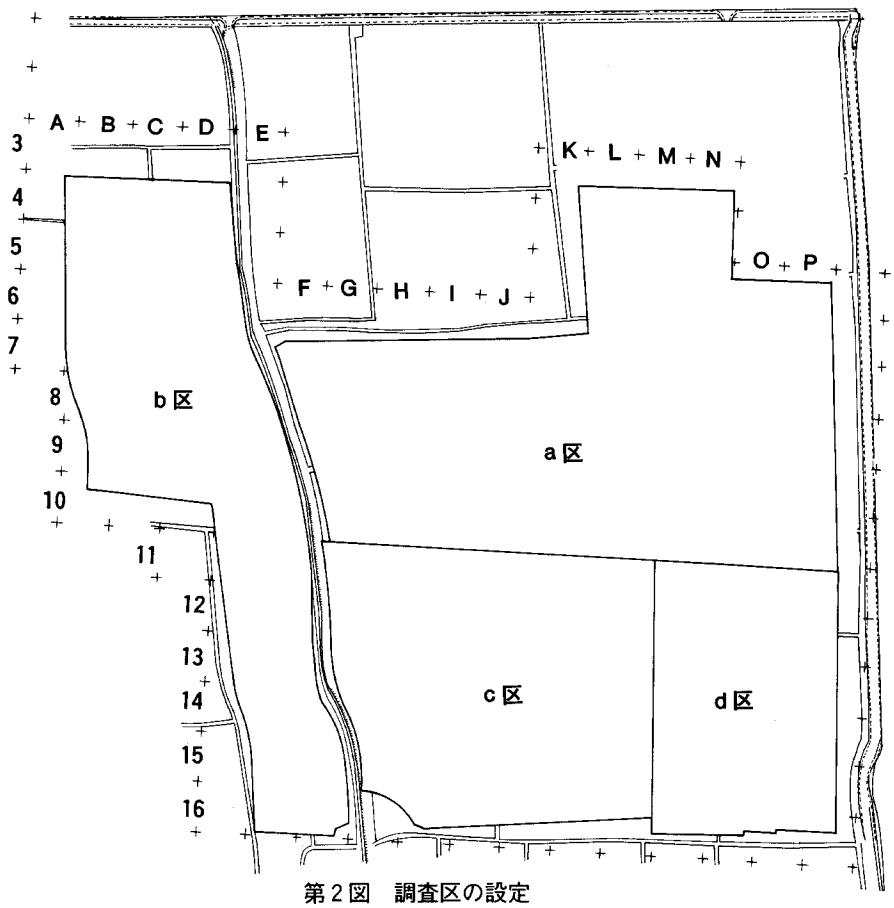
註1)　福岡市教育委員会『高柳遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 1981
註2)　福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982
　　福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅱ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984
註3)　福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅲ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 1987
註4)　福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅳ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 1987



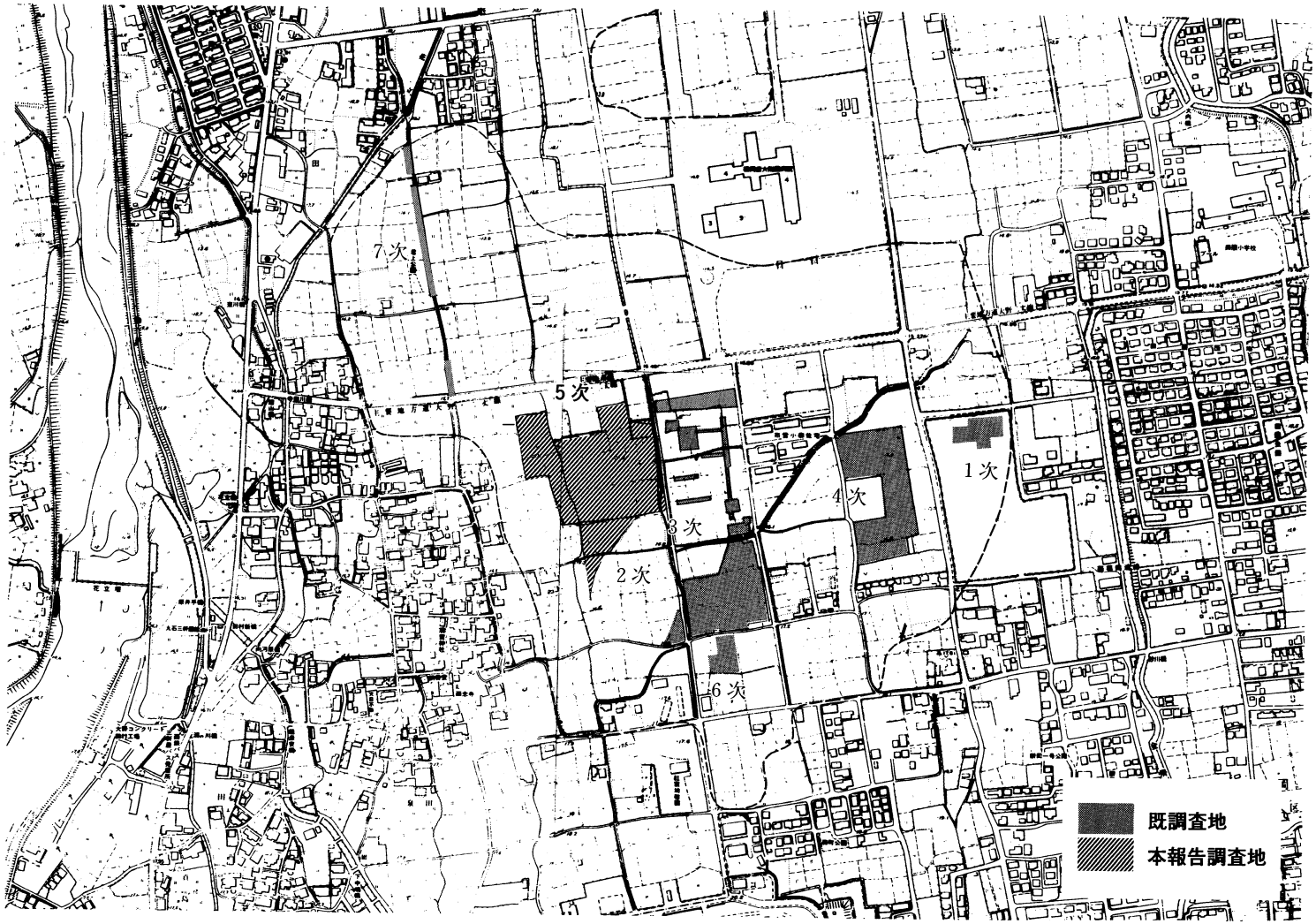
第１図　周辺の遺跡（1/50000）

Ⅲ　発掘調査の概要と経過

調査区は、農業用水路の西側をｂ区、東側北半をａ区、南半の1984年度調査区域をｃ区、1985年度調査区域をｄ区として、分割した。ａ区調査中はｃ区を、ｃ区調査中はａ区を排土置き場とした。調査区全域には磁北の方位をとる10ｍ間隔のグリットを設定した。東西方向をＡ～Ｑ、南北方向を３～16と区分した。発掘調査は1984年７月にａ区のバックホーによる表土剝ぎから開始した。遺構面は水田耕作土および床土のすぐ下から確認された。調査区北東隅では弥生時代前期後半の甕棺墓が検出されたが、かなりの削平を受けていた。同じ面からは11世紀から13世紀にかけての掘立柱建物、溝、旧河川、土坑が検出され、西へゆくに従い遺構は密になる。さらに縄文晩期の溝状遺構、土坑も確認された。９月に入ってａ区と併行してｂ区の調査を開始した。掘立柱建物群のほか、大溝を検出し夥しい量の遺物が出土した。ａ区の調査は11月で終了した。ｃ区の調査は翌年の３月からｂ区と併行して開始された。ｂ区の調査は３月末、ｃ区は４月をもって終了した。ｄ区の調査は６月から開始した。梅雨の最中、ａ区東端で検出した旧河川の調査に難儀しながらも１月余りで終了した。



第２図　調査区の設定



第３図　田村遺跡群全体図（1/8000）

Ⅳ　遺構と遺物

1　検出遺構

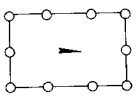
掘立柱建物

調査区内中央から西側にかけて夥しい数の柱穴が検出された。調査区内東側では、切り合い、重複のない良好な状態で掘立柱建物群を検出することができたが、特に中央から北西にかけては柱穴が重複して密集し、多数の掘立柱建物、柵の存在が想定され、それらの抽出に努めた。

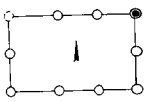
掘立柱建物の抽出にあたっては、良好な状態での検出例を参考にした。しかし、総柱建物の場合を除いては側柱による建物の検討・復原を行なったために、間仕切りのための柱穴がどの建物に伴なうか、重複の著しいなかでは明らかにし得なかった。また建物を構成している柱穴掘方から出土する遺物のほとんどは細片であるが、しばしば残存状態の良好な遺物が出土するピット状遺構がみられる。それらは建物を構成する柱穴の一部となることは少なく、鎮壇の性格をもった遺構とみなされよう。先に述べた理由で、建物としてまとめきれない柱穴・ピット状遺構が多く存在する。掘立柱建物の遺構番号はａ区がSB01から、ｂ区はSB61から、ｃ・ｄ区はSB101から始めた。基本的には地区割番号に沿って、北西隅から順次付けていった。検出された建物の数が膨大であるため、すべての実測図を載せることはできなかった。本文の左側に模式図を載せ、残存状態が良好な建物、四面廂付の建物、特殊な柱穴掘り方を持つ建物は、第４図から第10図に実測図を載せている。

模式図凡例　◉柱痕跡　○柱穴のみ　▲は磁北をしめす　縮尺は400分の１

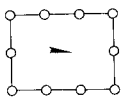
SB01　梁間２間、桁行は北側がSD104に切られ調査区外へ延びるために不明。梁間の全長は3.9ｍを測る。柱穴は円形で、径18～24㎝、深さ18～20㎝を測る。方位はＮ-6°-Ｗにとる。



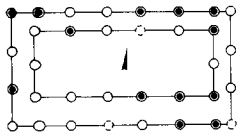
SB02　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.9ｍ、桁行の全長は6.1ｍを測る。柱穴は円形で、径20～28㎝、深さ10～22㎝を測る。方位はＮ-4°-Ｗにとる。



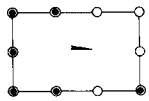
SB03　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.9ｍ、桁行の全長は6.7ｍを測る。柱穴は円形で、径18～22㎝、深さ５～23㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。



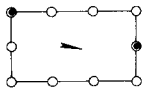
SB04　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長は5.4ｍを測る。柱穴は円形で、径18～43㎝、深さ16～40㎝を測る。方位はＮ-6°-Ｗにとる。



SB05　四面庇付の東西に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行５間である。庇と身舎の間隔は東が0.9ｍ、西が１ｍ、南が1.4ｍ、北が0.9ｍと不揃いである。身舎の梁間全長は3.6ｍ、桁行全長は9.6ｍを測る。身舎の柱穴は径28～33㎝、深さ18～28㎝、庇の柱穴は径20～32㎝、深さ５～34㎝で円形である。方位はN-8°-Wにとる。北側中央がSK202に切られている。(第５図)

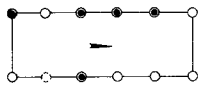


SB07　梁間2間、桁行3間の南北に長い建物である。梁間の全長4.1ｍ、桁行の全長6.6ｍを測る。桁行の柱間寸法は、北から2.0ｍ・2.4ｍ・2.2ｍを測る。柱穴は円形で、径18～35㎝、深さ25～36㎝を測る。方位はN-7°-Wにとる。

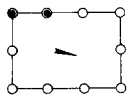


SB08　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.5ｍ、桁行の全長6.5ｍを測る。柱穴は円形で、径22～35㎝、深さ８～28㎝を測る。方位はN-7°-Wにとる。

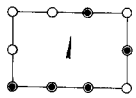
SB09　２間×２間の東西に長い建物である。東西3.9ｍ、南北3.3ｍを測る。柱穴は円形で、径25～30㎝、深さ10～30㎝を測る。方位はN-7°-Wにとる。



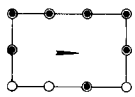
SB10　梁間１間、桁行５間の南北に長い建物である。梁間の全長3.5ｍ、桁行の全長9.3ｍを測る。柱穴は円形で、径24～35㎝、深さ７～26㎝を測る。方位はN-4°-Wにとる。



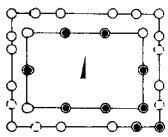
SB11　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長5.7ｍを測る。柱穴は円形で、径22～38㎝、深さ８～32㎝を測る。方位はN-11°-Wにとる。(第６図)



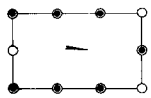
SB12　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長6.2ｍを測る。柱穴は円形で、径20～37㎝、深さ10～28㎝を測る。方位はN-12°-Wにとる。



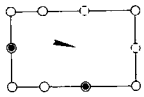
SB13　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.9ｍ、桁行の全長6.0ｍを測る。柱穴は円形で、径24～30㎝、深さ10～27㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。



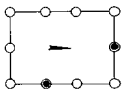
SB14　四面庇付の東西に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は東と西で1.2ｍ、南と北で0.8ｍを測る。身舎の梁間全長は3.5ｍ、桁行全長は6.4ｍを測る。身舎の柱穴は径24～33㎝、深さ22～31㎝、庇の柱穴は径18～30㎝、深さ6～33㎝を測る。方位はN-8°-Wにとる。(第６図)



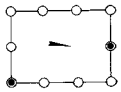
SB16　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長6.7ｍを測る。柱穴は円形で、径35～45㎝、深さ15～46㎝を測る。方位はN-4°-Wにとる。



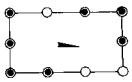
SB17　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長6.7ｍを測る。柱穴は円形で、径22～37㎝、深さ10～40㎝を測る。方位はN-12°-Wにとる。



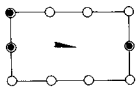
SB18　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長5.5ｍを測る。柱穴は円形で、径24～30㎝、深さ10～36㎝を測る。方位はN-2°-Wにとる。北西隅の柱穴がSK207に切られている。



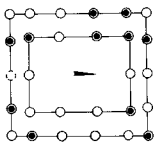
SB19　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長5.3ｍを測る。柱穴は円形で、径20～33㎝、深さ８～36㎝を測る。方位はN-8°-Wにとる。



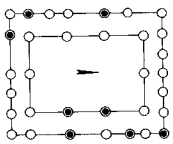
SB20　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.2ｍ、桁行の全長5.9ｍを測る。柱穴は円形で、径26～32㎝、深さ12～30㎝を測る。方位はN-6°-Wにとる。



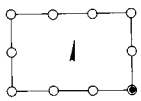
SB21　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.6ｍ、桁行の全長6.1ｍを測る。柱穴は円形で、径25～36㎝、深さ17～28㎝を測る。方位はN-6°-Wにとる。



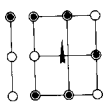
SB22　四面庇付の東西に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は東と西で1.2ｍ、南と北で0.9ｍを測る。身舎の梁間全長は4.0ｍ、桁行全長は5.3ｍを測る。身舎の柱穴は径22～28㎝、深さ８～20㎝、庇の柱穴は径18～30㎝、深さ10～29㎝で、円形である。方位はほぼ真北にとる。身舎西側の柱穴がSK23に、庇南側の柱穴がSK25に切られている。（第８図）



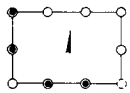
SB24　四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は東と西で1.2ｍ、南と北で1.0ｍを測る。身舎の梁間全長は3.9ｍ、桁行全長は6.2ｍを測る。身舎の柱穴は径26～33㎝、深さ６～40㎝、庇の柱穴は径22～28㎝、深さ10～32㎝で、円形である。方位はほぼ真北にとる。（第７図）



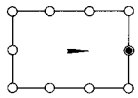
SB26　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長6.3ｍを測る。柱穴は円形で、径20～28㎝、深さ15～31㎝を測る。方位はN-4°-Wにとる。（第８図）



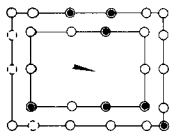
SB27　西庇付の２間×２間の南北に長い総柱建物で、東西3.3ｍ、南北4.2ｍを測る。庇と身舎の間隔は1.2ｍを測る。柱穴は円形で、径は身舎のものが32～45㎝、庇のもので35～40㎝、深さは身舎、庇ともに８～45㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。他の建物群とは様相を異にしている。



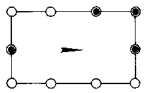
SB28　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.6ｍ、桁行の全長5.5ｍを測る。柱穴は円形で、径20～27㎝、深さ18～26㎝を測る。方位はN-6°-Wにとる。（第７図）



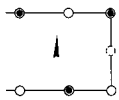
SB29　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長4.1ｍ、桁行の全長5.9ｍを測る。柱穴は円形で、径27～30㎝、深さ15～55㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。



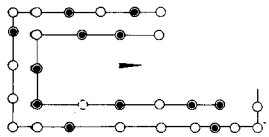
SB30　四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は東と西で1.0ｍ、南と北で0.9ｍを測る。身舎の梁間全長は3.9ｍ、桁行全長は6.2ｍを測る。身舎の柱穴は径20～30㎝、深さ30～58㎝、庇の柱穴は径17～21㎝、深さ８～34㎝を測り、平面形は円形を呈する。方位はN-12°-Wにとる。



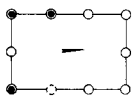
SB32　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.9ｍ、桁行の全長6.6ｍを測る。柱穴は円形で、径25～35㎝、深さ16～52㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。



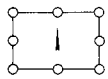
SB33　梁間２間、桁行２間以上の東西に長い建物で、桁行の西側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。梁間の全長は4.1ｍを測る。柱穴は円形で、径28～45㎝、深さ20～32㎝を測る。方位はN-4°-Wにとる。東側がSE01に切られる。



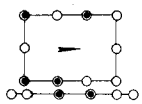
SB34　四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行５間である。庇と身舎の間隔は４面ともに1.2ｍを測る。身舎の梁間全長は3.5ｍ、桁行全長は9.7ｍを測る。身舎の柱穴は径25～36㎝、深さ５～40㎝、庇の柱穴は径20～30㎝、深さ２～７㎝を測り、平面形は円形を呈する。方位はN-1°30′-Eにとる。北西隅は調査区外へ延びる。



SB36　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長5.8ｍを測る。柱穴は円形で、径30～35㎝、深さ10～58㎝を測る。方位はN-4°-Eにとる。

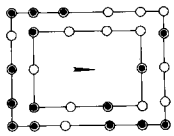


SB37　２間×２間の東西に長い総柱建物で、東西4.5ｍ、南北3.1ｍを測る。柱穴は円形で、径18～24㎝、深さ10～40㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。

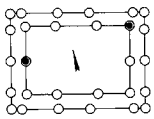


SB38　東庇付の南北に長い総柱建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は0.6ｍを測る。身舎の梁間全長は3.5ｍ、桁行全長は4.8ｍを測る。身舎の柱穴は径22～28㎝、深さ15～30㎝、庇の柱穴は径18～22㎝を測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-7°-Eにとる。

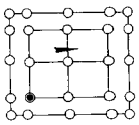
SB39　四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は西が1.0ｍ、東・南・北は1.2ｍを測る。身舎の梁間全長は3.9ｍ、桁行全長は5.4ｍを



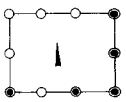
測る。身舎の柱穴は径26～30cm、深さ10～40cm、庇の柱穴は径18～26cm、深さ6～22cmを測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-1°30′-Eにとる。身舎南梁間の柱穴がSX48に切られており、建物はSD03、SD04の埋没後に建てられている。



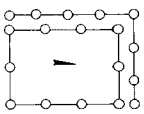
SB41 四面庇付の東西に長い建物で、身舎の規模は梁間2間、桁行3間である。庇と身舎の間隔は西と北が0.7m、東と南は0.8mを測る。身舎の梁間全長は3.4m、桁行全長は5.4mを測る。身舎の柱穴は径24～32cm、深さ4～10cm、庇の柱穴は径18～26cm、深さ4～10cmを測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-12°-Eにとる。(第9図)



SB43 四面庇付の2間×2間の南北に長い総柱建物で、身舎は東西3.5m南北4.2mを測る。庇と身舎の間隔は東が0.8m、西・南・北は1.0mを測る。身舎の柱穴は径20～26cm、深さ6～16cm、庇の柱穴は径16～36cm、深さ5～22cmを測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-2°-Eにとる。先に述べたSB27と身舎部分については、規模・寸法を同じくしており、同様の機能をもった建物と考えられる。

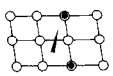


SB45 梁間2間、桁行3間の東西に長い建物である。梁間の全長4.2m、桁行の全長5.5mを測る。柱穴は円形で、径28～40cm、深さ25～44cmを測る。方位はN-5°-Eにとる。

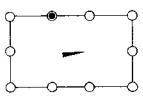


SB46 西と北の二面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間2間、桁行3間である。庇と身舎の間隔は0.8mを測る。身舎の梁間全長は3.8m、桁行全長は5.8mを測る。身舎の柱穴は径32～38cm、深さ22～38cm、庇の柱穴は径20～26cm、深さ10～44cmを測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-4°-Eにとる。

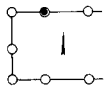
SB47 梁間2間、桁行2間以上の東西に長い建物で、桁行の東側がSD01に切られているため全体規模は不明。梁間の全長は2.9mを測る。柱穴は円形で、径21～32cm、深さ20～38cmを測る。方位はN-4°-Eにとる。



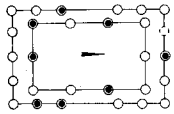
SB48 梁間2間、桁行3間の東西に長い総柱建物である。梁間の全長2.7m、桁行の全長は4.7mを測る。桁行の柱間寸法は西から1.3m・1.7m・1.7mと西の1間が狭く、西庇付の東西に長い2間×2間の総柱建物とも考えられる。柱穴は円形で、径20～30cm、深さ15～32cmを測る。方位はN-11°-Eにとる。(第9図)



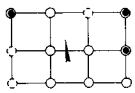
SB49 梁間2間、桁行3間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8m、桁行の全長6.4mを測る。桁行の柱間寸法は2.2m・2.0m・2.2mと中央が狭い。柱穴は円形で、径32～45cm、深さ12～35cmを測る。方位はN-8°-Eにとる。



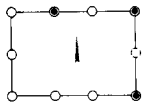
SB50　梁間２間、桁行２間以上の東西に長い建物で、桁行の西側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。梁間の全長は3.7ｍを測る。柱穴は円形で、径26～38㎝、深さ12～26㎝を測る。方位はN-8°-Eにとる。



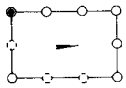
SB51　四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は、東と西が0.7ｍ、南と北が1.0ｍを測る。身舎の梁間全長は3.7ｍ、桁行全長は6.3ｍを測る。身舎の柱穴は径25～40㎝、深さ20～35㎝、庇の柱穴は径20～35㎝、深さ５～31㎝を測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はほぼ真北にとる。



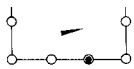
SB61　梁間２間、桁行３間の東西に長い総柱建物である。梁間の全長3.7ｍ、桁行の全長は6.3ｍを測る。柱穴は円形で、径20～60㎝、深さ13～21㎝を測る。方位はN-6°-Wにとる。



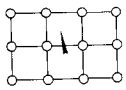
SB62　梁間２間、桁行３間の東西に長い総柱建物である。梁間の全長4.5ｍ、桁行の全長は6.1ｍを測る。柱穴は円形で、径25～34㎝、深さ６～35㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。東梁間柱がSX48に切られる。



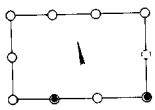
SB63　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.4ｍ、桁行の全長は5.4ｍを測る。柱穴は円形で、径22～30㎝、深さ８～22㎝を測る。方位はN-14°-Wにとる。東側の柱穴がSE05に切られている。



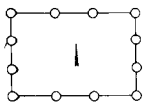
SB64　梁間１間以上、桁行３間の南北に長い建物で、梁間の西側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。桁行の全長は5.9ｍを測る。柱穴は円形で、径28～35㎝、深さ10～18㎝を測る。方位はN-12°-Wにとる。



SB65　梁間２間、桁行３間の東西に長い総柱建物である。梁間の全長3.6ｍ、桁行の全長は5.5ｍを測る。柱穴は円形で、径23～30㎝、深さ６～24㎝を測る。方位はN-10°-Wにとる。



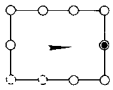
SB66　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長4.3ｍ、桁行の全長は6.3ｍを測る。柱穴は円形で、径19～35㎝、深さ７～26㎝を測る。方位はN-11°-Wにとる。



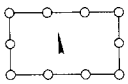
SB67　梁間３間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長5.2ｍ、桁行の全長は6.7ｍを測る。柱穴は円形で、径15～30㎝、深さ５～25㎝を測る。方位はN-2°-Wにとる。

SB68　梁間２間、桁行１間以上の建物で、桁行の西側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。梁間の全長は4.0ｍを測る。柱穴は円形で、径20～25㎝、深さ20～47㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。

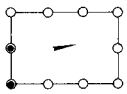
SB70 梁間２間、桁行１間以上の建物で、桁行の北側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。梁間の全長は3.9ｍを測る。柱穴は円形で、径31～46㎝、深さ27～36㎝を測る。方位はN-7°-Wをとる。



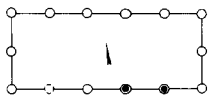
SB71 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.7ｍ、桁行の全長は4.9ｍを測る。柱穴は円形で、径22～32㎝、深さ10～35㎝を測る。方位はN-2°-Wにとる。



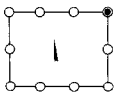
SB72 梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.4ｍ、桁行の全長は5.8ｍを測る。柱穴は円形で、径19～33㎝、深さ６～37㎝を測る。方位はN-7°30′-Wにとる。



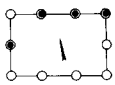
SB73 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長は5.6ｍを測る。柱穴は円形で、径20～30㎝、深さ19～65㎝を測る。方位はN-10°-Wにとる。



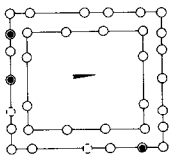
SB74 梁間２間、桁行５間の東西に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長は10.1ｍを測る。柱穴は不整円形で、径27～37㎝、深さ20～39㎝を測る。方位はN-10°-Wにとる。



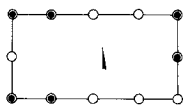
SB75 梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長は5.2ｍを測る。柱穴は不整円形で、径24～39㎝、深さ15～20㎝を測る。方位はN-6°-Wにとる。



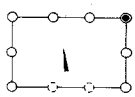
SB76 梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.3ｍ、桁行の全長は6.0ｍを測る。柱穴は円形で、径26～40㎝、深さ15～76ｍを測る。方位はN-10°-Wにとる。



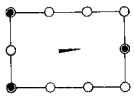
SB77 四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間３間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は４面ともに1.0ｍを測る。身舎の梁間全長は5.2ｍ、桁行全長は6.3ｍを測る。身舎の柱穴は径26～38㎝、深さ８～30㎝、庇の柱穴は径20～26㎝、深さ６～24㎝を測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-7°30′-Wにとる。



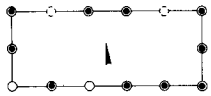
SB79 梁間２間、桁行４間の東西に長い建物である。梁間の全長4.6ｍ、桁行の全長8.8ｍを測る。柱穴は円形で、径35～48㎝、深さ32～65㎝を測る。方位はN-7°-Wにとる。



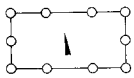
SB80 梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長5.9ｍを測る。柱穴は円形で、径28～43㎝、深さ４～55㎝を測る。方位はN-6°30′-Wにとる。南側中央の柱穴は検出できなかった。



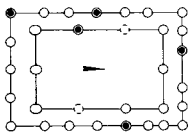
SB81　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長4.1ｍ、桁行の全長6.0ｍを測る。柱穴は円形で、径22～48㎝、深さ５～33㎝を測る。方位はN-6°-Wにとる。



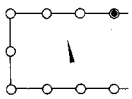
SB82　梁間２間、桁行５間の南北に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ柱間寸法2.0ｍ、桁行の全長10.0ｍ、柱間寸法2.0ｍの等間である。柱穴は不整円形で、径30～120㎝、深さ12～36㎝を測る。柱痕跡の径は18～22㎝を測る。南梁間柱の北２間の所に同じ規模の柱穴があり、床束と考えられる。偏平な石を根石とする柱穴がみられる。掘立柱建物群の中でも、規模、構造ともに群を抜く存在である。方位はN-7°30′-Wにとる。（第４図）



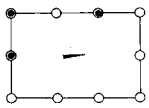
SB83　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.1ｍ、桁行の全長5.0ｍを測る。柱穴は円形で、径21～37㎝、深さ11～43㎝を測る。方位はN-10°-Wにとる。



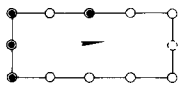
SB84　四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は東が0.8ｍ、西が0.9ｍ、南が1.2ｍ、北が1.1ｍを測る。身舎の梁間全長は4.2ｍ、桁行全長は6.5ｍを測る。身舎の柱穴は径20～34㎝、深さ６～42㎝、庇の柱穴は径22～26を㎝測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はほぼ真北にとる。



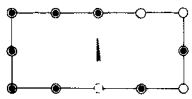
SB86　梁間２間、桁行３間以上の東西に長い建物で、桁行の東側がSD100と重複するため全体規模は不明。梁間の全長3.9ｍ、桁行は３間分で4.9ｍを測る。柱穴は円形で、径25～42㎝、深さ12～38㎝を測る。方位はN-12°-Wにとる。



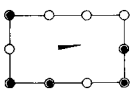
SB87　梁間２間、桁行３間以上の南北に長い建物である。梁間の全長4.5ｍ桁行の全長6.5ｍを測る。柱穴は円形で、径30～45㎝、深さ27～54㎝を測る。方位はN-6°30′-Wにとる。



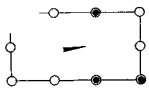
SB88　梁間２間、桁行４間の南北に長い建物である。梁間の全長3.5ｍ、桁行の全長8.5ｍを測る。柱穴は不整円形で、径26～55㎝、深さ18～60㎝を測る。根石をもつ柱穴がみられる。方位はN-6°-Wにとる。



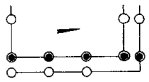
SB89　梁間２間、桁行４間の東西に長い総柱建物である。梁間の全長3.9ｍ、桁行の全長8.8ｍを測る。柱穴は円形で、径28～36㎝、深さ10～38㎝を測る。柱痕跡の径は15～24㎝を測る。方位はN-4°-Wにとる。



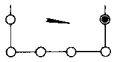
SB90　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長6.0ｍを測る。柱穴は円形で、径22～28㎝、深さ16～45㎝を測る。方位はN-6°30′-Wにとる。



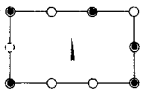
SB91　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.7ｍ、桁行の全長は6.9ｍを測る。柱穴は円形で、径23～45㎝、深さ５～25㎝を測る。方位はN-7°30′-Wにとる。南西隅の柱穴は調査区外にかかる。



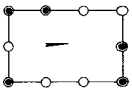
SB92　東と北の二面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間１間以上、桁行３間で、梁間の西側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。庇と身舎の間隔は0.7ｍを測る。身舎の桁行全長は5.8ｍを測る。身舎の柱穴は径25～35㎝、深さ28～45㎝、庇の柱穴は径16～24㎝、深さ６～24㎝を測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-6°-Wにとる。



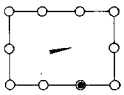
SB93　梁間１間以上、桁行３間の南北に長い建物で、梁間の西側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。桁行の全長は5.3ｍを測る。柱穴は円形で、径20～32㎝、深さ14～16㎝を測る。方位はN-10°-Wにとる。



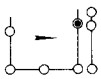
SB95　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長3.7ｍ、桁行の全長は6.9ｍを測る。柱穴は円形で、径23～45㎝、深さ10～36㎝を測る。方位はN-3°-Wにとる。



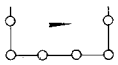
SB96　梁間２間、梁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長は6.0ｍを測る。柱穴は円形で、径23～28㎝、深さ15～40㎝を測る。方位はN-3°-Wにとる。



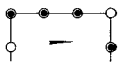
SB97　梁間２間、梁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長は5.7ｍを測る。柱穴は円形で、径23～32㎝、深さ８～46㎝を測る。方位はN-10°-Wにとる。



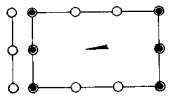
SB98　北庇付の東西に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行１間以上で、桁行の西側が調査区外へ延びるため全体規模は不明である。庇と身舎の間隔は0.7ｍを測る。身舎の梁間全長は3.6ｍを測る。身舎の柱穴は径20～32㎝、深さ16～30㎝、庇の柱穴は径18～30㎝、深さ４～46㎝を測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-1°30′-Wにとる。



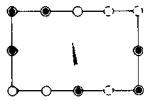
SB99　梁間１間以上、桁行３間の南北に長い建物で、梁間の西側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。桁行の全長は7.4ｍを測る。柱穴は円形で径24～36㎝、深さ10～35㎝を測る。方位はN-3°-Wにとる。



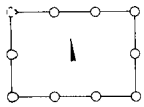
SB100　梁間１間以上、桁行３間の南北に長い建物で、梁間の東側が調査区外へ延びるため全体規模は不明。桁行の全長は7.4ｍを測る。柱穴は円形で、径20～32㎝、深さ16～30㎝を測る。方位はN-2°-Wにとる。



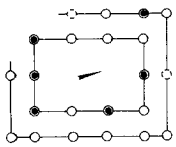
SB101　北庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は0.9ｍを測る。身舎の梁間全長は4.2ｍ、桁行全長は6.8ｍを測る。身舎の柱穴は径28～36㎝、深さ24～41㎝、庇の柱穴は径16～20㎝、深さ10～22㎝を測る。方位はN-6°-Wにとる。



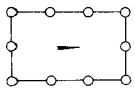
SB102　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長4.4ｍ、桁行の全長6.6ｍを測る。柱穴は円形で、径18～32㎝、深さ８～35㎝を測る。方位はN-6°-Wにとる。



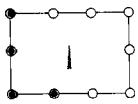
SB103　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長4.5ｍ、桁行の全長6.4ｍを測る。柱穴は円形で、径18～30㎝、深さ12～45㎝を測る。方位はN-7°-Wにとる。北西隅の柱穴が攪乱によって失われている。



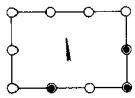
SB104　四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は４面ともに1.2ｍを測る。身舎の梁間全長は3.5ｍ、桁行全長は5.8ｍを測る。身舎の柱穴は径22～38㎝、深さ14～64㎝、庇の柱穴は径21～28㎝、深さ10～48㎝を測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-14°-Wにとる。南西隅が調査区外にかかる。（第10図）



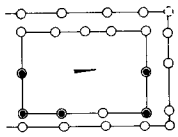
SB107　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長6.0ｍを測る。柱穴は円形で、径24～45㎝、深さ７～57㎝を測る。方位はN-3°-Wにとる。



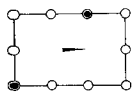
SB108　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長4.5ｍ、桁行の全長6.2ｍを測る。柱穴は円形で、径28～40㎝、深さ12～32㎝を測る。方位はほぼ真北にとる。



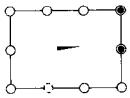
SB109　梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長4.1ｍ、桁行の全長6.1ｍを測る。柱穴は円形で、径24～36㎝、深さ24～56㎝を測る。方位はN-4°-Wにとる。



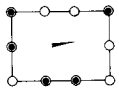
SB110　東・西・北の三面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は東が0.7ｍ、西が1.0ｍ、北が1.2ｍを測る。身舎の梁間全長は4.0ｍ、桁行全長は6.5ｍを測る。身舎の柱穴は径24～32㎝、深さ14～26㎝、庇の柱穴は径16～24㎝、深さ８～16㎝を測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はN-3°-Wにとる。



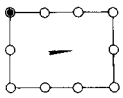
SB111　梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長5.9ｍを測る。柱穴は円形で、径23～29㎝、深さ14～34㎝を測る。方位はN-1°30′-Wにとる。



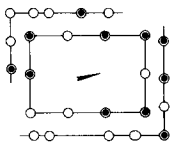
SB112 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長4.3ｍ、桁行の全長5.7ｍを測る。柱穴は円形で、径20～30㎝、深さ６～27㎝を測る。方位はＮ-5°-Ｗにとる。



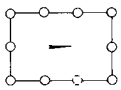
SB113 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.7ｍ、桁行の全長5.4ｍを測る。柱穴は円形で、径26～33㎝、深さ12～48㎝を測る。方位はＮ-8°-Ｗにとる。



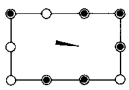
SB114 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.9ｍ、桁行の全長5.5ｍを測る。柱穴は円形で、径17～28㎝、深さ10～44㎝を測る。方位はＮ-6°-Ｗにとる。



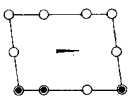
SB115 四面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は、４面ともに1.2ｍを測る。身舎の柱穴は径26～38㎝、深さ40～70㎝、庇の柱穴は径24～30㎝、深さ14～26㎝を測り、平面形はいずれも円形を呈する。方位はＮ-14°-Ｗにとる。北西隅は調査区外にかかり、南東隅の柱穴は検出できなかった。



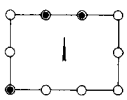
SB116 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長5.5ｍを測る。柱穴は円形で、径23～32㎝、深さ9～35㎝を測る。方位はＮ-3°-Ｗにとる。



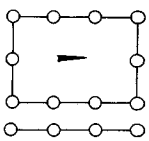
SB117 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.5ｍ、桁行の全長5.8ｍを測る。柱穴は円形で、径24～30㎝、深さ18～42㎝を測る。方位はＮ-7°30'-Ｗにとる。



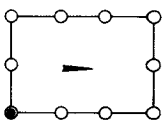
SB118 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長6.0ｍを測る。柱穴は円形で、径18～31㎝、深さ7～33㎝を測る。方位はＮ-1°-Ｗにとる。建替えを行なっている。



SB119 梁間２間、桁行３間の東西に長い建物である。梁間の全長4.0ｍ、桁行の全長5.7ｍを測る。柱穴は円形で、径20～32㎝、深さ7～22㎝を測る。方位はＮ-2°-Ｅにとる。



SB120 東面庇付の南北に長い建物で、身舎の規模は梁間２間、桁行３間である。庇と身舎の間隔は、1.0ｍを測る。身舎と庇の柱穴の径、深さとも差はみられず、それぞれ径20～35㎝、深さ20～30㎝を測り、円形を呈する。方位はほぼ真北にとる。



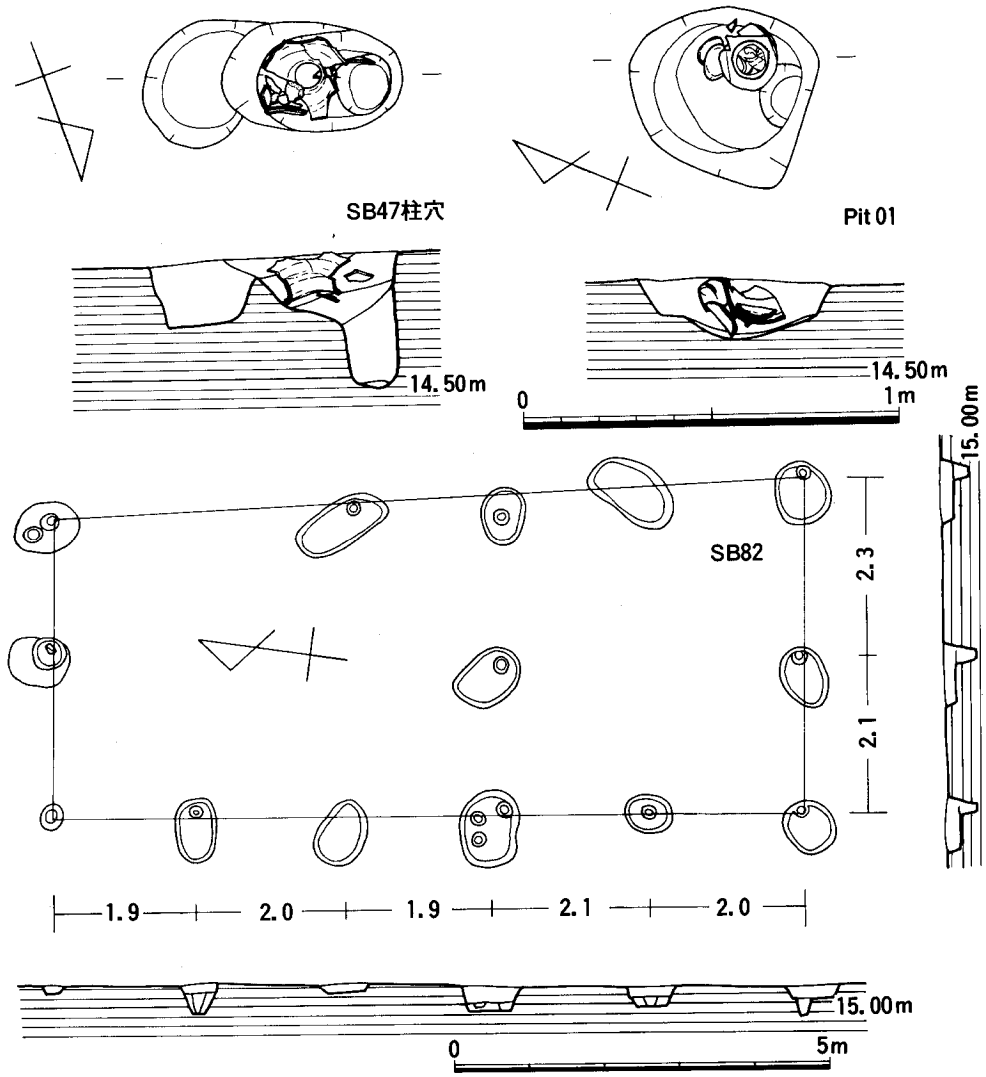
SB121 梁間２間、桁行３間の南北に長い建物である。梁間の全長3.8ｍ、桁行の全長5.7ｍを測る。柱穴は円形で、径35～40㎝、深さ24～48㎝を測る。方位はＮ-2°-Ｅにとる。

SB47柱穴（第４図、図版26）

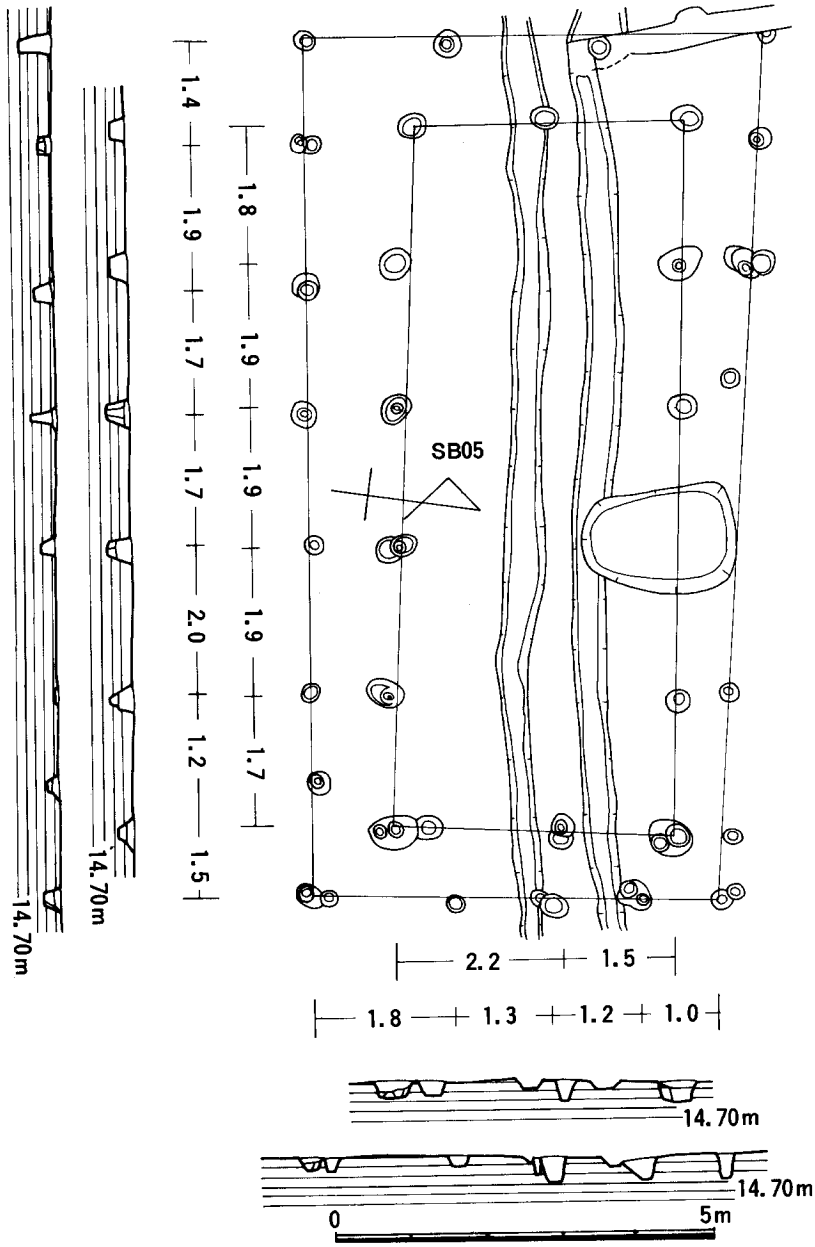
SB47の北側の北側柱列の西から２番目の柱穴掘り方から、陶器壺の上半部が倒置の状態で出土した。人為的に埋納したとするより、柱穴を埋める際に廃棄、もしくは流れ込んだものであろう。SD01から、同一個体とみられる壺の底部が出土している。

Pit01（第４図、図版22）

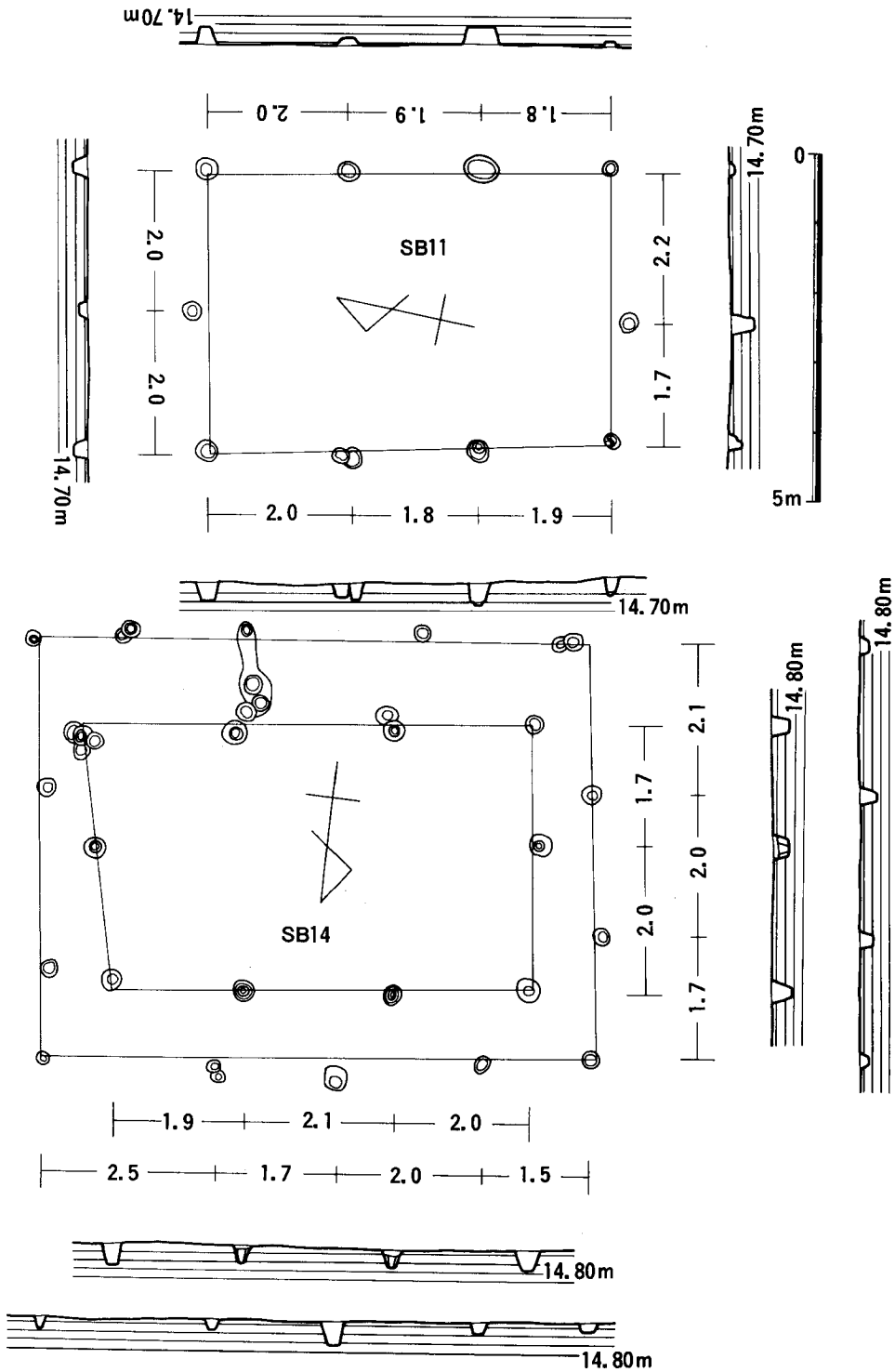
平面形は不整円形を呈し、直径45cm、深さ15cmを測る。底面より若干浮いた状態で、土師器小皿１、白磁椀１、皿２、底面に接して鉄鎌１が出土した。それらの遺物は鎮壇の目的で一括して埋納されたものであろう。



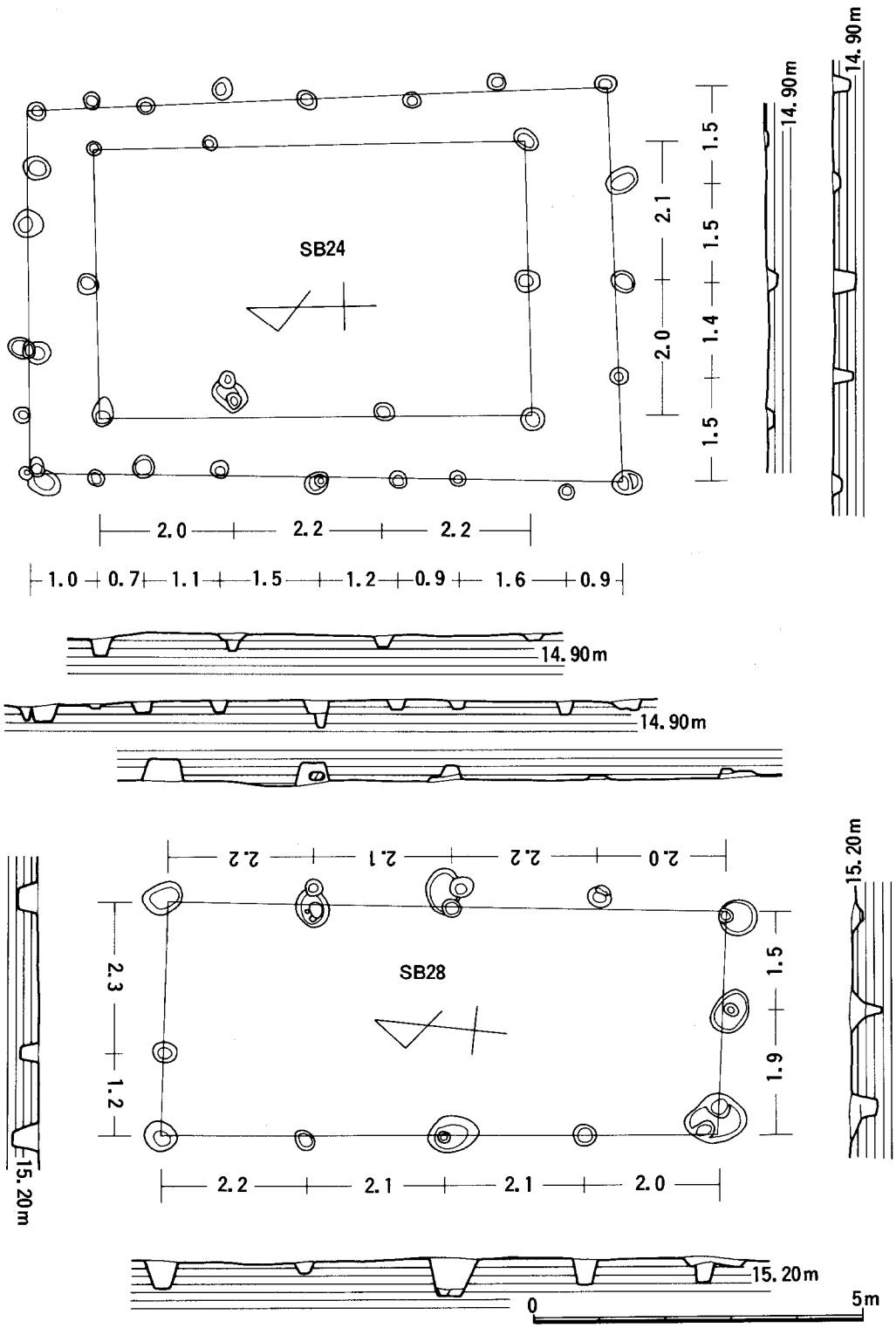
第４図　Pit・掘立柱建物実測図(1)（1/20・1/100）



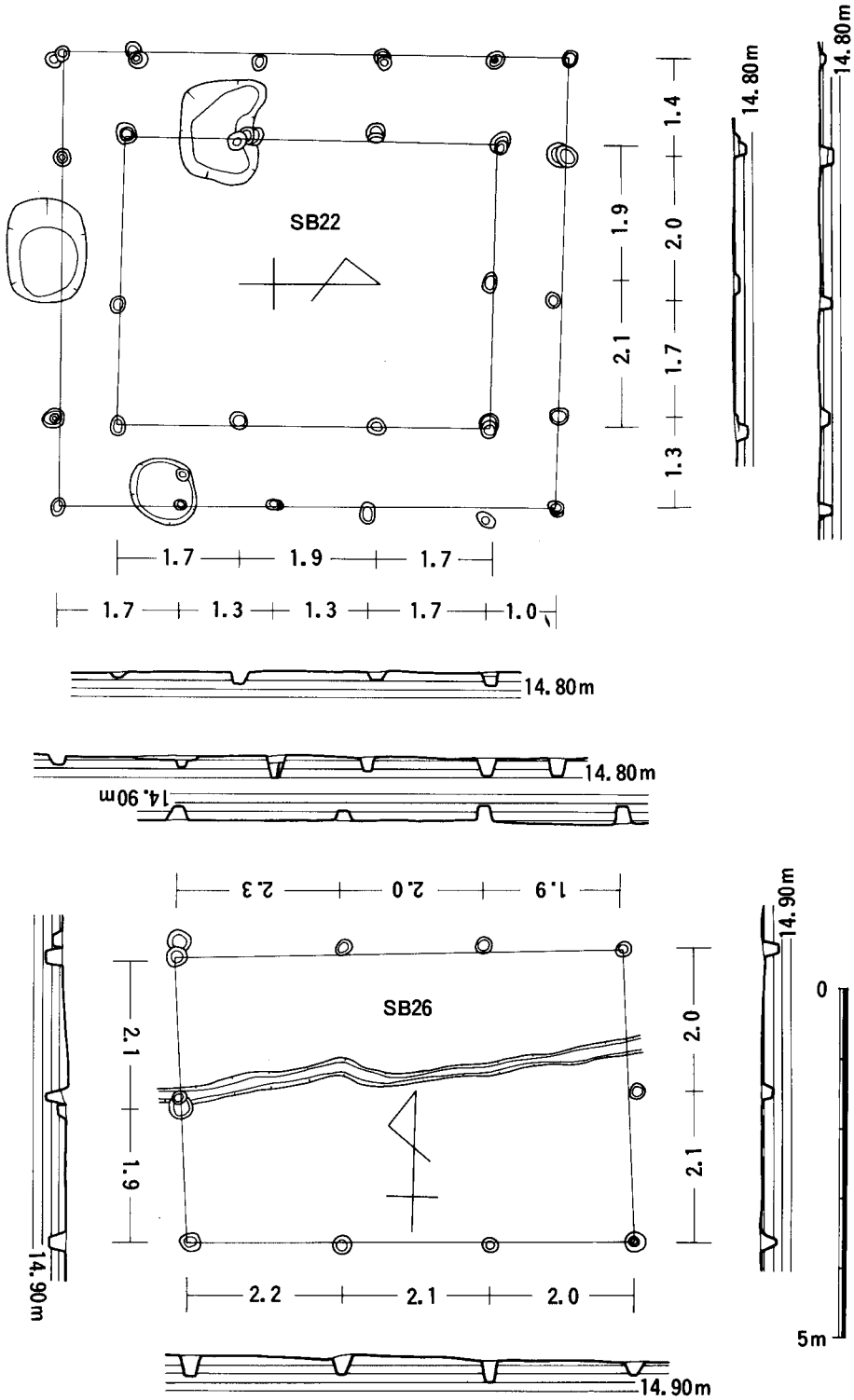
第５図　掘立柱建物実測図 (2) (1/100)



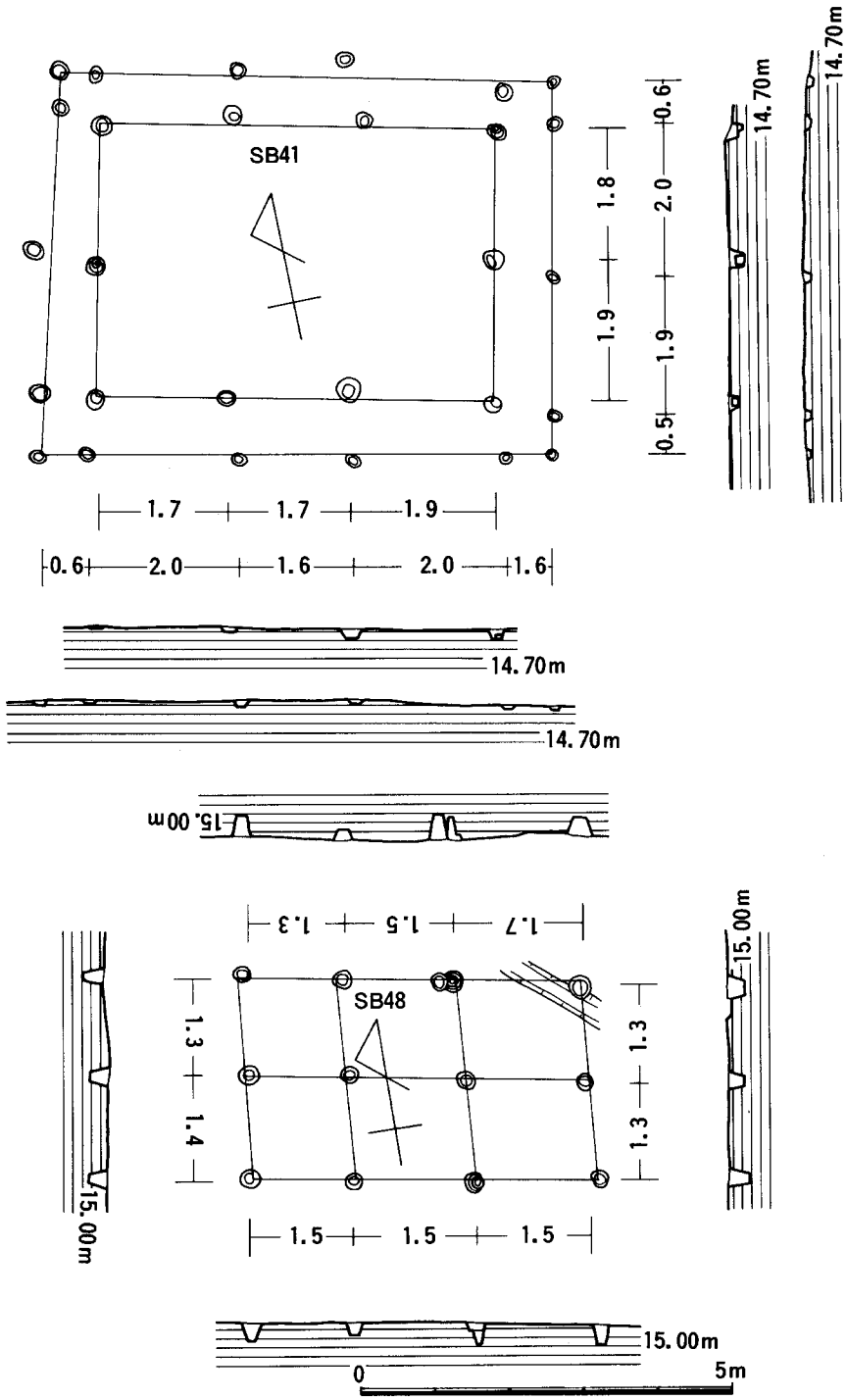
第６図　掘立柱建物実測図 (3) (1/100)



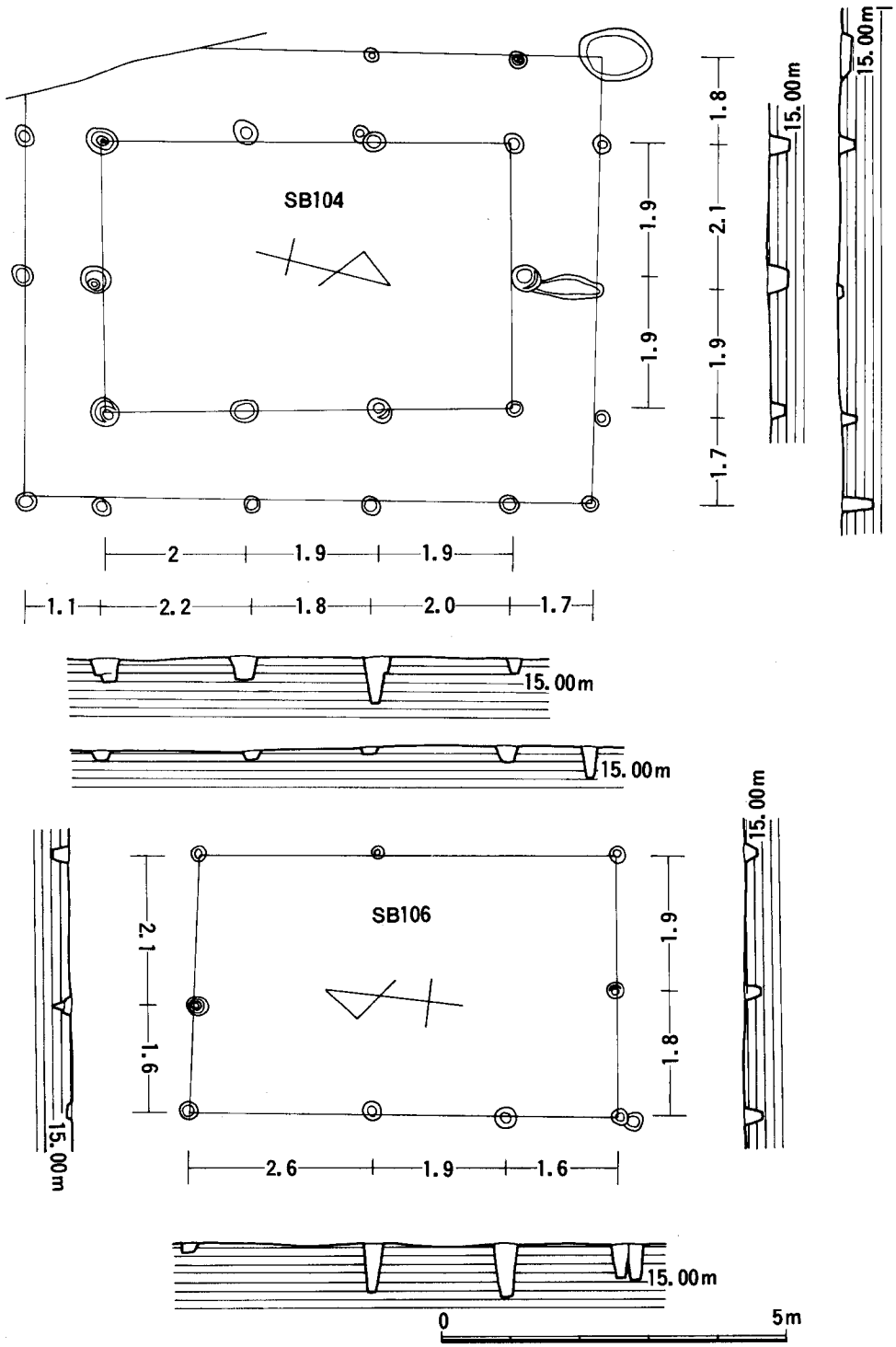
第７図　掘立柱建物実測図 (4) (1/100)



第8図　掘立柱建物実測図 (5) (1/100)



第９図　掘立柱建物実測図 (6) (1/100)



第10図　掘立柱建物実測図 (7) (1/100)

井戸

11基検出した。その内、石組みの井戸枠を構築するものが6基で、他は素掘り、もしくは木枠が腐朽したと考えられる。石組みの井戸から述べている。

SE01（SD100内）（第11図、図版22）

F-13区で検出した。直径130cmの円形の掘り方の中に、桶状の井戸枠が構築されている。井戸枠の上端内径65cmでその周囲には礫を積み補強している。井戸枠は上端から底までの55cmの深さまでみられた。掘り方の底径は120cmを測る。

SE03（第11図、図版16）

C-8・9区で検出した。直径250cmの円形の掘り方の中に井戸枠が石組みで構築されている。石組みの上端は内径60cmで、人頭大の石の長軸を放射状に構築し、隙間には拳大の礫で裏込めし補強している。石組みは、上端から底面までの160cmの深さまでみられる。井戸枠の底径(内径)は上端の内径と同じ60cm、掘り方の底径は190cmを測る。

SE04（第11図、図版17）

B-7区で検出した。直径140cmの円形の掘り方の中に井戸枠が石組みで構築されている。石組みの上端の内径は90cmで、構築されている石材は上端では人頭大であるが、下位になるにつれて小さくなる傾向を示す。石組みは掘り方壁面から5cmほど内側に乱雑に積み上げられ、隙間を5cmほどの礫で裏込めし補強している。石組みの下位の内径は50cmを測る。石組みは底面より上位15cm、上端から100cmの深さまでみられる。使用されている石材は他と同じく花崗岩で、一部玄武岩がみられる。掘り方の底径は75cmを測る。底面では井筒の痕跡とみられる直径45cm、深さ5cmの浅い落ち込みを検出した。砂礫層まで掘り込まれ、湧水層に達する。

SE06（第12図、図版17）

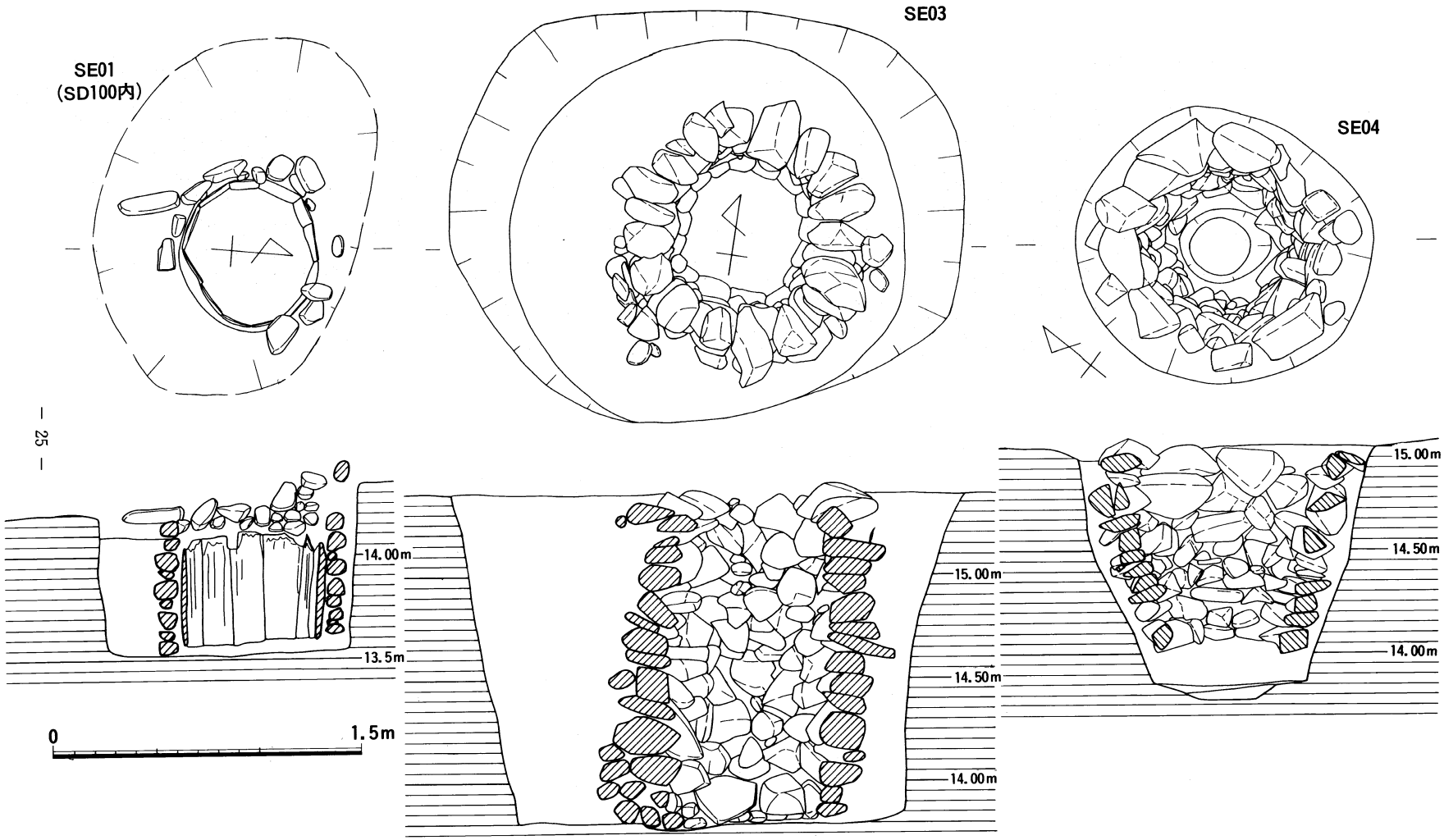
B-5区で検出した。直径130cmの円形掘り方の中に井戸枠が石組みで構築されている。石組みの上端の内径は70cmで、20cm前後の偏平な石が使用されている。石組みは掘り方壁面に沿って積み上げられ、隙間を粘土で補強している。石組みは上端から底までの160cmの深さまでみられる。井戸枠の底径(内径)は40cm、掘り方の底径は90cmを測る。砂礫層まで掘り込まれ、湧水層に達する。

SE08（第12図、図版20）

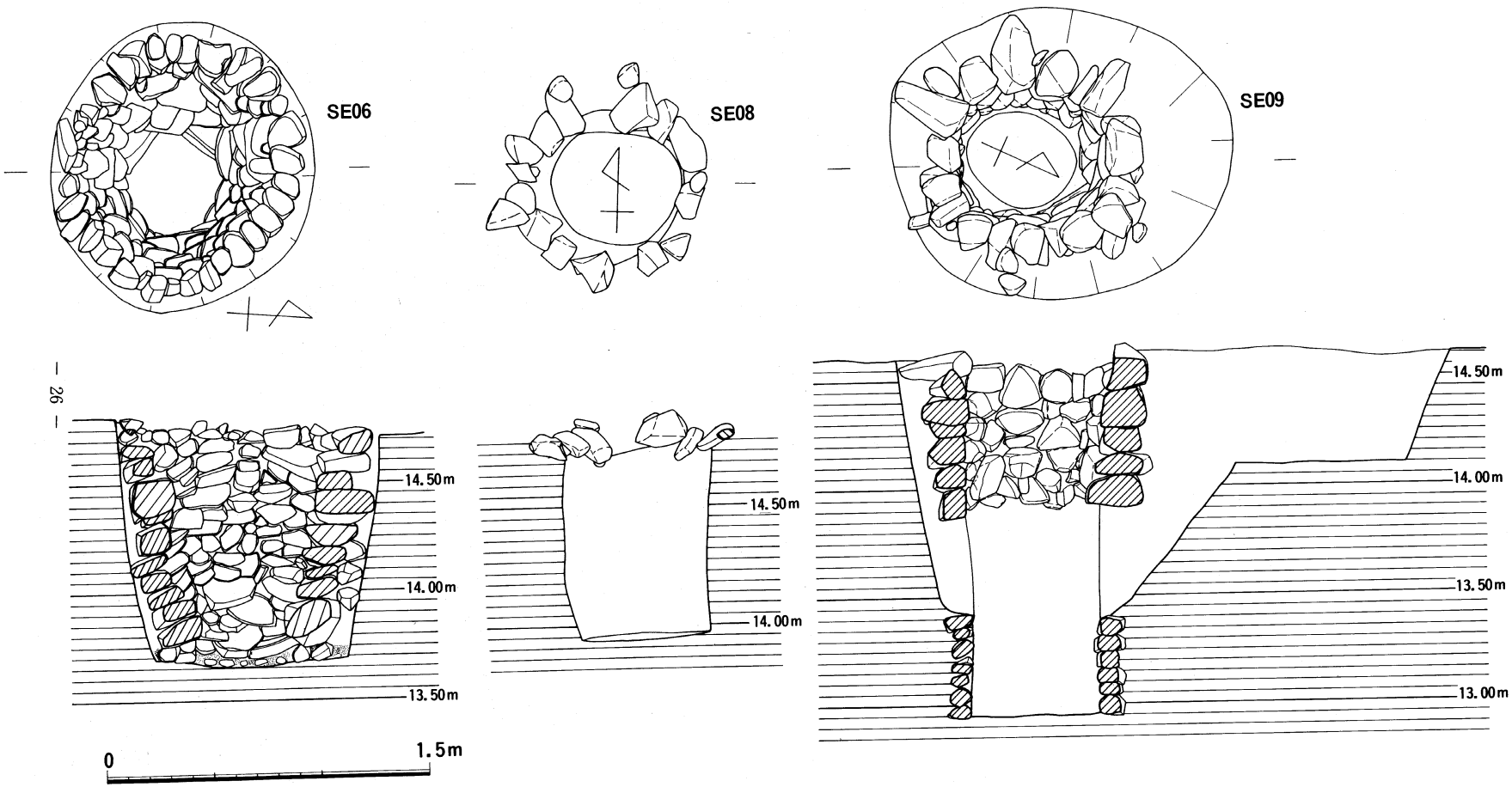
C-4区で検出した。石組みの下端が辛うじて残り、その下位は素掘り、もしくは木枠が設置されていたと考えられる。平面形は円形を呈し、上端の内径70cm、深さ90cm、底径60cmを測る。

SE09（第12図、図版20）

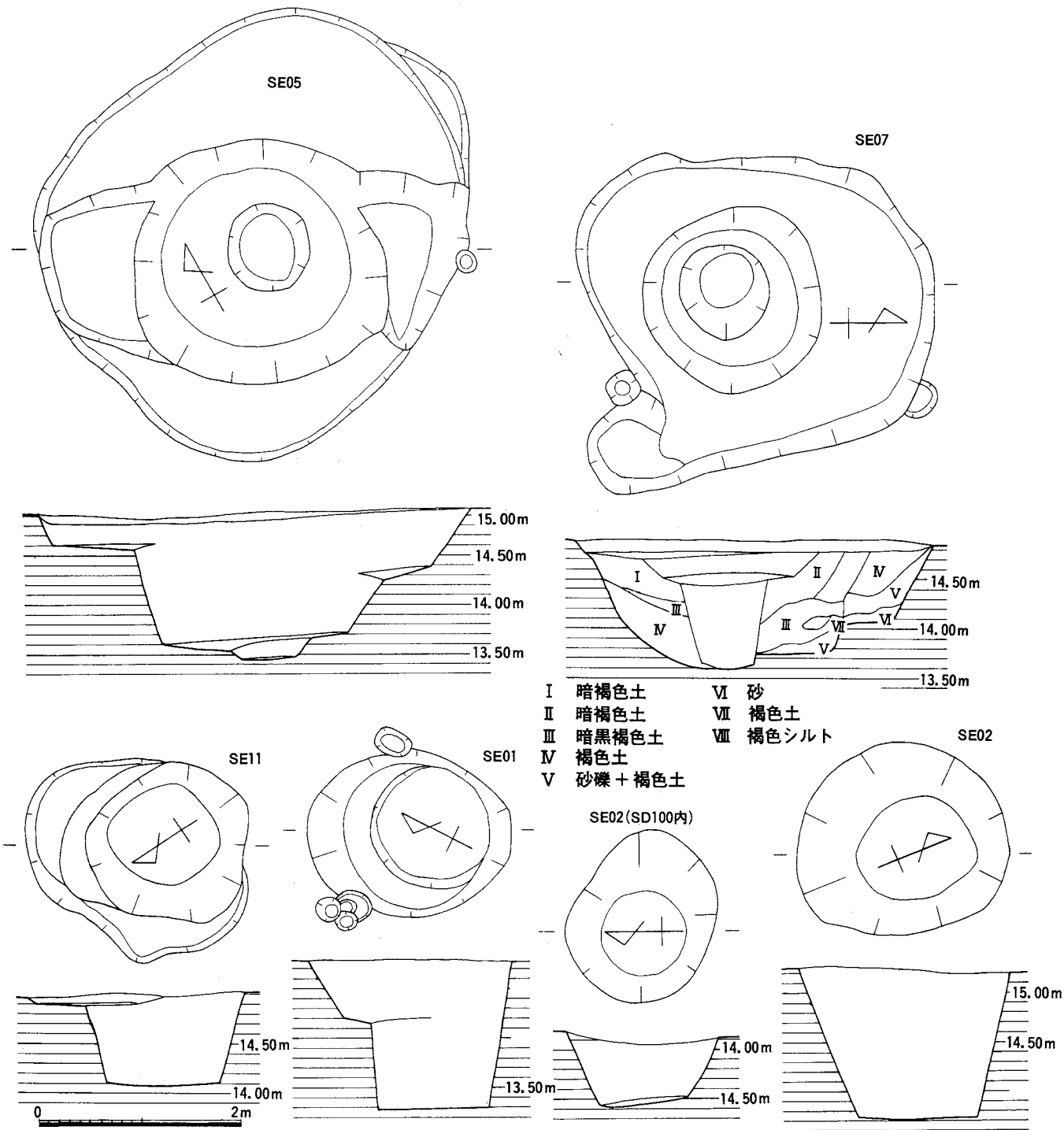
C-4区で検出した。直径160cmの不整円形の掘り方の中に井戸枠が石組みで構築されている。石組みの上端は内径60cmで、人頭大の石によって構築されている。石組みは上端から80cmの深



第11図　井戸実測図 (1) (1/30)



第12図　井戸実測図 (2) (1/30)


SE05
SE07
15.00m
14.50m
14.00m
13.50m
Ⅰ 暗褐色土
Ⅱ 暗褐色土
Ⅲ 暗黒褐色土
Ⅳ 褐色土
Ⅴ 砂礫＋褐色土
Ⅵ 砂
Ⅶ 褐色土
Ⅷ 褐色シルト
SE11
SE01
SE02(SD100内)
SE02
0
2m

第13図　井戸実測図 (3)

さまでみられ、その下位から底までの90cmにわたっては何らの施設もみられなかったが、掘り方の内部であり、石が崩壊した痕跡がみられないことから、木枠が設置されていたと考えられる。

SE01（第13図、図版21）

L-5区で検出した。二段掘りの井戸で、一段目は平面形が不整円形を呈し、上面径160～205cm、深さ60cm、底径150cmを測る。二段目は円形を呈し、上面径110cm、深さ90cm、底径65cmを測る。

SE02（第13図）

D-8区で検出した。平面形は不整円形を呈し、上面径140～180cm、深さ80cm、底径90cmを測る素掘りの井戸である。

SE02（SD100内）（第13図）

E-9区で検出した。平面形は不整円形を呈し、上面径220cm、深さ150cm、底径120cmを測る素掘りの井戸である。

SE05（第13図、図版18）

390cm×440cmの隅丸方形に近い深さ10cmの浅い掘り込みのほぼ中央に、上面径250cm、深さ120cm、底径180cmの円形の平面形をもつ井戸を検出した。地区はB・C-7区。広く浅い掘り込みは井戸振り方の上段が削平されたというよりは、井戸に伴なう掘り込み地形・貼り床と考えている。底面では、井筒の痕跡とみられる直径85cm、深さ20cmの円形の浅い落ち込みを検出した。井戸を貫いて幅150cm前後、深さ20～50cmの掘り込みがみられるが、井戸枠等を抜き取る際のものか。

SE07（第13図、図版19）

B-4・5区で検出した。300cm×350cmの隅丸方形に近い掘り方から、二段の井戸枠の痕跡が認められた。上段は円形の平面形で、上面径180cm、深さ25cm、底径140cmを測る。下段は円形で、上面径90cm、深さ90cm、底径90cmを測る。

SE11（第13図）

D-7区で検出した。直径180～220cm、深さ5cmの不整形の平面形を呈する浅い落ち込みに掘り込まれている。平面形は不整円形を呈し、上面径160cm、深さ180cm、底径95cmを測る素掘りの井戸である。

井戸の周囲には柱穴が散在しており、井戸に付属する覆屋等の施設の存在が考えられるが、建物としてまとめることはできなかった。

土坑

SK222（第14図）

K-10・11区で検出した。南北に長い隅丸方形を呈し、残存する長さ170cm、幅103cm、深さ22cmを測る。東側中央から、底面より若干浮いた状態で土師器小皿が出土した。南側を側溝に切られる。方位はほぼ真北にとる。埋土から土師器杯片・瓦器椀片が出土している。

SK05（第14図、図版26）

K-13区で検出した。南北に長い楕円形状を呈し、長さ197cm、幅83cm、深さ18cmを測る。南側に楕円形状の凹みがみられる。北東隅から底面より9cm浮いた状態で、黒色土器椀1点、土師器小皿1点が出土した。主軸より15cm西側、南壁面より70cmの位置で、滑石製品が底面に接して出土した。方位はほぼ真北にとる。

SK01（第14図、図版25）

M-6区で検出した。東西に長い方形を呈し、長さ173cm、幅85cm、深さ33cmを測る。四壁はほぼ垂直に立ち上がる。中央から、底面より8cm浮いた状態で黒色土器椀が出土した。北西隅からは、小刀2口が底面から10～15cmの位置で、柄を西、刃先を東、刃背を北に向けた状態で出土した。小刀は37cm離れた状態にあった。方位はほぼ東西にとる。

SX24（第14図）

C-5区で検出した。東西に長い不整円形を呈し、長さ180cm、幅115cm、深さ16cmを測る。南西側は北東側より35cm低くなっており、切り合い関係を示すものかと考えられたが、出土する土器は同一型式を示し同一遺構として扱った。多量の土器片が出土しており、廃棄のための土坑とみられる。方位はN-40°-Wにとる。南西隅が柱穴に切られている。

SX51（第17図、図版28）

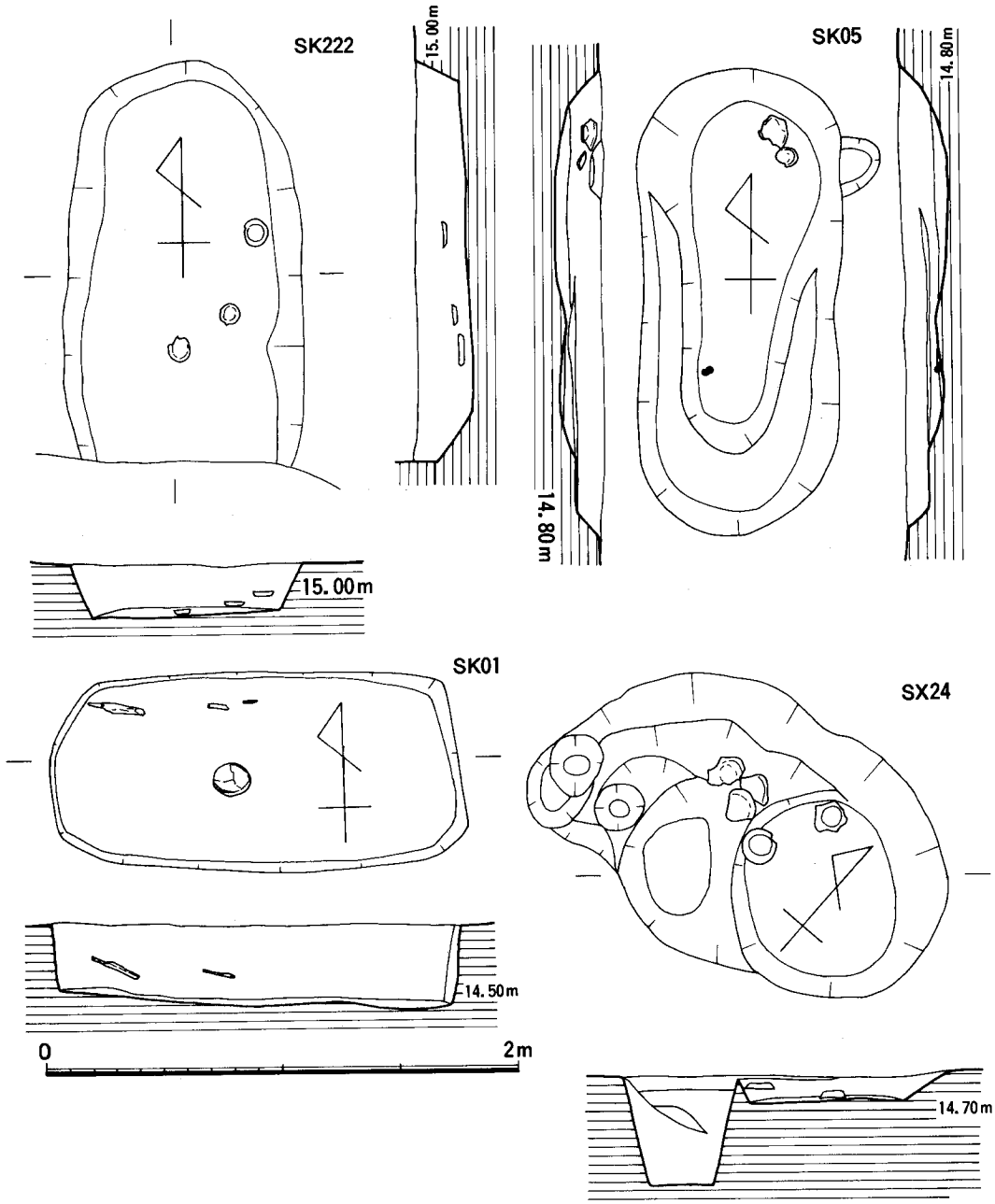
D・E-5区で検出した。南北に長い楕円形を呈し、長さ356cm、幅270cm、深さ18cmを測る浅い土坑である。東側がSD100と重複し、SD100の埋没後掘り込まれている。多量の土師器小皿、杯が南上部から底面に流れ込んだ状態で出土している。埋土には炭化物が含まれていたが、壁面が焼けた痕跡は認められなかった。方位はほぼ真北にとる。

SK20（第16図、図版27）

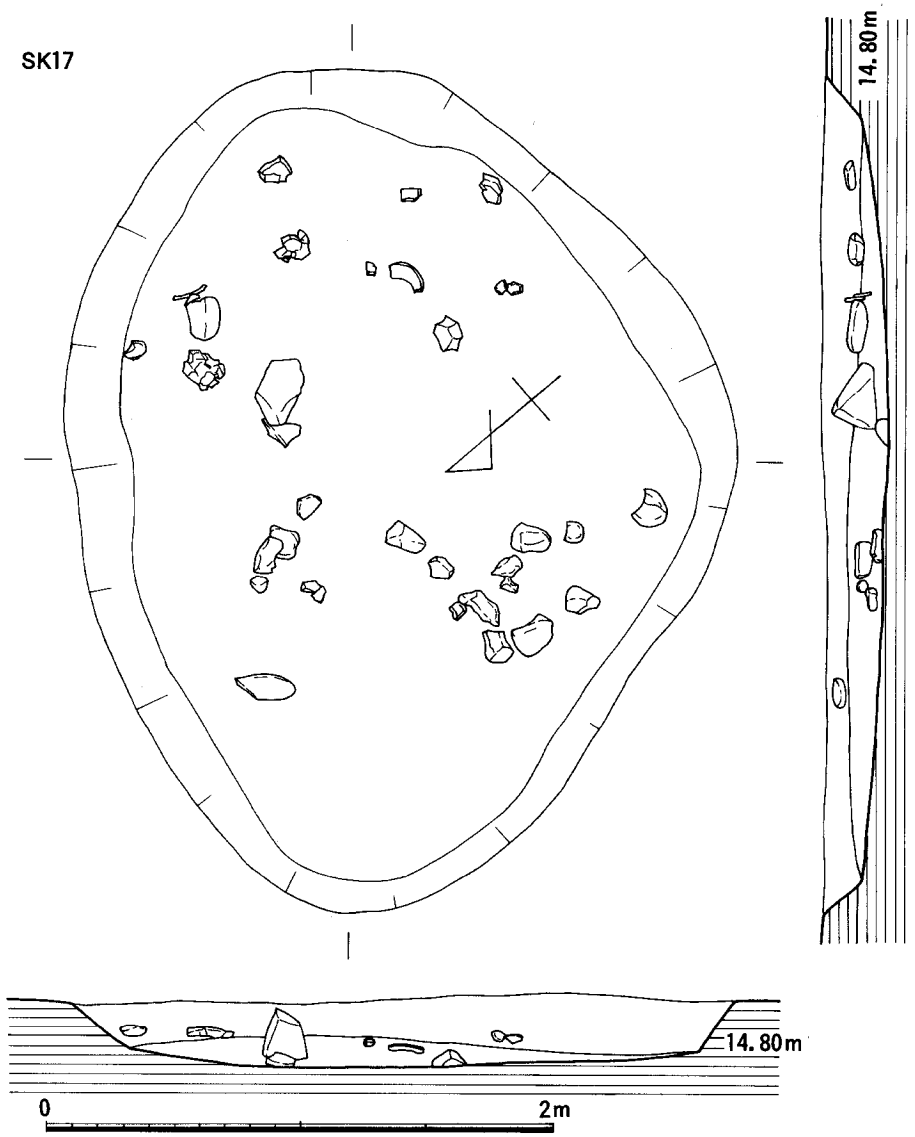
O-5区で検出した。南北に長い不整円形を呈し、長さ190cm、幅135cm、深さ7cmを測る浅い土坑である。瓦質の棒状土製品が水平に寝かされ、5cm前後浮いた状態で出土している。土製品のほかには少量の土師器細片が出土している。埋土には炭化物、赤褐色ブロックを含む。

SK17（第15図、図版27）

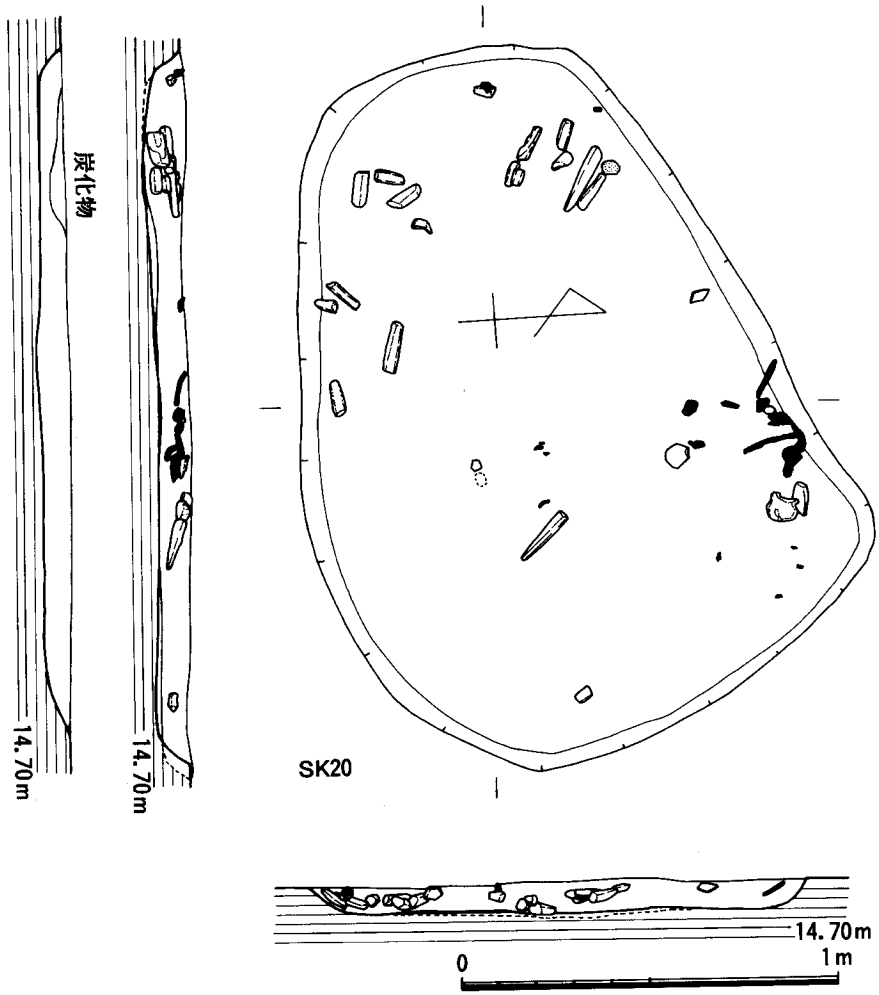
J-7区で検出した。不整円形を呈する330cm×263cm、深さ32cmを測る浅い土壙である。径10cmの礫が浮いた状態で散在する。



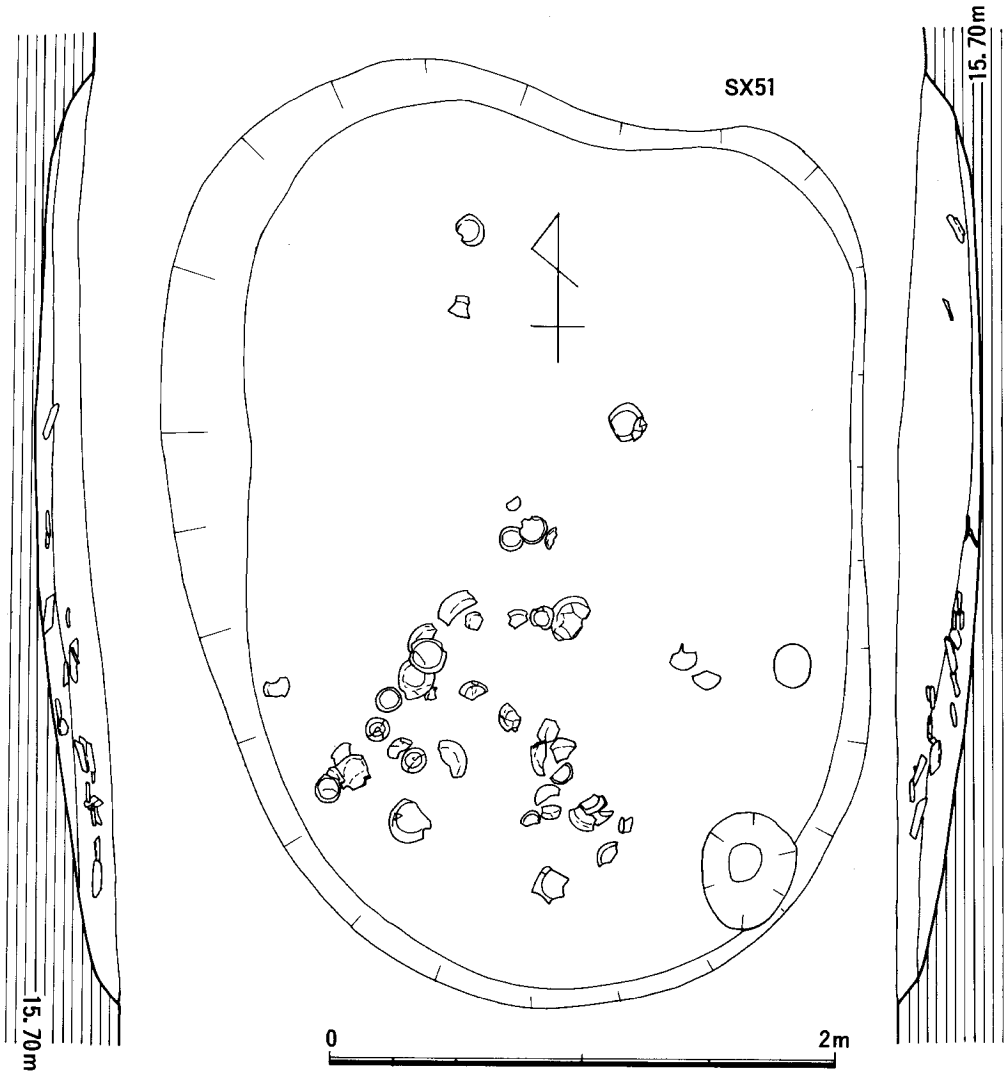
第14図　土坑墓実測図　(1/30)



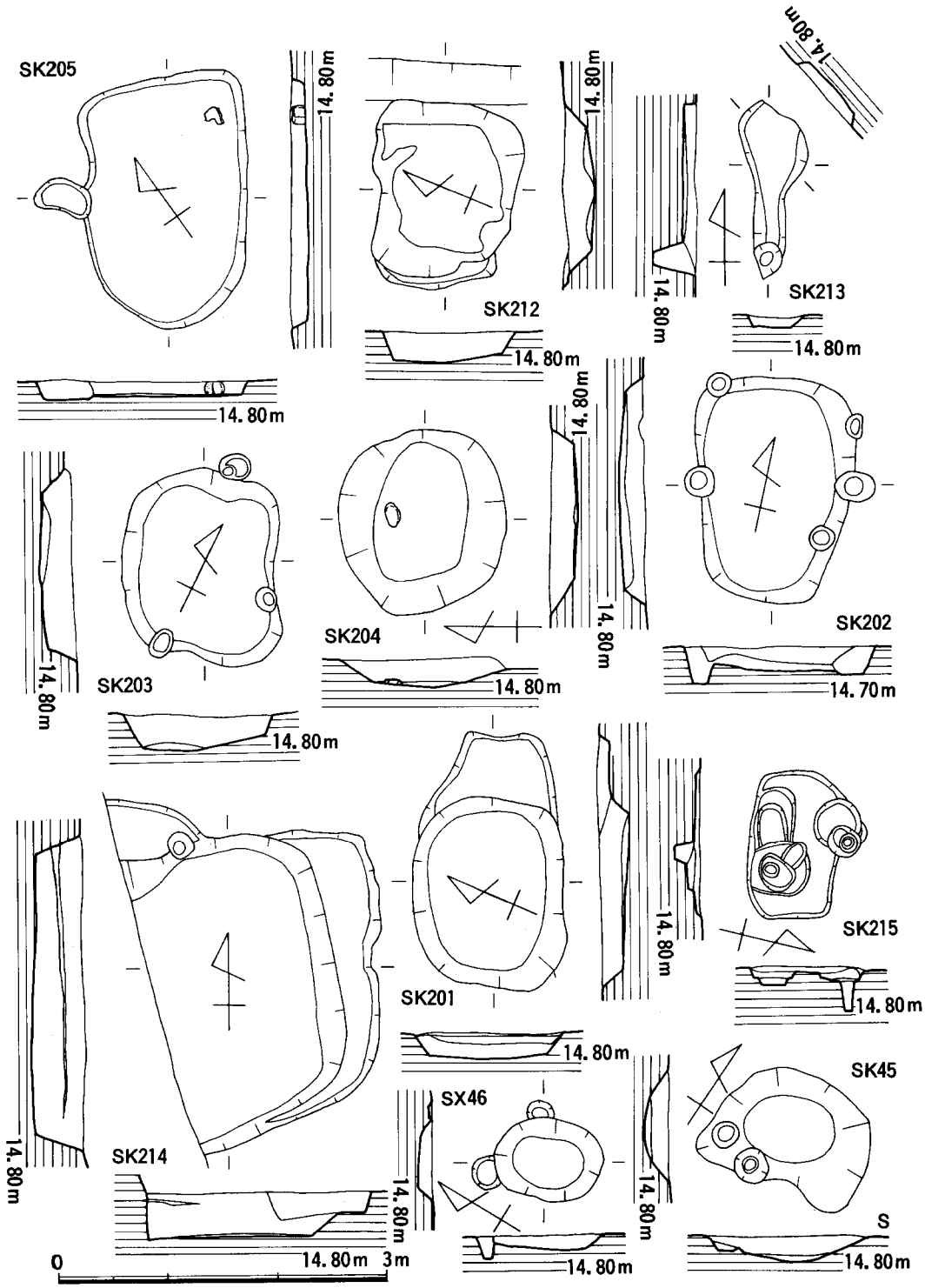
第15図　土坑実測図 (1) (1/30)



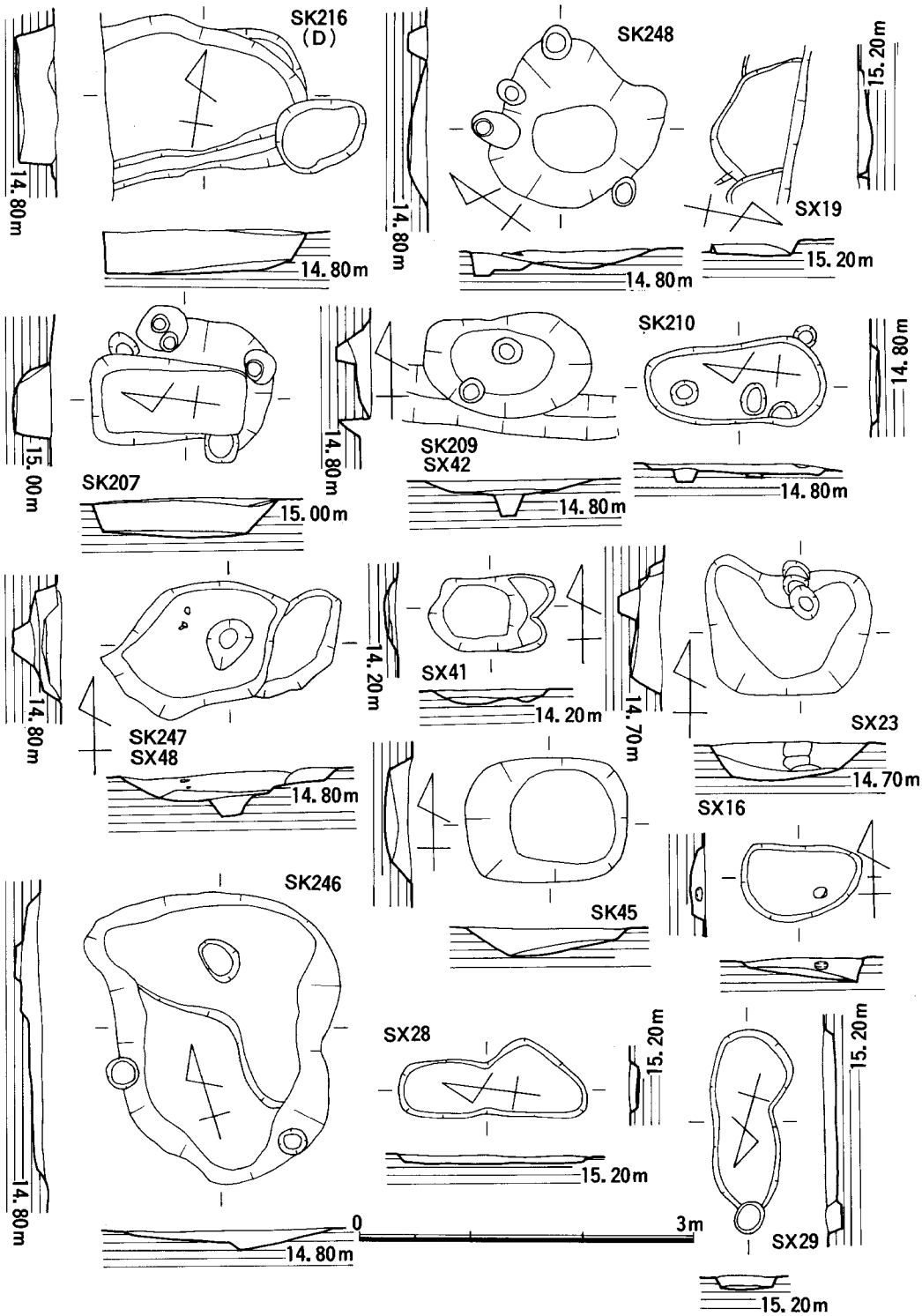
第16図　土坑実測図 (2) (1/20)



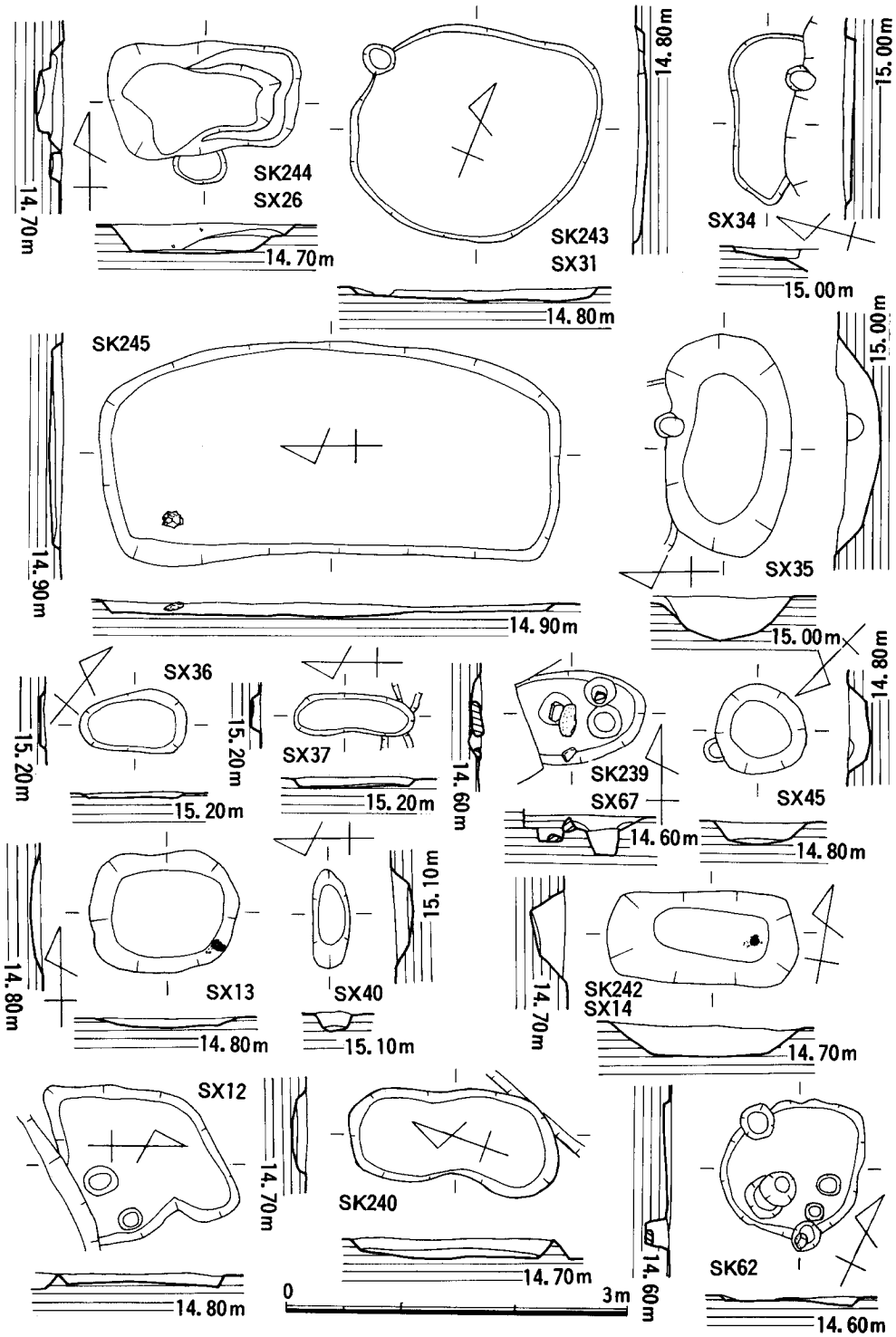
第17図　土坑実測図 (3) (1/30)



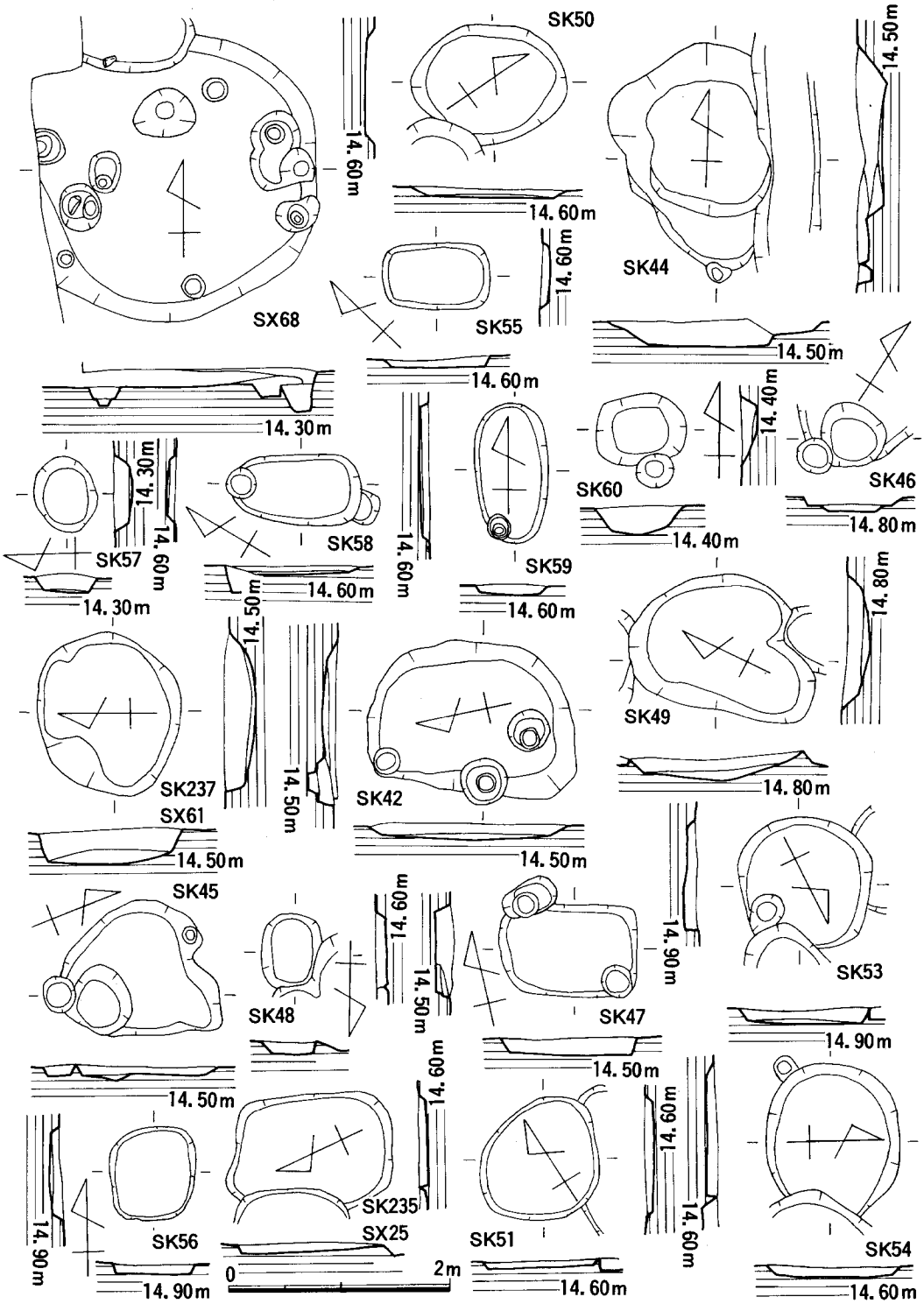
第18図　土坑実測図 (4) (1/60)



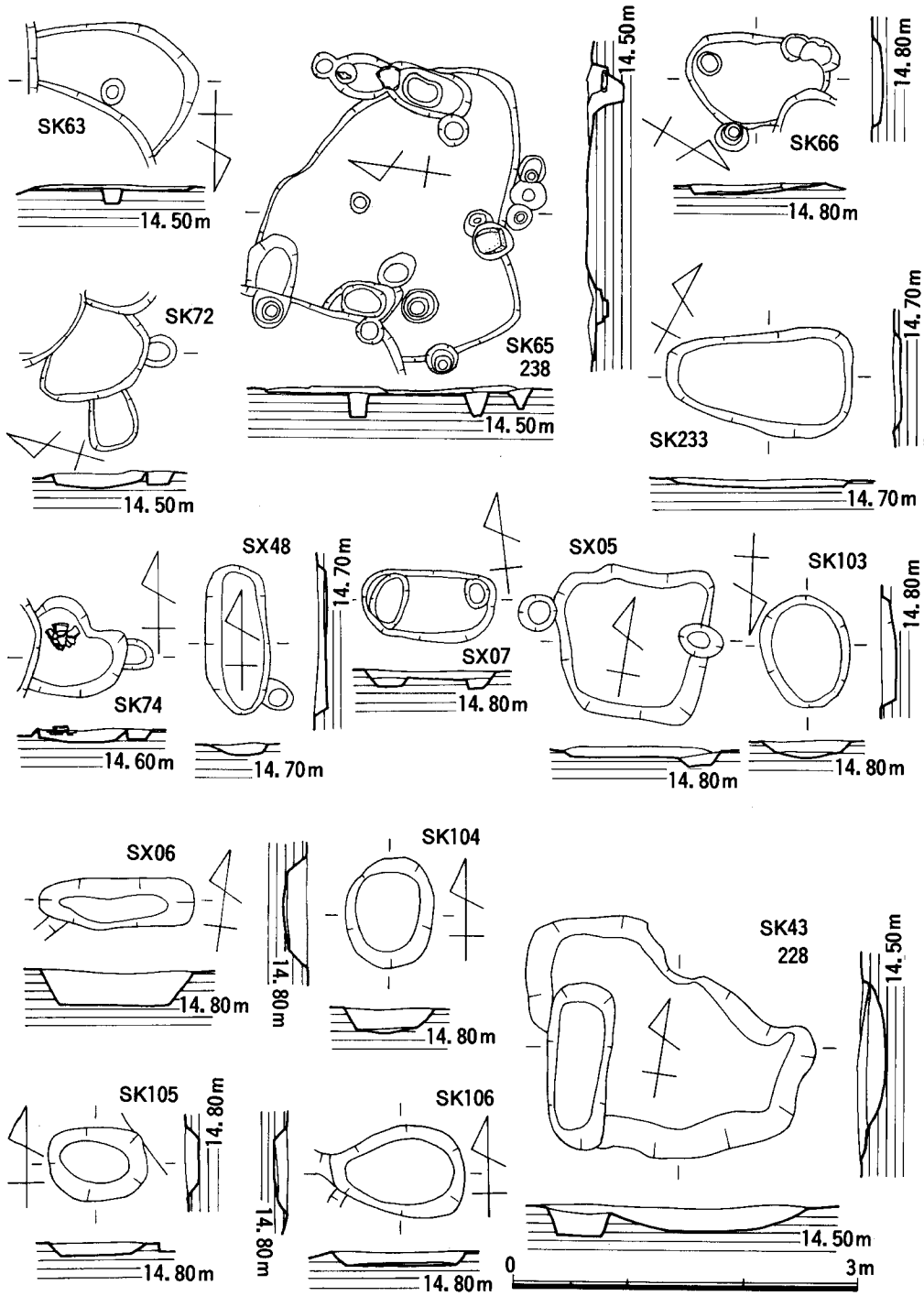
第19図　土坑実測図 (5) (1/60)



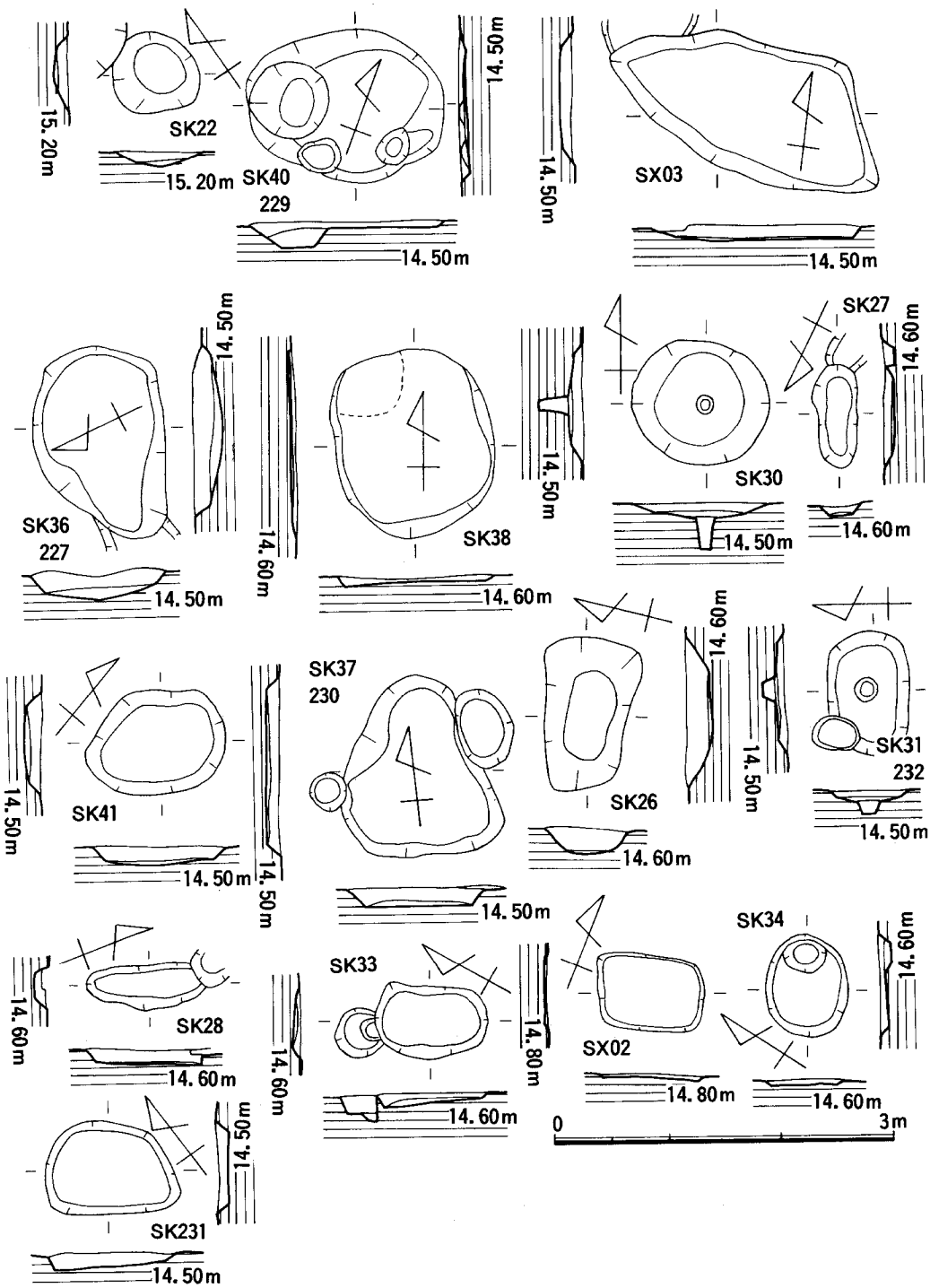
第20図　土坑実測図 (6) (1/60)



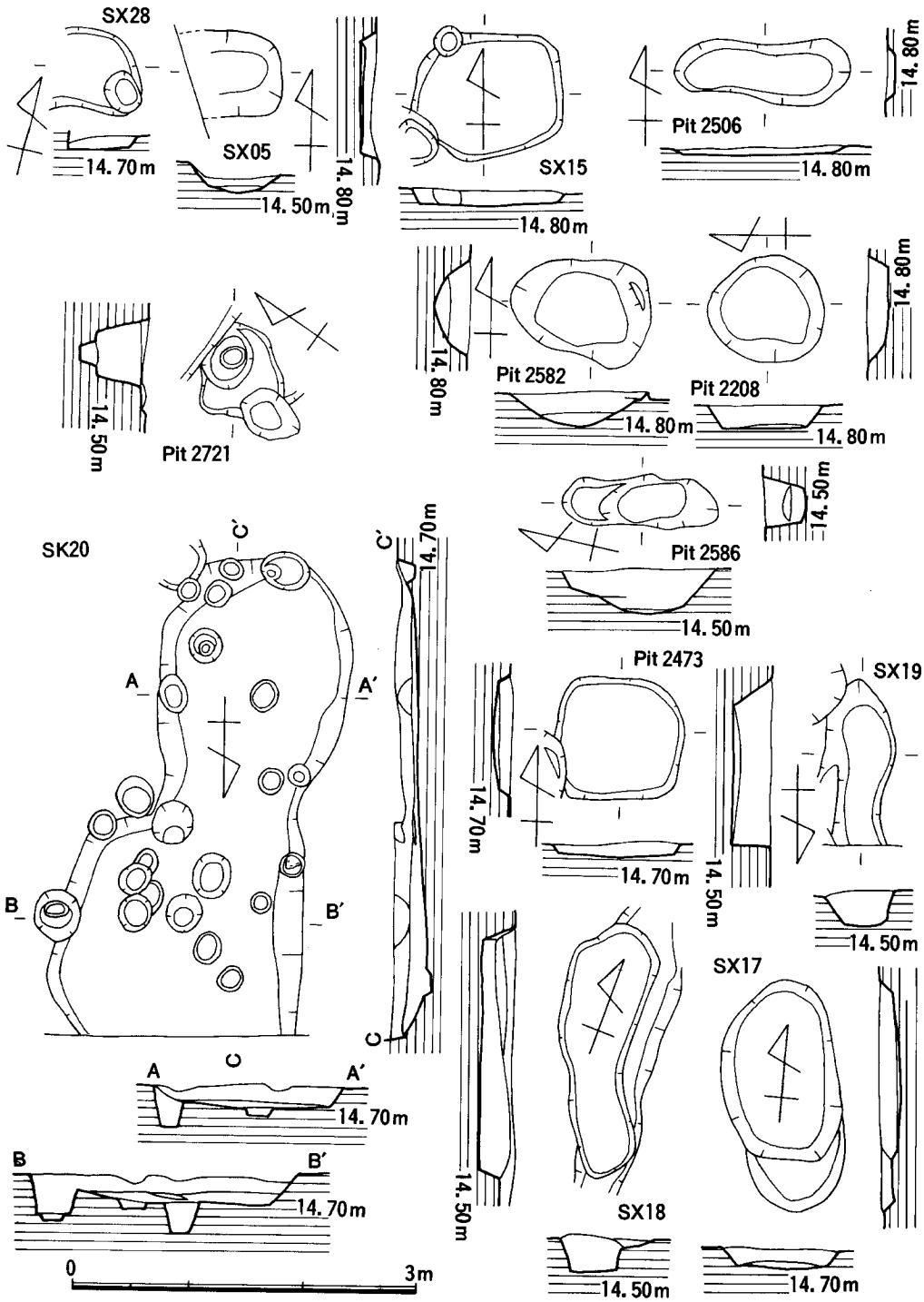
第21図　土坑実測図 (7) (1/60)



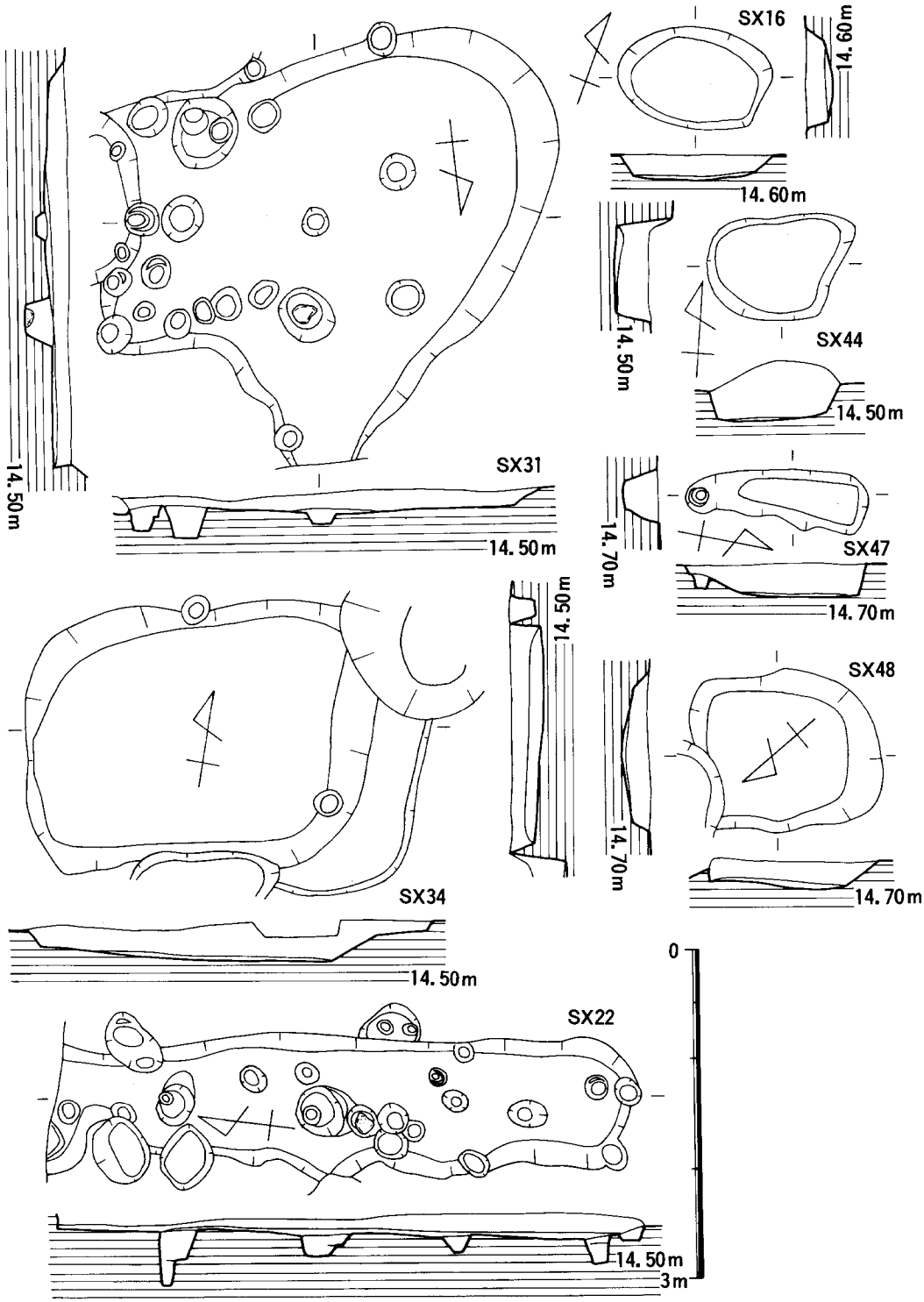
第22図　土坑実測図 (8) (1/60)



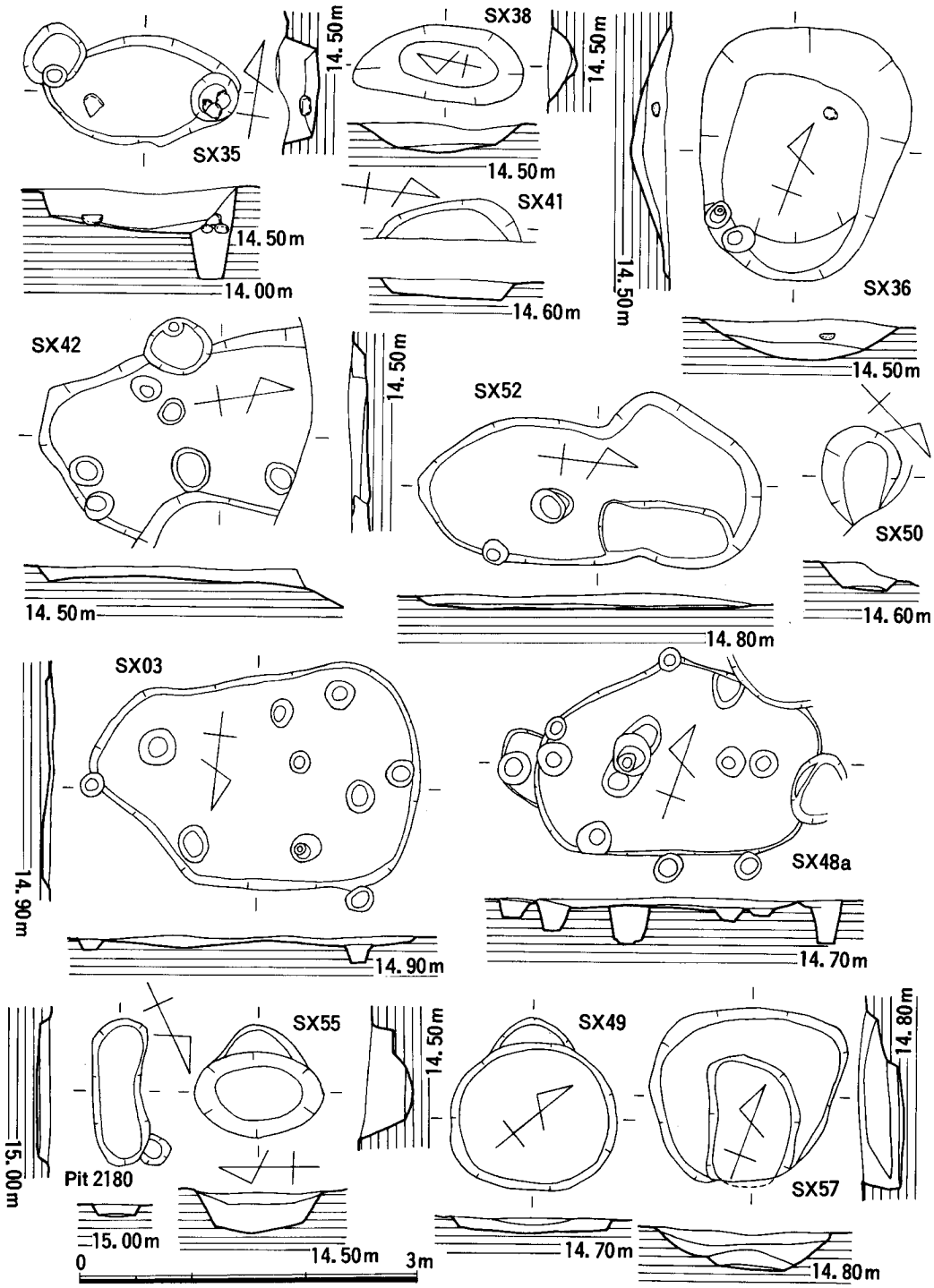
第23図　土坑実測図 (9) (1/60)



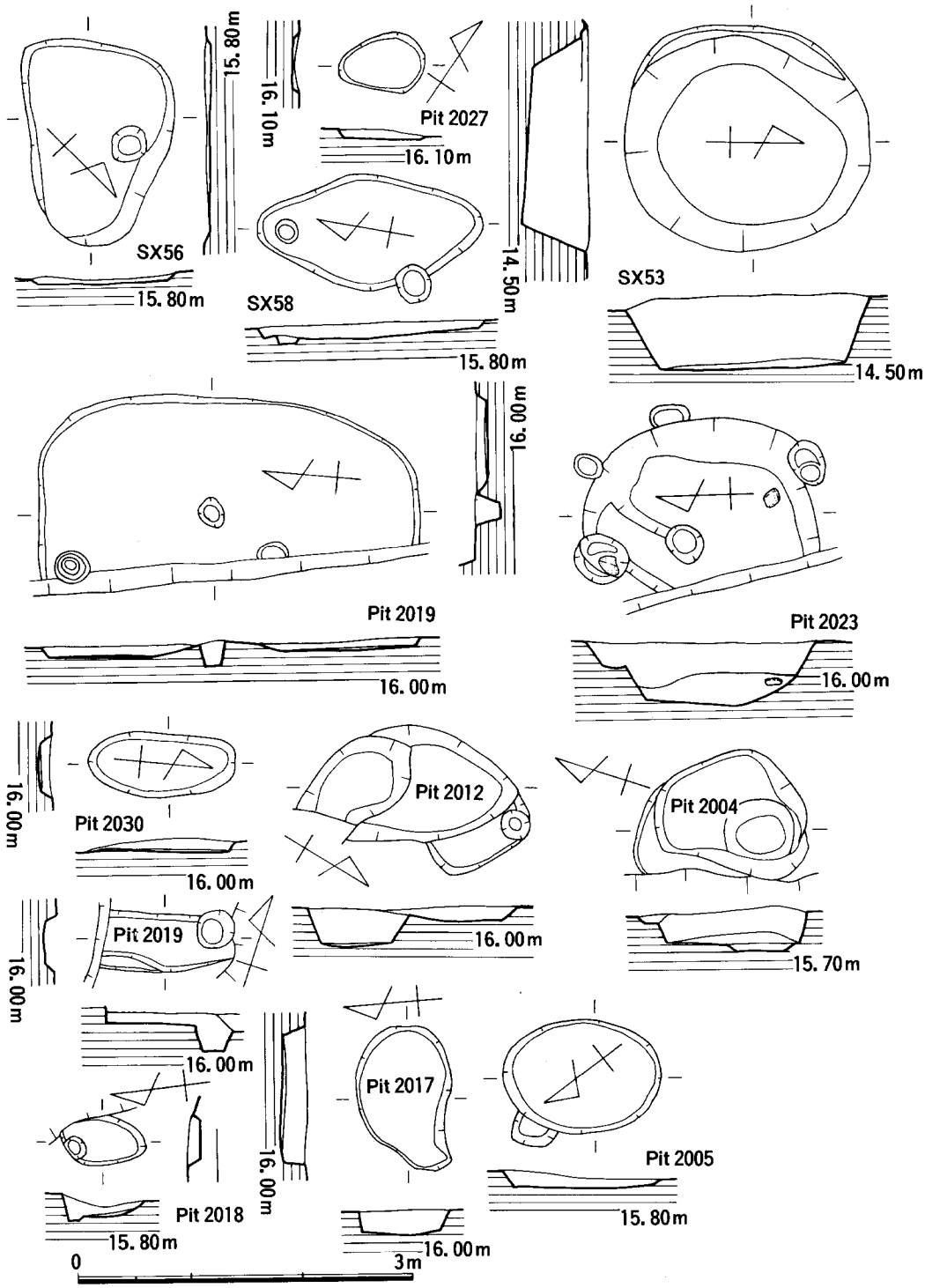
第24図　土坑実測図 (10) (1/60)



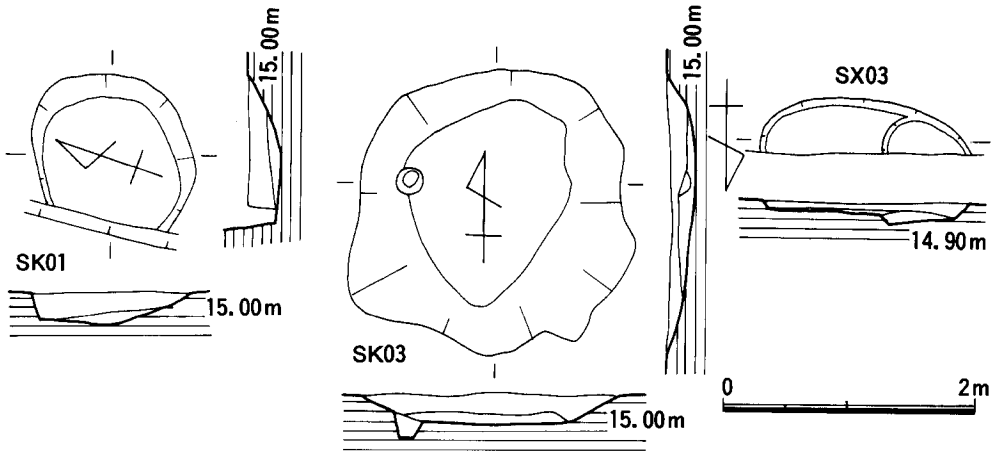
第25図　土坑実測図 (11) (1/60)



第26図　土坑実測図 (12) (1/60)



第27図　土坑実測図 (13) (1/60)



第28図　土坑実測図 (14) (1/60)

番号	地区	平面形態	平面規模 (cm)	深さ (cm)	方　位	備　　考	時期	遺物挿図
SK222 SX39	K-10・11	不整楕円形	170×98	18	N	調査区外に延びる	12C前半	第38図
SK05	K-13	長楕円形	196×82	20	N		11C	第37図
SK01	M-6	隅丸方形	172×84	34	N		11C	第37図
SX24	C-5	不整楕円形	183×117	10	N14°W		14C	第40図
SK17	J-7	楕円形	334×262	28	N49°50′W			
SK20	O-5	不整楕円形	192×133	8	N			第38図
SX51	D・E-5	ほぼ楕円形	366×271	32	N		13C	第41図
SK205	F -7	隅丸方形	230×150	10	N55°W		12C	第38図
SK212	F-8	隅丸方形	170×125	27	N20°W		14C	
SK213	F-9	不整形	155×55	10	N	Pit 1554と切り合い	12C	
SK203	G-8	隅丸方形	172×89	30	N25°W		近世	
SK204	G-8	円形	165×155	26	N			
SK202	G-9	隅丸方形	204×140	22	N12°40′W		11C	
SK214	G-10	不整隅丸方形	265×200	45	N3°E	調査区外に延びる	12C	第38図
SK201	G-10	楕円形	175×137	20	N22°10′W		12C前後	第38図
SK215	G-10	隅丸方形	135×82	5	N9°W	SD14を切る	12C	
SX46	H-8	楕円形	100×75	11	N32°W			
SX45	H-8	不整隅方形	150×98	22	N25°W			
SK216	G-10	不整楕円形	176×142	39	N9°40′W	SD100の張り出し部、溝とした方が適当か。	12C	第69図
SK216 (D)	H-8・9	不整円形	137×138	15	N35°50′W		13C	
SX19	I-7	不整形	98×57	15	N7°W	調査区外に延びる SX20を切る		
SK207	H-9	隅丸方形	160×92	34	N8°W		13C	

第２表　土坑一覧表(1)

番号	地区	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	方　位	備　　考	時期	遺物挿図
SK209 SX42	H-10	楕円形	148×92	12	N	SD14を切る	13C	
SK210	I-8	長楕円形	152×72	7	N7°10′W		11C	
SK247 SX48	I-7	不整形	192×108	23	N			
SX41	I-10	不整楕円形	114×64	17	N1°E			
SX23	I-8	不整隅丸方形	143×106	34	N			
SK246	I-8	隅丸方形	261×187	12	N14°10′E		13C	
SX25	I・J-8	隅丸方形	147×113	25	N			
SX16	J-7	楕円形	107×65	16	N35°W			
SX28	J-8	不整形	168×47	8	N8°20′W			第38図
SX29	J-8	不整形	160×56	10	N16°10′W			
SK244 SX26	J-8	隅丸方形	162×97	25	N		近世	
SK243 SX37	J-9	ほぼ楕円形	216×187	7	N21°W			
SX34	J-10	不整隅丸方形	150×48	8	N10°20′W	SX35に切られる		
SK245	J-9・10	隅丸方形	408×181	12	N		11C	第39図
SX35	J-10	楕円形	194×114	36	N	SX34を切る		
SX36	J-10	楕円形	94×57	5	N37°W			
SX37	J-10	長楕円形	105×34	7	N			
SK239 SX67	K-4	不整楕円形	111×80	12	N14°50′E	一部調査区外		
SX45	K-7	円形	79×78	20	N43°10′W			
SX13	K-8	隅丸方形	130×104	8	N			
SX40	K-10	長楕円形	87×33	17	N			
SK242 SX14	K-8	隅丸方形	165×79	26	N10°W		12C	
SX12	K-9	不整形	128×122	8	N	SD16に切られる		
SK240	K・L-7・8	隅丸方形	180×71	17	N18°50′W	SD28を切る		
SK62	K・L-4	ほぼ円形	122×118	5	N22°W			
SX68	K・L-4	円形	250×250	15	N11°10′W	調査区外及びSK67に切られる	13C	第39図
SK50	L-3	楕円形	140×107	7	N32°10′W	SK49に切られる		
SK44	L-3	不整隅丸方形	186×148	24	N4°30W			
SK55	L-3	隅丸方形	96×60	9	N53°50′W		13C	第39図
SK57	L-3	楕円形	69×56	16	N			
SK58	L-3	隅丸方形	122×63	4	N30°30′W			
SK59	L-3	楕円形	125×65	9	N			
SK60	L-3	ほぼ楕円形	82×63	23	N			
SK46	L-4	ほぼ円形	55×55	5	N56°E	SK45を切る		
SK237 SX61	L-3	楕円形	141×129	28	N		12~13C	
SK42	L-3・4	隅丸方形	185×135	15	N11°E			
SK49	L-3・4	不整形	158×122	18	N30°E	SK50・SK48を切る		

第2表　土坑一覧表(2)

番号	地区	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	方　位	備　　考	時期	遺物挿図
SK45	L-3・4	不整形	144×123	5	N17°E	SK46に切られる		
SK48	L-4	楕円形	67×52	9	N			
SK47	L-4	隅丸方形	122×84	12	N9°E	SK49に切られる		
SK53	L-4	ほぼ円形	116×117	12	N26°E	SK49に切られる SK54に切る		
SK56	L-4	隅丸方形	85×75	8	N			
SK235 SX52	L-4	隅丸方形	192×95	8	N24°E	SK51に切られ、 SK72を切る		
SK51	L-4	楕円形	110×105	5	N29°E	SK52・SK72を切る		
SK54	L-4	不整楕円形	121×119	7	N	SK53に切られる		
SK63	L-4	不整形	140×110	4	N	SD21・SK64に切られる	12C後半	第39図
SK64	L-4	隅丸方形	410×130	5	N	SD21を切る	12C後半	
SK72	L-4	不整形	105×70	10	N16°W	SK51・SK52に切られる		
SK65 SK238	L-4	不整形	258×203	4	N7°50′W	SK64に切られる	12C	
SK66	L-4	不整楕円形	120×79	3	N30°W	SK64に切られる		
SK233	L-4	隅丸方形	158×88	6	N29°W			
SK74	L-4	不整形	85×75	10	N12°W	SK64に切られる		
SX48	L-7	長楕円形	78×54	10	N			
SX07	L-8	隅丸方形	114×62	7	N5°E			
SX05	L-8	隅丸方形	130×127	7	N10°W			
SK103	L-9	楕円形	98×73	15	N2°W			
SX06	L-8	隅丸方形	134×45	28	N9°40′W	SD04を切る		
SK104	L-9	楕円形	95×75	20	N			
SK105	L-9	楕円形	85×62	12	N			
SK106	L-9	楕円形	115×80	11	N	SD16を切る		
SK43 SK228	L・M-3	不整形	228×204	20	N7°40′W		13C	
SK22	M-4	ほぼ円形	75×70	12	N32°E			
SK40 SK229	M-3・4	楕円形	175×82	5	N19°W		12C	
SX03	LM-7	不整形	188×121	11	N6°40′W			
SK36 SK227	M-3	不整形	154×115	21	N24°E			
SK38	M-3	隅丸方形	164×140	5	N			
SK30	M-4	円形	122×108	12	N			
SK27	M-4	隅丸方形	90×34	9	N35°W			
SK41	M-4	ほぼ楕円形	118×92	15	N29°20′W			
SK37 SK230	M-4	不整形	158×123	15	N6°10′E			
SK26	M-5	隅丸方形	132×71	24	N24°W			
SK31 SK232	M-4	隅丸方形	108×72	11	N			
SK28	M-4	楕円形	103×39	11	N20°E	SK27に切られる		
SK33	N-3	隅丸方形	100×65	11	N28°W			

第2表　土坑一覧表(3)

番号	地区	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	方　位	備　　考	時期	遺物挿図
SX02	M-6	隅丸方形	95×66	3	N23°W			
SK34	N-3	楕円形	88×70	5	N32°W			
SK231	N-4	隅丸方形	110×82	6	N36°E			
SX28	A-4	不整隅丸方形	75×70	11	N11°W	調査区外へ延びる	12C	
SX05	A-4・5	不整隅丸方形	80×71	11	N12°E	調査区外へ延びる	14C	
SX15	B-4	隅丸方形	132×108	13	N	Pit2727が切る	13C	
Pit2506	B-4	長楕円形	152×52	7	N			
Pit2582	B-6	ほぼ楕円形	123×88	30	N2°W	Pit2473を切る		
Pit2208	B-7	ほぼ円形	99×93	23	N			
Pit2586	B-6	楕円形	135×42	37	N15°W			
SX20	C・D-4	不整形	417×210	24	N	調査区外へ延びる	14C	
Pit2473	B・C-5・6	隅丸方形	110×107	11	N	Pit2582に切られる		
SX19	C-4	不整形	146×61	32	N	調査区外に延びる	13C	
SX18	C-4	不整形	213×57	28	N23°W		13C	
SX17	C-4	楕円形	203×102	19	N6°10′W	Pit2539を切る	13C	
Pit2721	B-4	不整形	86×65	53	N32°30′W	Pit2799が切る		
SX31	C-4	不整形	372×365	20	N6°20′E		13C前後	第40図
SX34	B・C-5	隅丸方形	365×230	30	N7°40′W	SE008に伴う	13C	
SX16	C-5	楕円形	140×93	25	N19°30′W		14C	
SX44	C-5	不整形	120×93	31	N7°W	SX34を切る	13C	
SX47	C-6	不整形	165×48	30	N10°W		13C	
SX48	C-6	隅丸方形	170×144	25	N43°W			
SX22	D-4	不整形	524×124	18	N6°W	調査区外へ延びる		
SX35	D-4	楕円形	170×100	33	N8°W			
SX38	D-4	不整楕円形	145×65	25	N15°W		13C	
SX41	D-4	不整楕円形	119×35	18	N5°W	調査区外へ延びる	12C後半~	
SX36	D-4	隅丸方形	225×176	38	N23°W		13C後半	第40図
SX42	D-4	不整形	237×157	11	N6°30′W	調査区外へ延びる	12C後半~	
SX52	D-7	不整形	303×122	6	N-7°20′W			第40図
SX50	D-5	不整楕円形	80×70	23	N43°W	SD101が切る	12C前半	
SX03	D-5・6	不整方形	235×190	7	N5°W		13C前半	第40図
SX48a	D-6	不整楕円形	250×175	10	N18°40′W		12C後半~	
Pit2180	D-8	長楕円形	128×44	11	N26°E			
SX55	D・E-5	楕円形	111×75	32	N		12C後半~	
SX49	D-5	ほぼ円形	145×130	12	N37°E	SD101を切る	12C後半~	
SX57	D・E-7	隅丸方形	156×157	31	N18°W		13C	
SX56	E-7	不整方形	185×128	5	N45°W		12C後半~	

第2表　土坑一覧表(4)

番号	地区	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	方　位	備　　考	時期	遺物挿図
Pit2027	E-13	ほぼ楕円形	57×52	8	N35°30W			
SX58	E-7・8	不整長楕円形	200×105	13	N12°30′W		13C	第40図
SX53	D-7	円形	220×203	57	N		13C	第40図
Pit2019	E-12	不整隅丸方形	340×148	6	N5°W	調査区外へ延びる		
Pit2023	E・F-15	不整楕円形	206×140	55	N4°E	一部調査区外		
Pit2030	E-12	長楕円形	142×58	11	N7°40′W			
Pit2019	F-15	不整長楕円形	114×52	9	N17°10′W	調査区外へ延びる		
Pit2012	F-16	不整楕円形	186×100	11	N149°30′E	一部調査区外		
Pit2004	G-15	不整方形	150×112	30	N28°10′W			
Pit2018	F-16	楕円形	65×45	7	N4°10′E			
Pit2017	F-6	不整楕円形	128×80	22	N2°E	Pit2016を切る		
Pit2005	G-15	楕円形	142×103	10	N35E			
SK01	G-11	不整円形	127×120	25	N20°W	一部調査区外		
SK03	G・H-12	不整円形	225×207	23	N			
SX03	J-11	不整楕円形	160×47	9	N	半分a区側		

第2表　土坑一覧表(5)

溝（第29図）

SD03　SD04

調査区北東で検出した、平行してコの字状に廻る2条の溝である。方位はN-3°-Eにとる。SD03は幅47cm、深さ8cm、SD04は幅52cm、深さ10cmを測る。心々距離は北東辺で1.5m、北西辺で1.5m、南西辺で4.0mを測る。東側はSD01に切られ全体規模は不明であるが、南西辺はSD01の直前で屈曲し、東南方向へ走る北東辺につながると考えられる。残存する長さは44m×48m以上を測る。

SD01（第30図）

調査区東端で検出した、東へ湾曲し北へ流れる旧河川である。幅6.6～9.4m、深さ24～10cmを測り、延長96m検出した。さらに北東へ延びる。中央で2条の河川が合流し1条になっている。南側の2条の河川の内、東側のものは東岸が調査区外にかかるため規模は不明。西側の河川は幅3～7m、深さ30cmを測る。

SD21

北東に張り出した調査区で検出した。幅280cm、深さ15cmを測り、東側は調査区外へ延びる。方位はN-10°-Eにとる。

SD07

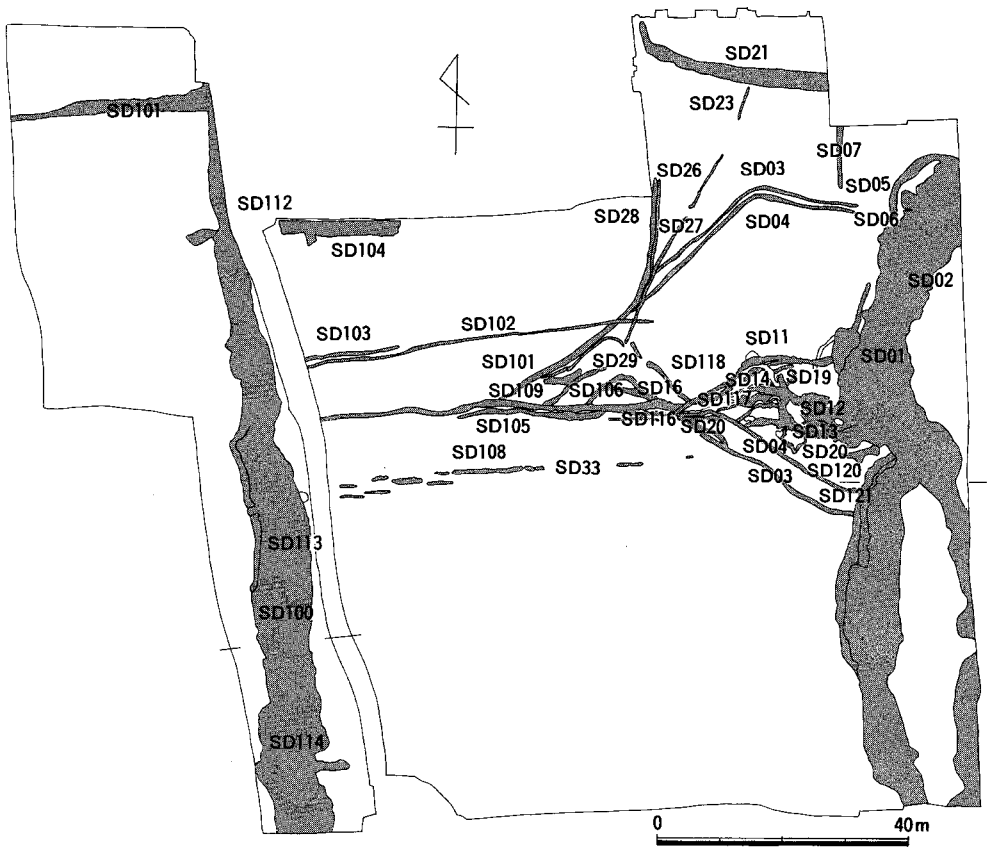
調査区北東で検出した。幅70cm、深さ15cmを測り、北側は調査区外へ延びる。方位はほぼ真北にとる。

SD26

調査区北東で検出した、東北方向に走る溝である。幅25cm、深さ2cmを測る。途中2m途切れているが、延長46m検出した。

SD28

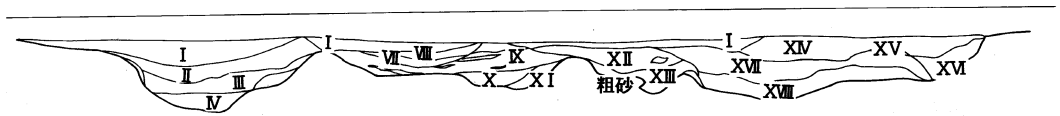
調査区北側中央を西へ湾曲して北に走る。幅75cm、深さ12cmを測り、延長48m検出した。SD101を境に途切れる。



第29図　溝配置図（1/1200）

SD01 北側

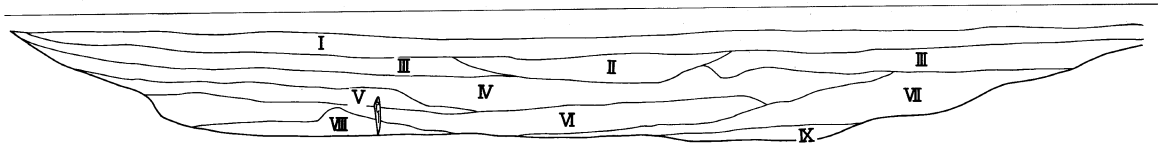
L=15.00m



Ⅰ．灰褐色土（粗砂を含む）
Ⅱ．灰褐色粘質土
Ⅲ．濃灰色砂質土
Ⅳ．濃灰色砂（粗砂、レキを多く含む）
Ⅴ．黄灰褐色土（地山崩壊土）
Ⅵ．灰褐色細砂
Ⅶ．濃灰褐色土（若干粗砂を含む）
Ⅷ．濃灰褐色砂質土（若干粗砂を含む）
Ⅸ．灰色砂と灰白色粗砂の互層
Ⅹ．白色粗砂
XⅠ．灰褐色砂質土
XⅡ．灰褐色砂質土
XⅢ．灰褐色粘質土
XⅣ．赤褐色土と粗砂の混在層
XⅤ．灰褐色粘質土
XⅥ．灰褐色粘質砂
XⅦ．灰褐色砂質土
XⅧ．青灰色シルト

SD100 南側

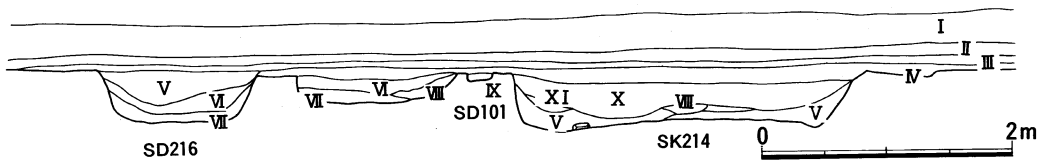
L=15.00m



Ⅰ．暗灰色土
Ⅱ．暗茶褐色土（砂のブロックを含む）
Ⅲ．暗黄褐色土
Ⅳ．褐色シルト
Ⅴ．黄褐色土
Ⅵ．暗茶褐色土
Ⅶ．暗灰褐色土
Ⅷ．灰色シルト
Ⅸ．青灰色シルト

a区西壁

L=16.00m



Ⅰ．耕作土
Ⅱ．床土
Ⅲ．灰褐色土と黄褐色土
Ⅳ．黒褐まじりの茶褐色土
Ⅴ．暗褐色土
Ⅵ．茶褐色土と黄褐色土
Ⅶ．暗褐色土
Ⅷ．炭と焼土
Ⅸ．砂
Ⅹ．炭を含む暗褐色土
XⅠ．炭

第30図　溝土層実測図（1/60）

SD27

SD28の東側に接して走る幅37cm、深さ9cmの溝である。延長27m検出した。

SD29・SD16

調査区北側中央で検出した。平行して矩形に廻る2条の溝である。方位はN-40°-Eにとる。SD29は幅35cm、深さ7cm、SD16は幅55cm、深さ8cmを測る。心々距離は3.0mを測る。SD16はSD116を境に途切れ、SD29はその北側で途切れている。SD16は延長11m、SD29は延長12m検出した。

SD102・SD101・SD30

東西方向に平行して走る3条の溝である。心々距離は10m前後を測る。方位はN-7°30′-Wにとる。SD101は幅45cm、深さ8cmを測り、SD100を挟んだ西側でその延長6mを検出した。東側はSD01の西側26mの位置から複雑に分岐している。分岐点からSD100東側までの延長56mを検出した。SD102は幅40cm、深さ13cmを測り、延長55m検出した。SD30は後世の削平によって、破線状に途切れた状態で検出された。幅52cm、深さ26cm、延長は途切れた部分を加え延長48mを測る。

SD103

SD102の北を50cmの心々距離をとって平行に走る溝である。幅45cm、深さ13cmを測り、延長15m検出した。

SD105

SD101の南を30～75cmの心々距離をとって平行に走り、東端はSD101と重複する。幅55cm、深さ12cmを測り、延長23m検出した。

SD30の南1～3m付近にもSD30と平行に走る数条の溝の断片がみられるが、削平により詳細は不明。

SD104

北側中央で検出した。北岸は調査区外にかかるため、幅の全長は不明。深さ17cmを測り、延長22m検出、SD100をはさんだ西側で延長とみられる幅180cm、深さ26cmの溝を延長5m検出した。

SD05

調査区の北東隅で検出した、SD01の北西を迂回するように流れる溝である。幅76cm、深さ10cmを測り、延長17m検出した。

SD100（第30図、図版23）

調査区西側を南北に流れる幅3.5～9m、深さ1mの大溝である。延長110m検出した。主軸の方位はN-6°30′-Wにとる。溝底部は北へ緩やかに傾斜する。埋土中からは夥しい量の遺物が出土した。SD100の埋土に掘り込んだ遺構も予想されたが、上面からの識別は困難で、辛うじて土層断面から確認できた。上層出土遺物中に新しい様相を示すものが全体の量からすれば若干混入しているが、上面からの掘り込みに伴うものと考えている。

第31図　杭列実測図（1/60）

付属施設

SD100と直交する溝状の張り出しが、約42m(70丈)の間隔をとって3ヵ所でみられた。北側から、SD112、SD113、SD114とする。

SD112

SD100調査区北端から18mで検出した。SD100の東岸が調査区外にかかるため、西岸でのみ検出した。長さ5m、幅1.8m、深さ15cmを測る。

SD113

SD112から42m南のSD100の両岸で検出した。東岸では一部調査区外にかかるが、長さ75m、幅55cm、深さ25cm、西岸で長さ2m、幅1m、深さ15cmを測る。

SD114

SD113から42m南のSD100の両岸で検出したが、西岸では西側が調査区外に延び、長さ2m分検出、幅1m、深さ22cm、東岸で長さ5.5m、幅1.3m、深さ7cmを測る。

杭列（第31図）

SD100の調査区南端の西岸寄りで検出した。南北に平行にのびる2列の杭列で、2列間の距離は2.3mを測る。方位はN-5°-Wにとる。東側の杭列は約4.6m続き、16本の丸杭からなる。そのほとんどは垂直に打ち込まれている。杭底の水準高は13.9～14.3mとほぼ均等で、杭は先端から20～40cm程残存し、北側の杭ほど残存長は短くなる。杭の間隔は、中央に90cmの開きがあるほかは20～40cmの間におさまる。北端に横たわっている木材は、横木か折れた杭のいずれであるか不明。西側の杭列は約2.3m続き、6本の丸杭からなる。すべて垂直に打ち込まれている。杭底の水準高は14.1～14.3mとほぼ均等で、杭は先端から10～35cm残存し、東側の杭列と同じく北側に行くにつれて残存長は短かくなる。杭の間隔は40～50cmにとる。

杭列の西側のSD100西岸は、通常の幅より約2m抉れており、溝の流れに沿ったこの杭列は護岸用と考えられる。

2　出　土　遺　物

掘立柱建物・ピット状遺構出土遺物　建物を構成する柱穴としてまとめることができた柱穴掘り方から出土した遺物のほとんどは細片で、図化することができたものについて述べる。

SB46出土土器（第32図）

土師器小皿(1)　底部は糸切りで、板状圧痕はみられない。外面体部から内底まで横ナデ。口径8.6cm、底径6.5cm、器高1.2cmを測る。

SB47出土土器（第32図、図版29）

土師器小皿片、陶器四耳壺が出土した。

陶器四耳壺(2)釉は緑色、胎土は灰色を呈する。

SB48出土土器（第32図）

陶器壺（3） 平底の底部片で、体部は横ナデで、器面の凹凸が著しい。胎土は粗い砂粒を多量に含み、色調は外面赤褐色、内面灰色を呈する。

SB80出土土器（第32図、図版29）

白磁皿（4） 体部中位で屈曲し、内底見込みは平坦で、口縁部は内湾気味に外上方へ延びる。内底見込みに、ヘラ状工具で草花文を施す。釉は灰白色で、屈曲部よりやや下位まで施釉される。胎土は灰白色を呈する。

SB92出土土器（第32図、図版29）

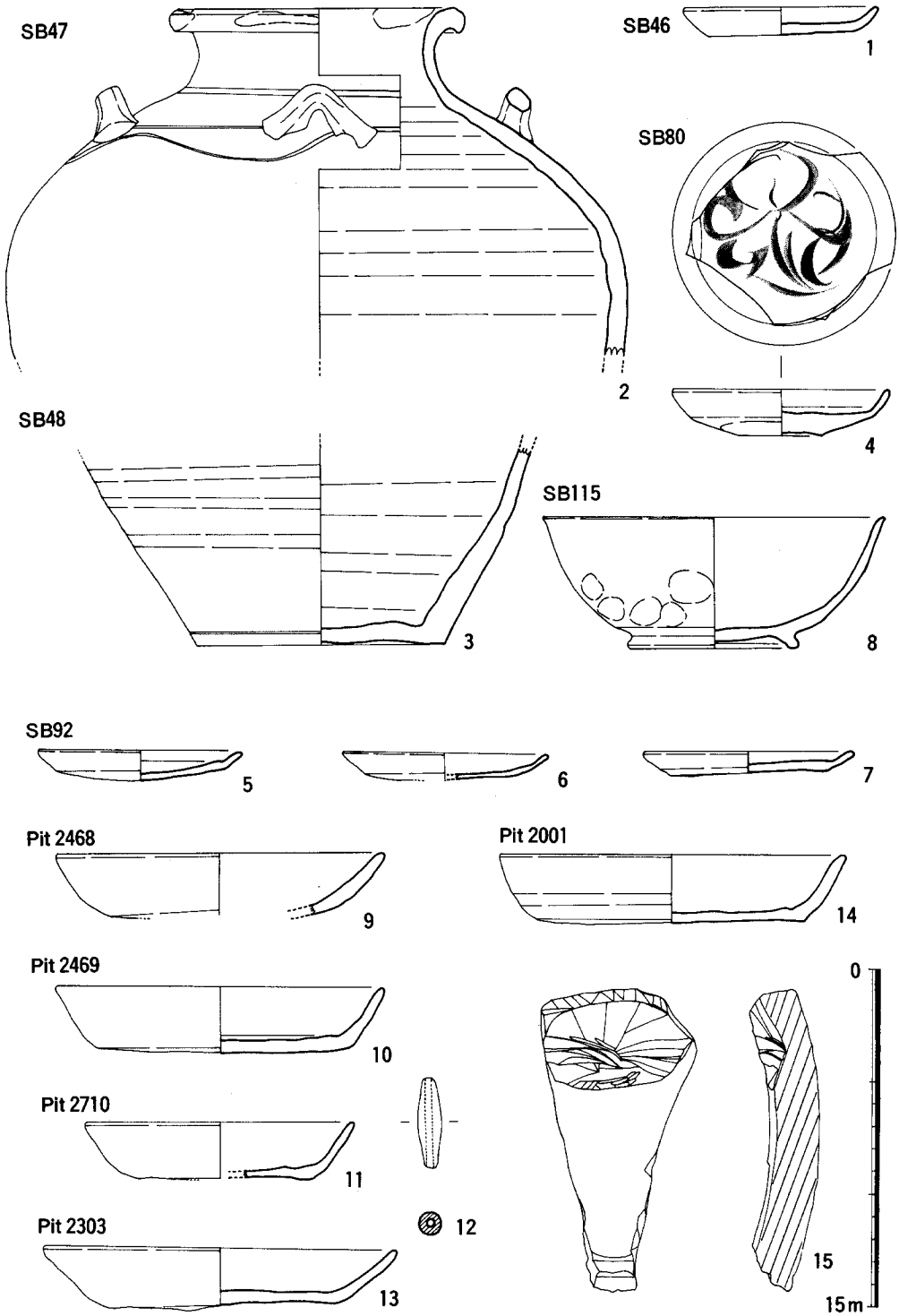
土師器小皿（5～7） 底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径は9.0～9.4cm、底径6.9～7.2cm、器高1.0～1.4cmを測る。

SB115出土土器（第32図、図版29）

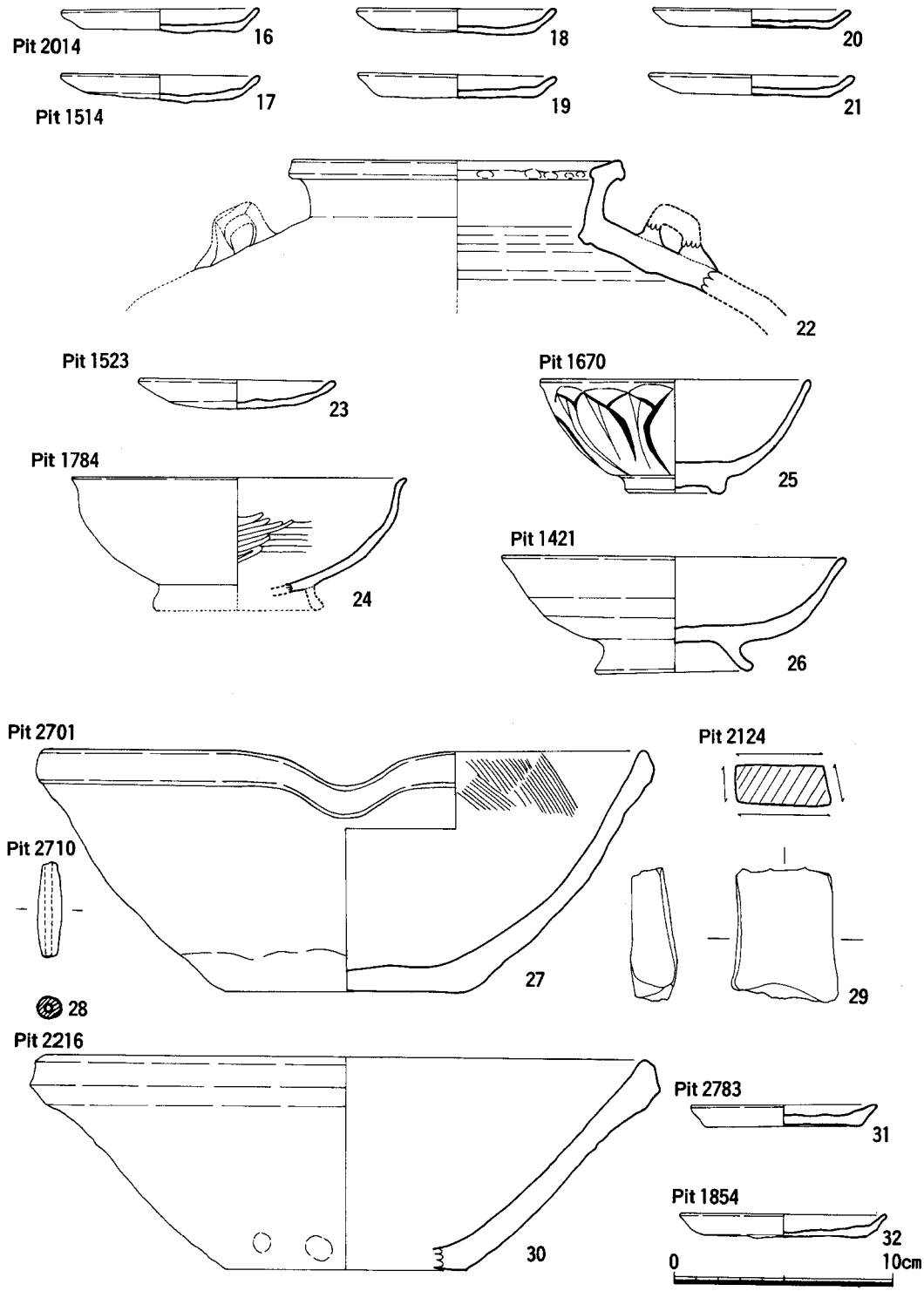
黒色土器椀（8） 体部は丸味を持って外上方に延び、口縁部はかるく外反し、端部を外側に引き出す。外面体部から内面にかけてヘラミガキ、口縁部内面はコテアテ痕か、外面体部下半には指頭圧痕がみられる。内外面とも燻され、漆黒色を呈する。高台は低く、幅が狭く、外側に開く。

柱穴・ピット状遺構出土土器（第32～34図、図版29～31）

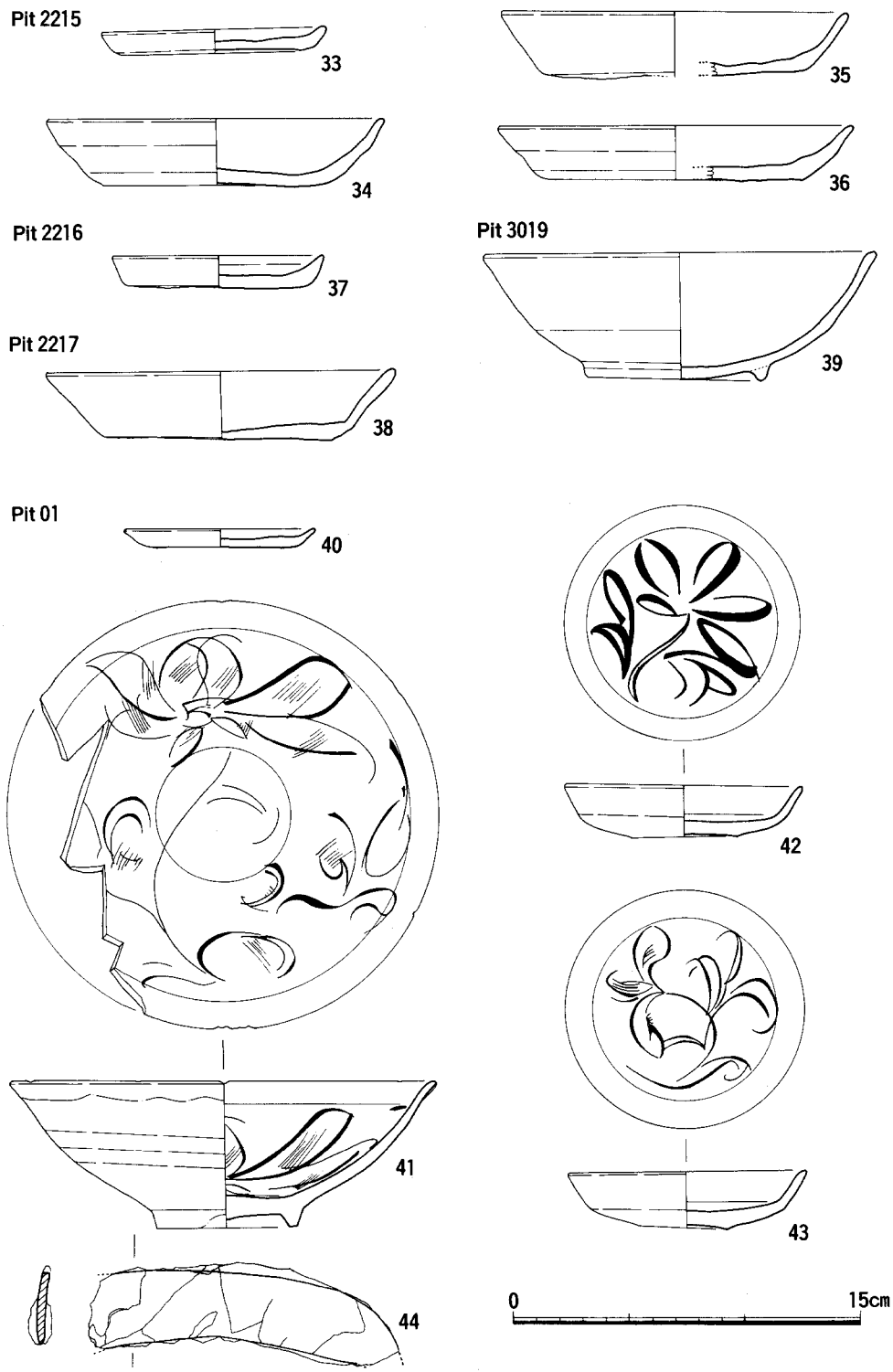
建物を構成する柱穴以外について述べる。建物としてまとまる柱穴から出土する遺物のほとんどが細片であるのに比べ、遺物の残存状態もよく、Pit01のように鎮壇の性格をもつとみられるものもある。9～11・13は土師器杯で、底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径、底径、器高はそれぞれ、9は14.5cm、8.6cm、3cmを測る。Pit2468（B-6区）出土。10は14.5cm、11cm、3cmを測る。Pit2469（B-6区）出土。11・12はPit2710（B・C-4区）出土。11は11.8cm、7.8cm、2.5cmを測る。12は土錘で長さ4cm、径1.1cmを測る紡錘形のものである。13は15.6cm、10cm、2.8cmを測る。Pit2303（C-7区）出土。14・15はPit2001（B-9）出土。14は土師器杯で底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径15.2cm、底径11.8cm、器高3.1cmを測る。15は滑石製匙で、石鍋を再加工したもので撥形の形状をとる。16～21はPit2014（B-9区）出土。土師器小皿で、底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径は9.4cm～9.0cm、底径7.4～6.8cm、器高1.1cm～0.9cmを測る。22は陶器壺で口縁部を折り返し、断面四角形にする。口縁部内面に指頭圧痕がみられる。外面に小豆色の釉がかけられ、胎土は灰色を呈する。23は土師器小皿で、底部はヘラ切り、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径8.9cm、底径6.4cm、器高1.3cmを測る。Pit1523（G-9区）出土。24は黒色土器椀で器周残1/5からの復元。体部上位で屈曲し、口縁部はわずかに外反し、端部を外側へ引き出す。高台は欠失。内外面ともヘラミガキを施す。Pit1784（I-8区）出土。25は龍泉窯系青磁小椀で、体部外面に鎬蓮弁をもつ。釉は空色に発色



第32図　掘立柱建物・Pit 出土遺物実測図(1)(1/3)



第33図　Pit 出土遺物実測図(2)(1/3)



第34図　Pit 出土遺物実測図(3)(1/3)

し胎土は灰白色を呈する。Pit1670(L-5区)出土。26は土師器椀で体部中位に肥厚する屈曲部をもち、口縁部は外反する。口径15.7cm、高台径7.2cm、器高5.4cmを測る浅めの椀である。Pit1427(M-7区)出土。27は瓦質土器片口鉢で、器周残1/8からの復元である。体部中位はやや丸味を持って外上方に延び、口縁部を玉縁状にする。器表の磨滅が著しく、調整は明確に観察できないが、口縁部内面にハケ目がみられる。色調は外面が灰白色、内面は淡黄色灰色を呈する。Pit2701(C-4区)出土。28は土錘で、全長4.4cm、径1.0cmを測る棒状のものである。Pit2534(C-4区)出土。29は砥石で4面が研磨に使用されている。30は瓦質片口鉢で器周残1/4からの復元である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は外側に肥厚する。器表の磨滅が著しく、調整は明確に観察できないが、内面は横方向のハケ目の上に条線を施す。外面は体部上位に横方向のハケ目、それより下位は凹凸が著しく、体部の下位に指頭圧痕がみられる。色調は淡黄灰色を呈する。31・32は土師器小皿である。31は底部糸切りか、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径8.5cm、底径6.9cm、器高1.0cmを測る。Pit2783(C-6区)出土。32は底部ヘラ切り、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径9.4cm、底径7.5cm、器高1.0cmを測る。Pit1854(G-8区)出土。33～36はPit2215(D-8区)出土。33は土師器小皿、34～36は土師器杯である。底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。33は口径9.7cm、底径8.0cm、器高1.0cm、34～36は器周残1/4からの復元口径14.6～15.4cm、底径9.7～11.9cm、器高2.4～2.9cmを測る。37は土師器小皿で底部は、糸切り板状圧痕はみられない。外面体部から内底まで横ナデ。口径9.1cm、底径7.9cm、器高1.4cmを測る。Pit2216(D-8区)出土。38は土師器杯で、底部は糸切り板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径15.1cm、底径9.8cm、器高3.0cmを測る。Pit2217(D-8区)出土。39は瓦器椀で、器周残1/6からの復元。体部中位に肥厚する屈曲部を持ち、口縁部は外反する。調整は磨滅により詳細不明。外面口縁部から内面にかけて黒色、その他の部位は灰色を呈する。

Pit01(D-4区)出土遺物(第34図、図版31)

土師器小皿1、白磁椀1、皿2、鎌1が埋納されていた。

土師器小皿(40)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径8.2cm、底径6.3cm、器高0.9cmを測る。

白磁

椀(41)　口縁部は外反し、高台は細く、低い。口縁部を輪花にし、体部内面上位に沈線、内底見込みと体部の境に段をもつ。内面にヘラおよび櫛状工具によって草花文を施す。白色の強い灰白色の釉がほぼ高台までかかり、口縁部外面から垂下している。胎土は灰白色を呈する。

皿(42・43)　平坦な見込みから直線的に屈曲し、口縁部に到る。内底見込みに草花文を施す。

鎌(44)　刃先端は欠失。残存長13.5cmを測る。

井戸出土遺物

SE01出土土器（第35図、図版32）

土師器　底部切り離し方法は糸切りで、体部および内面底部は横ナデ、外面底部に板状圧痕はみられない。

小皿（1）　口径8.3cm、底径6.2cm、器高1.2cmを測る。

杯（2）　口径(復元)13.4cm、底径8.8cm、器高2.6cmを測る。

龍泉窯系青磁椀（3）　口縁部は外反し、高台は断面四角形で畳付から露胎である。体部外面にヘラ描きの蓮弁文をもつ。釉は緑色、胎土は明赤褐色を呈する。

SE07出土土器（第35図、図版32）

土師器小皿片・杯片、瓦器椀片、白磁片、龍泉窯系青磁片、瓦質土器片、石鍋片が出土したが、そのほとんどは細片である。

土師器　底部切り離し方法は糸切りで、体部および内面底部は横ナデ、外面底部に板状圧痕はみられない。4・5は器周残1/4前後からの復元である。

小皿（4）　口径(復元)9.2cm、底径(復元)7.6cm、器高1.7cmを測る。

杯（5）　口径(復元)12.8cm、底径(復元)7.8cm、器高3.0cmを測る。

龍泉窯系青磁皿（6）　やや上げ底の平底皿の底部片である。内底見込みに櫛状工具で花文を施す。緑色の釉をかけた後、外底の釉をカキ取っている。胎土は黄灰色を呈する。

SE06出土土器（第35図）

土師器小皿片、青磁片、白磁片、瓦質土器片が出土したが、そのほとんどは細片である。

土師器小皿（7）　底部は糸切りで器周残1/4からの復元。口径8.6cm、底径6.8cm、器高1.25cmを測る。磨滅により調整不明。

SE08出土土器（第35図）

土師器小皿片、杯片、龍泉窯系青磁片、白磁(口禿)片、瓦質土器片が出土した。

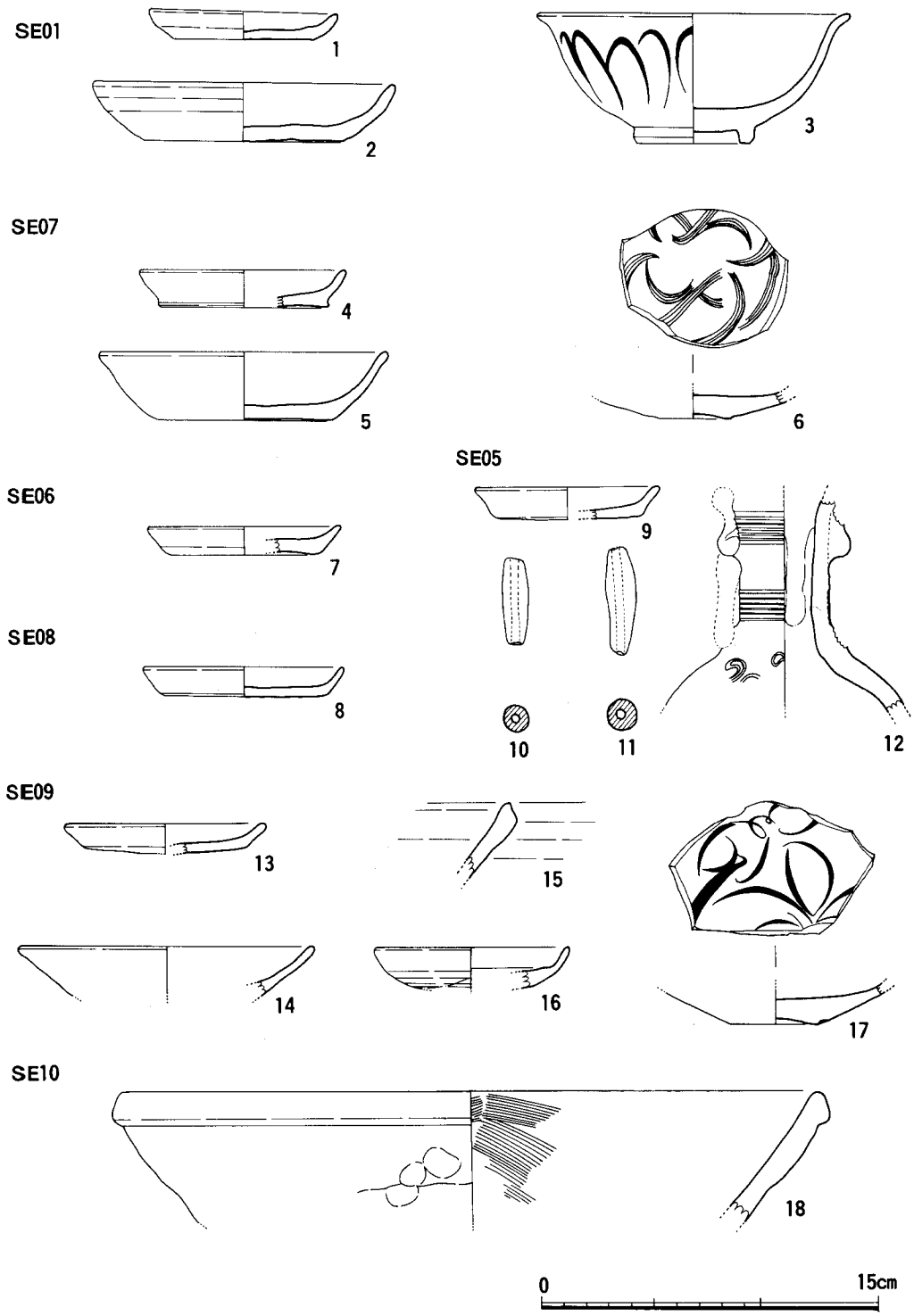
土師器小皿（8）　底部は糸切りで、器周残1/4からの復元口径9.0cm、底径7.4cm、器高1.4cmを測る。磨滅により調整不明。

SE05出土土器（第35図、図版32）

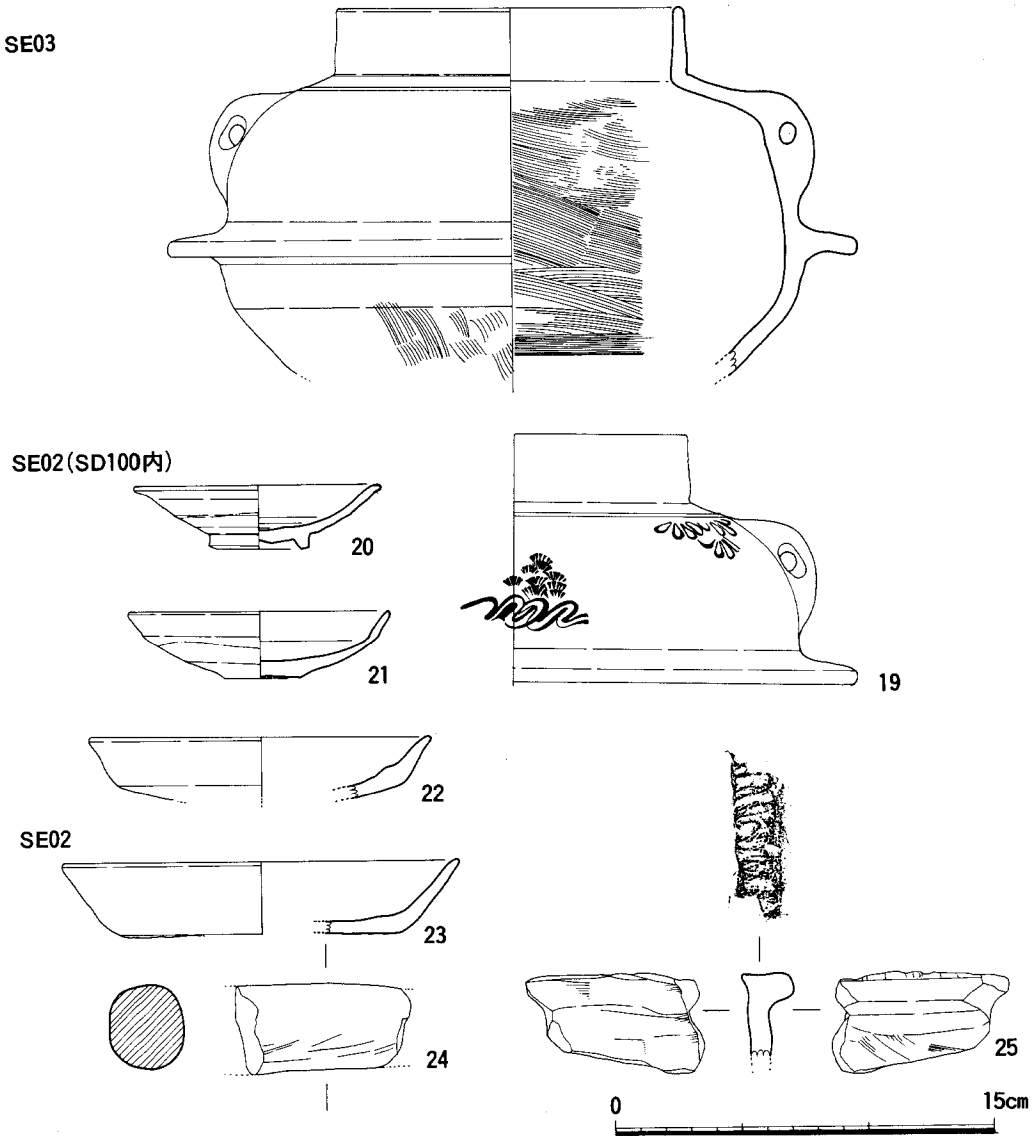
土師器小皿片・杯片、白磁片、陶器片、瓦質土器片、石鍋片、土錘片が出土したが、その多くは細片である。

土師器小皿（9）　底部は糸切りで、器周残1/4からの復元口径8.2cm、底径6.4cm、器高1.5cmを測る。磨滅により調整の詳細は不明であるが、外面底部に板状圧痕がみられる。

土錘(10・11)　10は全長3.8cm、径1.2cm、11は全長4.9cm、径1.3cmを測る紡錘形のもの。



第35図　井戸出土遺物実測図 (1) (1/3)



第36図　井戸出土遺物実測図 (2) (1/3)

古瀬戸仏花瓶(12)　頸部と体部上半の破片資料。頸部に不游環（欠損)、平行沈線を有し、体部上半には蕨手文の印文を施す。鉄釉を漬け掛けしている。胎土は灰色を呈する。

SE09 出土土器（第35図、図版32)

土師器小皿片、杯片、白磁片、龍泉窯系青磁片、瓦質土器片、須恵器片が出土したがその多くは細片である。

土師器

小皿(13)　底部は糸切りで器周残1/3からの復元口径9.0cm、底径7.2cm、器高1.3cmを測る。

体部は横ナデ、内面底部はナデ、外面底部には板状圧痕がみられる。

杯(14)　器周残1/6の口縁部片である。椀の可能性もある。磨滅により調整の詳細は不明。

須恵器片口鉢(15)　口縁部細片である。

白磁皿(16)　体部上位で内湾し、屈曲部の内面には沈圏線がめぐる。破片資料でみるかぎり無文である。釉色は灰白色で、体部外面下半には施釉されない。胎土は黄灰色を呈する。

龍泉窯系青磁皿(17)　6より大型の平底皿底部片である。内面見込みにヘラ状工具で花文を施す。灰緑色の釉をかけた後、外底の釉をカキ取っている。胎土は灰白色を呈する。

SE10 出土土器（第35図、図版32）

土師器杯片(底部糸切り、板状圧痕)、白磁片、龍泉窯系青磁片、瓦質土器片が出土したがそのほとんどは細片である。

瓦質土器片口鉢(18)　口縁部を玉縁状にし体部は丸味をもつ、器周残1/8の体部上半の破片資料である。外面は横ナデで、指頭圧痕がみられ、内面にはハケ目を施している。

SE03 出土土器（第36図、図版32）

土師器小皿片、杯片、白磁片、石鍋片、瓦質土器湯釜が出土したがそのほとんどは細片である。

瓦質土器湯釜(19)　器周残1/3で、底部は欠失している。口縁部は直立し、体部は丸味をもつ。肩部上位に沈線、体部中位に鍔を巡らす。肩部の沈線より下位に耳を貼り付ける。耳は径2.4cm、全長5.4cm、孔径0.9cmを測る。肩部の沈線の下位に菊花文、体部中位の鍔の上位に松、波状文の印文を施す。口縁部内面から体部外面中位にかけて横ナデ、その下位にはハケ目を施す。体部内面には細かいハケ目が施され、口縁部と体部の境から肩部の内面、耳と鍔の張り付け部分の内面には指頭圧痕が残る。色調は灰黒色で、一部に銀色の光沢がみられる。

SE02(SD100内)（第36図、図版32）

土師器小皿片、杯片、瓦器椀片、白磁、龍泉窯系青磁片、須恵器片が出土した。

土師器杯(22)　器周残1/6からの復元口径13.5cm、底径11.2cm、器高2.5cmを測る。底部は糸切りで体部には横ナデを施す。

白磁皿(20・21)　20は内底見込みの釉を輪状にカキ取っている高台付皿である。口縁部は外反する。釉色は白色が強い灰白色で、体部外面下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。21は体部中位で屈曲し、その内面に沈線をもつ平底皿である。口縁部は外反する。釉色は淡黄灰色で、体部下半には施釉されない。胎土は灰色を呈する。

SE02 出土遺物（第36図、図版32）

土師器小皿片、杯片、土鍋片、瓦器椀片、白磁片、龍泉窯系青磁片、須恵器片、棒状土製品片が出土したがそのほとんどは細片である。

土師器

杯(23)　器周残1/4からの復元口径15.8cm、底径11.0cm、器高2.9cmを測る。底部は糸切りで板状圧痕がみられ、体部には横ナデが施される。

鍋(25)　内面はヘラナデ、口縁部平坦面には、植物繊維の圧痕がみられる。外面は屈曲部から上位はナデ、それより下位にはヘラナデが施されている。

棒状土製品(24)　両端は欠失し、一方に窄まる。胎土には胎い砂粒を多量に含む。

SE04 出土遺物

土師器小皿片、杯片、瓦器椀片、白磁片、龍泉窯系青磁片が出土したが、いずれも細片で図化できない。

SE11 出土遺物

土師器(底部糸切り)小皿片、杯片、瓦器椀片、白磁片、同安窯系青磁片が出土したが、いずれも細片で図化できない。

土坑出土遺物

SK01出土遺物（第37図、図版33）

黒色土器椀（1）　体部は丸味をもち、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。外側に開く高台を貼り付ける。内面から体部外面にかけてヘラミガキを施す、外部外面に針状工具で焼成後につけられた記号とみられる線刻がある。口径15.4cm、高台径7.7cm、器高6.1cmを測る。

小刀（2・3）　2は残存する長さ8.8cm、(茎の長さ1.4cm、刃部の長さ7.4cm) 3は残存する長さ25.1cm(茎の長さ9.9cm、刃部の長さ15.2cm)を測る。

SK05 出土遺物（第37図、図版33）

土師器小皿（4）　底部はヘラ切りで板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径10.2cm、底径7.7cm、器高1.1cmを測る。

黒色土器椀（6）　体部は丸味をもち、口縁部は外反する。外側に開く高台を貼り付ける。内面から体部外面にかけてヘラミガキを施す。口径16.0cm、高台径7.5cm、器高6.3cmを測る。

滑石製品（5）　直径2.4cmの筒状の容器を2個連ねた製品である。外面は研磨され、内面には工具痕を残す。

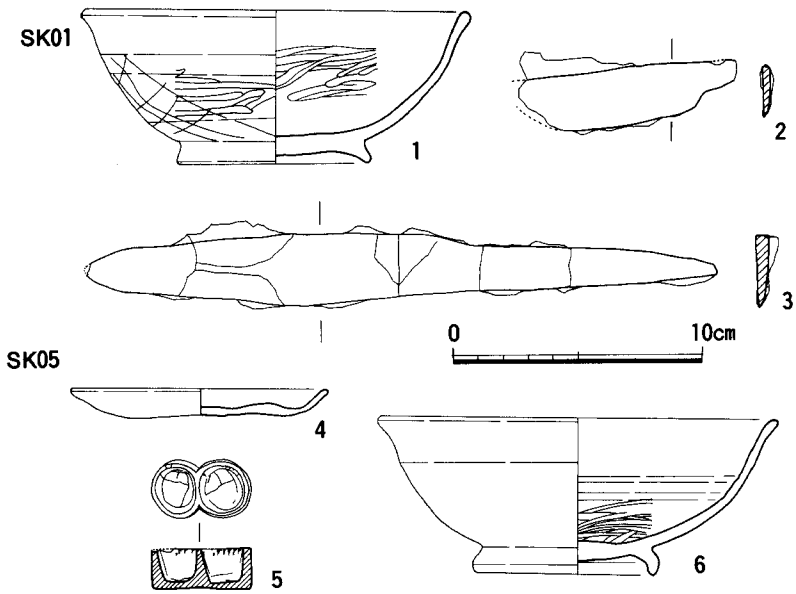
SK201 出土土器（第38図、図版33）

土師器小皿、杯、瓦器椀片、越州窯系青磁椀片、白磁椀Ⅳ類・Ⅴ類（以下、太宰府史跡分類による）片が出土したがそのほとんどは細片である。

土師器

小皿(7)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径7.9cm、底径6.7cm　器高1.0cmを測る。

杯(8)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径15.8cm、底径11.4cm、器高2.5cmを測る。



第37図　土坑墓出土遺物実測図（1/3）

瓦器椀（9）　器周残1/6の口縁片。色調は外面灰色、内面灰白色。

越州窯系青磁椀片（10）　内底見込みに目アトを有し、釉は黄緑色、胎土は灰色。

SK214 出土土器（第38図、図版33）

土師器小皿、底杯、瓦器椀が出土した。

土師器

小皿（11～14）　底部はヘラ切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径8.6～10.2cm、底径6.3～8.8cm、器高0.8～1.3cmを測る。

丸底杯（15）　磨滅により調整不明。器周残1/3からの復元口径15.0cm、底径3.1cmを測る。

瓦器椀（16）　体部は丸味をもち、口縁部外面下位をくぼませ薄くする。高台は幅が狭く、低い。内底見込みを中心に灰黒色、その他の部位は明赤色を呈する。重ね焼きによる。

SK222 出土土器（第38図、図版34）

土師器小皿、杯、瓦器椀が出土した。

土師器　底部はヘラ切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。

小皿（17～21）　口径8.7～9.3cm、底径6.4～7.5cm、器高1.1～1.3cmを測る。

杯（22）　口径15.9cm、底径12.3cm、器高3.0cmを測る。

瓦器椀（23）　体部中位に肥厚する屈曲部をもち、口縁部は外反する。調整は磨滅により詳細不明。内面から外面口縁部にかけて黒色、外面底部は明赤褐色、その他の部位は灰色を呈する。

SK20 出土遺物（第38図、図版33）

棒状土製品（24・25）　24はほぼ一個体分で、断面隅丸六角形を呈する。先端部は窄まり、刳り込みをもつ。胎土には粗い砂粒を多量に含み、瓦質に焼成され灰黒色を呈する。

SX28 出土遺物（第38図、図版34）

棒状土製品（26）　断面形は隅丸正方形を呈する。両端を欠失する。胎土には粗い砂粒を多量に含み、土師質に焼成され淡黄褐色を呈する。

SK68 出土土器（第39図、図版34）

土師器小皿、杯、龍泉窯系青磁が出土した。

土師器

小皿(27～29)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径7.7～8.9cm、底径6.2～6.6cm、器高0.9～1.3cmを測る。

杯(30)　器表のアレが著しく底部切り離し方法、調整は不明。器周残り1/6からの復元口径9.0cm、器高2.7cmを測る。

龍泉窯系青磁椀(31)　内面に「金玉満堂」の印文を施す。

SK245 出土土器（第39図、図版34）

研磨土器椀が出土している。

研磨土器椀(32)　口縁部を玉縁状にし断面半円形の低い高台を貼り付ける。体部内外面は研磨され、器面を密にする。胎土は淡赤褐色の精良なものである。器周残1/8からの復元。

SK55 出土土器（第39図）

土師器杯(33)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。器周残り1/4からの復元口径13.6cm、底径8.6cm、器高2.4cmを測る。

SK63 出土土器（第39図、図版34）

土師器小皿(34)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径9.8cm、底径7.7cm、器高1.1cmを測る。

SK64 出土土器（第39図）

土師器小皿(35)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。器周残り1/2からの復元口径9.9cm、底径7.1cm、器高1.2cmを測る。

SX31 出土土器（第40図、図版35）

土師器小皿、杯片、白磁椀Ⅴ-4類片が出土した。

土師器小皿(36～38)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径9.1～9.2cm、底径7.2～7.8cm、器高0.8～1.2cmを測る。

SX24 出土土器（第40図、図版35）

土師器小皿、杯片、白磁(口禿)片、青磁片が出土したが、そのほとんどは、細片である。

土師器　底部は糸切りで、板状圧痕はみられない。外面体部から内面底部まで横ナデ。

小皿(39～40)　口径8.0～8.4cm、底径6.7～6.4cm、器高1.1～1.2cmを測る。

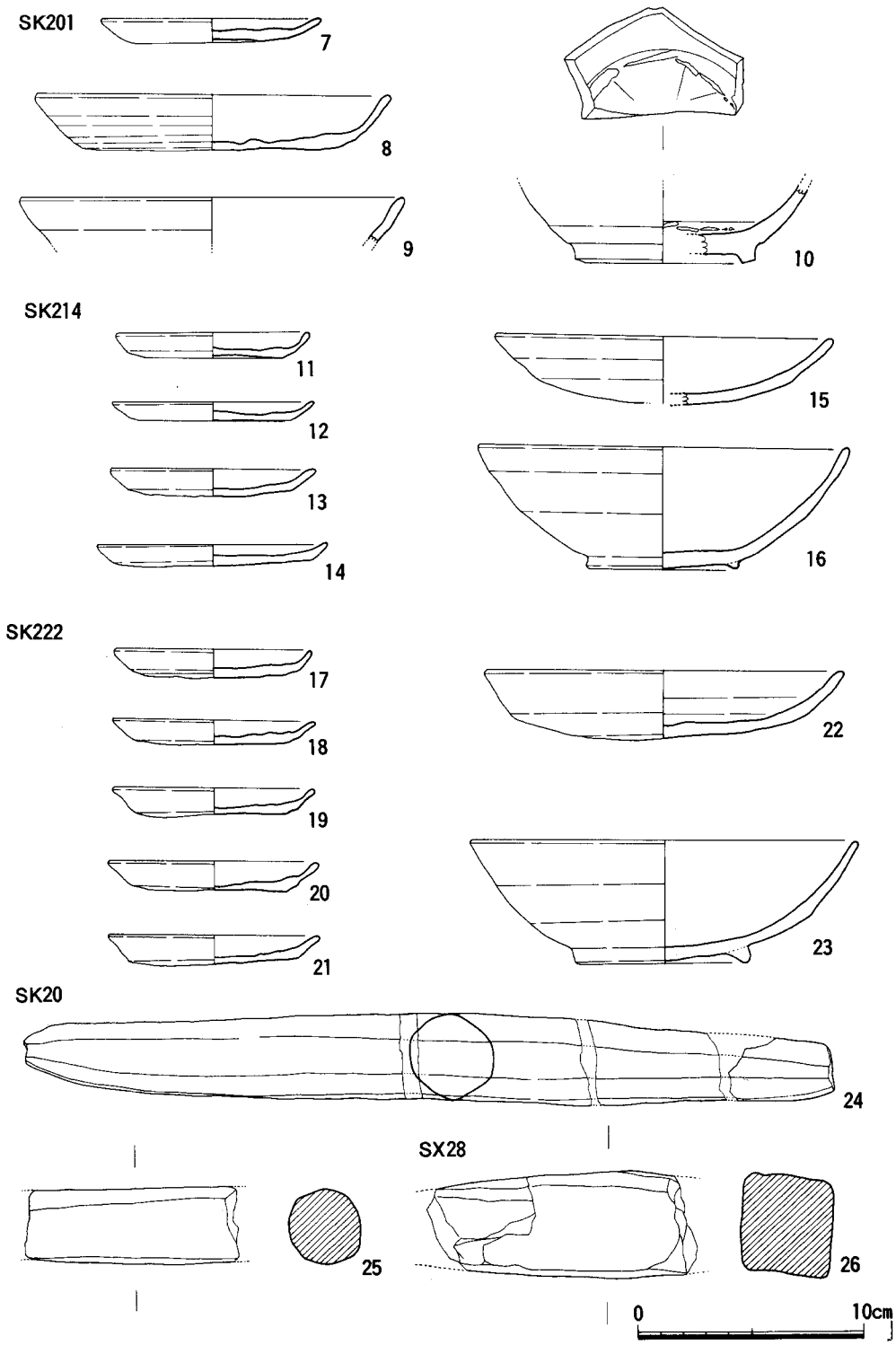
杯(41～44)　口径11.7～12.6cm、底径7.5～8.0cm、器高2.7～3.1cmを測る。

SX36 出土土器（第40図、図版35）

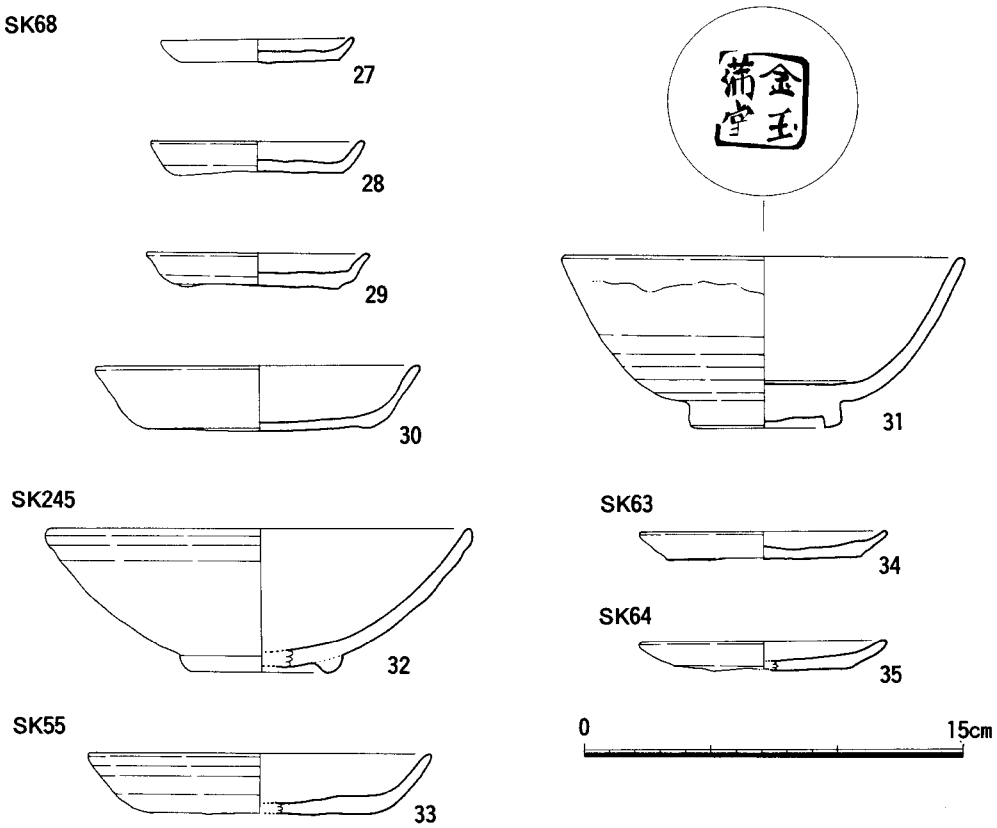
土師器小皿、杯、瓦器椀片、白磁片、青磁片が出土した。

土師器　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。

小皿(45)　口径0.8cm、底径5.6cm、器高1.3cmを測る。



第38図　土坑出土遺物実測図 (1) (1/3)



第39図　土坑出土遺物実測図 (2) (1/3)

杯(46)　口径12.0cm、底径7.5cm、器高2.7cmを測る。

SX53 出土土器（第40図、図版35）

土師器小皿、杯片、鍋片、白磁椀Ⅴ類片、青磁片、黒釉陶器片が出土したが、そのほとんどは細片である。

土師器小皿(47)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径(復元)9.2cm、底径6.3cm、器高1.1cmを測る。

SX03 出土土器（第40図、図版35）

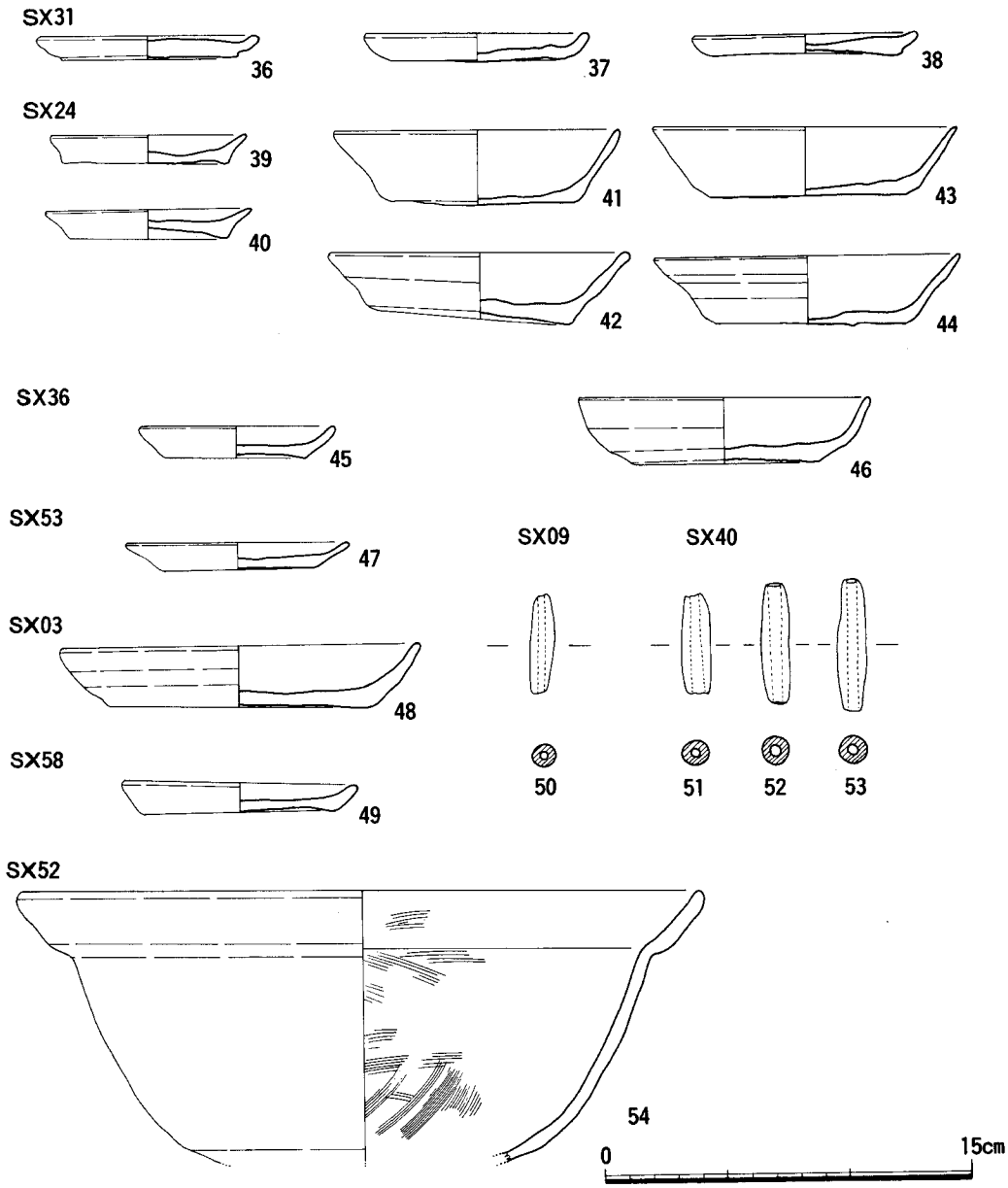
土師器小皿片、杯、鍋片、白磁片、青磁椀が出土したが、そのほとんどは細片である。

土師器杯(48)　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径14.8cm、底径10.8cm、器高2.5cmを測る。

SX58 出土土器（第40図、図版35）

土師器小皿片、杯片、白磁椀Ⅳ類片、瓦質土器片、が出土したが、そのほとんどは細片である。

土師器小皿(49)　底部は糸切りで、磨滅により圧痕の有無、調整は不明。器周残1/4から



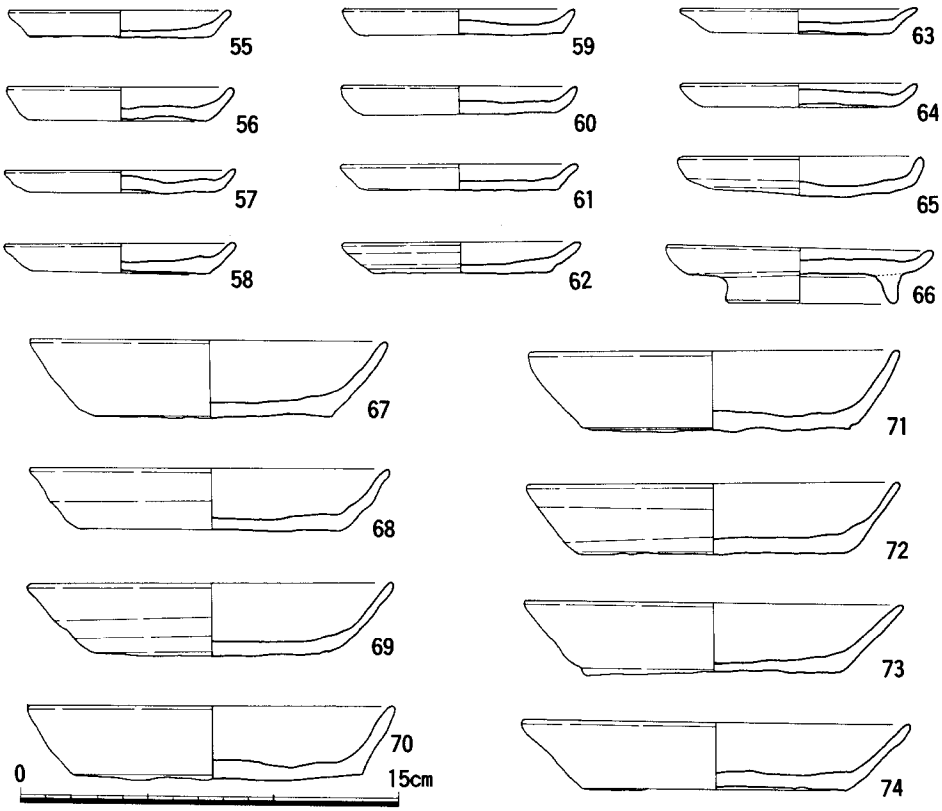
第40図　土坑出土遺物実測図 (3) (1/3)

の復元、口径9.6cm、底径7.7cm、器高1.2cmを測る。

SX09 出土遺物 (第40図、図版35)

土師器杯(底部糸切り)細片、土錘が出土した。

土錘(50)　全長4.0cm、径1.0cmを測る棒状のものである。



第41図　SX51出土土器実測図（1/3）

SX40 出土土器（第40図、図版35）

土師器杯(底部糸切り)片、瓦器椀片、青磁椀片、土錘が出土したが、そのほとんどは細片。

土錘(51～53)　全長4.1～5.4cm、径1.0～1.2cmを測る棒状のものである。

SX52 出土土器（第40図、図版35）

土師器鍋(54)　口縁部は内湾して体部上位で屈曲し、端部を丸くおさめる。体部は丸味をもって外上方に延びる。体部と底部の境は不明瞭である。底部は縁辺部以外は欠失している。外面には煤が付着し、ナデを施す。口縁部内面はハケ目をナデ消し、体部内面にはハケ目を施し下半のハケ目は上半のものより細かい。胎土には砂粒を多量に含み、暗黄褐色を呈する。

SX51 出土土器（第41図、図版36）

土師器小皿、高台付小皿、杯が出土した。

土師器　底部は糸切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。

小皿(55～65)　口径8.8～9.8cm、底径6.9～9.0cm、器高0.9～1.6cmを測る。

高台付小皿(66)　口径10.5cm、底径5.8cm、器高2.2cmを測る。

杯(67～74)　口径14.1～15.3cm、底径9.3～11.4cm、器高2.7～3.1cmを測る。

溝出土遺物

SD01 出土土器（第42・43図、図版37・38）

上層で13世紀代の遺物片がみられたが、それより下の層ではまとまった時期の土器が出土している。13・15・16・20・21は、１型式先行するとみられる。

土師器

小皿（１～13）　底部切り離し方法はすべてヘラ切りである。体部は横ナデ、内面底部はナデ、外面底部には板状圧痕がみられる。口径9.4～10.6cm、底径6.6～8.4cm、器高1.2～1.8cmを測る。

椀（14～19）　14は口径15.5cm、器高3.8cmを測る無高台の椀である。底部はあまり丸味をもたず、平底に近い。口縁部は外反している。体部外面は横ナデ、内面はヘラナデとみられる。15～19は高台付椀である。15は口径14.5cm、高台径9.6cm、器高6.1cmを測る。高台径、器高は他のものより大きい。体部は丸味を持ち、口縁部は若干外反する。16の体部は丸味をもって外上方へ延び、口縁部は外反する。高台は欠失している。体部は内外面とも横ナデを施す。17は口縁端部を外側へ引き出す。体部下半には指頭圧痕がみられる。体部外面は横ナデ、内面はヘラ磨きを施す。18・19は、体部上位で屈曲し、中位は肥厚し、口縁部は若干外反する。18の外面体部は横ナデ、内面はヘラミガキを施す。19の外面体部は横ナデ、内面はヘラナデを施す。

内黒土器

椀（20・21）　体部は丸味を持ち、口縁部は外反する。内面および体部外面にヘラミガキを施し、内面のみを燻す。

黒色土器

椀（22）　口径（復元）15.0cm、器高6.9cmを測る深めの椀である。高台は低く外側に開き気味で、径は8.4cmと大きい。内面および体部外面はヘラミガキを施し、内外面を燻す。

研磨土器

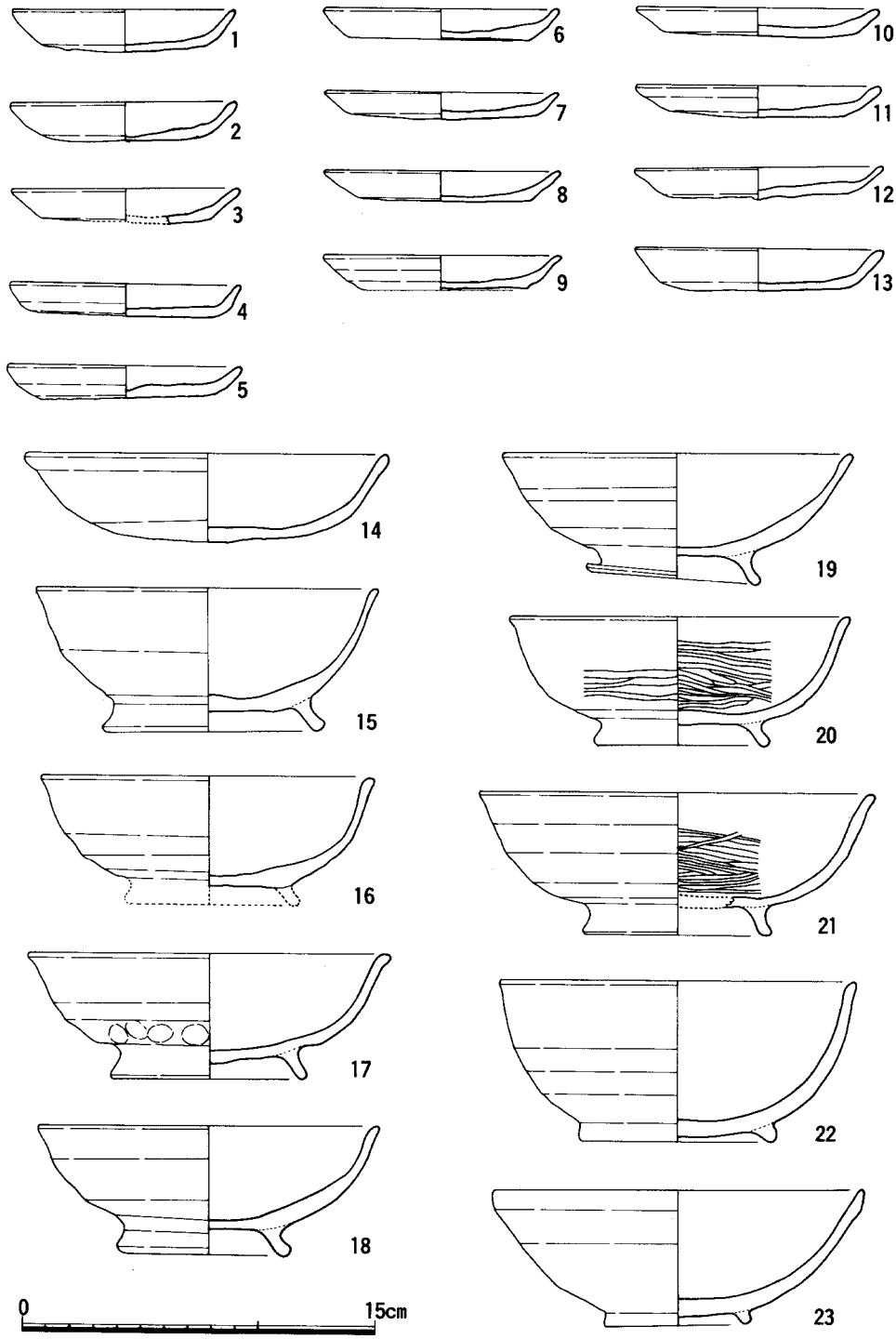
椀（23）　体部は丸味を持ち、口縁部を小さい玉縁状にする。内面および体部外面にヘラミガキを施し、体部下半に凸凹がみられることから、指頭圧痕がヘラミガキにより、不鮮明になったとみられる。胎土は黄白色の精良なもので、内面に光沢をもつ煤の付着がみられる。燻された可能性が考えられる。

越州窯系青磁

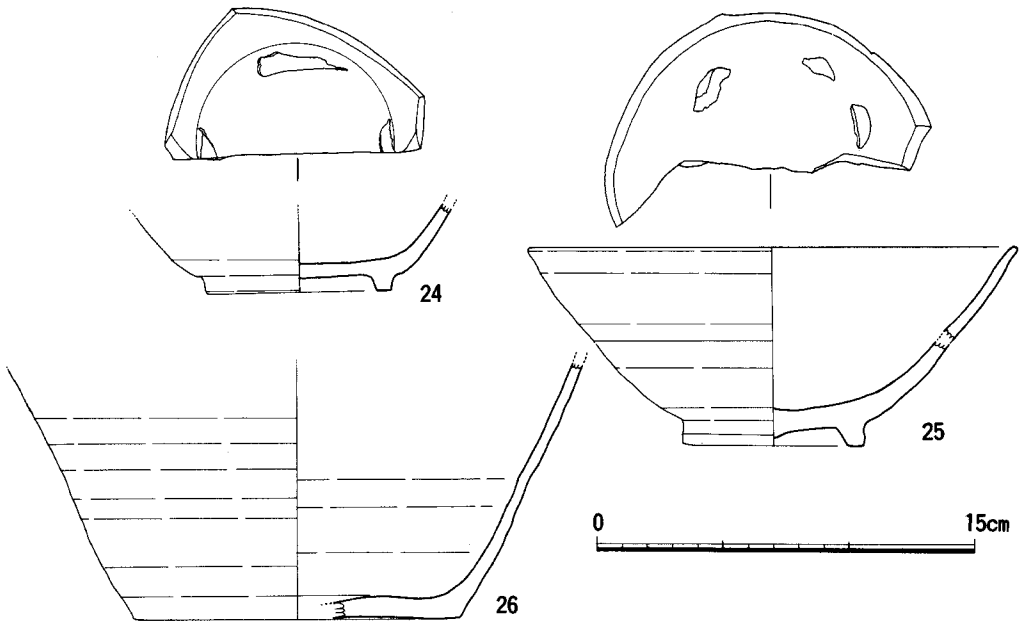
椀（24・25）　断面四角形の高台、内底見込みと畳付に目アトを有す。全面施釉の後、畳付の釉をカキ取っている。24の釉は灰緑色、胎土は灰色を呈し白色粒子を含む。25は外底部の中心がへそ状に突起し、釉は淡緑色、胎土は灰白色～淡橙灰色を呈し白色粒子を含む。

陶器

壺（26）　平底の底部片で、釉は緑色、胎土は明橙色を呈し、SB47柱穴出土のものと同一個体とみられる。内面の施釉にはむらがみられる。



第42図　SD01出土土器実測図 (1)



第43図　SD01出土土器実測図 (2) (1/3)

SD12出土土器（第44図、図版38）

土師器椀小片・土師器椀が出土した。

土師器椀（1）　口径15.0cm、器高6.4cmを測る深めの椀である。体部は丸味をもち、口縁はほぼ直線的に外上方へ延びる。内外面とも横ナデを施す。

SD14出土土器（第44図）

土師器杯小片、黒色土器椀が出土した。

黒色土器椀（2）　口径(復元)14.0cm、高台は欠失し残存する器高3.6cmを測る浅めの椀である。口縁部は内湾し、調整は磨滅により詳細不明。

SD26出土土器（第44図）

黒色土器椀、内黒土器椀が出土した。

内黒土器椀（3～5）　3は端部を外上方に引き出している口縁部片で、内外面ともヘラミガキされる。4・5は、開き気味の低い高台を貼り付けた底部片で内面はヘラミガキされる。

黒色土器椀（6）　外反する口縁部片で、内外面ともヘラミガキされる。

SD101出土土器（第44図）

内黒土器椀（8）　低く開き気味の高台を貼り付けた底部片で内面はヘラミガキされる。

黒色土器椀（7）　端部を外上方へ引き出している口縁部片で、内外面ともヘラミガキされる。

土錘（9）　全長4.3cm、径0.9cmを測る棒状のものである。

SD102出土土器（第44図）

土師器小皿片、内黒土器椀片が出土した。

内黒土器椀(10)　断面円形の高台を貼り付けた体部下半片、外面はナデ、内面はヘラミガキ。

SD104出土土器（第44図、図版38）

土師器小皿、内黒土器椀片のほか、瓦器椀片、陶器甕片と新しい時期のものが混入している。

土師器小皿(11)　底部切り離し方法はヘラ切りである。体部は横ナデ、内面底部はナデ、外面底部に板状圧痕がみられる。口径10.5cm、底径7.8cm、器高1.2cmを測る。

内黒土器椀(12)　体部は直線的に外へ延び、中位で屈曲する。屈曲部は肥厚し、内外面とも稜をなす。口縁部は外反し、端部は丸く肥厚する。体部外面は横ナデ、内面はヘラミガキされる。やや外側に開く高台を貼付した底部片と胎土からみて同一とみられる。

陶器甕(13)　T字形をなす口縁部片で、内面には青海波状の叩き目がみられる。釉は口縁部の破片資料の範囲では、みられない。胎土には粗い白色砂を多量に含み、紫灰色を呈する。外面は赤褐色を呈する。

SD105出土遺物（第44図、図版38）

土師器椀(14)　直線的外上方に延びる口縁部で外側に開く、高い高台を貼り付けた底部と胎土からみて同一とみられる。磨滅により、調整の詳細は不明。

黒色土器椀(15)　外に開く高い高台を貼り付けた底部片で、内面はヘラミガキされる。

SD21出土遺物（第44図、図版38）

土師器　器周残約1/3破片資料である。

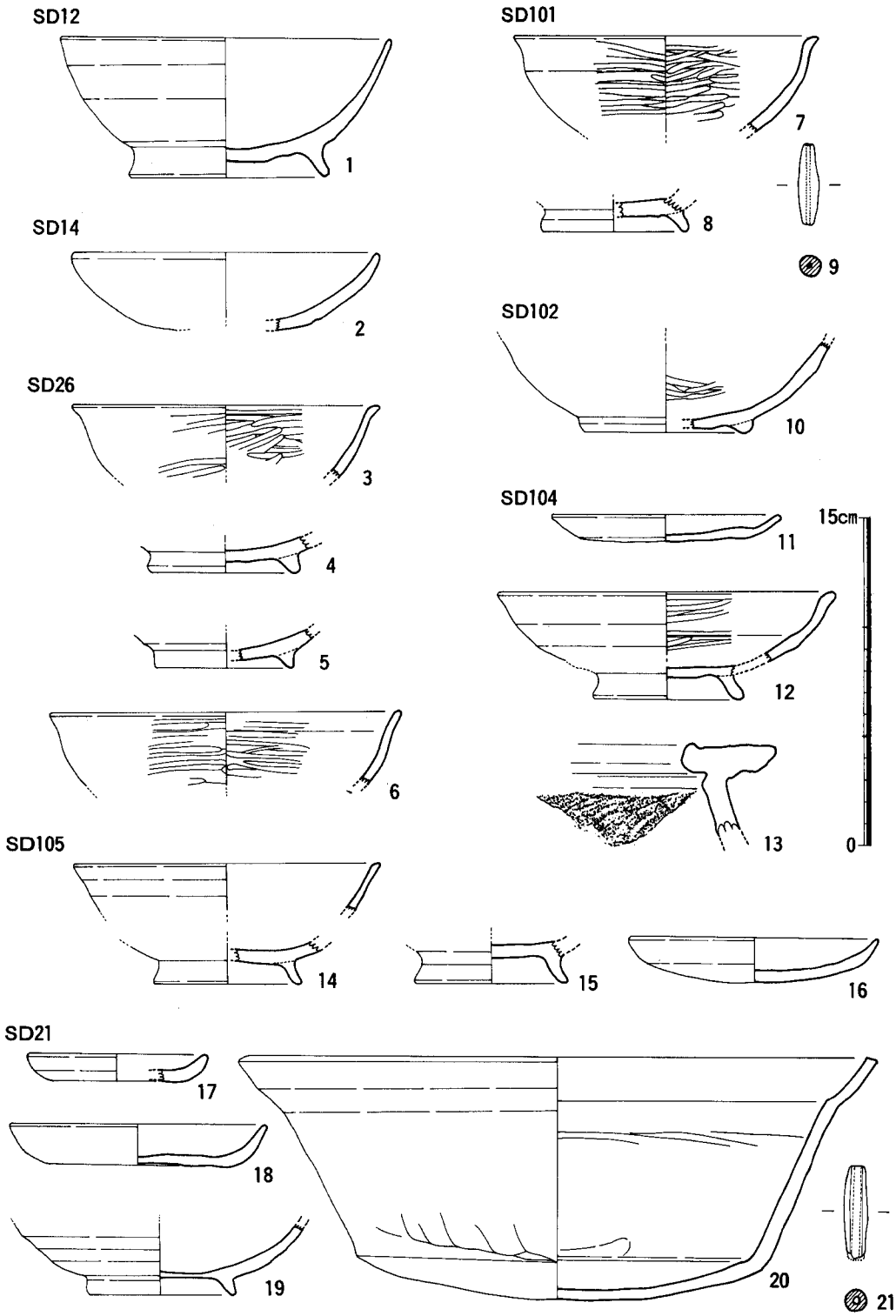
小皿(15)　底部切り離し方法は糸切りで、体部は横ナデ。口径(復元)8.2cm、底径(復元)5.8cm、器高1.2cmを測る。

杯(16)　糸切りで、体部および内面底部は横ナデ、外面底部に板状圧痕はみられない。口径11.7cm、底径8.3cm、器高1.9cmを測る。

椀(17)　やや外側に開く低い高台を貼り付けた体部下半の破片資料である。内面、および体部外面はヘラミガキで、高台内には板状圧痕がみられる。色調は橙色を呈する。

鍋(18)　口縁部は内湾して体部上位で屈曲し、端部は鋭い。体部は直線的に外上方へ延びる。体部と底部の境は、明瞭に屈曲している。底部はやや丸味をもつ平底である。鉄鍋の形態を模したものである。外面体部下半と内面底部には煤が付着し、底面内外面に器面の剥離がみられる。口縁部は内外面とも横ナデ、外面体部下半には縦方向のヘラ削り、外面底部にはコテアナ痕が放射線状にみられる。内面体部以下は器面の剥離や磨滅により明確に観察しえないが、体部と底部の境には接合する際の凹凸がみられる。内面体部はヘラナデか。胎土には細かい砂粒を含み、淡黄褐色を呈する。SK47出土のものと接合した。

土錘(19)　全長4.3cm、径1.1cmを測る棒状のものである。



第44図　溝出土土器実測図（1/3）

SD100下層出土遺物（第45～48図、第３表、図版39～41）

Ⅵ層から下を下層として遺物を取り上げた。土師器、瓦器、陶磁器、滑石製品が出土した。

土師器

小皿（１～７）　底部切り離し方法はヘラ切りである。体部は横ナデ、内面底部はナデ、外面底部には板状圧痕がみられる。口径8.5～10.1cm、底径6.5～8.4cm、器高1.0～1.3cmを測る。

杯（８・９）　底部切り離し方法はヘラ切りである。体部は横ナデ、内面底部はナデ、外面底部には板状圧痕がみられる。８は口径14.6cm、底径11.5cm、器高3.1cm、９は口径15.7cm、底径11.9cm、器高2.8cmを測る。

丸底杯(10)　内面を磨いて器面を密にし、外面底部にはヘラ切り痕と板状圧痕がみられる。口径15.7cm、器高3.1cmを測る。

瓦器

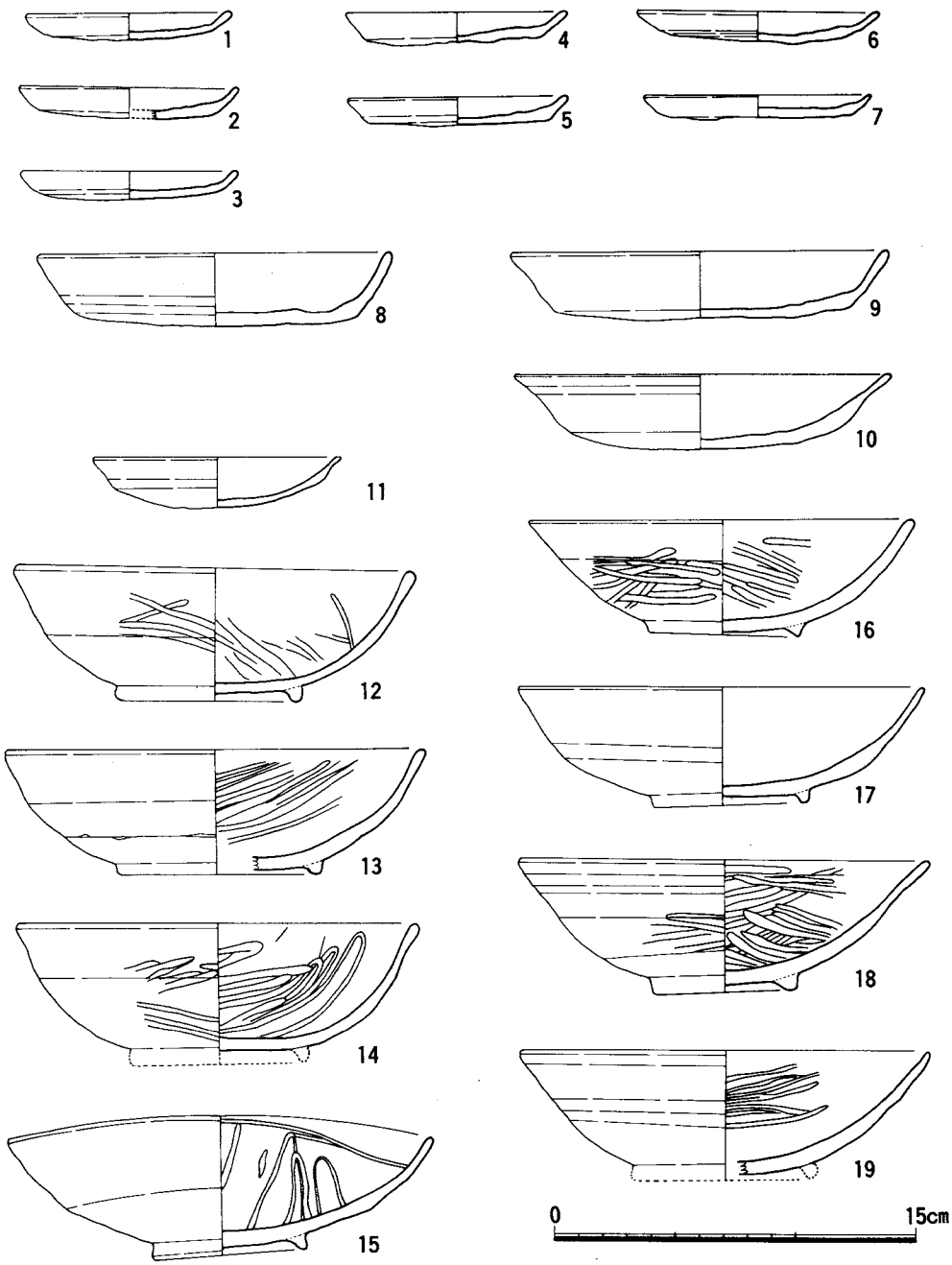
小皿(11)　外面底部を含む器表のほぼ全面にヘラミガキが施されている。外面底部にはヘラミガキの下からヘラ切り痕と板状圧痕がみられる。色調は口縁部の一部が黒色、その他の部位は灰白色を呈する。口径10.3cm、底径8.2cm、器高2.1cmを測る。

椀(12～19)

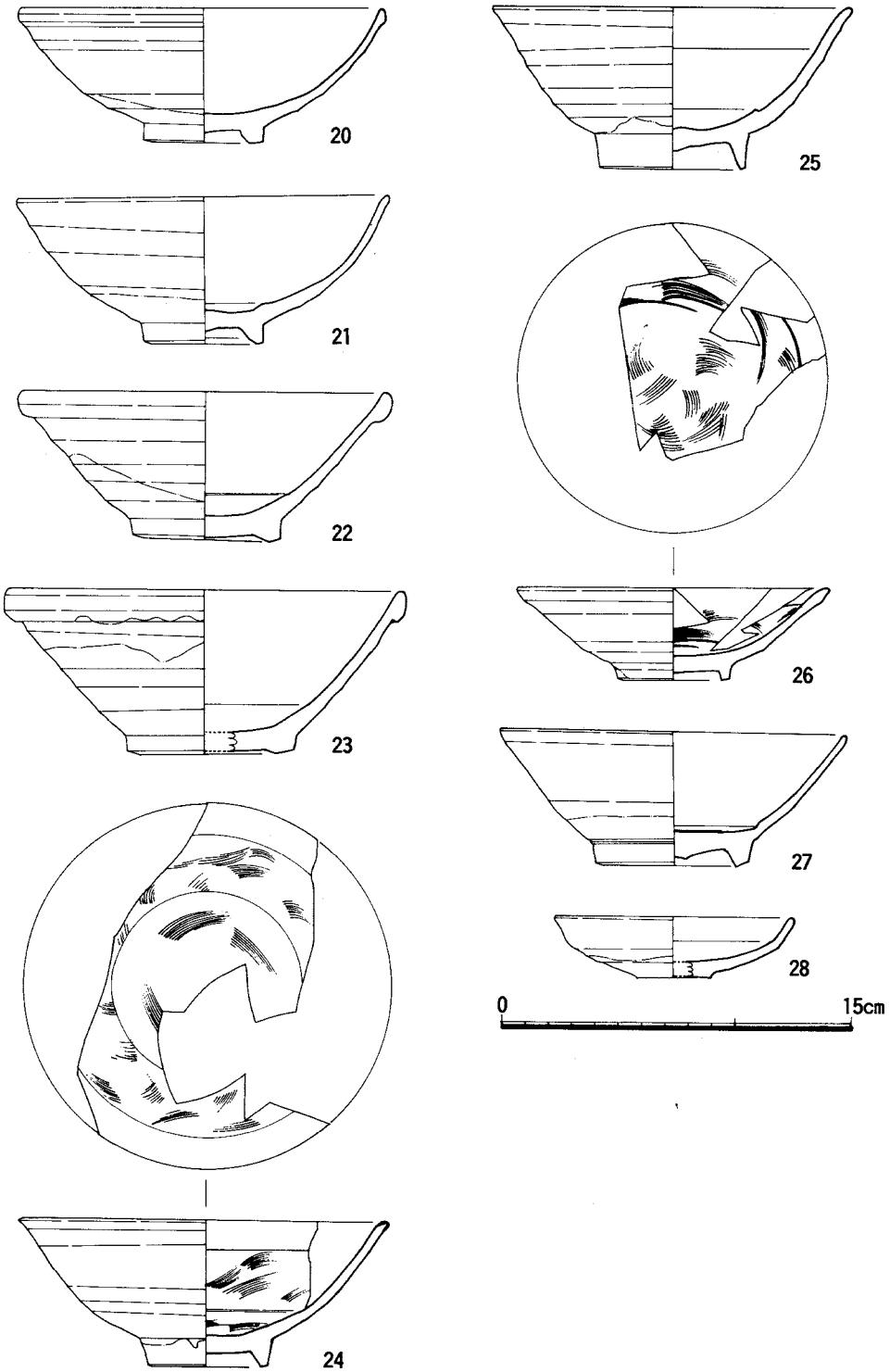
12～14は、体部が丸味を持って外上方へ延びる。口縁部はかるく外反し、端部は肥厚し、その下位は薄くくぼんで稜をなす。12・13の高台は断面半円形で、直立気味である。14の高台は欠失している。12～14の体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は１方向のヘラミガキ、14の内面にはコテアテ痕が放射状にみられる。高台の周囲は横ナデ調整である。13の外面体部下半には粘土紐の継ぎ目がみられる。色調は12が内面淡黄灰色、外面灰色、13が内面口縁部から外面にかけて灰黒色、その他の部位は灰白色を呈する。14は、口縁部内外面とも黒色、その他の部位は灰白色を呈し、重ね焼きに起因するとみられる。

15は体部下位に肥厚する屈曲部をもつ。体部は屈曲部から内湾気味に外上方に延びる。、体部外面は横方向にヘラミガキ、内面は１方向にヘラミガキされる。色調は底部内外面とも灰色その他の部位は黒色を呈し、銀色の光沢がみられる。

16は体部の中位が肥厚し、明瞭に屈曲せず稜をなすには至らない。口縁部は直線的である。高台は断面三角形である。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は１方向にヘラミガキし、コテアテ痕が放射状にみられる。体部外面下半には凹凸がみられ、指頭圧痕がヘラミガキによって不鮮明になったものとみられる。内底見込みには高台径と同径の沈圏線がみられる。高台貼り付けの際ついたか生乾きの時点で重ねたことによるものか。色調は口縁内外面とも黒色、その他の部位は灰白色を呈する。



第45図　SD100下層出土土器実測図



第46図　SD100下層出土白磁実測図

17は、体部が中位の肥厚する屈曲部から直線的に外上方に延び、口縁部を薄くおさめる。器面のアレが著しく、調整について詳細は不明。色調は、口縁部内外面とも黒色、その他の部位は灰白色を呈する。

18・19は、体部の下位に肥厚する屈曲部をもつ。体部は屈曲部から大きく外反し、内の口縁端部は内湾する。18の体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は4方向に分けてヘラミガキされる。色調は口縁部内外面とも黒色、その他の部位は灰白色を呈す。高台は径が6.0cmと他に比べ小さいが、幅広で周囲は横ナデ調節される。19の器面の磨滅により調整を明確に観察できないが、体部外面および内面はヘラミガキ、底部外面には板状圧痕がみられる。色調は灰白色を呈する。高台は欠失している。

白磁

椀(20～27)

20・21は高台を外面を直に、内面は斜めに削り出している。体部は丸味を持って外上方へ延びる。体部外面下半は露胎である。20は口縁を小さい玉縁とする。釉色は淡黄灰色、胎土は灰白色を呈する。21は口縁を外反させ、内底見込みに段をもつ。釉色は淡黄灰色、胎土は灰白色を呈する。

22・23は、口縁を折り返し断面三角形の玉縁とする。20に比べ肉厚で玉縁は大きい。体部は直線的に外上方へ延びる。高台は幅広で削り出しは浅い。体部外面下半は露胎である。内底見込みに沈圏線をもつ。釉色は灰白色で、胎土は22が淡黄灰色、23は灰白色を呈する。

24は他のものと比べ細く、低い高台をもち、口縁部を外反させ端部を水平にする。内面には体部上位と見込みに沈圏線をもち、櫛描文が施されている。釉色は白色が強い灰白色で、体部下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。

25は細く高い高台をもち、口縁部をゆるやかに外反させる。内面体部上位と見込みに沈圏線をもつ。釉色は白色が強い灰白色で、体部下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。

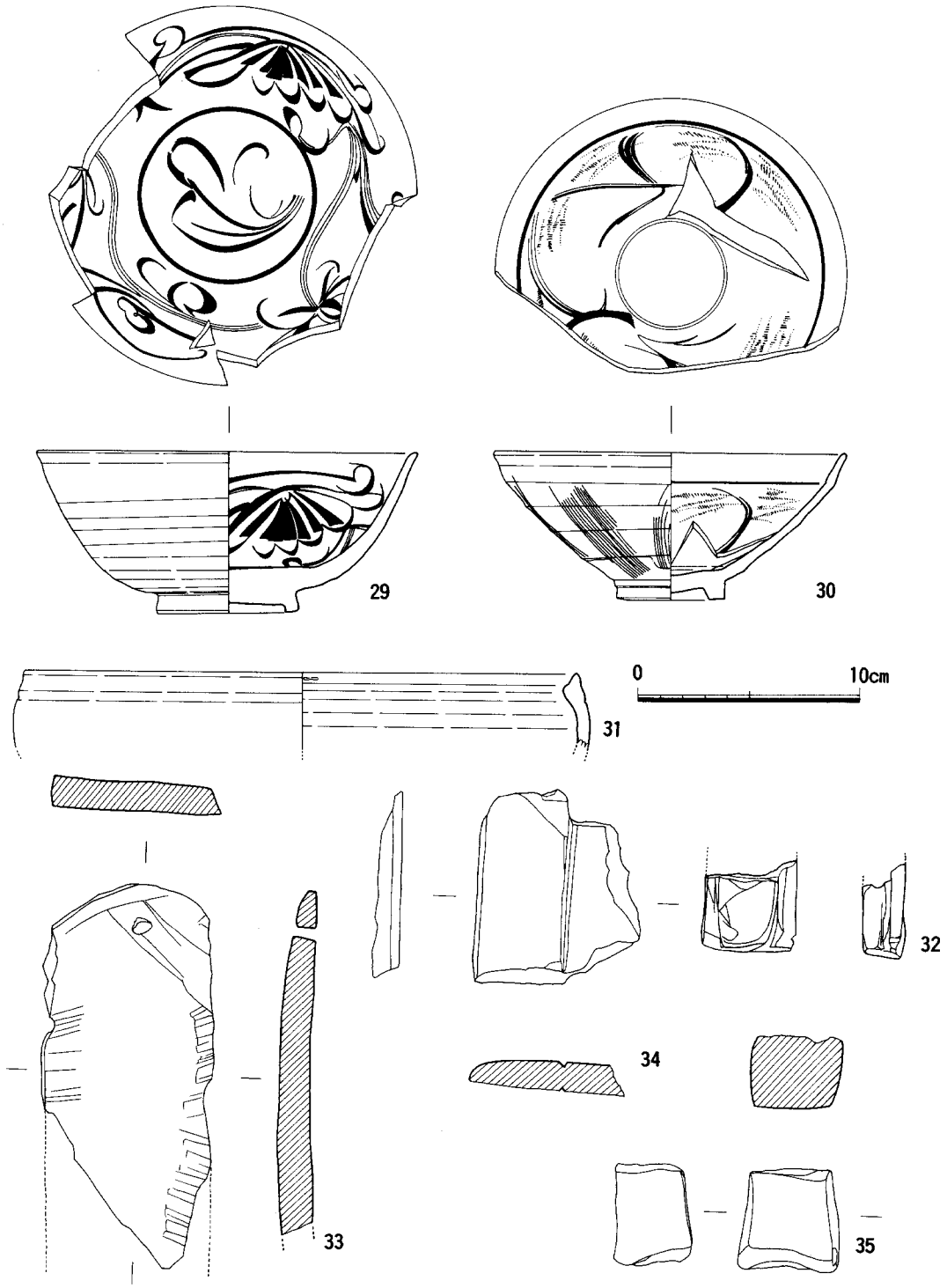
26は細く低い高台をもち、口縁部を外反させ、体部は開く。内面には体部上位に沈線をもち、櫛描文が施されている。釉は淡黄灰色で、高台付近にまでかけられている。胎土は淡黄灰色を呈する。

27の体部は直線的に外上方へ延び、内見込みの釉を輪状にカキ取る。釉色は灰白色で、体部下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。

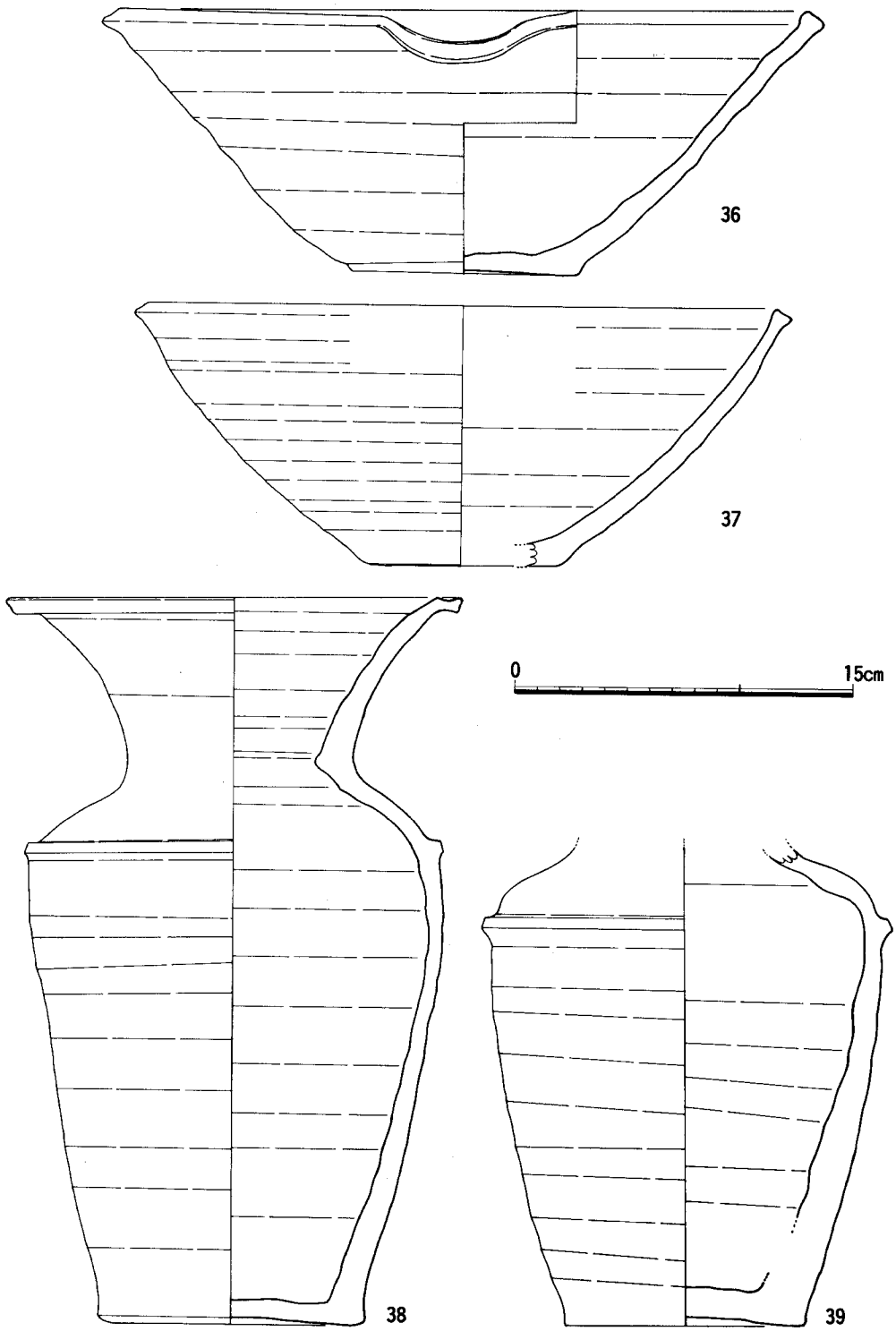
皿(28)

28は体部は中位で屈曲し屈曲部の内面には沈線をもつ平底皿である。口縁部は外反する。釉色は淡黄灰色で、体部下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。

龍泉窯系青磁椀(29)　高台は断面形四角で、畳付より内側は露胎である。内面に双蓮華単葉劃花文を施す。釉色はオリーブ色で、胎土は灰白色を呈する。



第47図　SD100下層出土青磁他実測図（1/3）



第48図　SD100下層出土須恵器実測図

同安窯系青磁椀(30)　外上方へ内湾気味に延びる体部の上半に、屈曲部をもつ。口縁部はかるく外反する。屈曲部の内面には沈線をもち、内面見込みと体部との境に段をもつ。体部外面に櫛状工具で、放射状に８方向の条線を施し、内面はヘラ状工具による片彫りと櫛状工具による雷光文を施す。釉色は淡いオリーブ色で、体部外面下半は露胎である。胎土は黄灰色を呈する。

陶器鉢(31)　口縁端部は外傾し、端部内面の下位と外面口縁下に沈線をもつ。胎土は橙色を呈する。

滑石製品(32・33)　32は有孔紐付コテ状工具で、長方形の紐に孔を穿った部分から欠損している。残存長4.2cm、幅4.1cm。33は有孔方形板で、石鍋を再加工したもので、断面にその曲線が残る。孔径0.5m、残存長17.3cm、幅7.8cm、厚さ1.4cmを測る。

砥石(34・35)

須恵器　東播系のものである。

片口鉢(36・37)　36は体部下半は丸味をもち、上半は直線的に外上方に延び口縁部に至る。口縁端部は平坦にする。外面体部から内面体部上半は横ナデ、下半は横ナデ後、斜め方向にナデ、底部は糸切り離し、口径31.9cm、底径10.1cm、器高11.7cmを測る。色調は青灰色を呈し、口縁端部には自然釉がみられる。37の体部は丸味をもち外上方に延び、口縁端部は平坦にする。調整は36に同じ、器周残1/6からの復元、口径27.8cm、底径9.2cm、器高11.5cmを測る。色調は青灰色を呈する。

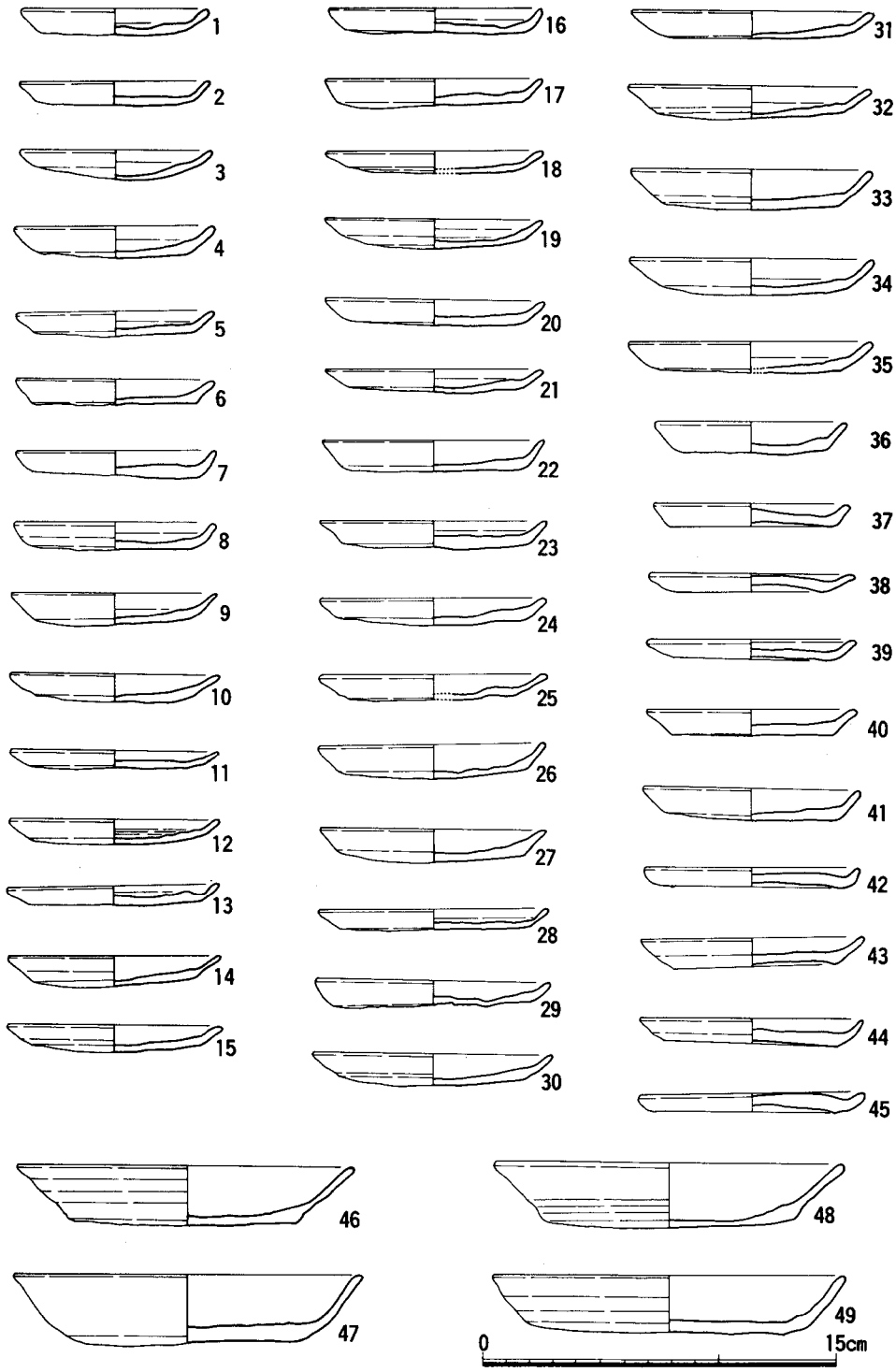
広口壺(38・39)　口縁部は朝顔状に開き端部は平坦にする。肩部と体部の境に断面四角形の突帯を廻らせる。長めの体部は上位に最大径をとる。口縁部から体部まで横ナデ、底部は糸切り離し、38は口径（復元）20.1cm、底径11.8cm、器高37.4cmを測る。39は頸部以上は欠失。色調は青灰色を呈する。

SD100上層出土遺物（第49～68図、第３表、図版42～59）

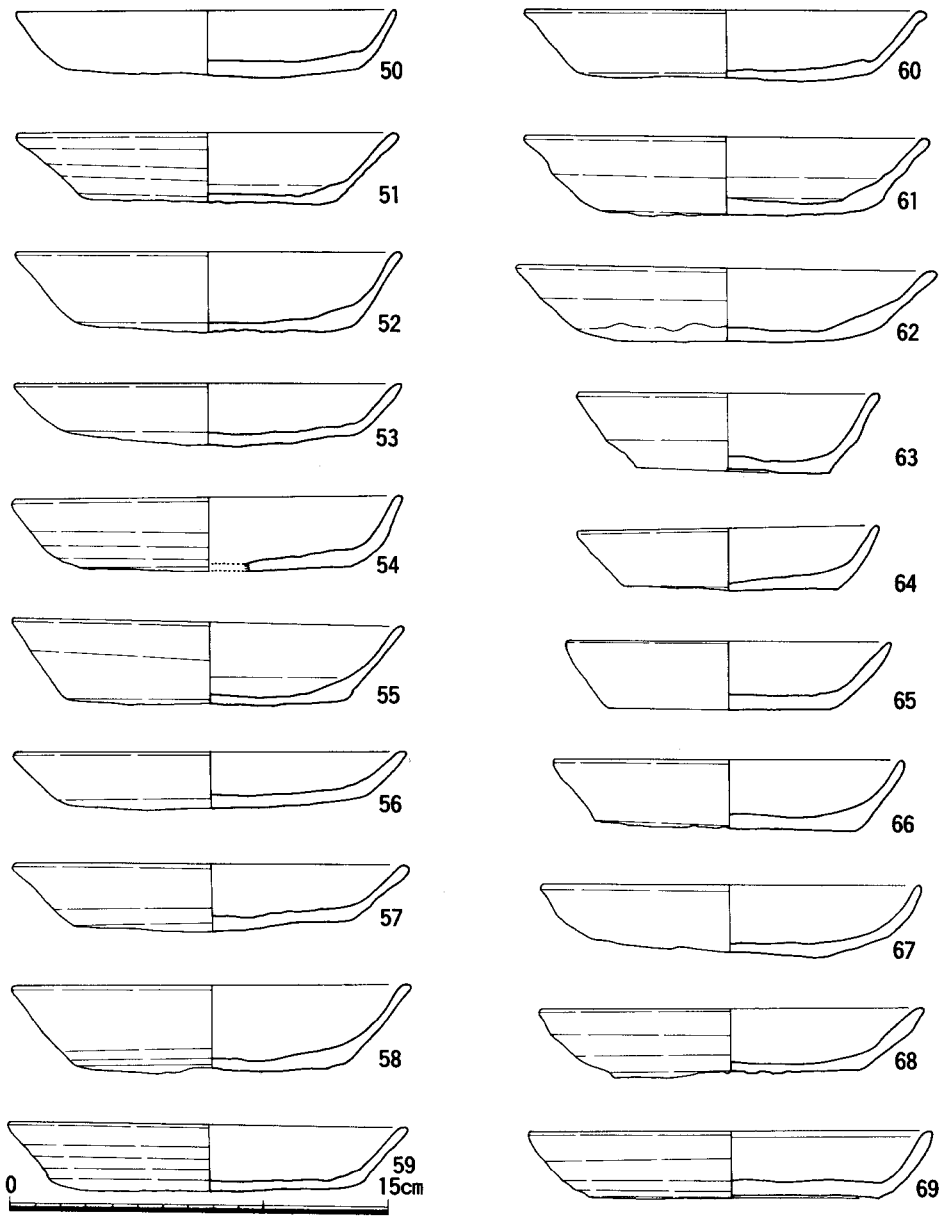
土師器

小皿(１～45)　１～35の底部切り離し方法はヘラ切り、36～45は糸切りである。体部は横ナデ、内面底部はナデ、外面底部には板状圧痕がみられる。１～35は口径8.0～10.4cm、底径6.1～8.4cm、器高0.9～1.7cmを測り、36～45は口径8.2～9.7cm、底径6.1～7.9cm、器高0.8～1.3cmを測る。

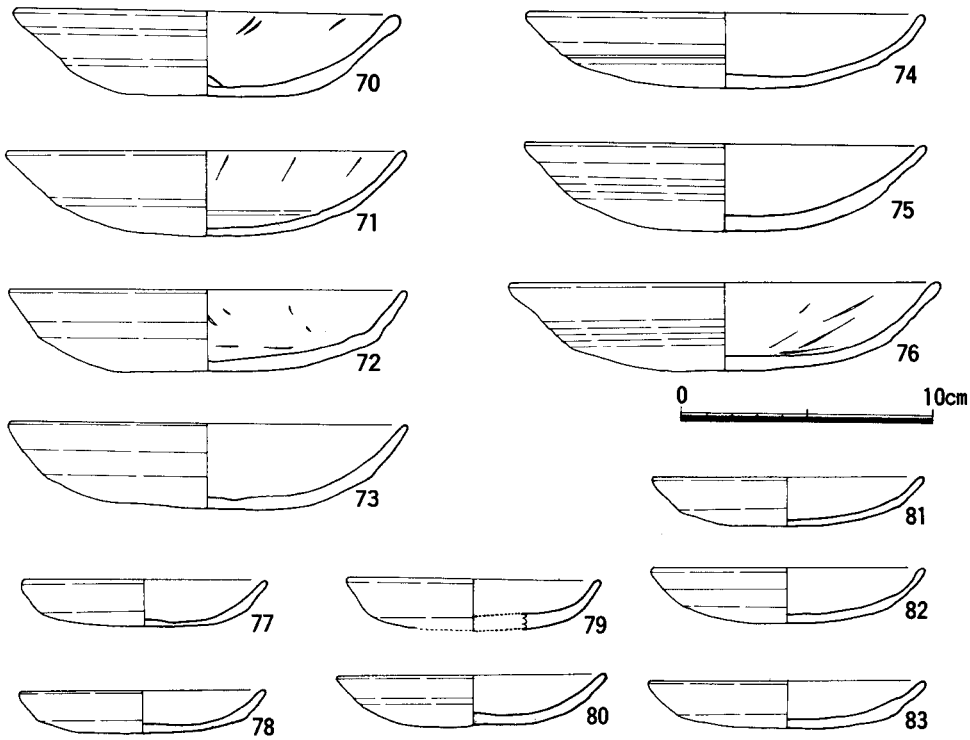
杯(46～69)　46～62の底部切り離し方法はヘラ切り、63～69は糸切りである。体部は横ナデ、内面底部はナデ、外面底部には板状圧痕がみられる。46～62は口径14.3～16.7cm、底径9.7～12.4cm、器高2.4～3.4cmを測る。糸切り底のものは法量により大きく２つに分けられる。63～65は口径12.0～12.9cm、底径7.6～8.8cm、器高2.5～3.1cmを測り、66・68・69は口径14.0～16.0cm、底径10.3～11.3cm、器高2.6～2.8cmを測る。63～65は上からの混入であろう。67は口径14.8cm、底径7.2cm、器高2.8cmを測り、底径が小さい。他地域からの搬入品か。



第49図　SD100出土土師器・小皿・杯実測図



第50図　SD100出土土師器杯実測図



第51図　SD100出土土師器丸底杯・瓦器小皿実測図

丸底杯(70～76)　内面を磨いて器面を密にし、こてあて痕が放射状にみられる。外面底部にはヘラ切り痕がみられる。口径15.3～17.3cm、器高3.0～3.5cmを測る。

瓦器

小皿(77～83)　外面底部にはヘラ切り痕がみられる。全体的に磨滅が著しいが、外面底部を含む器表のほぼ全面にヘラミガキが施されている。色調は78・79・82が全体に黒～灰黒色を呈し、77・80・81・83は口縁部内外面が黒色、その他の部位は淡黄灰色もしくは灰色を呈する。口径9.8～11.0cm、底径8.0～9.5cm、器高1.7～2.2cmを測る。

椀(84～125)

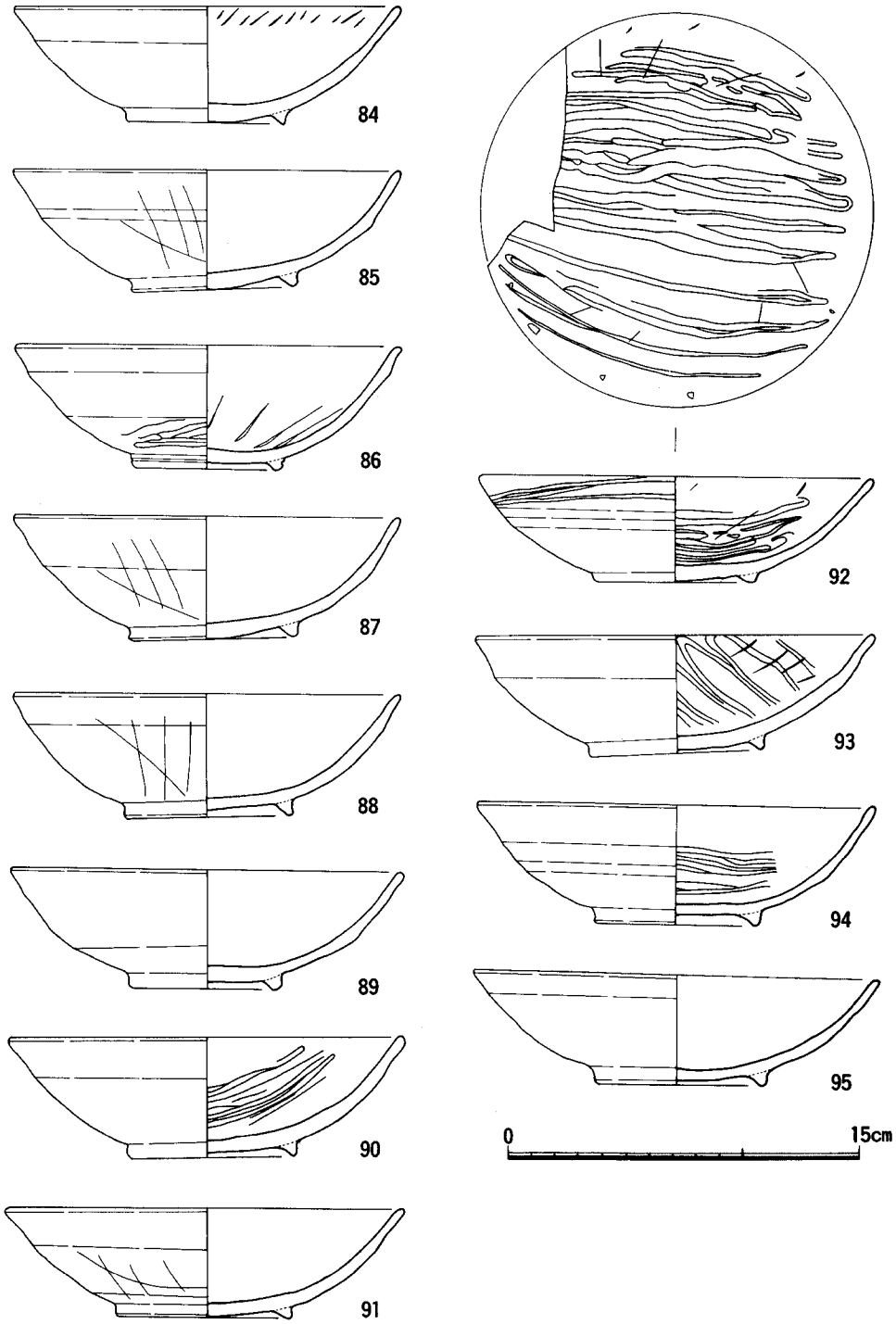
84～95は体部上位に肥厚する屈曲部をもつ、体部下位は丸味を持ち外上方へ延びる。屈曲部から外反し口縁部となる。

体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は90・91・92が1方向のヘラミガキ、93・94は4方向に分けてヘラミガキしている。他は磨滅により詳細不明、84・86・92・93の内面にはコテアテ痕が放射状にみられる。92は器面調整痕が比較的よく残っていた。ヘラミガキの下にコテアテ痕が2段にわたってみられる。91・93・95の体部外面下半には凹凸がみられ、指頭圧痕がヘラミガキによって不鮮明になったものとみられる。92の体部外面下半、93・94は高台内に板状圧

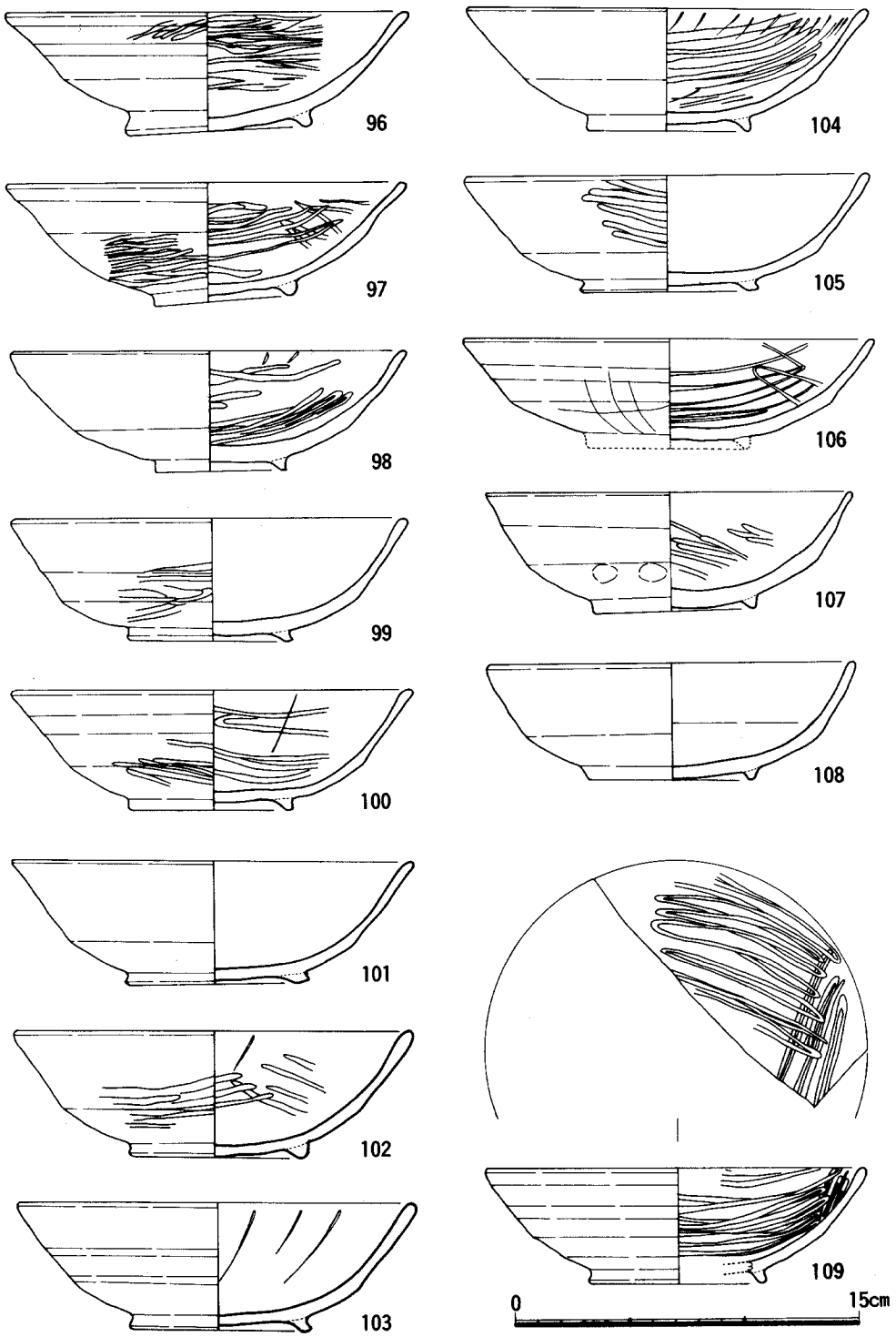
痕がみられた。84では、粘土紐の継ぎ目がみられた。85・87・88・91の体部外面には焼成後、針状の工具で記号が線刻されている。高台はいずれも貼り付け高台で、低くやや開き気味である。高台の周囲は横ナデ調整である。84～95は口径16.5～17.5㎝、高台径6.5～7.6㎝、器高4.7～5.4㎝を測る。色調は84・90・92・93・95が口縁部内外面とも黒色、その他の部位は灰色を呈し、85・87・89・91は口縁部内外面とも黒色、その他の部位は灰色～淡黄灰色を呈する。重ね焼きに起因するものである。86は外面口縁部から内面にかけて黒色、外面下半は淡赤褐色を呈する。88・94は淡黄灰色を呈し、部分的に黒色を呈す。92・93・95の内底見込みは高台径に等しい径の円形に白色を帯び、90の内底見込みには高台の圧痕がみられ、いずれも重ね焼きに起因すると考えられる。

96～106は体部下位に肥厚する屈曲部をもつ。体部は屈曲部から大きく外反し、口縁部は肥厚し、その下位の器壁は薄くくぼむ。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は98が1方向のヘラミガキ、97・100・102・103・104・105・106は4方向に分けてヘラミガキしている。他は磨滅により詳細不明。98・100・102・103・104・105の内面にはコテアテ痕が放射状にみられる。96・97・99・100・104の体部下半には凹凸がみられ、指頭圧痕がヘラミガキによって不鮮明になったものとみられる。98の体部外面下半、97・99・100・103・105は高台内に板状圧痕がみられた。98では粘土紐の継ぎ目がみられた。106の体部外面には焼成後、針状の工具で記号が線刻されている。高台はいずれも貼り付け高台であるが98の高台径は5.7㎝と他のものより小さく、断面形はほとんど丸味をもっていない。焼成も群を抜いて堅緻である。98以外の高台はいずれも低く、やや開き気味である。106は高台が欠失している。高台の周囲は横ナデ調整である。96～106は口径17.2～17.9㎝、器高5.1～5.6㎝高台径(98を除く)6.2～8.1㎝を測る。色調は96は内面黒色、外面淡黄灰色、101は黒色、102は灰色、103は灰白色、104は淡黄灰色、106は外面体部上半から内面にかけて黒色、外面体部下半は灰色白を呈する。97・99・100・105は口縁部内外面とも黒色、その他の部位は97・99が灰白色、100は淡黄灰色、105は灰色を呈する。98は灰黒色を呈し、一部に銀色の光沢がみられる。内底見込みには高台の圧痕がみられ、その内側は灰白色を呈し、重ね焼きに起因するとみられる。

107～113は体部下位に肥厚する屈曲部をもつ、体部は屈曲部ら内湾気味に外上方へ延びる。口縁部はわずかに肥厚する。体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は107・111が1方向のヘラミガキ、109は器周残約⅓からの復元であるが4方向に分けてヘラミガキしているとみられる。他は磨滅により詳細不明、112・113の内面にはコテアテ痕が放射状にみられる。107は体部下半に指頭圧痕が残る。他のものも体部下半に凹凸がみられ、指頭圧痕が後の調整により不鮮明になったものとみられる。107は高台内に板状圧痕がみられた。高台はいずれも貼り付け高台であるが、111～113の高台径は6.6㎝前後と他のものより小さく、108・110～113の高台は直立気味である。高台の周囲は横ナデ調整である。107～113は口径15.9～17.2㎝、高台径6.4～7.7㎝、



第52図　SD100出土瓦器椀実測図　(1)



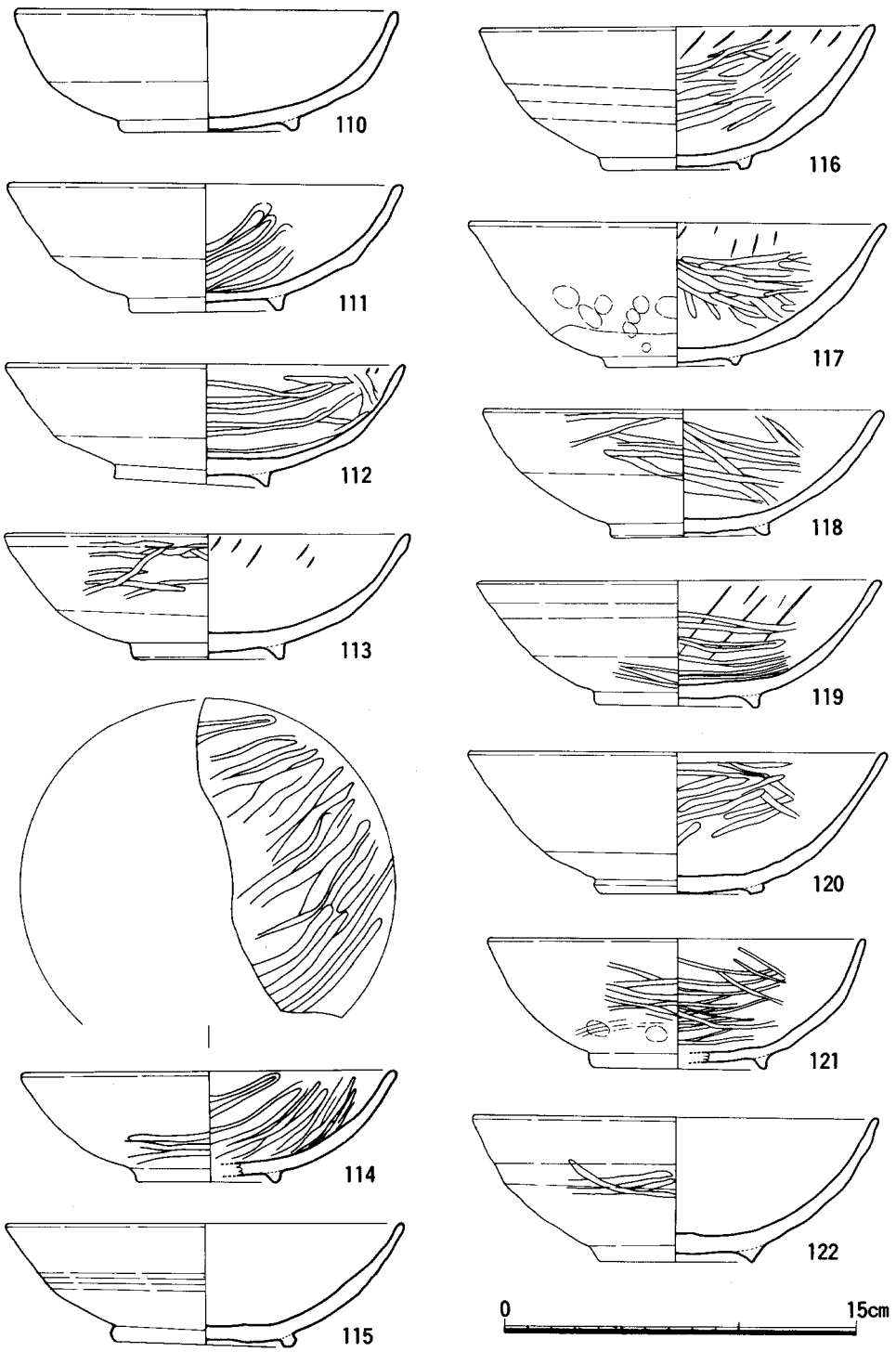
第53図　SD100出土瓦器椀実測図 (2)

器高5.1～5.5cmを測る。色調は107は灰黒色、111の外面は黒色、内面は灰色、113は淡黄灰色を呈する。108～110は口縁部内外面とも黒色、その他の部位は灰色、112は灰黒色で内底込みには高台の圧痕がみられ、その内側は灰白色を呈し、重ね焼きに起因するとみられる。112は98と口縁の形態や高台径に違いがみられるが、胎土や色調、高台の形態等類似する点が多くみられる。

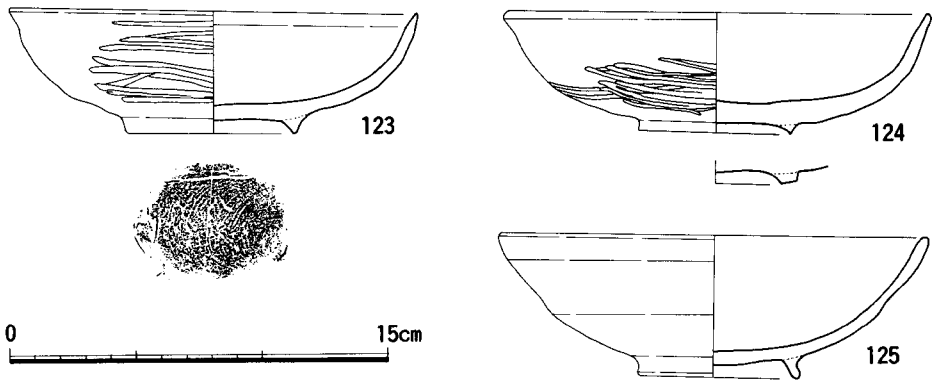
114～117は体部の中位が肥厚し、明瞭に屈曲せず稜をなすには至らない。口縁部は直線的で、端部は薄くおさめている。114の体部外面は横方向のヘラミガキ、内面には1方向のヘラミガキがみられる。口径16.0cm（復元）、高台径（復元）6.2cm、器高4.8cmを測る。色調は内面から口縁部外面にかけて黒色、その他の部位は灰白色を呈する。115は磨滅が著しいが体部外面には焼成後針状の工具で付けられた記号の痕跡がみられる。内外面とも黒色を呈するが、内面の器表が剝離している部分は赤褐色を呈する。口径17.0cm、高台径7.8cm、器高5.2cmを測る。116は口径16.9cm、高台径6.3cm、器高6.2cmを測る深さの椀である。内面および高台付近までヘラミガキ、内面はコテアテ痕が放射状にみられる。色調は口縁部内外面とも黒色、その他の部位は灰白色を呈する。117は口径16.9cm、高台径5.7cm、器高6.2cmを測る。深めで高台径が小さい椀である。外面は高台付近までヘラミガキ、内面は1方向にヘラミガキしコテアテ痕が放射状にみられる。体部外面下半には指頭圧痕が顕著にみられる。色調は外面から口縁部内面にかけて黒色で一部に銀色の光沢がみられる。その他の部位は灰白色を呈する。

118～120は器肉を肥厚させずに、体部は丸味を持って開き、口縁部は直線的である。118の体部は内外面ともヘラミガキ。口径17.1m、高台径6.8m、器高は5.5mを測り、色調は外面は黒色、内面は黄灰色を呈する。119の内面は4方向に分けたヘラミガキの下にコテアテ痕がみられ、体部外面はヘラミガキ。色調は灰黒色～黄灰色を呈する。120は口径17.9cm、高台径7.2cm、器高6.1cmを測る深めの椀である。外面は体部中位よりやや下までヘラミガキもしくはヘラナデ、その下位はヘラ削り、内面は4方向に分けてヘラミガキしている。色調は外面が黒色、器面の剝離した部分は淡黄灰色、内面は黒色で一部銀色の光沢がみられる。外面と同じく器面の剝離した部分は淡黄灰色を呈する。

121・122は丸味を持って口縁端部まで延びる。ヘラミガキの幅が他ののより狭く、内外面とも密ではあるが、一定の方向性もなく雑然とヘラミガキされる。ヘラミガキの下にコテアテ痕がみられる。外面下半ではヘラミガキの下に指頭圧痕と糸切り痕がみられる。断面三角形の高台が貼り付けられている。121は口径16.2cm、高台径7.6cm、器高5.6cmを測る。色調は内外面とも灰黒色を呈す。122は口径17.3cm、高台径6.6cm、器高6.3cmを測る。色調は灰黒色～灰白色を呈する。123は口径16.2cm、高台径6.7cm、器高4.9cm、124は口径17.1cm、高台径6.1cm、器高4.8cmを測る浅めの椀である。体部は丸味を持ち、口縁の傾きは小さい。体部は横方向のヘラミガキ、内底はジグザグにヘラミガキを施す。断面三角形の貼り付け高台であるが、124



第54図　SD100出土瓦器椀実測図　(3)



第55図　SD100出土瓦器椀実測図 (4) (1/3)

は一部が断面方形を呈する。123の高台内側には糸切り痕がみられる。色調は内面から体部外面上半にかけて黒色を呈し、一部に銀色の光沢がみられる。その他の部位は灰白色を呈する。125は体部から口縁まで丸味を持って延びるが、口縁部下位の外面を薄くくぼませる。調整は高台周辺が横ナデのほかは、磨滅により不明、色調は口縁部黒色、その他の部位は淡黄褐色を呈する。

白磁

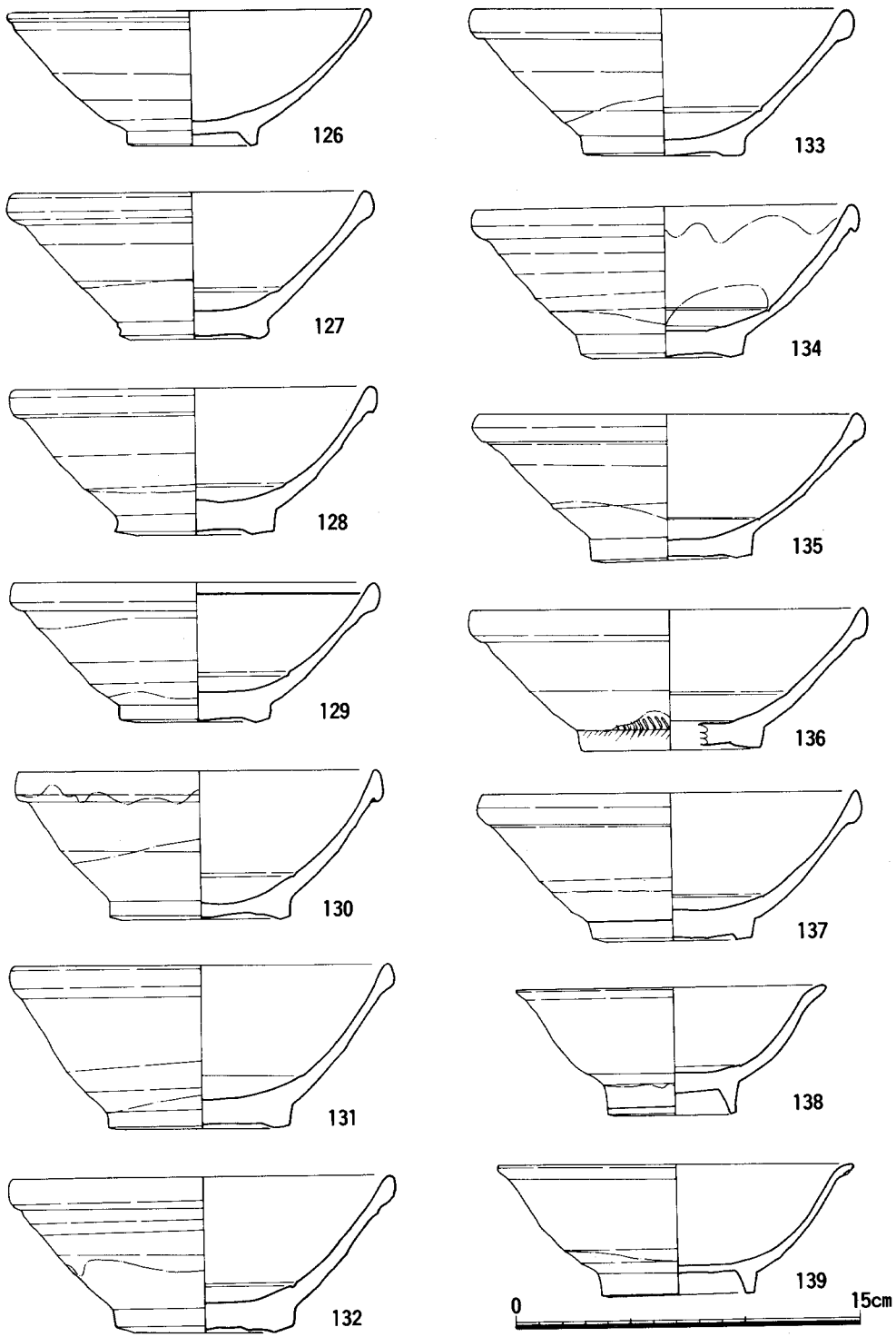
椀(126～148)

126は口縁を小さい玉縁とし、高台は外面を直に内面を斜めに削り出している。黄白色の釉が薄く高台付近までかけられる。胎土は灰白色を呈する。釉には細かい氷裂が入り剝離している部分がみられ、火熱による影響と考えられる。

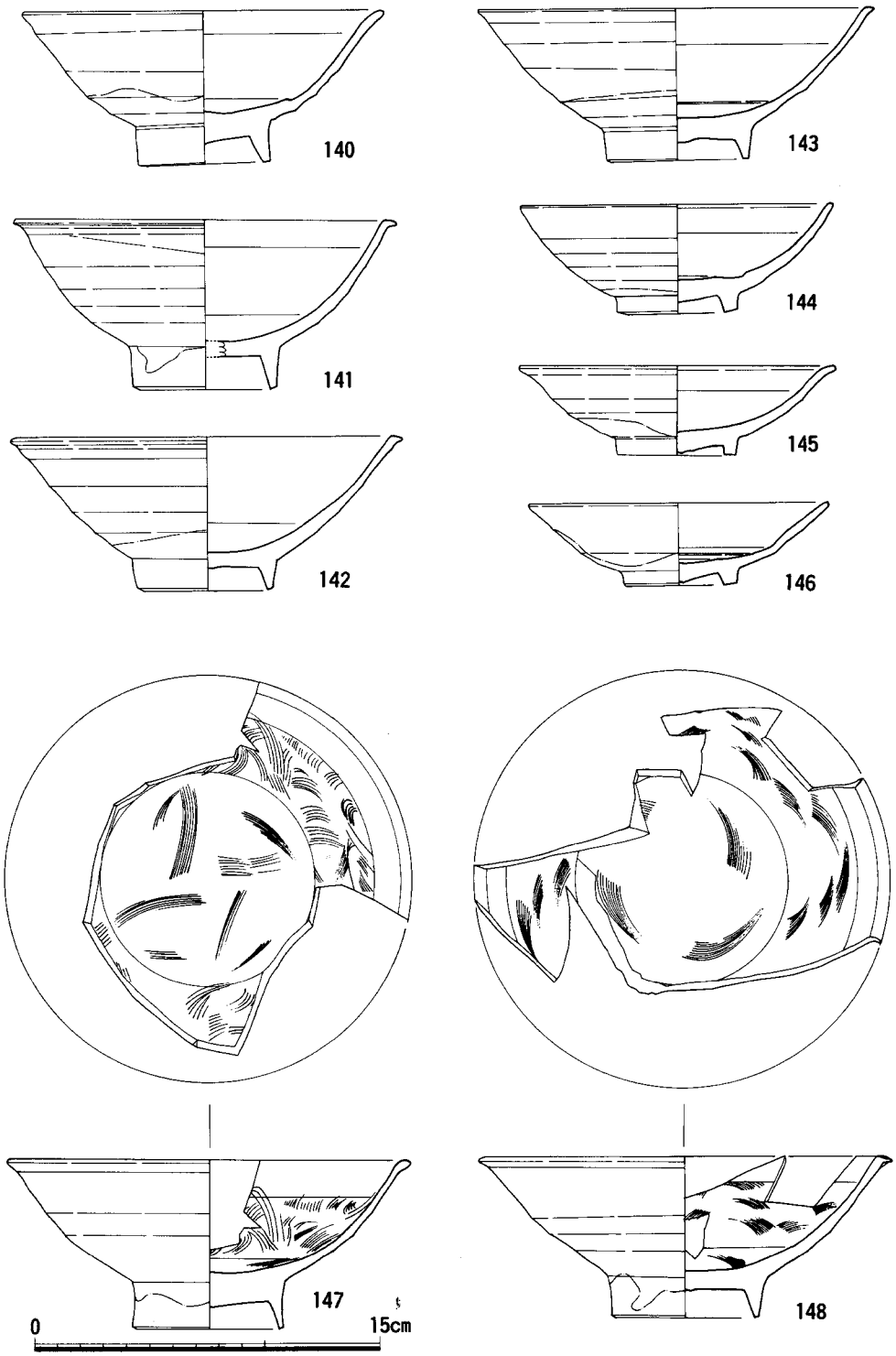
127～136は、口縁を折り返し断面三角形の玉縁とする。126に比べ玉縁は大きく、体部は直線的に外上方へ延び器肉は厚い。外底の削り出しが浅いため底部も肉厚である。高台の幅は広い。内底見込みには沈圏線をもつ。灰白色の釉が厚目にかけられているが体部外面下半は露胎である。134は内底見込みに施釉されていない部分がみられる。133の釉色は黄色味を帯びている。127～136の胎土は灰白色を呈する。

137は、高台が高く削り出されている以外は127～136と同じ特徴を示す。

138～143・147・148は高台の外面を直に内面を斜めに深く削り出し、高台は細く高い形状を呈する。釉は高台部と体部の境付近、もしくは高台部までかけられている。胎土は灰白色を呈する。138～140は口縁部を、ゆるやかに外反させる。138はやや小振りの椀で内底見込みに段をもつ。釉色は白色の強い灰白色を呈する。139の高台は他のものと比べ低い。釉色は灰白色を呈する。140は内面体部上位と見込みに沈圏線をもつ。141～143・147・148は口縁部を外反させ端部を水平にする。釉色は灰白色を呈する。内面体部上位と見込みに沈圏線をもつ。141は他のものと比べ体部に丸味をもつ。147・148は内面に櫛描文が施されている。



第56図　SD100出土白磁椀実測図 (1)



第57図　SD100出土白磁椀実測図 (2) (1/3)

144は口縁部を内湾気味におさめ、内底見込みは輪状に釉をカキ取っている小振りの椀である。内面体部上位に沈線をもつ。釉色は白色の強い灰白色で、体部下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。

145は、口縁部を外反させ、体部が開く浅い椀である。高台は細く低い。内面体部上位に沈線をもつ。釉色は灰白色で、体部外面下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。

146は、体部下位で屈曲し、口縁部は直線的に延びる。内底見込みは輪状に幅1.5cm、釉をカキ取っている。灰白色の釉が体部外面屈曲部までかけられている。胎土は黄色味を帯びた灰色を呈する。

皿(149～159)

149は口縁部を外反させ端部を水平にし、内面見込みは輪状に釉をカキ取る。釉色は灰色で、体部外部下半は露胎である。胎土は黄色味を帯びた灰色を呈する。

150～154は、底部がやや上げ底の平底皿である。体部は中位で屈曲し屈曲部の内面には沈線がめぐる。150～153は内湾、154は外反する先細りの口縁部となす。釉色は150～153が黄白色、154が灰白色で、体部外面下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。

155～157は口縁部を外反させ、内底見込みは輪状に釉をカキ取る高台付皿である。釉色は白色の強い灰白色で体部下半は露胎である。

158・159は口縁端部の釉をカキ取った口禿の皿である。釉は空色を帯びた灰白色、胎土は灰白色を呈する。158は口縁部を外反させ、内底見込みに沈圏線をもつ高台付皿である。外底は露胎である。159は、口縁部を外反させ、外底の釉を拭い取っている。

龍泉窯系青磁

椀(160～166・168)

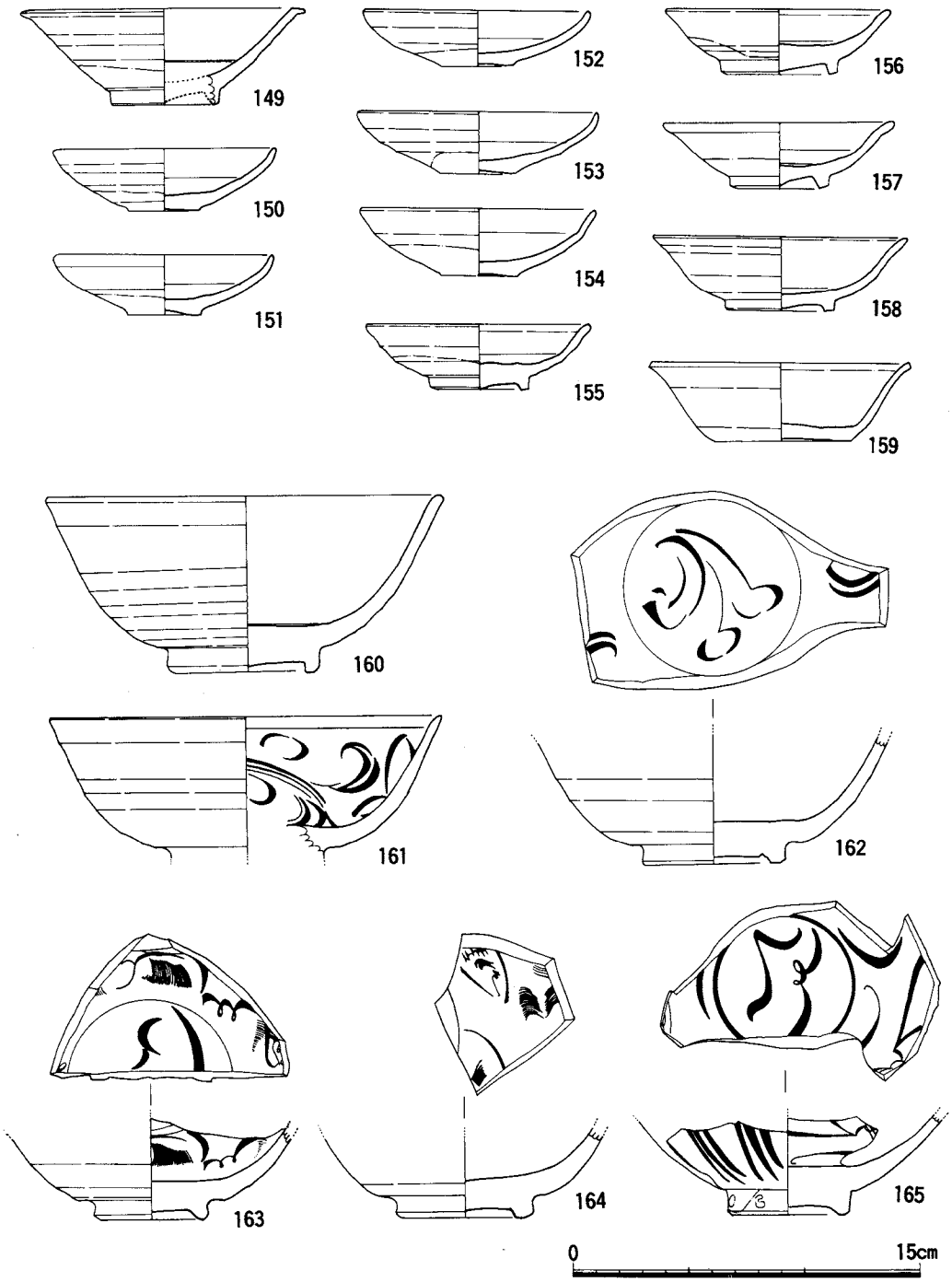
高台は断面形四角で、畳付より内側は露胎である。160は内外面とも無文、161は内面に花文を片彫りする。162は体部内面の縦方向の片彫りの線しか破片からは伺い知れないが、雲文を配した文様パターンであったと考えられる。163・164は内面にヘラ状工具に加え櫛状工具で文様を施している。164は魚文を描いている。165は体部外面にヘラ状工具で条線あるいは蓮弁を片彫りしている。内面にも片彫りがみられる。166は体部外面に脈入り蓮弁、体部内面は破片で全体を知りえないが、蓮華の葉を施文している。168は体部外面に鎬蓮弁の文様をもつもので内底見込みには渦文を組み合わせた印文がみられる。釉調は106・163・165・168がオリーブ色、161・162・164・166が青緑色、胎土は灰色を呈する。

高台付皿(167)

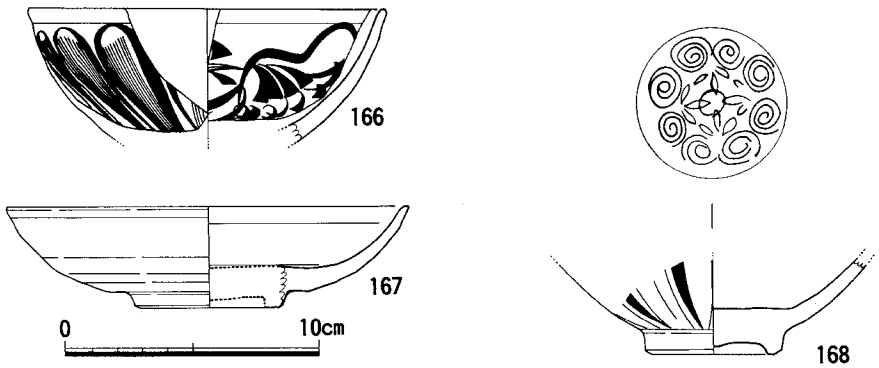
内外面とも無文である。釉はオリーブ色、胎土は灰色を呈する。

同安窯系青磁

椀(169～172)



第58図　SD100出土白磁・龍泉窯系青磁実測図



第59図　SD100出土龍泉窯系青磁実測図

169～171の体部は内湾気味に外上方へ延び、上位で屈曲し口縁部はかるく外反する。屈曲部の内面には沈線をもち、内底見込みと体部との境に段をもつ。釉は灰オリーブ色で体部外面下半は露胎である。胎土は黄色灰色～灰白色を呈す。170・171は外面に櫛状工具で放射状に条線を施し内面はヘラ状工具による片彫りと櫛状工具による雷光文が施されている。170は他のものと比べて大型である。

172の体部は直線的に外上方へ延びる。外面にヘラ状工具で放射状に条線を施し、内面はヘラ状工具による片彫りと櫛状工具による猫掻手の文様を施す。内底見込みの釉を輪状にカキ取る。釉は鮮やかな緑色で、外面体部下半は露胎である。胎土は灰白色を呈する。

皿(173～178)

体部中位で屈曲し、口縁部を外反させる平底皿である。屈曲部の内面、体部と見込みの境に段をもつ。

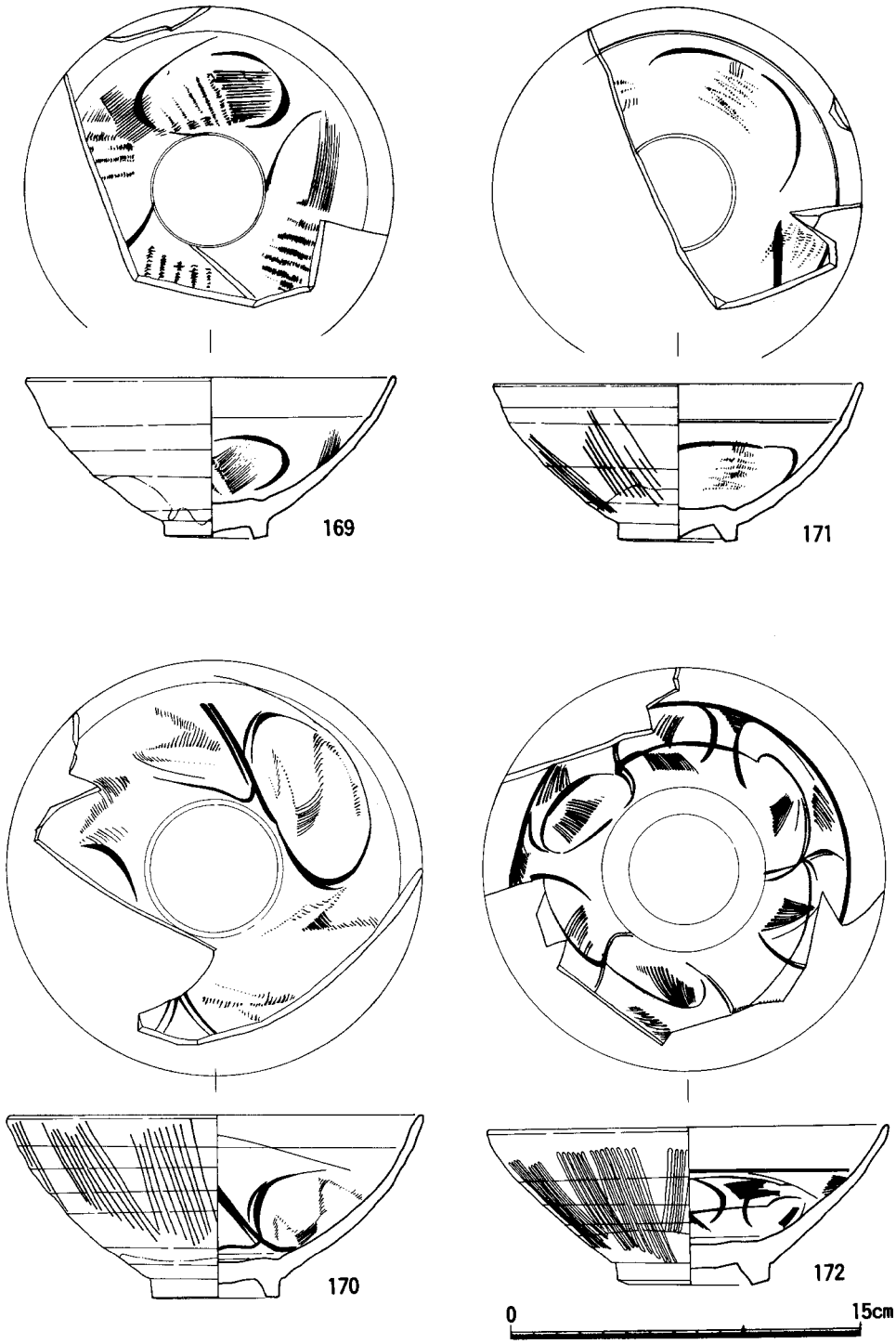
173～175は内外面無文で外面体部下半は露胎である。釉調は173・174が緑灰色、175が黄灰色、胎土は173・174が灰色、175が黄灰色を呈する。

176～178は内面にヘラ状工具による草文とみられる片彫りと櫛状工具による雷光文が施されている、全面施釉ののち、外底の釉をカキ取っている。釉色は176が青緑色、177・178が緑灰色、胎土は176が黄灰色、177・178が灰白色を呈する。

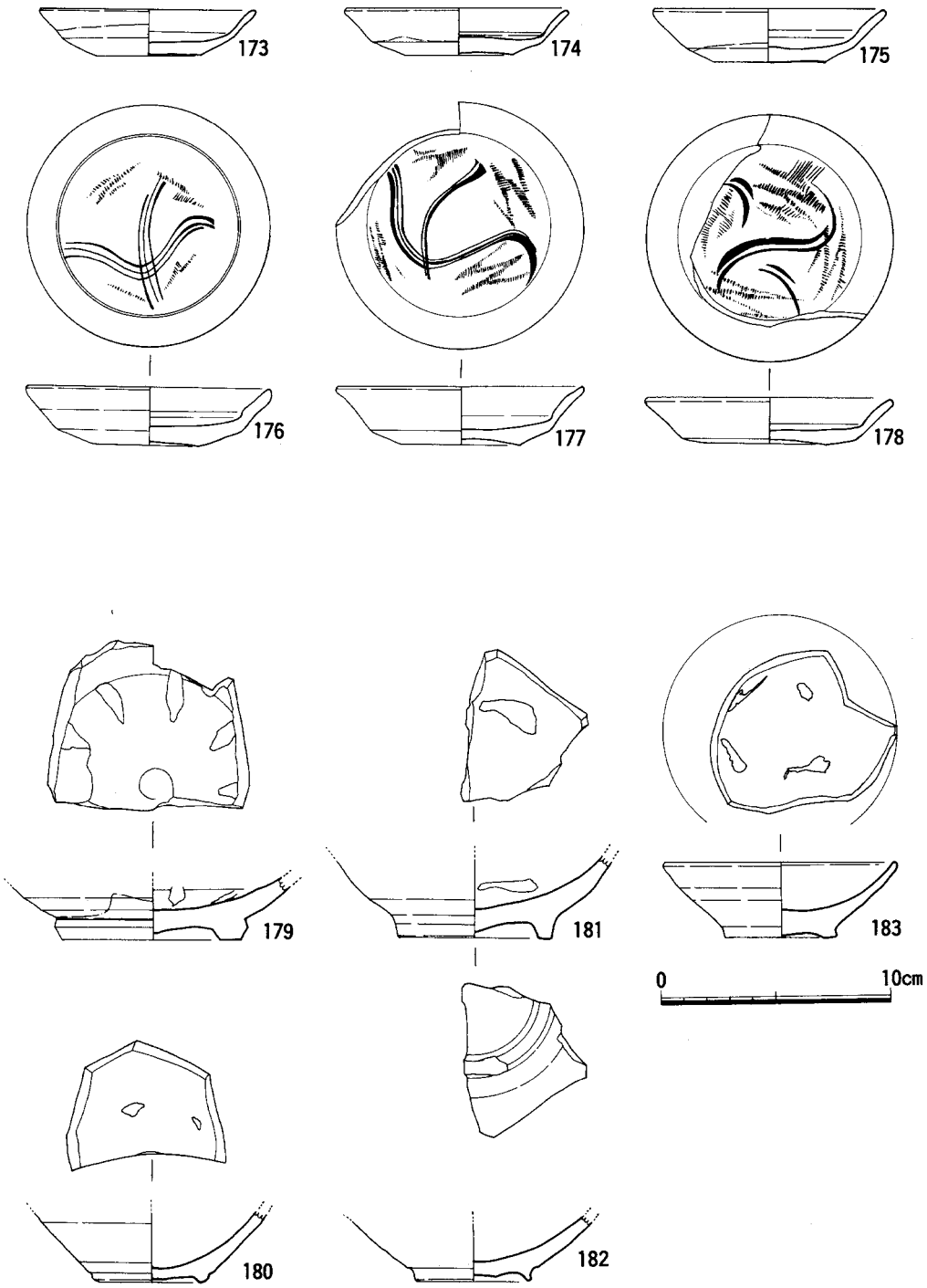
越州窯系青磁(179～182)　いずれも内底見込みと畳付に目あとを有する。

鉢(179)　高台の上位まで施釉され、化粧土はみられない。Ⅱ-1・b類か。

椀(180～182)　180・182は細く低い輪状高台から直接的に延びる体部下半片である。全面施釉の後、畳付の釉をカキ取っている。釉色は灰緑色で182の方がやや明るい。胎土は灰白色を呈し、白色粒子を含む。181は断面四角の輪状高台から丸味を持って延びる体部下半片である。釉色は緑色で、胎土は灰白色を呈し白色粒子を含む。初期高麗青磁である可能性が考えら



第60図　SD100出土同安窯系青磁椀実測図



第61図　SD100出土同安窯系青磁皿・越州窯系青磁実測図（1/2）

れる。釉色は緑色で、胎土は灰白色を呈し白色粒子を含む。

杯(183)　高台の削り出しは浅く、体部は直線的に外上方へ延びる。全面施釉の後、畳付の釉をカキ取っている。釉色は淡緑灰色で、胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。

黒釉陶器椀(184・185)　184はすっぽん口の天目椀の体部片、185は底部片である。釉色は青みを帯びた漆黒色で、釉が薄くなる口唇部、露胎部との境付近は褐色を呈する。外面体部下半は露胎である。胎土は明赤褐色を呈する。

白磁(186)　186は四耳壺もしくは水注の頸部片である。口縁は折り曲げられ、釉色は灰白色、胎土は明灰色を呈する。

青白磁

小壺(187・188)　187は体部に縦線を入れた瓜割形の壺で口縁部は欠失している。釉色は淡黄灰色を呈し、高台畳付から内側は露胎である。胎土は淡黄灰色を呈する。188は、口縁部が欠失している。釉色は黄灰色で外底部付近までかけられている。釉の剝離は著しい。胎土は白色が強い灰白色を呈する。

合子(189～191)　189は蓋で、側面には蓮華座を型押ししてつくる。天井部は大半が欠失しているが、文様の型押しが断片的にみられる。釉色は青灰色を呈し、内面は天井部のみ施釉されている。胎土は白色を呈する。190は身で、側面に蓮華座を型押ししてつくる。釉色は青灰色を呈し、蓋受け部、外底部には釉がみられない。胎土は白色を呈する。189・190は、口径・蓮華座のつくり・釉や胎土の色調を同じくする。191は、蓋で側面に蓮華座、天井部に草花文を型押ししてつくる。釉色は灰緑色を呈し、内面は天井部のみ施釉されている。胎土は灰白色を呈する。

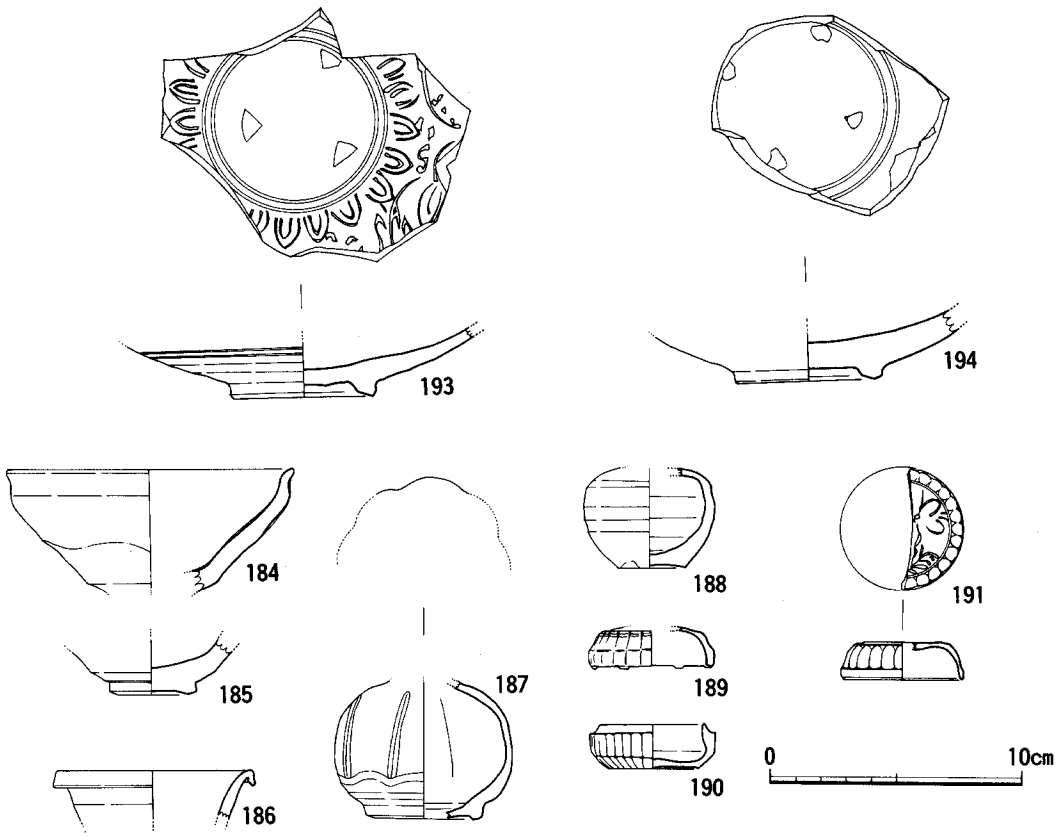
高麗青磁椀(193・194)　いずれも体部上半欠失で、象嵌を施す。193は内底見込みに2種の圏線、その周囲に蓮弁、さらに草文を配している。主に白い化粧土で象嵌され、一部に黒い化粧土が使用されている。体部外面には2重の圏線をもつ。194は内底見込みに2重の圏線をもつ。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。全面に施釉され、畳付には粗い砂粒が付着する。

陶器

鉢(195・204)　口縁部を折り返し、玉縁状とする。口縁部内面と体部外面下位に目アトを有し、195は口端部下位に耳を貼り付ける。釉は暗褐色、胎土は195が橙灰色、208が紫灰色を呈する。

四耳壺(196～198)　196は口縁部、体部下半、耳を欠失する破片資料からの復元。肩部外面に波状の沈線をもち、口縁内面に目アトを有する。釉は褐色、胎土は淡黄灰色を呈する。197は、肩部より上位の破片資料。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。198は、内側を抉り蛇の目状をなす底部片で、釉、胎土は197に似ており同一個体か。

四耳付長壺(199)　口縁部を折り返し、内面に目アトを有する。釉は褐色、胎土は小豆色。



第62図　SD100出土黒釉陶器・白磁・青白磁・高麗青磁実測図（1/3）

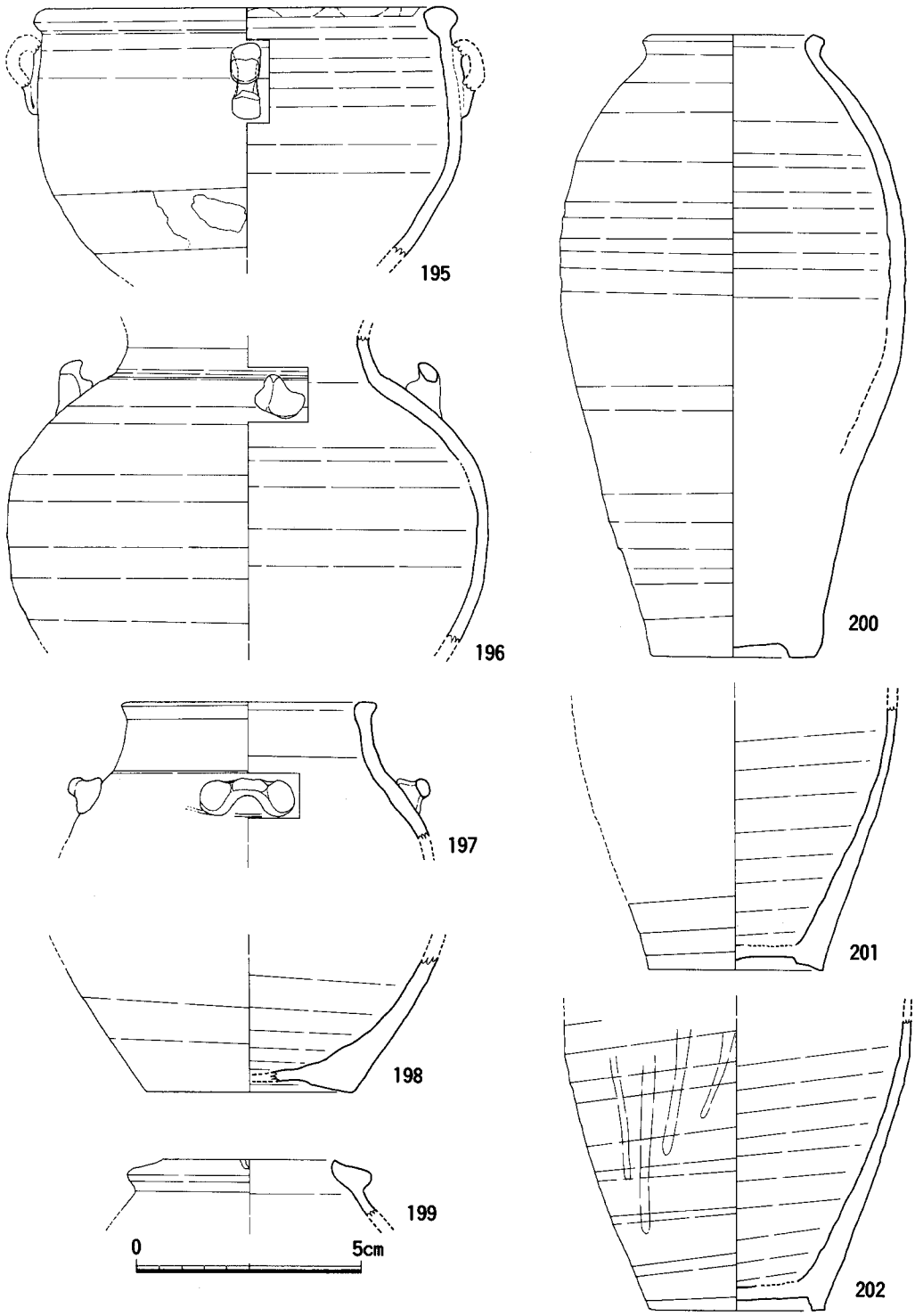
長瓶(200)　口縁は短く、やや開く。体部中位のやや上に最大径をもつ。底部は内側を抉り、蛇の目高台状をなす。釉は灰オリーブ色、胎土は明赤褐色を呈する。

201は、細く幅が広い高台状の底部で、畳付はほとんどない。釉は緑色、胎土は灰色を呈する202は細く低い高台状の底部で釉は灰緑色、胎土は淡灰褐色を呈する。

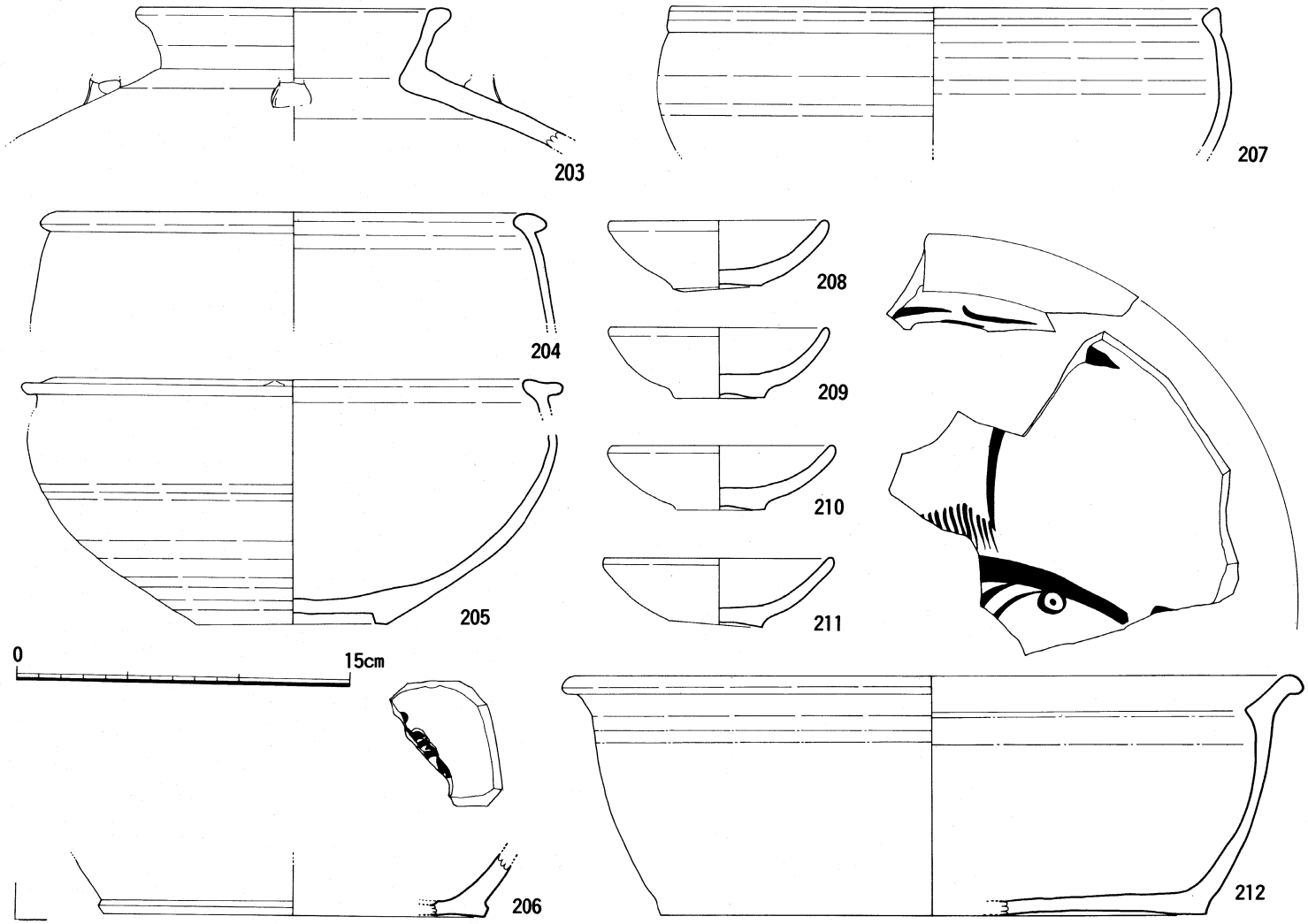
203は、器表が明褐色、胎土が赤味を帯びた灰色を呈する壺である。

平鉢(205)　口縁部に明橙色の釉が薄くかけられ、胎土には砂粒を含み、明橙色を呈する。胎土には砂粒を含み、灰色を呈する。

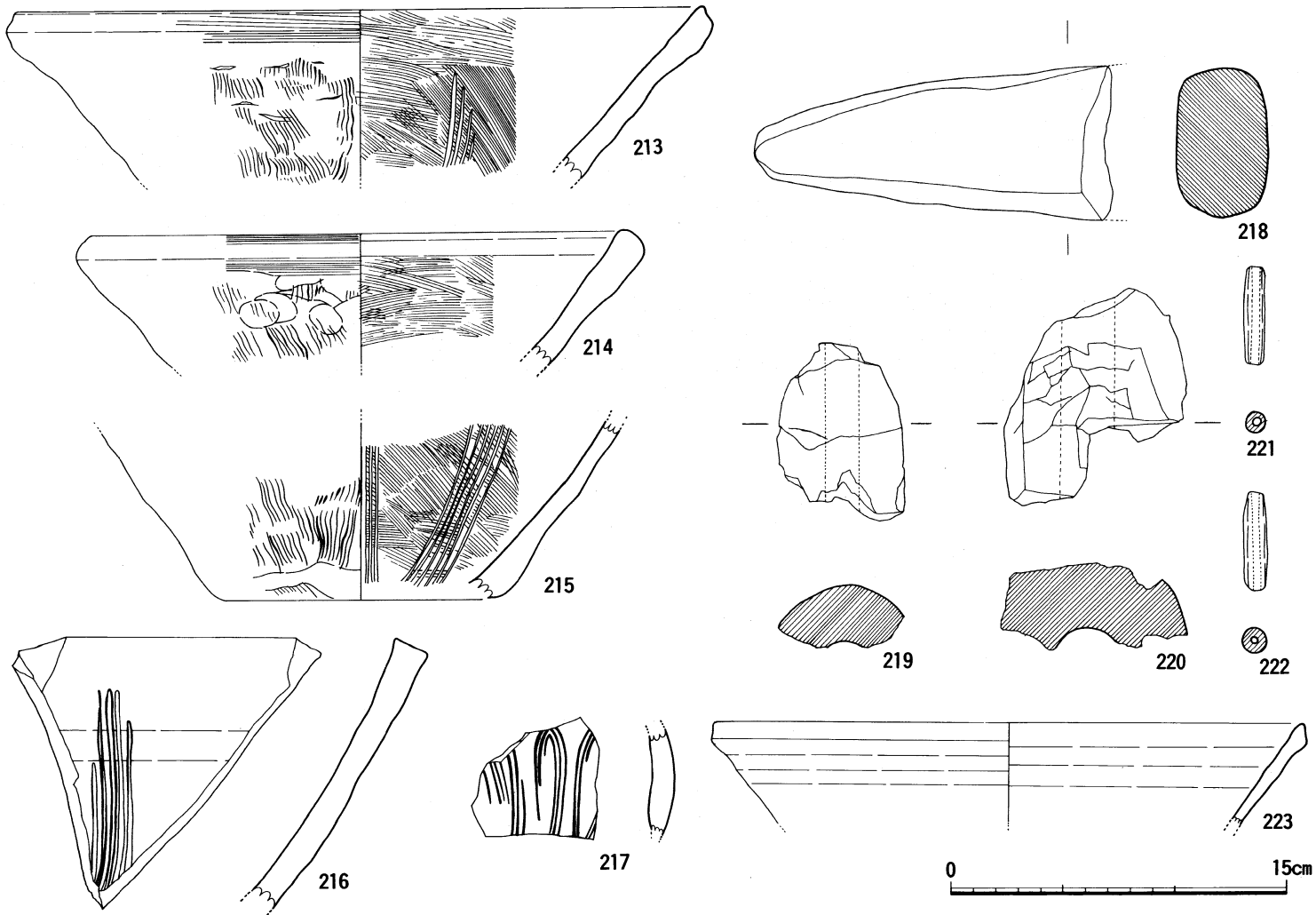
盤(206・207・212)　206は内底に印文を有し、内面に緑色の釉がかけられ、外側はヘラ削りされる。胎土は灰白色を呈し木目細かい。207は鉢の可能性もある。口縁を断面四角形にし、釉は明褐色、胎土は橙色を呈する。212は、内底に鉄絵の魚文をもつ黄釉の盤である。灰緑色ないし灰黄色の釉が、内面から外面体部上位までかけられる。胎土には砂粒を多量に含み、赤褐色を呈する。



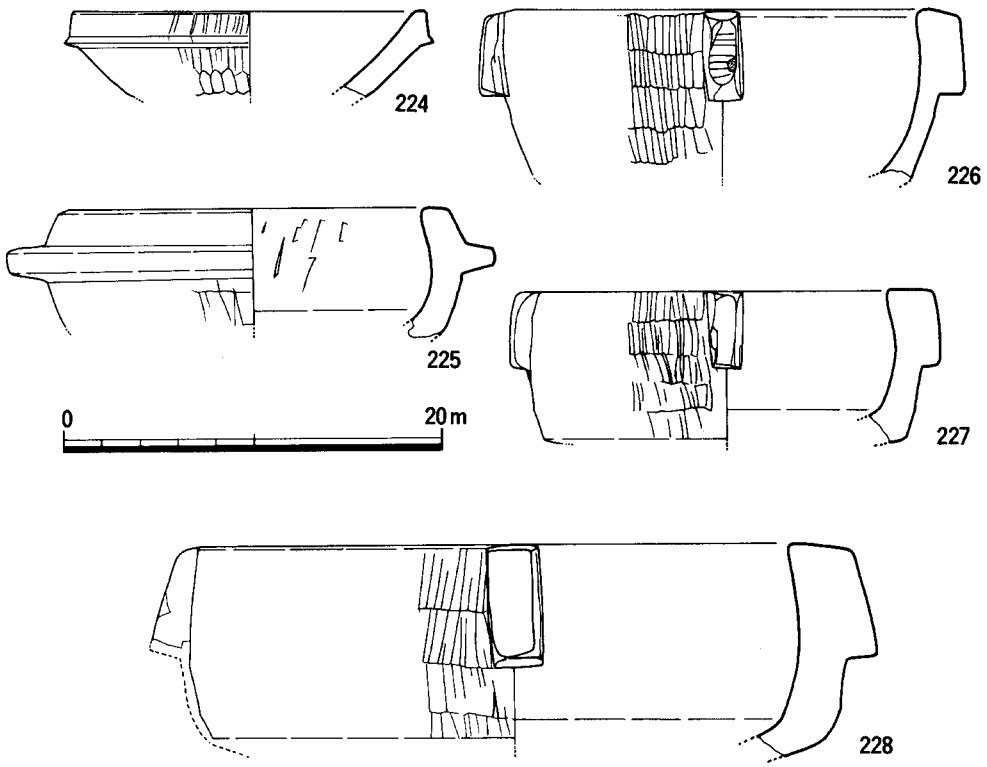
第63図　SD100出土陶器実測図 (1) (1/3)



第64図　SD100出土陶器実測図 (2) (1/3)



第65図　SD100出土遺物実測図（1/3）



第66図　SD100出土滑石製石鍋実測図（1/4）

平皿(208～211)　釉は灰緑色、胎土は橙灰色を呈する。

瓦質土器鉢(213～215)　口縁部は肥厚し、内面はハケメ、213・215には摺目がつく、口縁部は横ナデ。上からの混入であろう。

陶器　216は備前焼摺鉢。217は古瀬戸胴部片。上からの混入であろう。

棒状土製品(218)　先端部は窄まり断面方形を呈する。胎土には粗い砂粒を多量に含み、橙灰色を呈する。

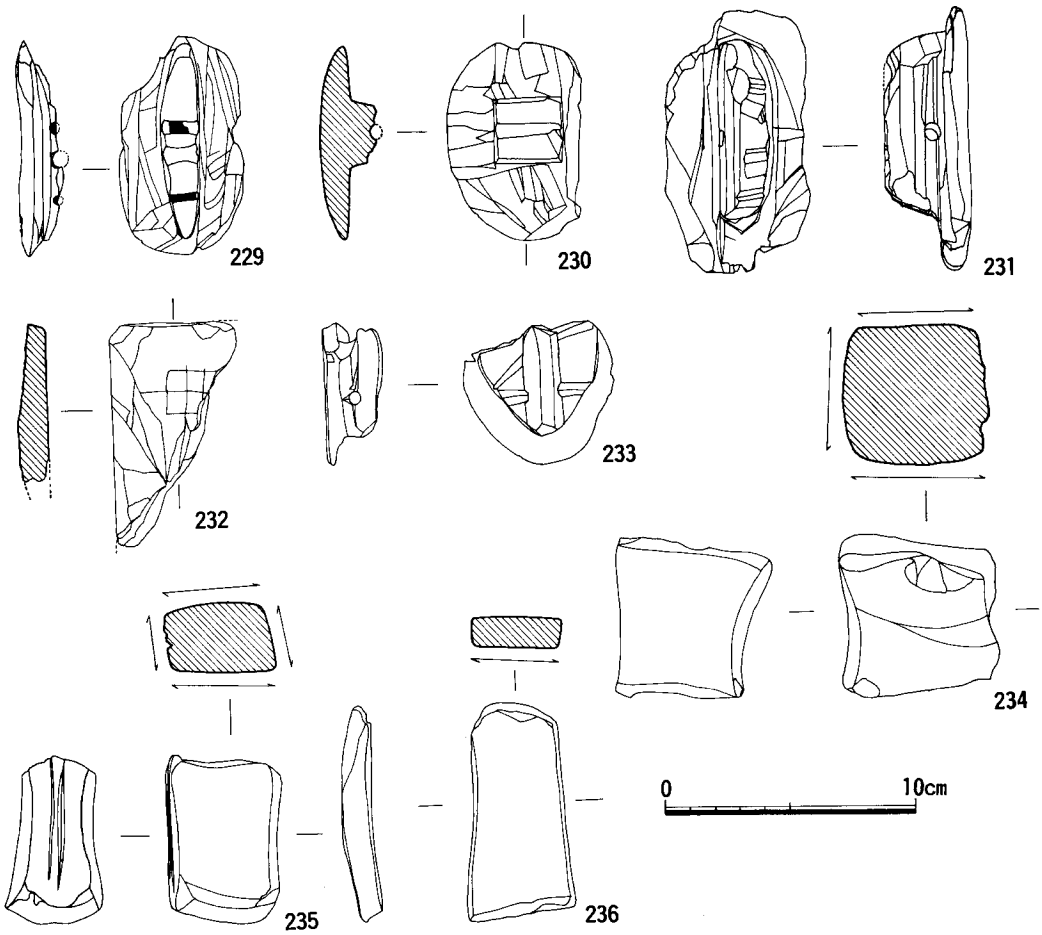
鞴羽口(219・220)　胎土には粗い砂粒を多量に含み、淡褐色を呈する。219は先端部がわずかに残存し、２次加熱を受けガラス質化している。

土錘(221・222)　221は全長4.3cm、径0.9cm、222は全長4.4cm、径1.1cmを測る。棒状のものである。

須恵器片口鉢(223)　口縁端部を上方へつまみ出す。色調は口縁端部が灰黒色、その他の部位は灰色を呈する。

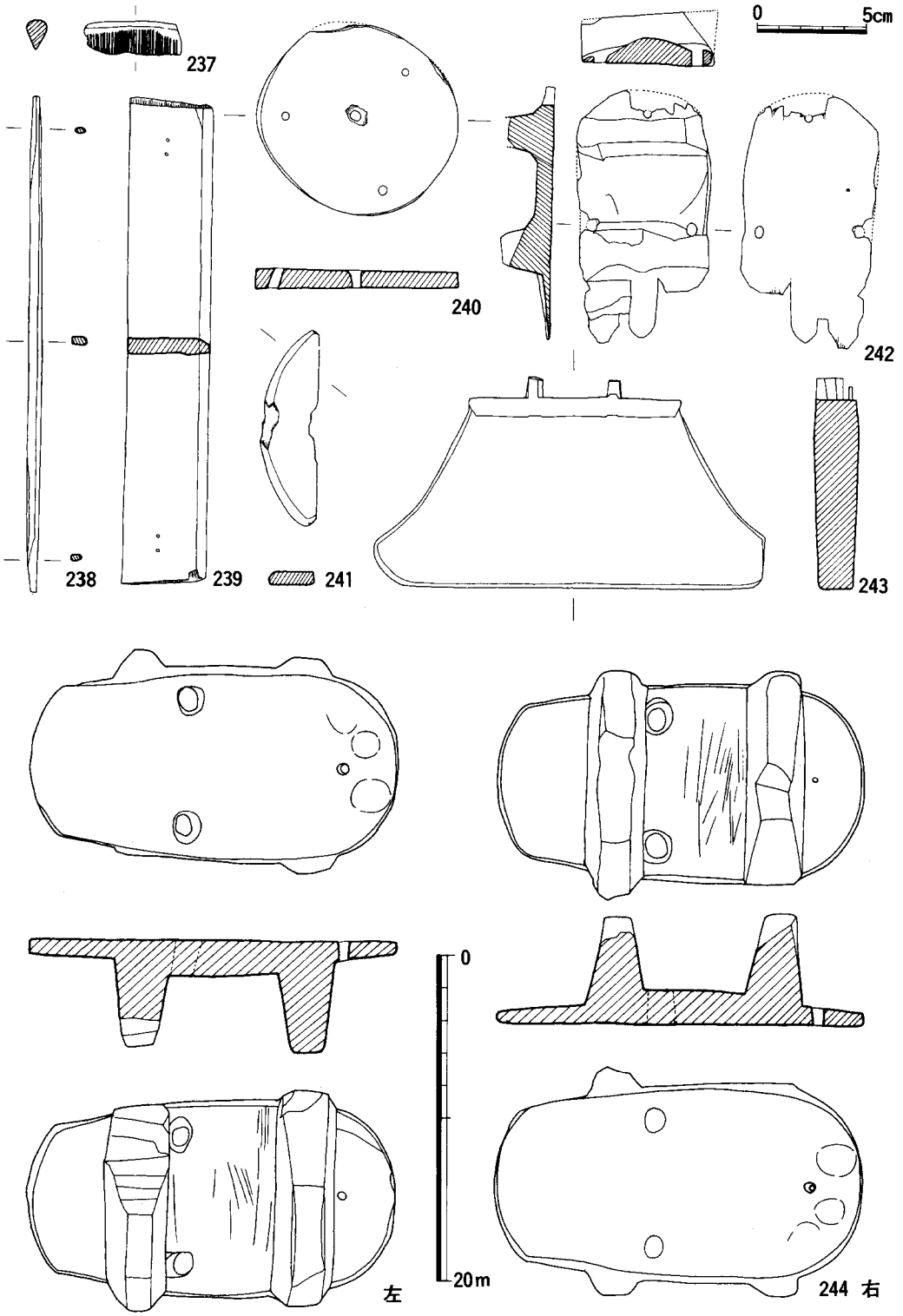
滑石製石鍋

224は復元口径18.6cmを測る。体部は片口鉢状の形状を呈し、口縁部より1.4cm下方に断



第67図　SD100土出石製品実測図（1/3）

面三角形の鍔をめぐらせる。225～228は内湾する体部をもつ、225は器周が3/4残り、口径20.6cmを測る。底部は欠失。口縁部より2.0cm下方に断面台形の鍔をめぐらせる。内面から外面は鍔上面にかけて研磨による仕上げがなされているが、内面には一次加工時のノミによる削痕が残る。鍔より下位はノミによる数段の横方向の削痕がみられるが、煤が付着しており明瞭には観察できない。226～228は方形の耳をもつ、226は器周残1/4から復元口径23.5cmを測り、底部は欠失。227は器周残1/2弱からの復元口径18.6cmを測り、底部と体部の境のやや下から欠失している。228は器周が完存し、平面形は隅丸方形を呈する。対角線上の口径33.2cmを測り、底部と体部の境のやや下から欠失。226～228の口縁端部より両面は丁寧な研磨仕上げがなされ、外面はノミによる数段の横方向の削痕がみられる。228は下層出土の破片と接合。



第68図　SD100出土木製品実測図

滑石製品

紐付きコテ状工具(229～231・233)　小判形を呈し、紐に穿孔されている。229は紐の上部が欠失しているが、孔が3個所残り、さらにもう1個あったとみられる。2個所の孔に鉄がのこる。230は平面正方形の紐をもつ。231は高さ2.4cmの紐をもち、下位に孔をもつ。233は体部から穿孔される。

232は方形の板で、表面は研磨されている。針状工具による線刻がある。

砥石(234～236)　研ぎ面は234が3面、235は4面とも、236は1面使用している。

木製品

237は櫛で歯先はほとんど残存しない。238は箸で、両端を尖らせる。239は、両端に径0.1cmの孔を木目と平行に穿つ板で、厚さ0.7cmを測る。両端に加工の痕跡はみられないが、孔との間隔は等しく、折損によるものではないとみられる。240は、中心に径0.5cmの孔の中心から約3.5cmの位置に3個所径0.3cmの斜めの孔を穿つ円板で径8.5～9.5cm、厚さ0.8cmを測る。241は、曲物の蓋あるいは底板で、復元径12.6cm、厚さ0.7cmを測る。

下駄(242～244)242は小児用の下駄で両端が欠損し、残存状態は良くない。歯の磨滅から右足用である。243は下駄の差し歯で、上方に枘ををもつ、254は対で、前方が幅広になっている小判形を呈し、指に触れる部分に磨痕がみられる。

SD216 出土土器（第69図、図版60）

土師器小皿、杯、丸底杯、瓦器椀片、白磁椀Ⅳ類片が出土した。

土師器

小皿(5・6)　底部はヘラ切りで、板状圧痕がみられる。体部は横ナデ、内底はナデ。口径9.2・9.5cm、底径7.5・7.6cm、器高1.0・1.4cmを測る。

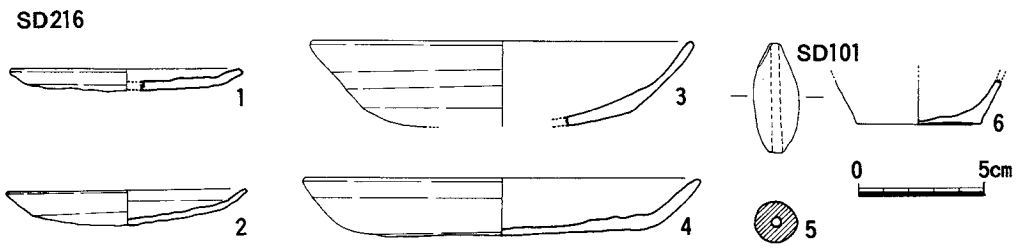
杯(8)　底部はヘラ切りで、板状圧痕が、みられる。調整は小皿と同じ。口径15.8cm、底径11.8cm、器高2.3cmを測る。

丸底杯(7)　磨滅により調整は詳細不明。口径15.2cm、器高3.5cmを測る。

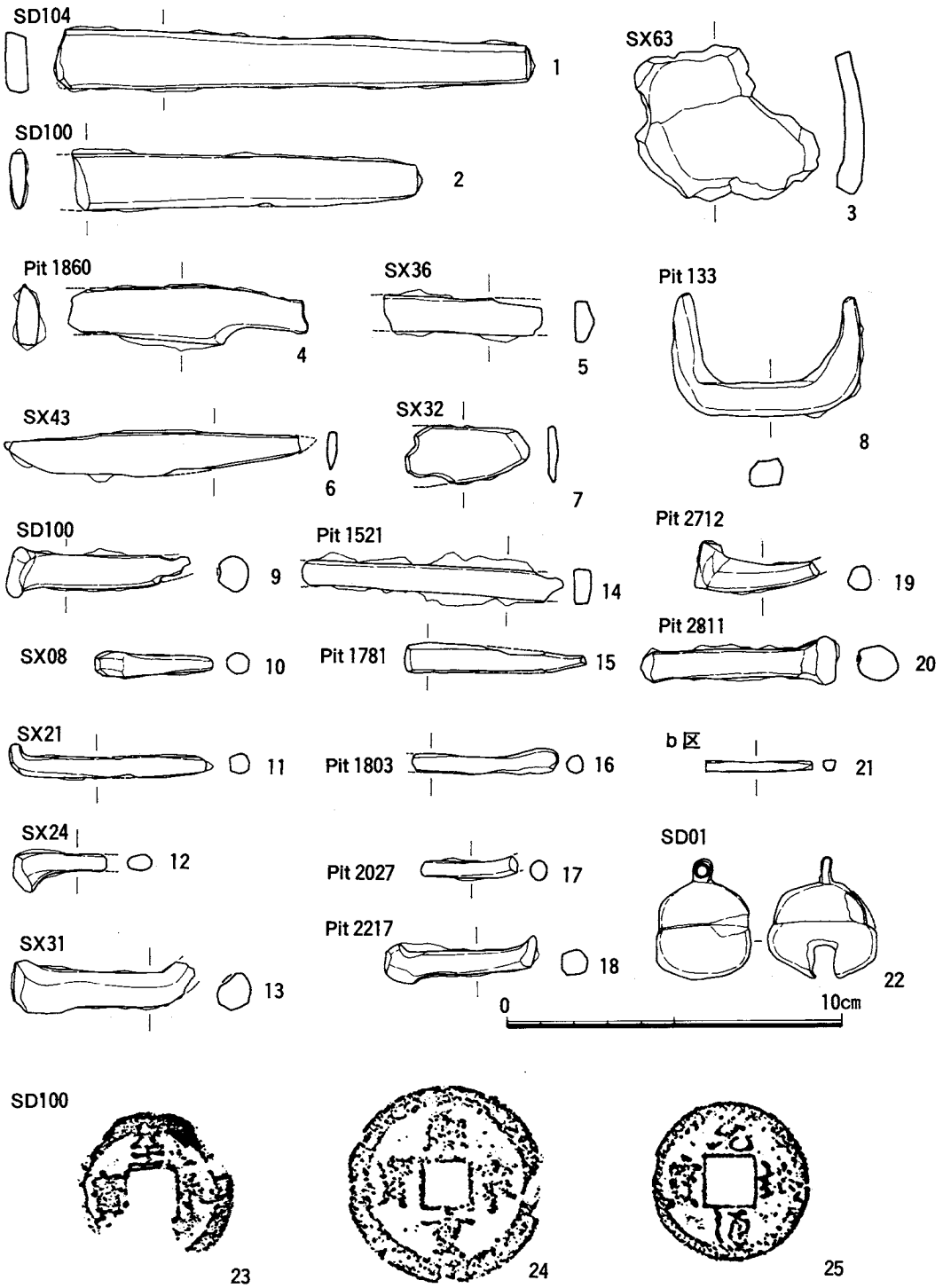
SD101 出土遺物（第69図）

土師器小皿（6）　口縁部欠失。底部は糸切りで板状圧痕はみられない。体部から内底まで横ナデ、胎土は精良で淡黄褐色を呈する。底径4.8cmを測る。

土錘(5)　全長4.3cm、径1.7cmを測る紡錘形の形状をとる。



第69図　溝出土遺物実測図（1/3）



第70図　金属製品実測図（1/2）・銅銭拓影

金属製品（第70図、図版60）

各遺構出土のものをまとめて述べる。1～20は鉄製品である。1はノミか。2は小刀の柄とみられる。3は器種不明の鉄片である。4～7は刀子である。6はほぼ原形をとどめており、残存長8.6cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。8はかすがいである。9～20は釘である。頭の部分を折り曲げている。21・22は銅製品である。21は器種不明の棒状製品である。22は鈴で全長3.6cm、胴部最大径3.2cmを測る。

銅銭（第70図、図版60）

いずれもSD100からの出土で、北宋銭である。23は至和○寶（○の部分は欠失）。24は熙寧重寶で初鋳年は神宗の1068年、25は元祐通寶で初鋳年は哲宗の1086年である。

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)(高台径)
SK01			
黒色土器（椀）			
1	15.4	6.1	7.7
SK05			
小　皿			
4	10.2	1.0	7.3
黒色土器（椀）			
6	16.0	6.3	7.5
SK201			
小　皿			
7	9.7	1.0	6.7
杯			
8	15.8	2.5	11.4
瓦　器　（椀）			
9	(17.0)		
SK214			
小　皿			
11	8.6	1.1	6.3
12	8.9	0.8	6.7
13	9.1	1.3	7.2
14	10.2	1.0	8.8
丸　底　杯			
15	(15.0)	3.1	
瓦　器　（椀）			
16	16.4	5.5	6.8
SK222			
小　皿			
17	8.7	1.2	7.3
18	8.9	1.1	6.4
19	8.9	1.1	7.6
20	9.3	1.3	6.8
21	9.3	1.3	7.5
杯			
22	15.9	3.0	12.3
瓦　器　（椀）			
23	(17.2)	5.5	7.8
SK68			
小　皿			
27	7.7	0.9	6.2
28	8.5	1.2	6.6
29	8.9	1.3	6.5
杯			
30	(12.8)	2.7	(9.0)
SK245			
研磨土器（椀）			
32	(16.8)	5.7	(6.5)
SK55			
杯			
39	(13.6)	2.4	(8.6)
SK63			
小　皿			
34	9.8	1.1	7.7
SK64			
小　皿			
35	(9.9)	1.2	(7.1)
SX31			
小　皿			
36	9.1	0.9	7.2
37	(9.2)	1.2	(7.4)
38	9.2	0.8	7.8
SX24			
小　皿			
39	8.0	1.1	6.7
40	(8.4)	1.2	(6.4)
杯			
41	11.7	3.1	7.5
42	12.4	2.7	7.9
43	(12.5)	2.8	8.0
44	(12.6)	2.8	(7.7)
SX36			
小　皿			
45	8.0	1.3	5.6
杯			
46	12.0	2.7	7.5
SX53			
小　皿			
47	(9.2)	1.1	6.3
SX03			
杯			
48	14.8	2.5	10.8
SX58			
小　皿			
49	(9.6)	1.2	(7.7)

第3表　土坑出土土器計測表　（括弧内の数値は復元値）

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)(高台径)	挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)(高台径)	挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)(高台径)
小		皿		62	9.4	1.3	6.9	68	14.2	2.4	10.0
55	8.8	1.1	7.1	63	9.4	1.0	7.0	69	14.5	2.9	9.3
56	9.0	1.4	6.9	64	9.4	0.9	7.8	70	14.5	2.9	11.4
57	9.0	0.9	7.5	65	9.8	1.6	9.0	71	14.8	3.1	10.5
58	9.1	1.1	7.0	高台付小皿				72	14.8	2.8	10.8
59	9.2	1.0	8.1	66	10.5	2.2	5.8	73	15.1	2.8	10.2
60	9.3	1.2	7.6	杯				74	15.3	2.7	10.4
61	9.3	1.1	7.6	67	14.1	3.1	9.3				

SX51出土土器計測表

小		皿		10	10.3	1.2	8.1	18	14.5	5.5	7.4
1	9.4	1.8	6.7	11	10.5	1.4	7.4	19	15.0	5.6	7.5
2	9.6	1.6	6.6	12	10.6	1.4	7.8	内黒土器(椀)			
3	9.6	1.5	7.0	13	10.6	1.8	8.4	20	14.6	5.5	7.5
4	9.8	1.3	7.7	無高台椀				21	16.8	6.1	8.0
5	9.9	1.3	7.6	14	15.5	3.8		黒色土器(椀)			
6	10.0	1.4	7.6	椀				22	15.0	6.9	8.4
7	10.0	1.2	7.8	15	14.5	6.1	9.4	研磨土器(椀)			
8	10.1	1.3	7.4	16	14.2			23	15.8	5.8	6.3
9	10.2	1.5	6.9	17	15.4	5.4	8.3				

SD01出土土器計測表

SD12				黒色土器(椀)				16	11.5	2.2	10.0
椀				7	(14.0)			椀			
1	15.0	6.4	9.1	内黒土器(椀)				14	(14.0)	5.5	(6.7)
SD14				8			(6.8)	黒色土器(椀)			
黒色土器(椀)				SD102				15			7.0
2	(14.0)			内黒土器(椀)				SD21			
SD26				10			(8.0)	小		皿	
内黒土器(椀)				SD104				17	(8.2)	1.2	(5.8)
3	(14.0)			小		皿		杯			
4			7	11	10.5	1.2	7.8	18	11.7	1.9	8.3
5			(6.3)	内黒土器(椀)				椀			
黒色土器(椀)				12	(15.5)	4.9	(6.8)	19			6.8
6	(16.0)			SD105							
SD101				小		皿					

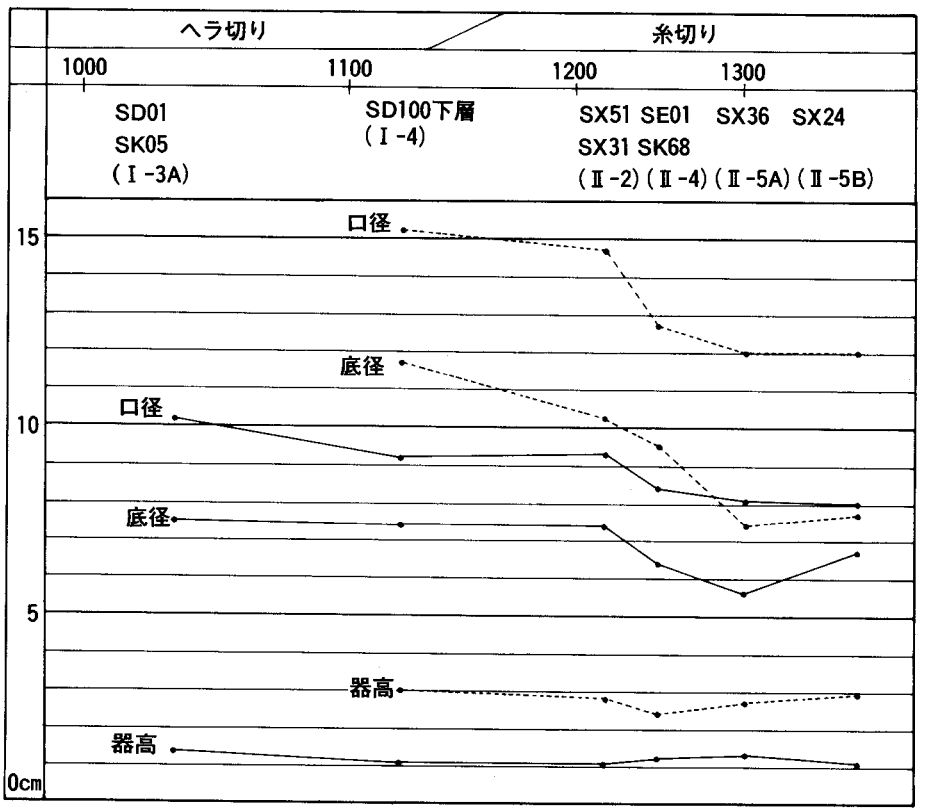
第3表　溝出土土器計測表

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)(高台径)
SD100下層			
小皿			
1	8.5	1.1	6.5
2	9.0	1.2	7.1
3	9.0	1.2	8.0
4	9.2	1.25	7.1
5	9.2	1.2	7.5
6	10.1	1.3	8.4
7	9.5	1.0	7.6
杯			
8	14.6	3.1	11.5
9	15.7	2.8	11.9
丸底杯			
10	15.7	3.1	
瓦器(小皿)			
11	10.3	2.1	8.2
瓦器(椀)			
12	16.6	5.5	7.7
13	17.5	5.2	8.5
14	16.7		
15	17.6	5.8	6.4
16	16.0	4.8	6.3
17	16.8	4.9	6.5
18	17.0	5.5	6.0
19	17.0		
SD100			
小皿			
1	8.0	1.1	6.1
2	8.1	0.9	6.7
3	8.2	1.1	6.7
4	8.5	1.3	6.5
5	8.5	1.0	6.8
6	8.5	1.2	7.0
7	8.5	1.1	7.0
8	8.6	1.2	6.8
9	8.8	1.4	6.5
10	8.9	1.2	6.7
11	8.9	0.8	7.2
12	9.0	1.1	6.8
13	9.0	0.9	7.3
14	9.1	1.3	6.9
15	9.1	1.2	7.2
16	9.1	1.0	7.7
17	9.1	1.2	7.8
18	9.2	1.0	6.4
19	9.2	1.3	7.8
20	9.3	1.1	7.1
21	9.3	0.9	7.1
22	9.4	1.4	7.1
23	9.6	1.1	7.9
24	9.6	1.2	8.0
25	9.7	1.1	7.9
26	9.7	1.5	7.8
27	9.7	1.4	8.0
28	9.8	0.9	8.0
29	10.0	1.0	8.4
30	10.0	1.0	8.4
31	10.3	1.2	7.6
32	10.3	1.4	8.0
33	10.3	1.7	8.2
34	10.4	1.5	7.8
35	10.4	1.3	7.9
36	8.2	1.3	6.3
37	8.9	0.9	6.4
38	8.7	0.8	6.1
39	8.9	0.9	6.4
40	9.0	1.1	6.9
41	9.2	1.4	7.4
42	9.2	0.8	7.9
43	9.5	1.3	6.8
44	9.6	1.1	7.1
45	9.7	0.8	7.8
杯			
46	14.3	2.6	9.7
47	14.8	2.9	10.3
48	14.8	2.8	10.5
49	14.9	2.4	12.1
50	15.0	2.6	11.4
51	15.1	2.8	10.3
52	15.3	3.3	10.9
53	15.3	2.5	11.4
54	15.3	2.9	12.1
55	15.5	3.2	11.0
56	15.5	2.3	12.1
57	15.7	2.7	10.9
58	15.8	3.4	10.5
59	15.9	2.7	12.4
60	16.0	2.7	11.6
61	16.1	3.1	11.2
62	16.7	3.0	12.2
63	12.0	3.1	7.6
64	12.1	2.5	8.4
65	12.9	2.7	8.8
66	14.0	2.8	10.3
67	14.8	2.8	7.2
68	15.2	2.6	9.6
69	16.0	2.7	11.3
丸底杯			
70	15.3	3.4	
71	15.6	3.4	
72	15.7	3.3	
73	15.8	3.5	
74	15.9	3.0	
75	(16.0)	3.5	
76	17.3	3.5	
瓦器(小皿)			
77	9.8	1.9	8.4
78	9.9	1.7	8.2
79	10.2	2.0	8.0
80	10.7	2.1	8.8
81	10.8	2.0	8.8

第3表　SD100出土土器計測表(1)

挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)(高台径)	挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)(高台径)	挿図番号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)(高台径)
82	10.9	2.2	9.4	96	17.4	5.3	8.1	111	16.8	5.5	6.6
83	11.0	1.9	9.5	97	17.4	5.2	6.2	112	17.0	5.2	6.6
瓦器(椀)				98	17.2	5.4	5.7	113	17.2	5.4	(6.4)
84	16.5	5.0	6.8	99	(17.2)	5.4	7.2	114	(16.0)	4.8	(6.2)
85	16.5	5.1	7.1	100	17.4	5.3	7.1	115	17.0	5.2	7.8
86	16.5	5.4	6.5	101	17.4	5.4	8.1	116	16.9	6.2	6.3
87	16.5	5.3	7.2	102	17.4	5.6	(7.8)	117	17.8	6.2	5.7
88	16.6	5.4	7.2	103	17.4	5.6	8.0	118	17.1	5.5	6.8
89	16.8	5.1	6.5	104	17.5	5.4	7.2	119	17.2	5.4	7.0
90	17.0	5.2	7.3	105	17.7	5.1	7.8	120	17.9	6.1	7.2
91	17.1	4.7	7.6	106	17.9			121	16.2	5.6	7.6
92	16.9	4.5	7.0	107	(15.9)	5.2	7.1	122	17.3	6.3	6.6
93	17.1	5.1	7.5	108	(16.1)	5.1	(7.1)	123	16.2	4.9	6.7
94	17.1	5.2	7.1	109	(16.6)	5.1	(7.7)	124	17.1	4.8	6.1
95	17.5	4.7	7.4	110	16.3	5.3	7.7	125	17.1	5.7	6.5

第3表　SD100出土土器計測表(2)



第4図　土師器　法量の変遷　　小皿 ———— 杯 ----------

V 小 結

遺構の時期

出土遺物の項で述べた通り、掘立柱建物の柱穴掘り方から出土する遺物のほとんどは細片で、法量を計測できず、形状も部分的にしか知りえない。比較的良好な残存状態でまとまって遺物が出土する溝や土坑ほど細かく時期を比定できない。以下、建物の時期を4期に大別し、さらに主軸の方位により細分した。

Ⅰ期　ほぼ北に方位をとる……SB13・18・22・24・27・29・32・34・39・62・111
　5°前後西偏する……SB01・02・04・10・16・20・21・26・45・101・107・110
　7°30′前後西偏する……SB08・09・14　10°前後西偏する……SB11・30・65
　その他……SB47（N5°E）・SB48（N10°E）・SB115（N15°W）

Ⅱ期　5°前後西偏する……SB89・95　7°30′前後西偏する……SB05・19

Ⅱ～Ⅲ期　ほぼ北に方位をとる……SB03・67・69・75・84・98・140
　5°前後西偏する……SB96
　7°30′前後西偏する……SB72・77・79・80・82・87・90・91
　10°前後西偏する……SB17・66

Ⅲ期前半　5°前後西偏する……SB92

Ⅲ期　5°前後西偏する……SB07・33・61・97　7°30′前後西偏する……SB80
　10°前後西偏する……SB04・74・76・83

Ⅲ～Ⅳ期　ほぼ北に方位をとる……SB03　5°前後西偏する……SB88
　7°30′前後西偏する……SB70　10°前後西偏する……SB66・86
　5°前後東偏する……SB46

Ⅳ期　ほぼ北に方位をとる……SB71　5°前後西偏する……SB99
　7°30′前後西偏する……SB92

Ⅰ期の建物の柱穴掘り方から底部ヘラ切りの土師器小皿片・SD01出土のものと同じ形状をとる黒色土器椀片が出土しており、11世紀代に比定される。Ⅱ期の建物の柱穴掘り方からは、底部ヘラ切りの土師器小皿・杯片に伴って、瓦器椀片や白磁片が出土しており、12世紀前半に比定される。Ⅲ期の建物の柱穴掘り方からは、底部糸切りで、板状圧痕がみられる土師器、小皿・杯片・瓦器椀片・白磁片に加え龍泉窯系・同安窯系青磁片が出土しており、12世紀中頃から13世紀後半に比定される。Ⅳ期の建物の柱穴掘り方からは、底部に板状圧痕がみられない、糸切りの土師器小皿、杯片、口禿の白磁片、龍泉窯系青磁小椀Ⅲ類片が出土しており、14世紀を中心とする時期に比定される。主な溝、土坑の時期は表にまとめた。

大溝 SD100の性格

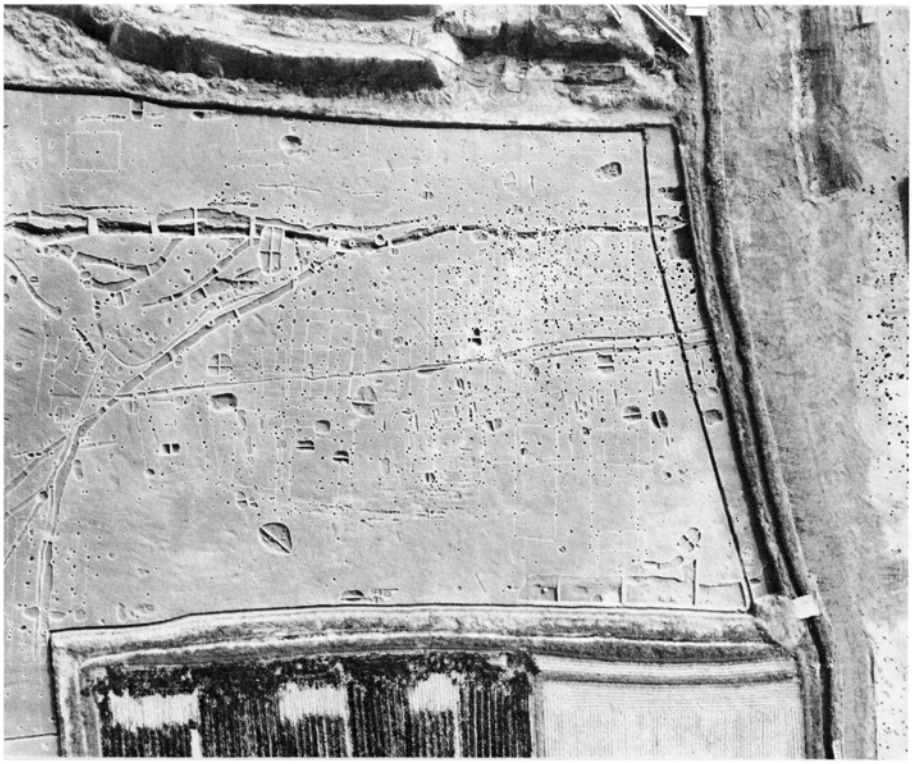
SD100は、現在早良平野に残る条里地割りに沿って検出された。早良平野では、西区下山門遺跡で条里方位の杭列、下山門敷町遺跡で条里方位の溝が検出されているが、SD100は下層出土の遺物から12世紀前半に造営の時期を求められ、律令制崩壊の時期にあたる。当遺跡を荘園の一部として考える場合、律令制度における公地公民制度が崩壊し荘園領主土地の私有地化を進めていく上で、新田開発は必要不可欠であり、大規模に自然環境を改変しなければならなかった。残された最大の可耕地である沖積地の開発が本格的に行なわれるまでには、荘園領主の貪欲なまでの利益の追求に加え、土木技術の進歩を考慮しなければならないだろう。当調査区域では水田等の生産に関する遺構の検出はされなかったが、大溝SD100は沖積地の新田・居住地の開発にはまず欠かせない河川の氾濫、浸水を防ぎ、農業用水の供給源として、機能したであろう。

出土土器について

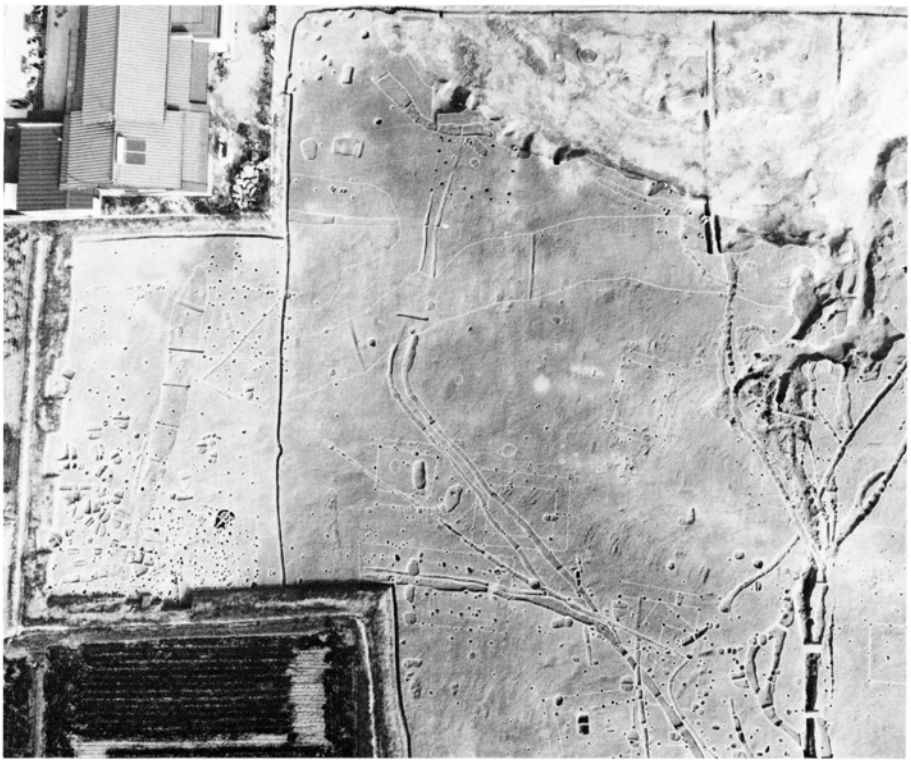
在地土師器の各遺構毎の法量の平均値の変遷は第4表に示す通りである。小皿や杯の外底にみられた板状圧痕は、SX24の段階で消失する。当遺跡において輸入陶磁器の出土量が飛躍的に増大するのは、筑前地方に通有の12世紀前半で、それに伴って国内からの搬入土器も少なからずみられるようになる。その内のSD100下層出土の東播系須恵器（第48図）は、同時期に造営された福岡県筑紫野市武蔵寺経塚の第八号経塚の外容器として使用された片口鉢、第九号経塚の外容器として使用された広口壺（頸部以上は打ち欠き）と形態を同じくする。SD100出土の土師器杯（第50図66）は底径が小さく体部は丸味をもち、他と異なる。豊前地方からの搬入品か。瓦器椀についても、形態、法量、手法を異にするものがみられた。今後、他地域の資料と対比、検討を重ね、生産地の同定、消費地への流通等を明らかにしていかねばならない。滑石製石鍋についても同様で、自然科学的な分析も必要である。一方、六古窯の内、瀬戸焼、備前焼が当遺跡で見られるのは、14世紀まで下降する。

陶磁器の分類は大宰府史跡分類（横田賢次郎・森田勉「大宰府出土輸入陶器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978）によったが、欠落する資料については博多出土貿易陶磁分類表（福岡市教育委員会『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ　博多(1)　別冊』1984）で補なった。土師器の分類は、福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告2･3･6～9』1975～1980、太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡Ⅱ』1983を参考にした。山本信夫氏（太宰府市教育委員会）からは、陶磁器・土師器について有益なご教示を載いた。記して感謝する次第である。

図　　版



1



2

1． a 区西半空中写真（下が北）
2． a 区東半空中写真（左が北）

図版 2

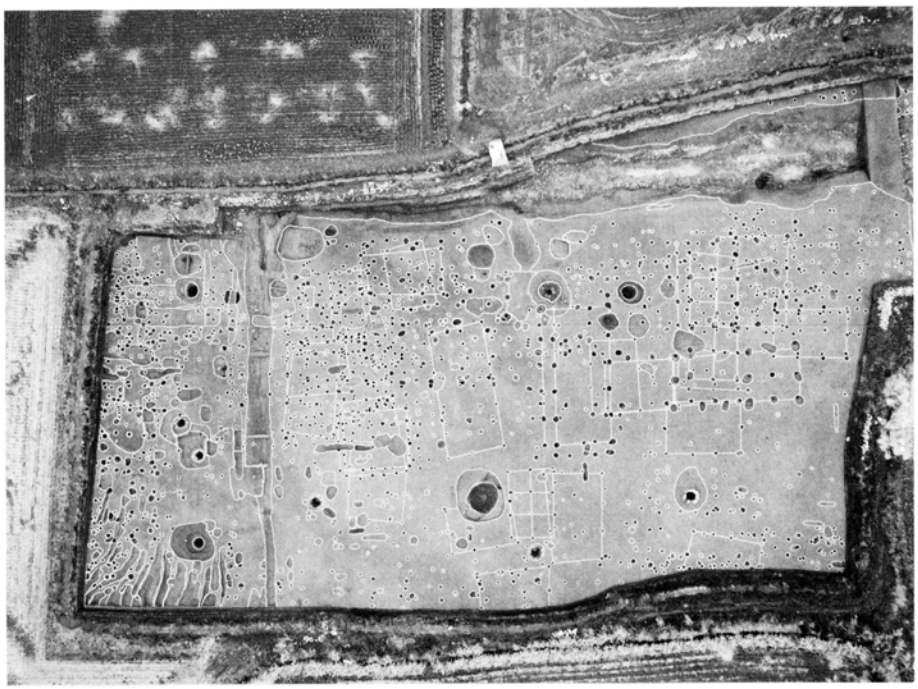
1

2

1．c区空中写真（左が北）

2．a区東半空中写真（上が北）

1



2

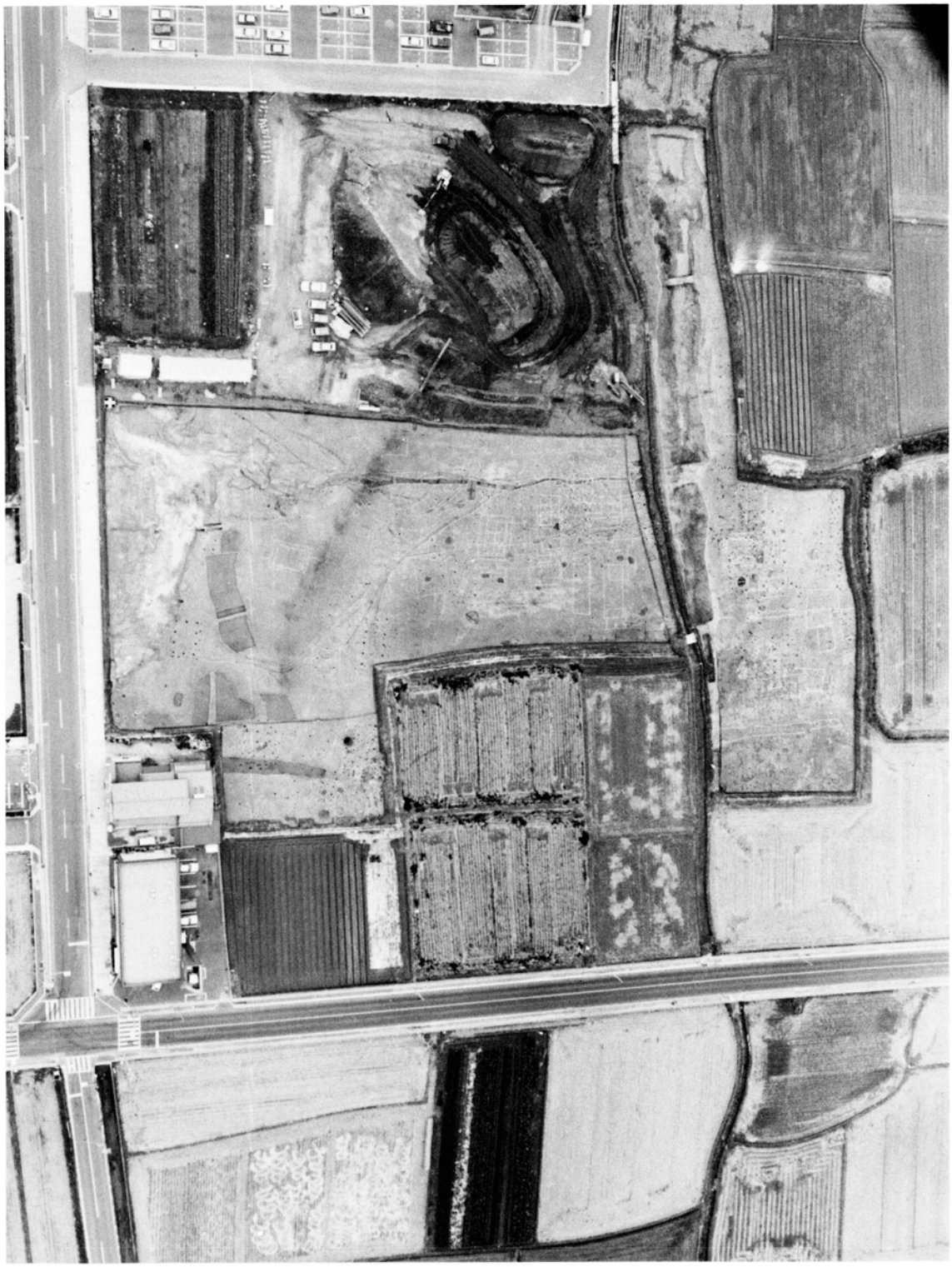
1．b区北半空中写真（左が北）
2．b区南半空中写真（左が北）

図版 4

1

2

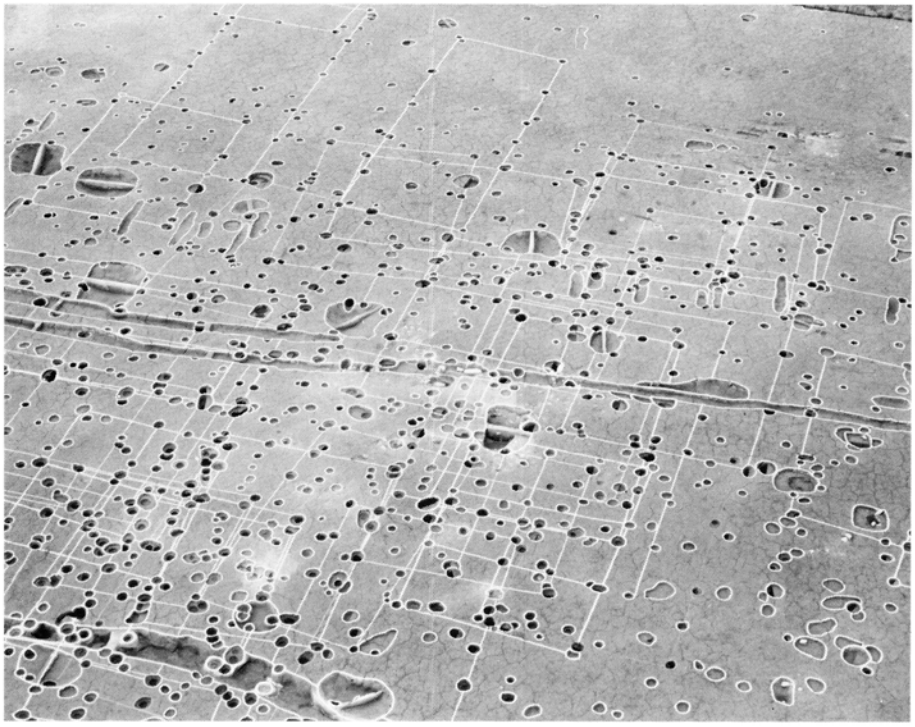
1．d区全景（東から）
2．d区 SD01（南から）



調査区空中写真

図版 6

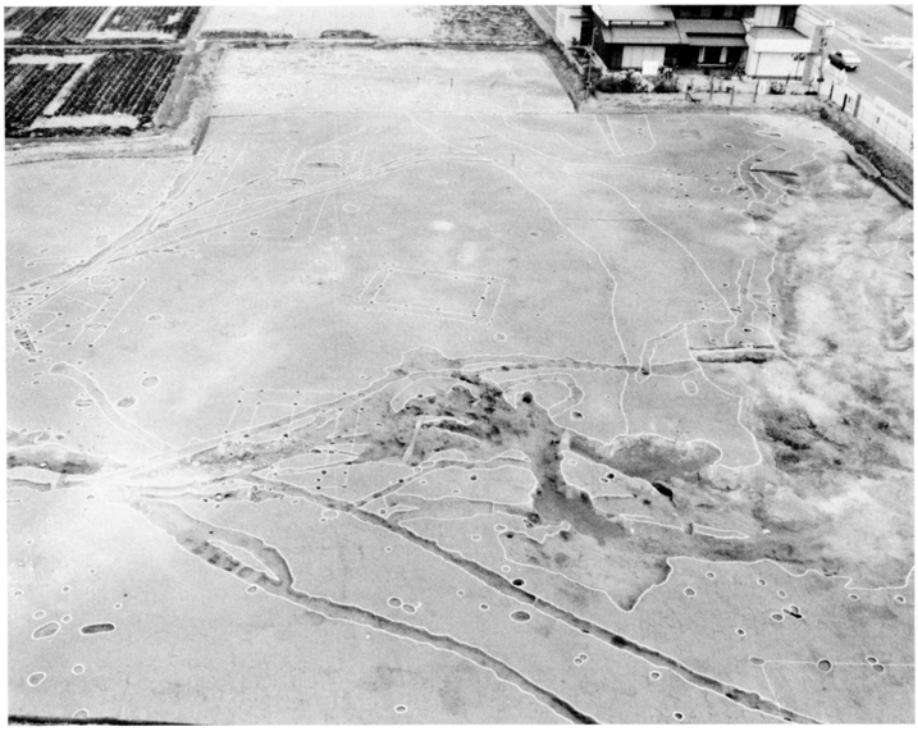
a 区西半と b 区北半（東南から）



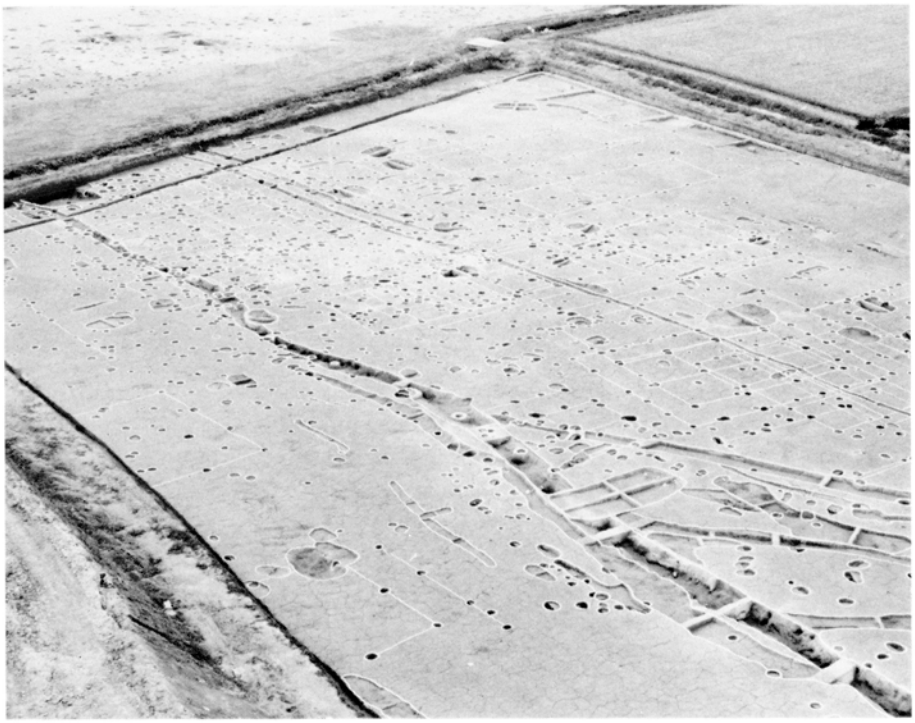
1

2

1．ａ区西半掘立柱建物群（南から）
2．ａ区西半掘立柱建物群（西から）

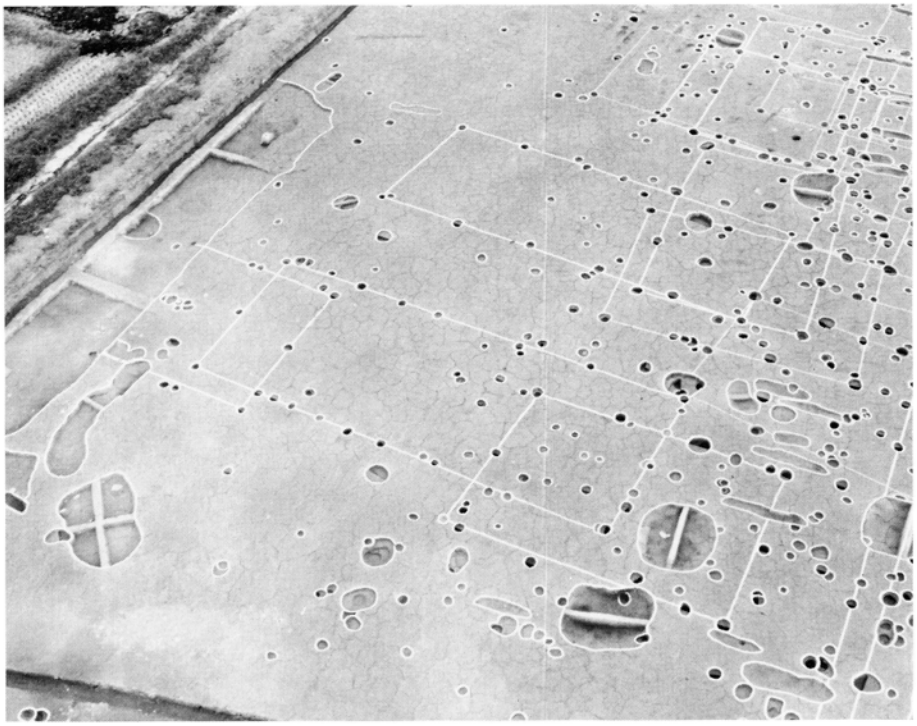


1

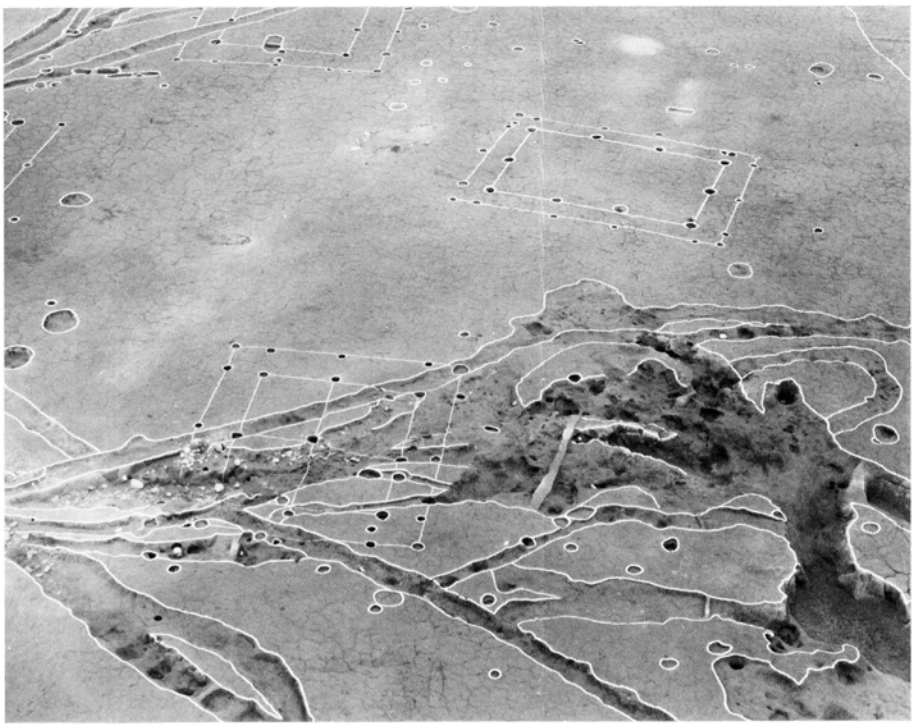


2

1．a区東半掘立柱建物群（南から）
2．a区西半掘立柱建物群（南東から）

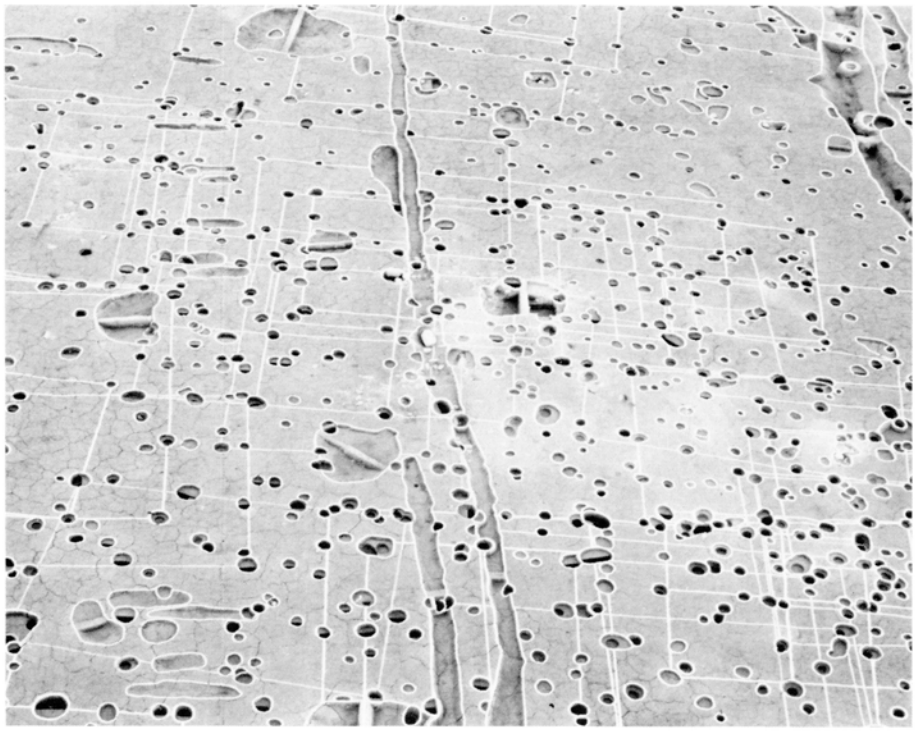


1



2

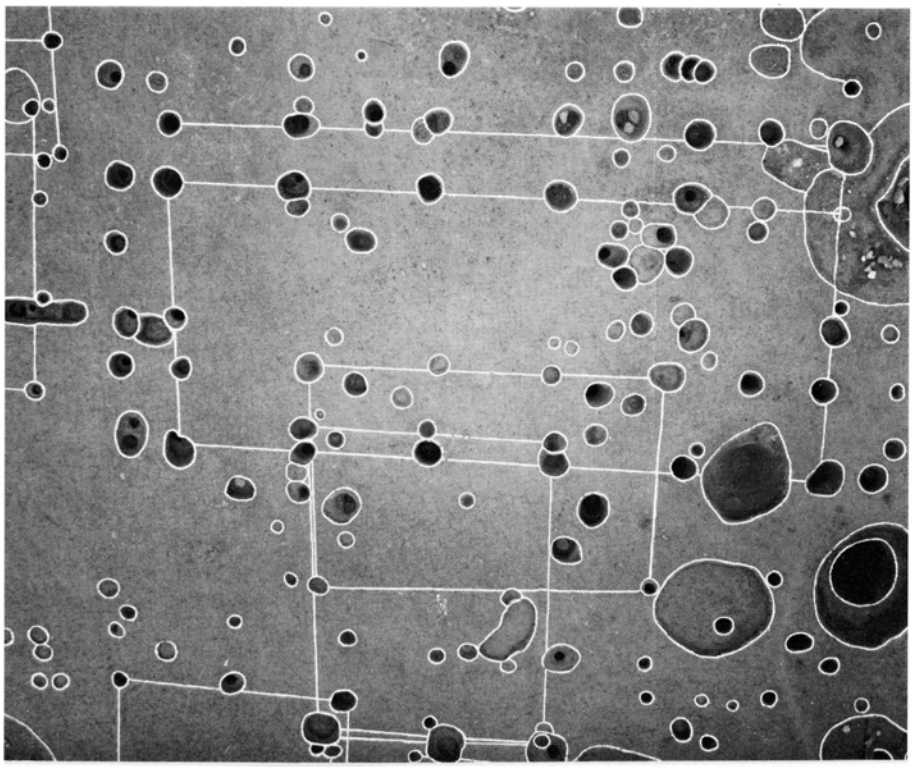
1．a区北西掘立柱建物群（西から）
2．a区南東掘立柱建物群（南から）



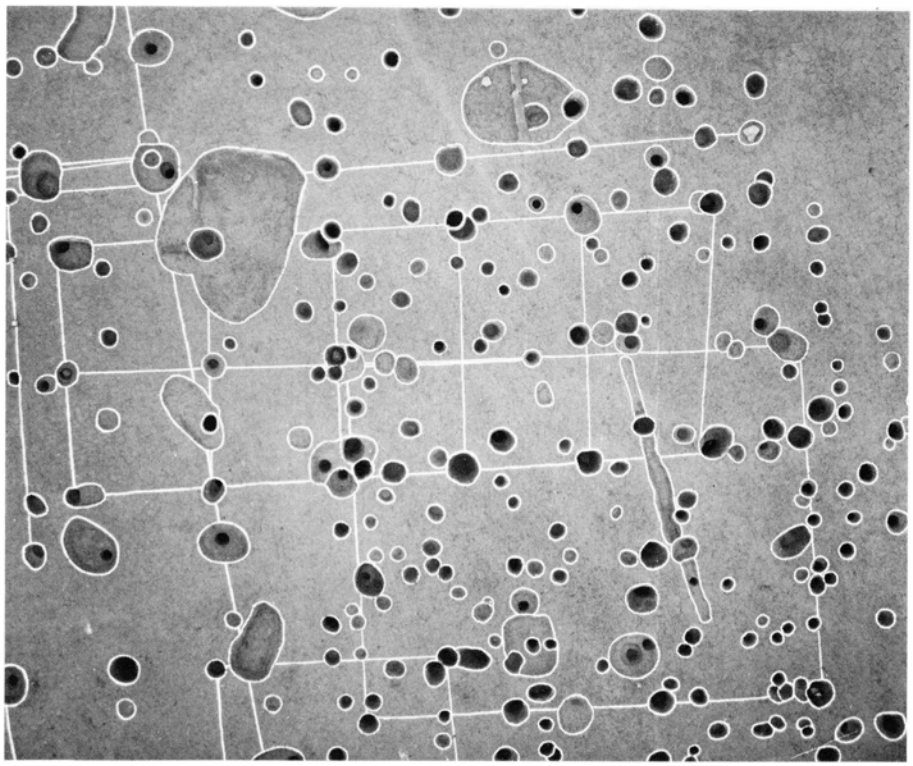
1

2

1．ａ区西半中央掘立柱建物群（西から）
2．ａ区西半掘立柱建物群（西から）

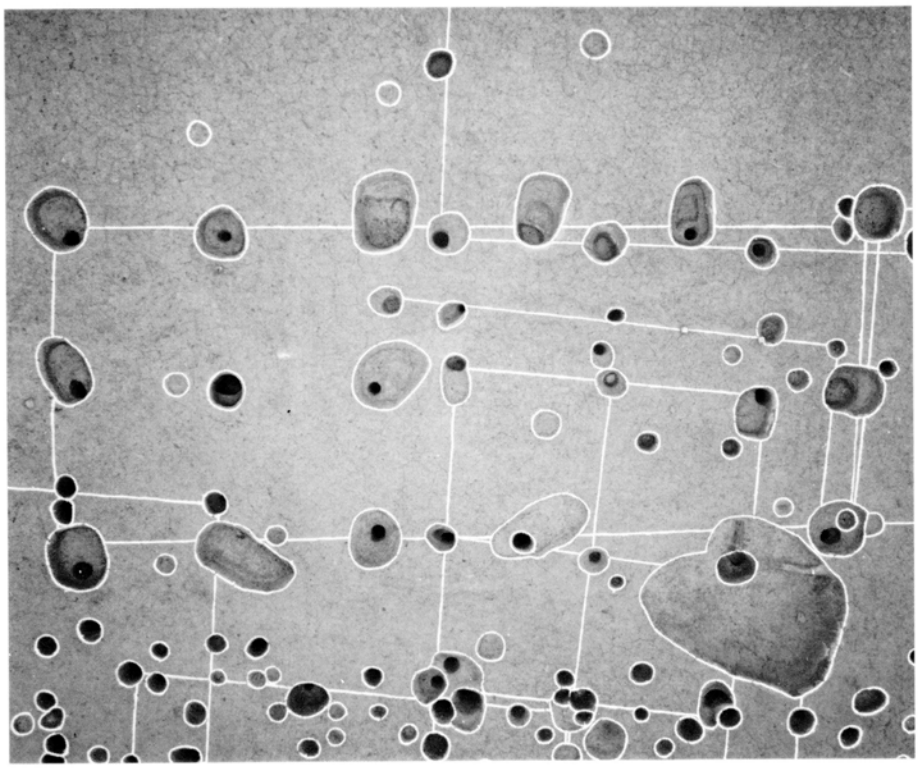


1

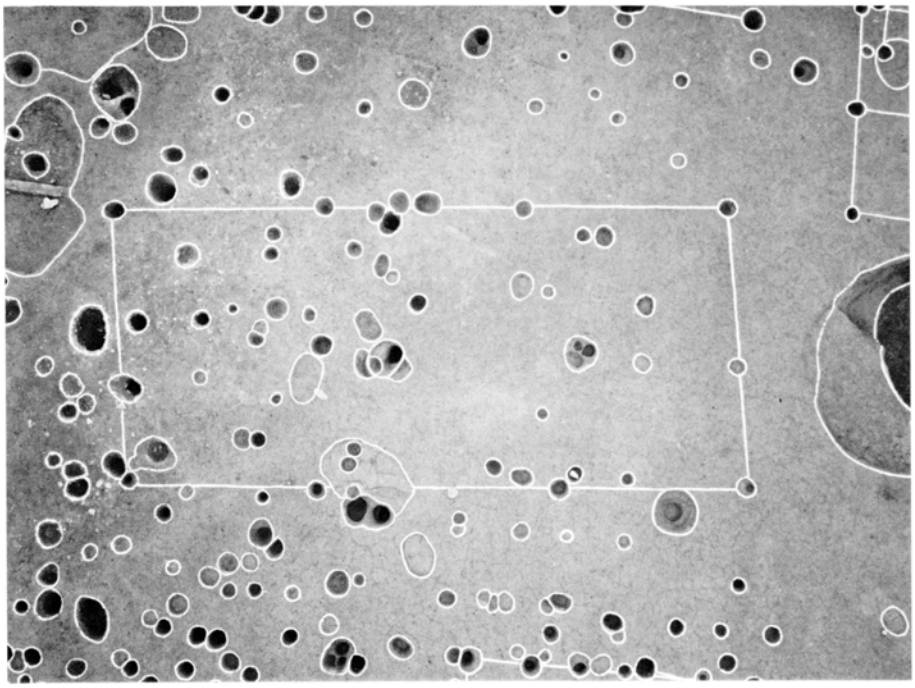


2

1．b区 SB79・SB80（上が北）
2．b区 SB89・SB95（上が北）

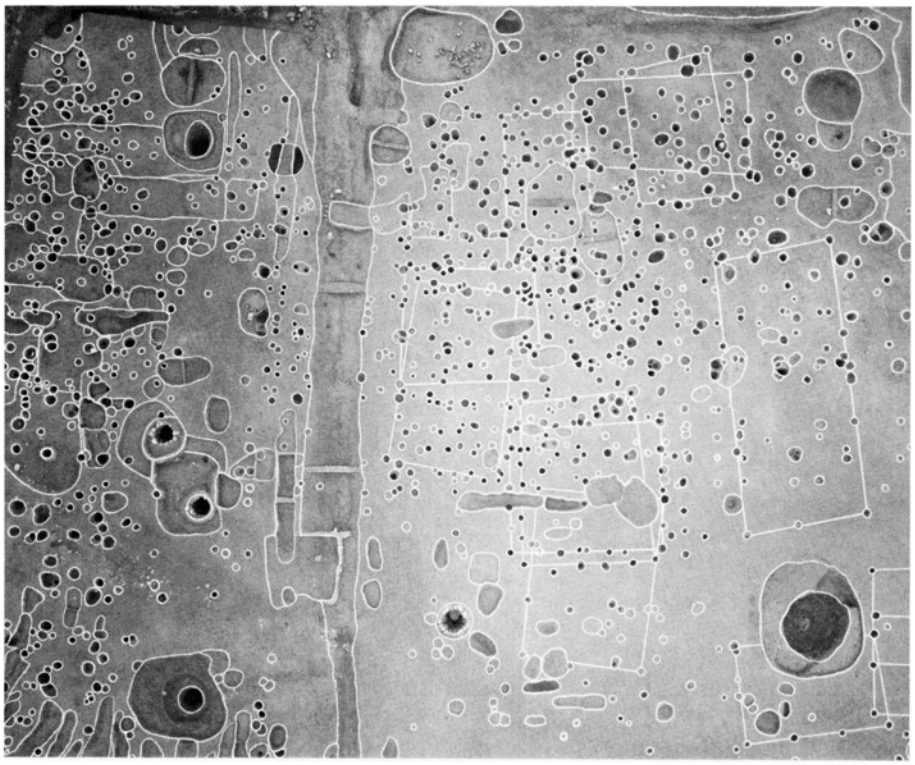


1

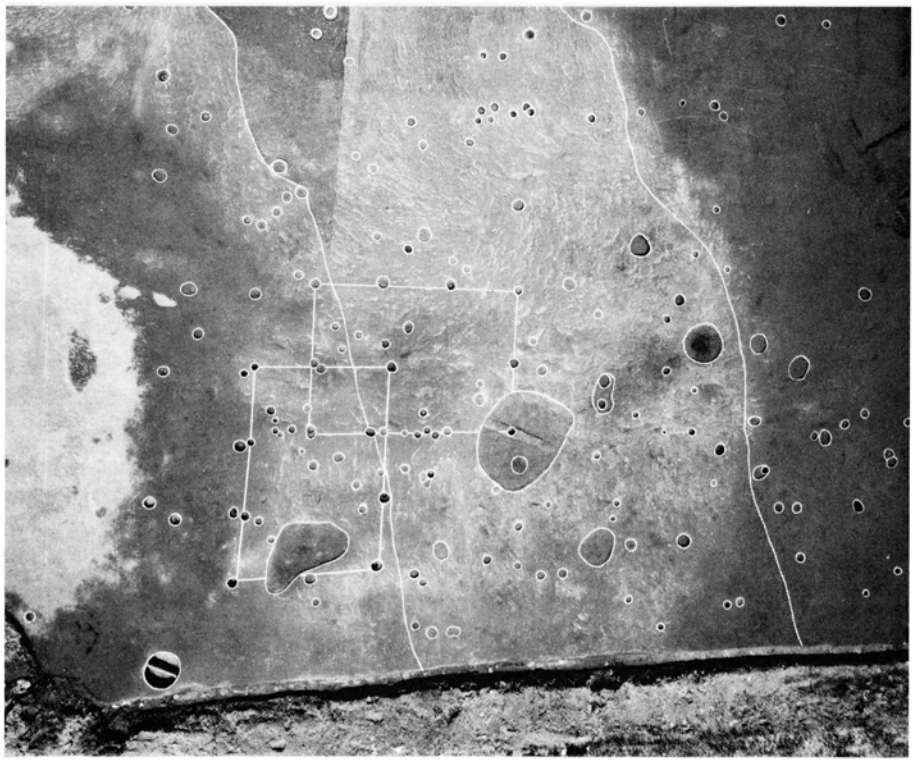


2

1．b区 SB82（右が北）
2．b区 SB77（下が北）



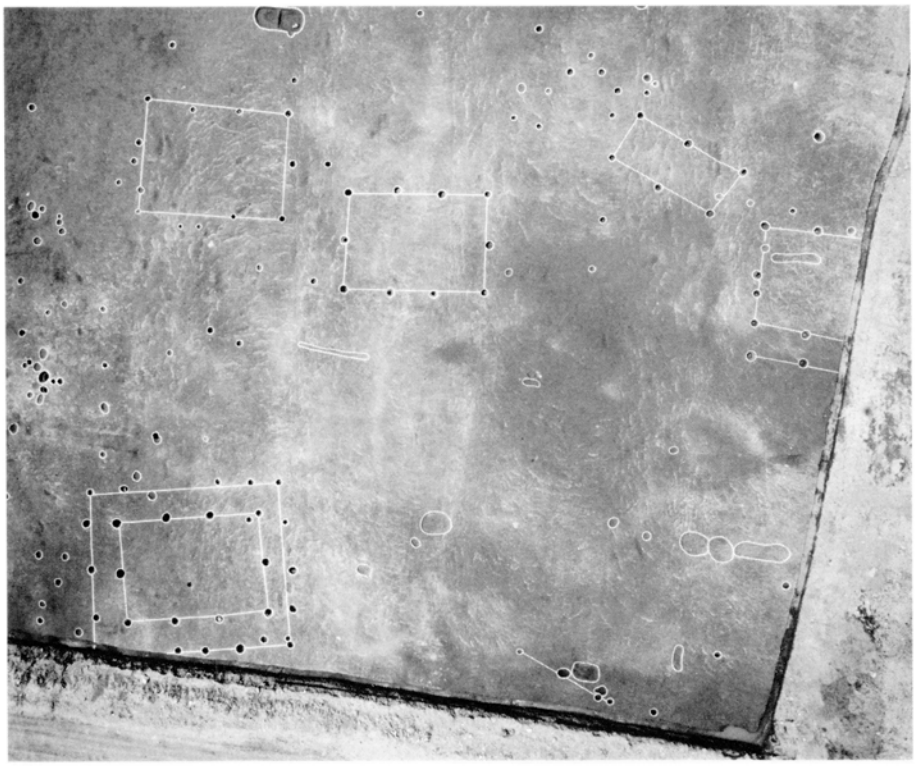
1



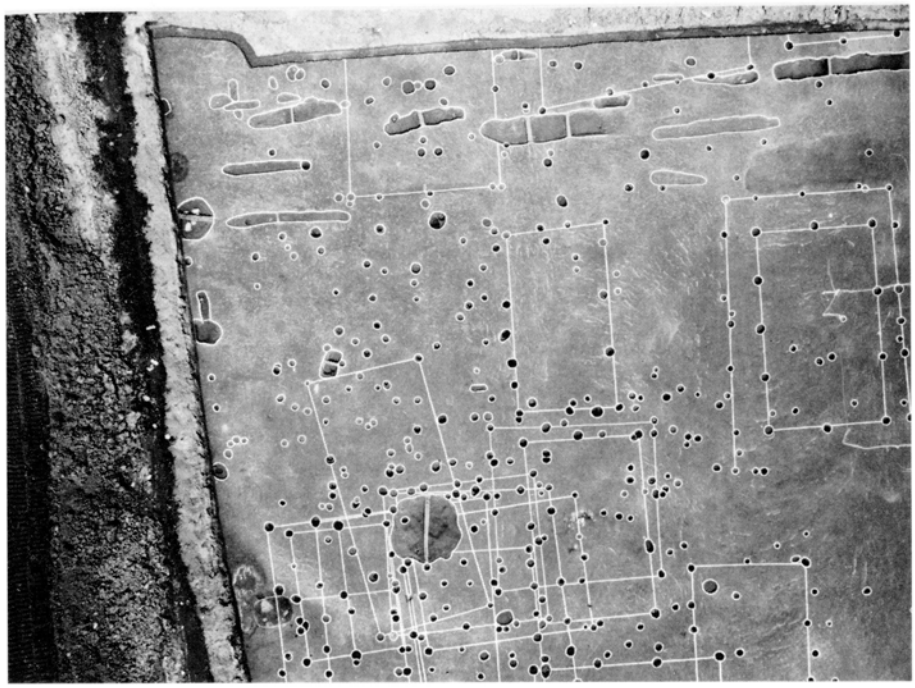
2

1．b区北側掘立柱建物群（左が北）

2．c区 SB118・SB119（上が北）



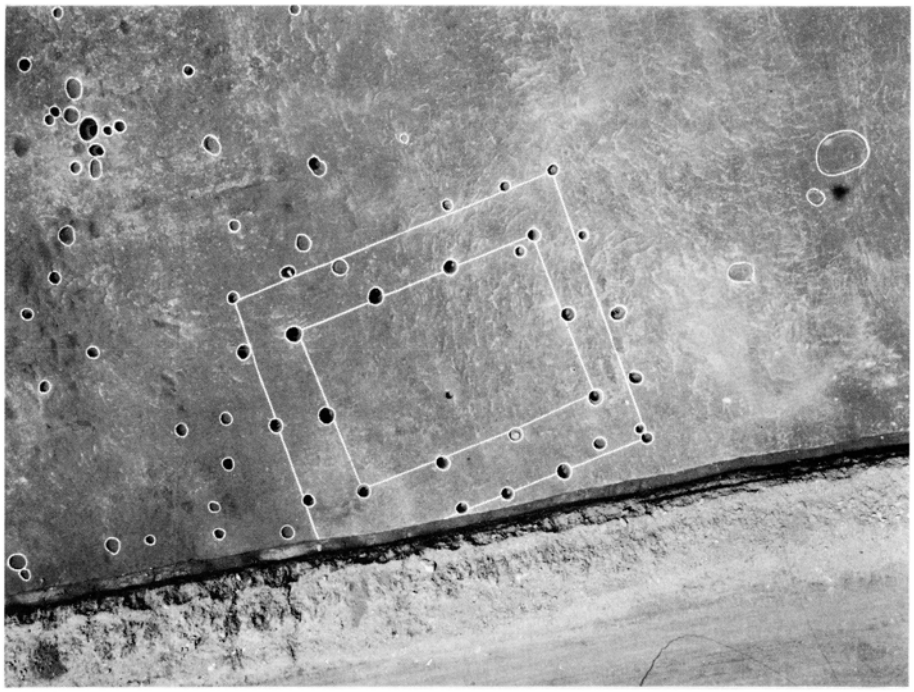
1



2

1．c区東北掘立柱建物群

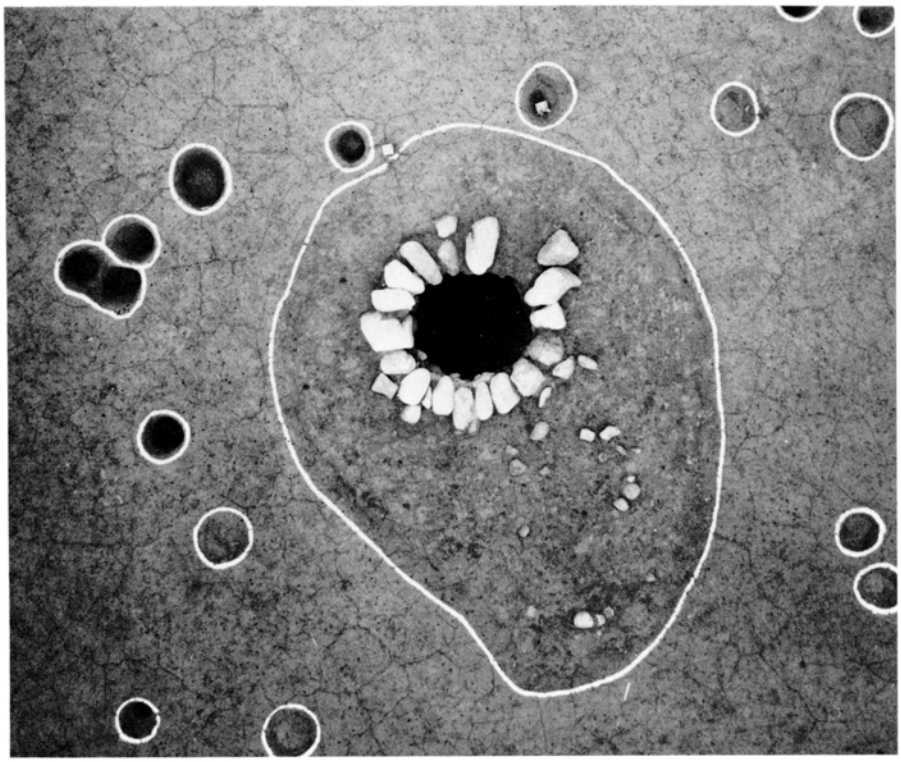
2．c区西半掘立柱建物群



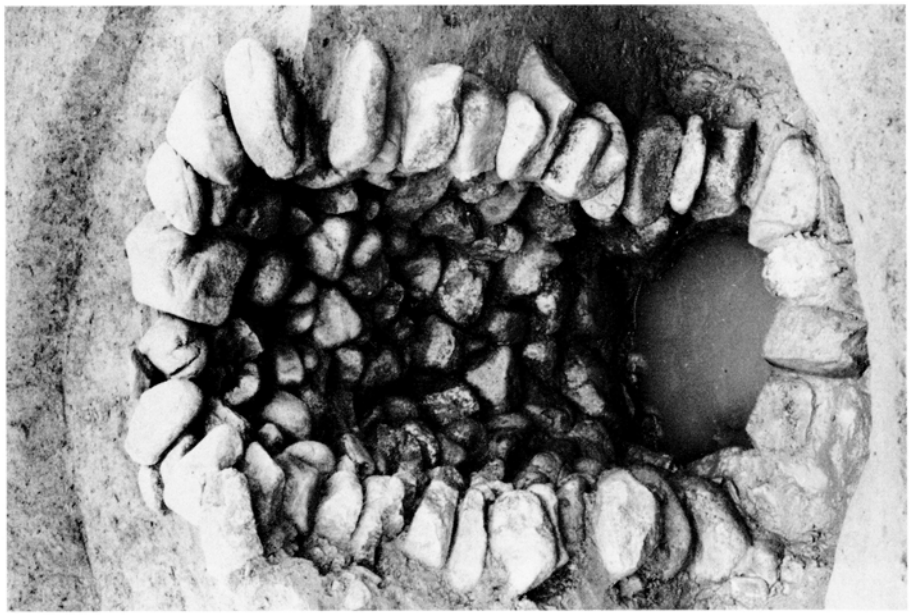
1

2

1．ｃ区 SB104（北から）
2．ｃ区南西掘立柱建物群

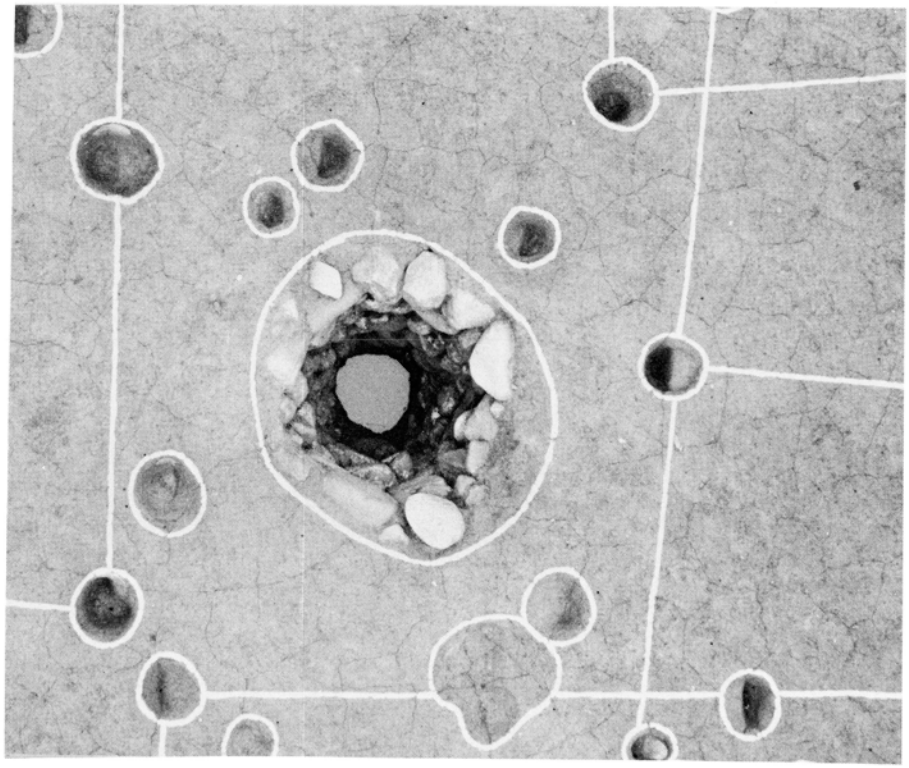


1

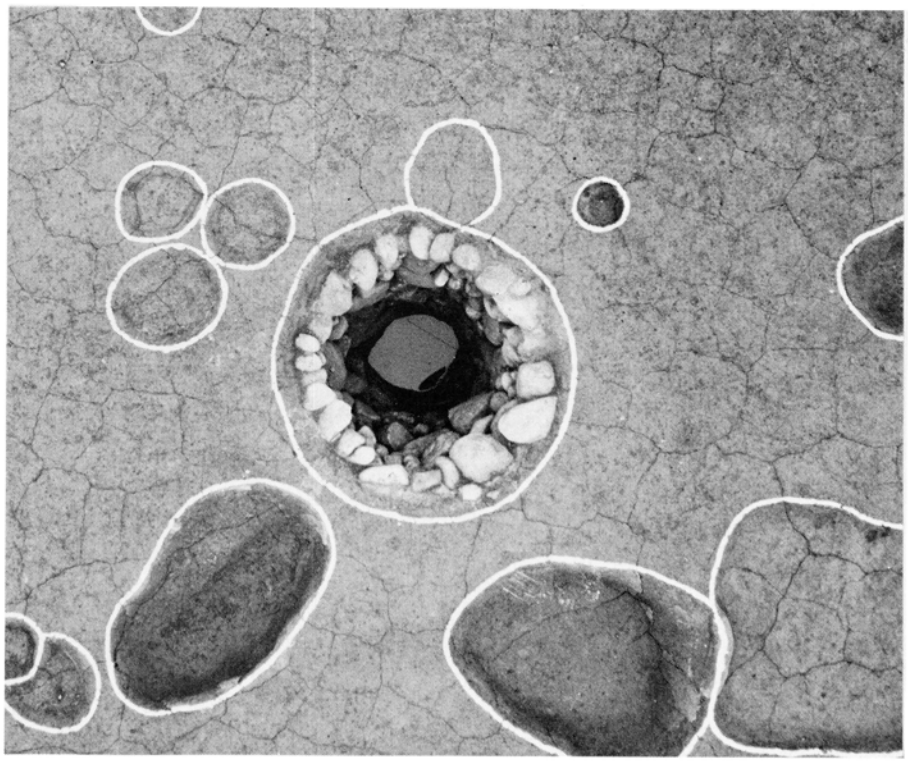


2

1．SE03（右が北）
2．SE03断面（北から）

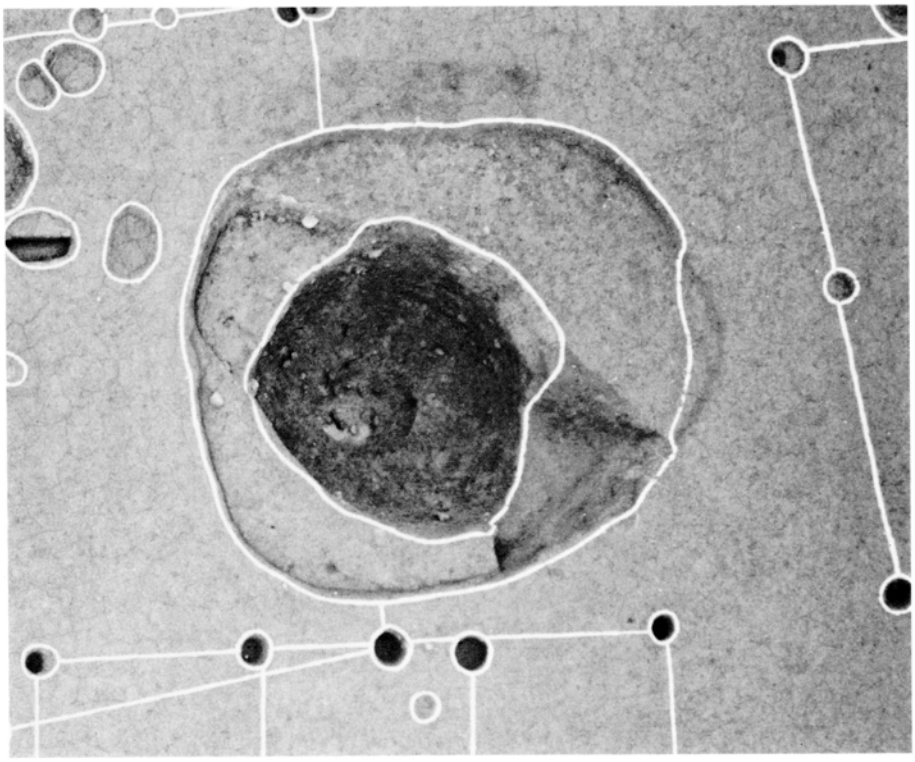


1



2

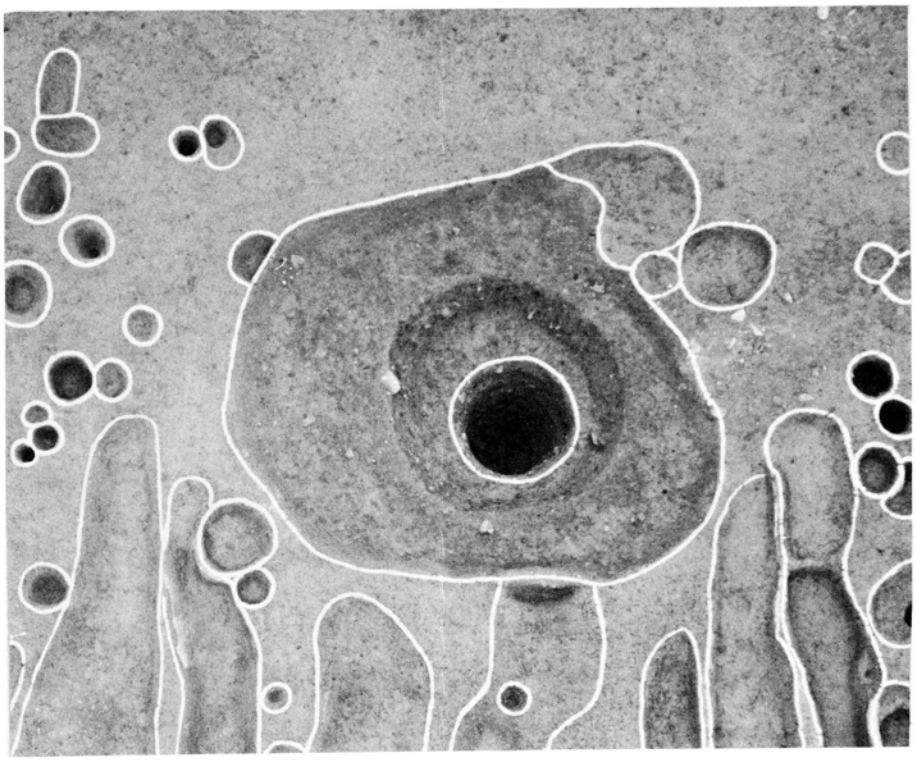
1．SE04（上が北）
2．SE06（上が北）



1

2

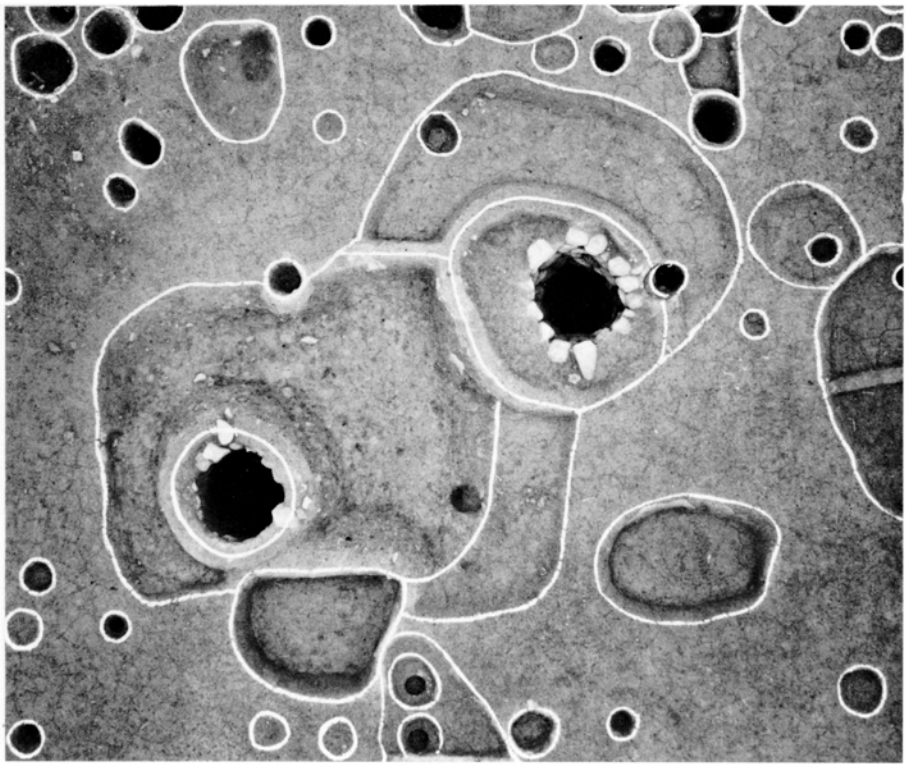
1．SE05（上が北）
2．SE05断面（南東から）



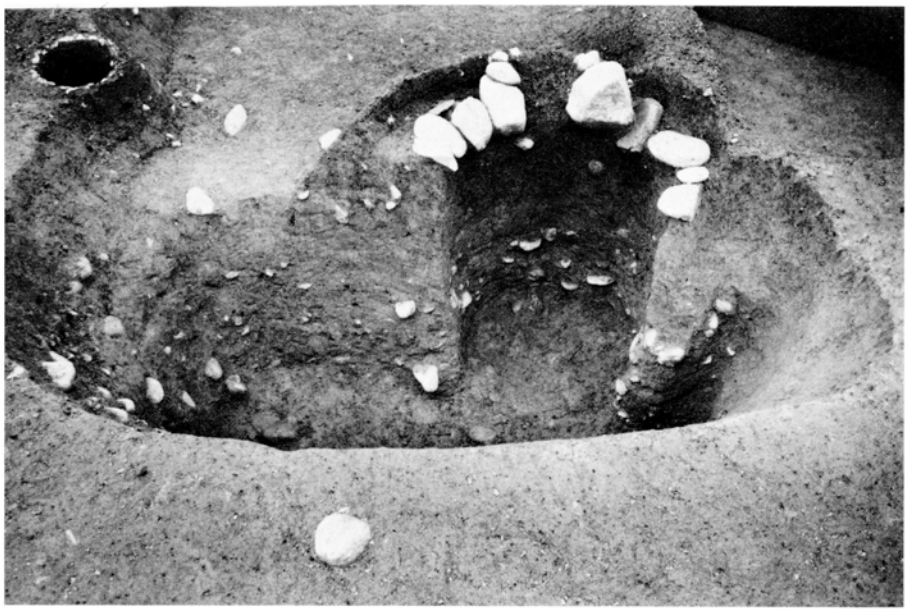
1

2

1．SE07（左が北）
2．SE07断面（東から）

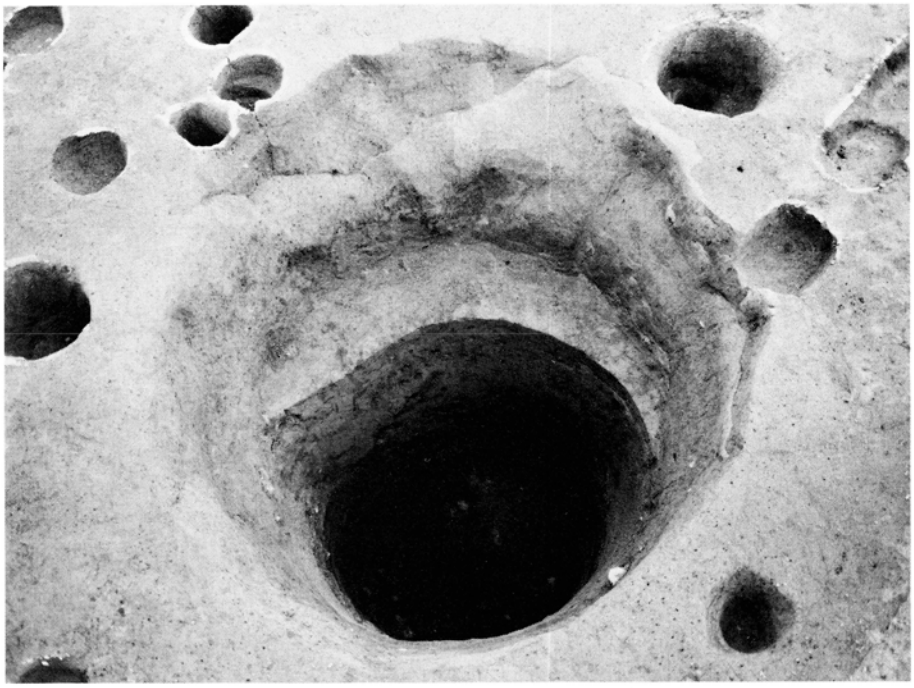


1



2

1．SE08・SE09（上が北）
2．SE08断面（西から）



1

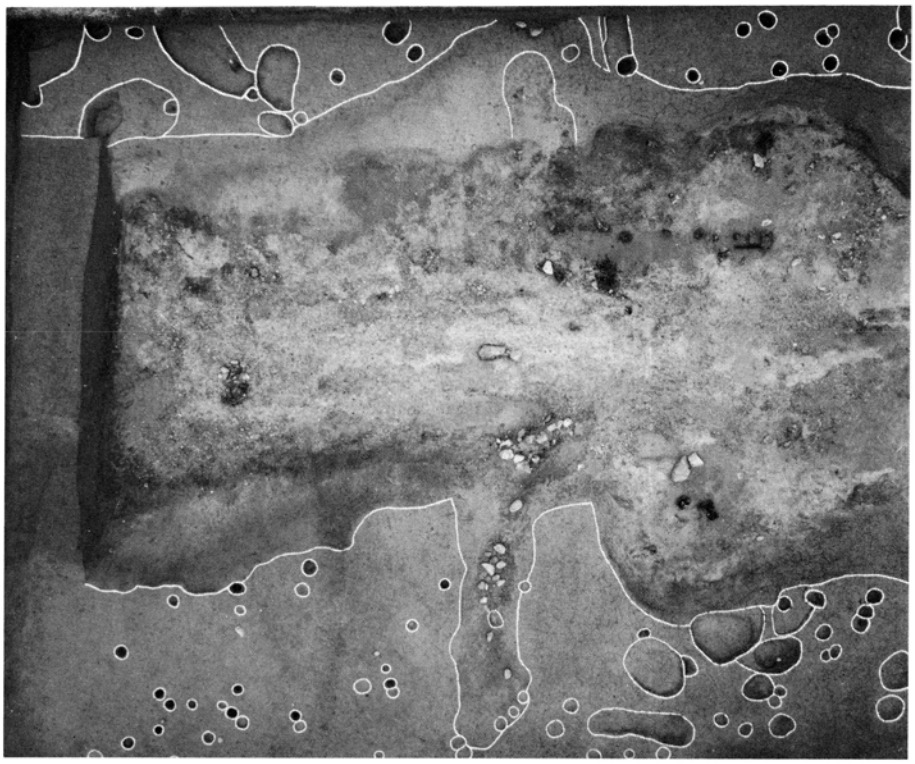
2

1．SE01
2．SE10断面（東から）

1

2

1．SE02（SD100内）
2．Pit01（西から）



1

2

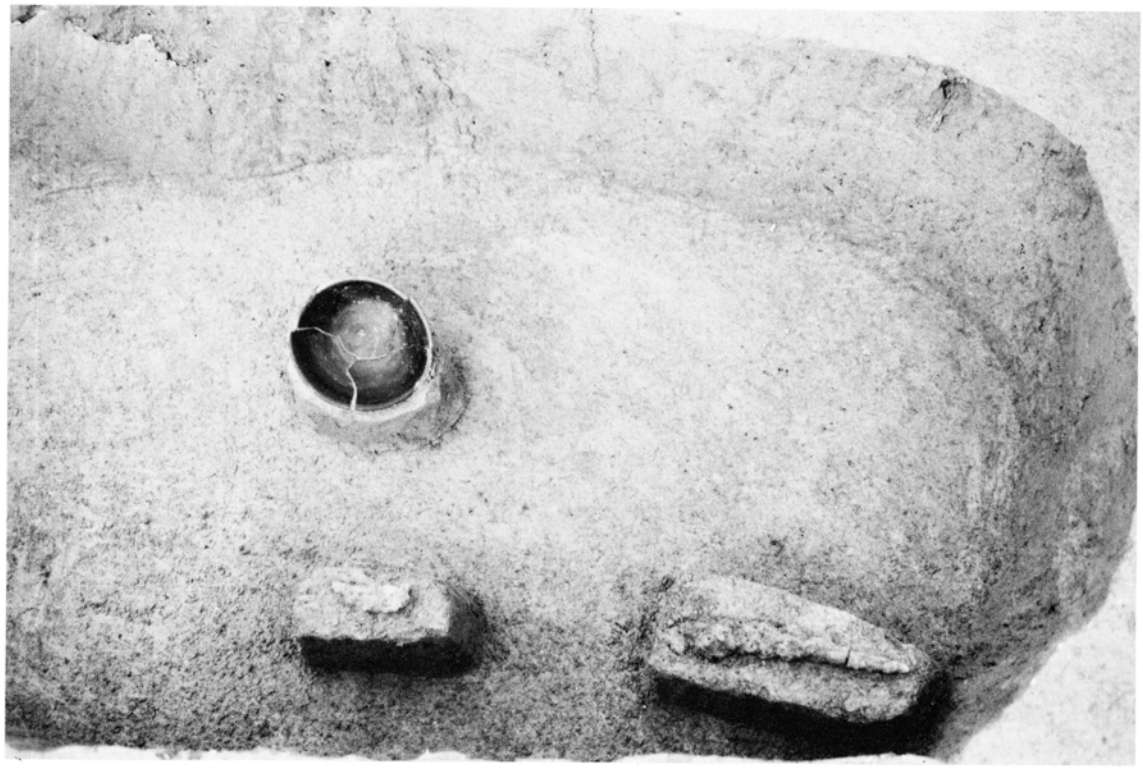
1．SD100南側
2．SD100土層（南から）

1

2

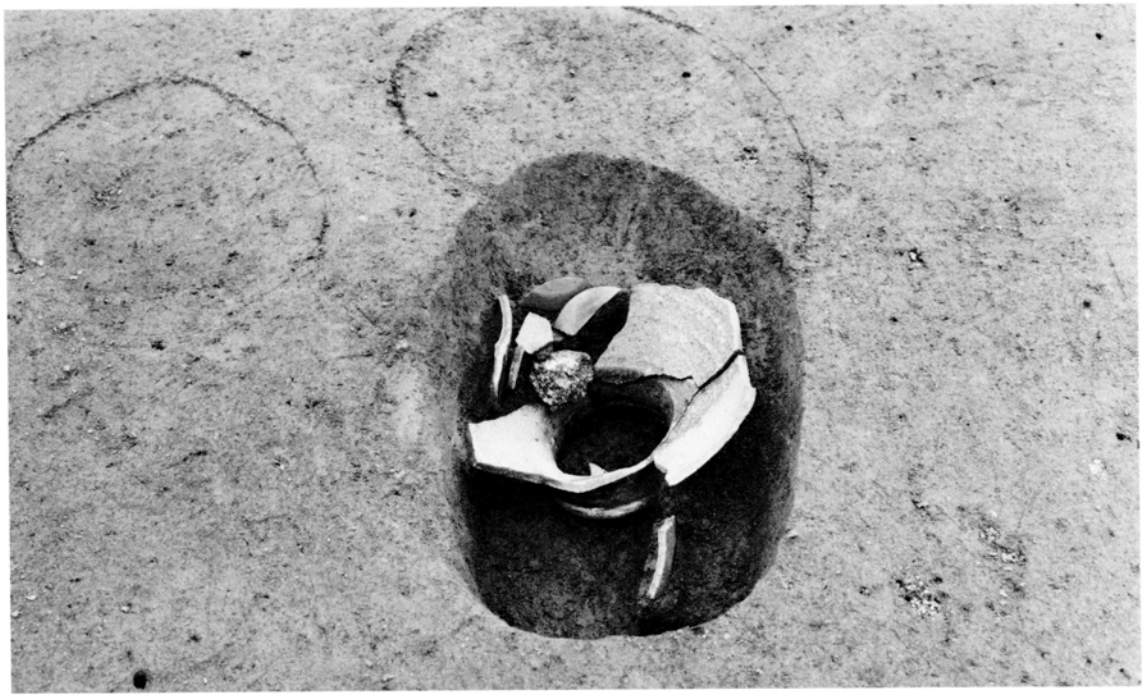
1．b区周辺（南上空から）
2．b区周辺（北上空から）

1

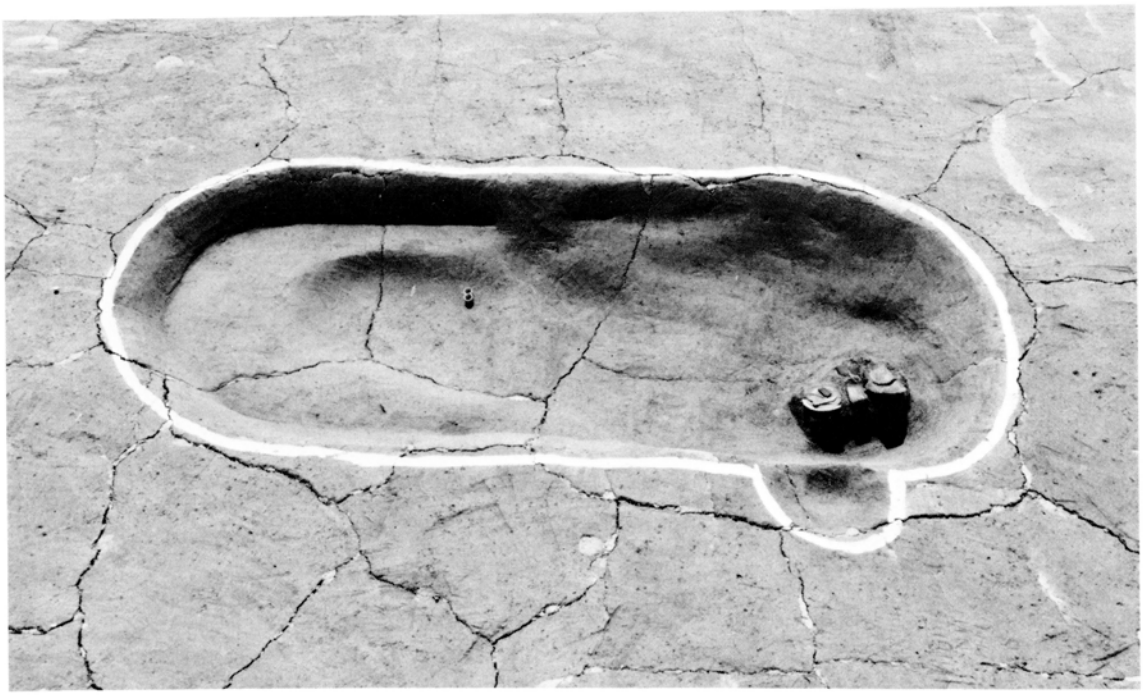


2

1．SK01（南から）
2．SK01副葬遺物（北から）

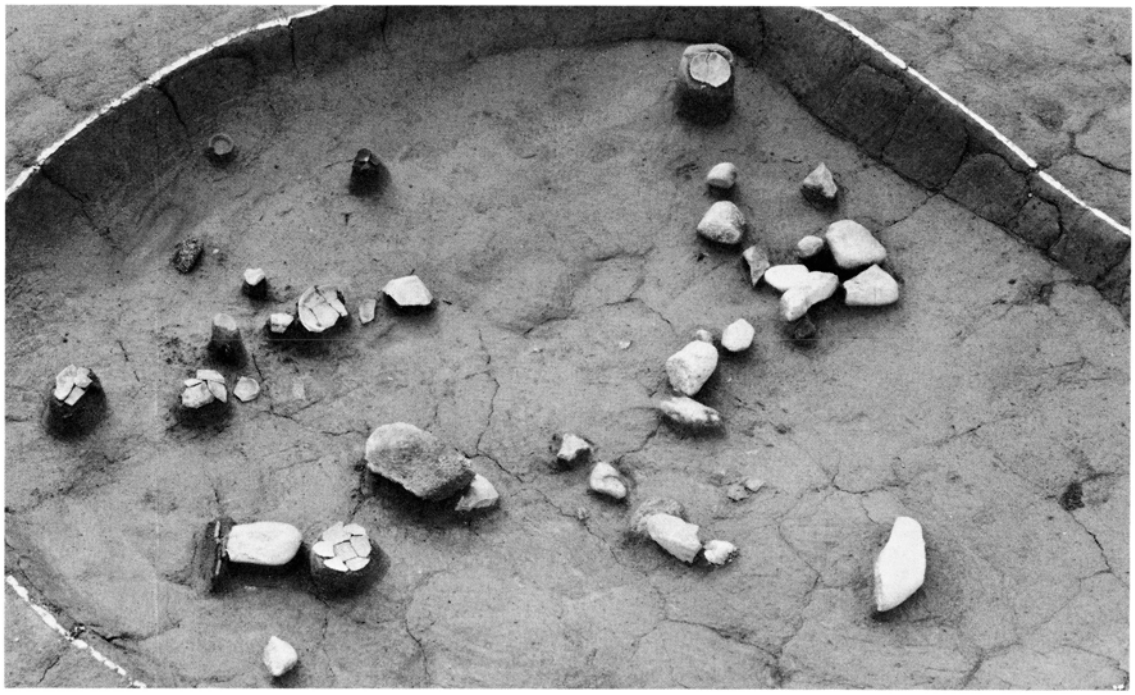


1



2

1．SB47柱穴（西から）
2．SK05（東から）



1

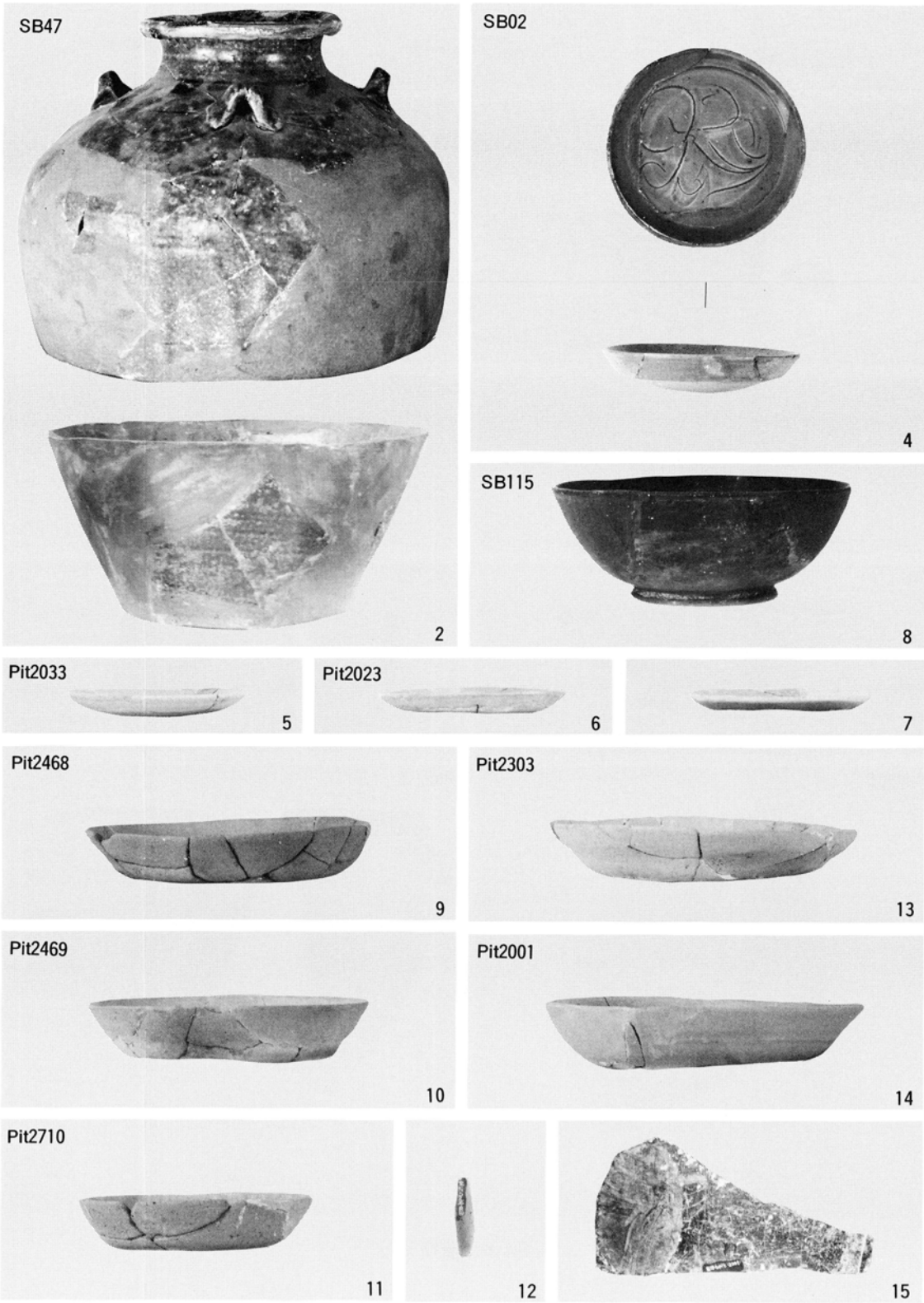
2

1．SK17（東北から）
2．SK20（南から）

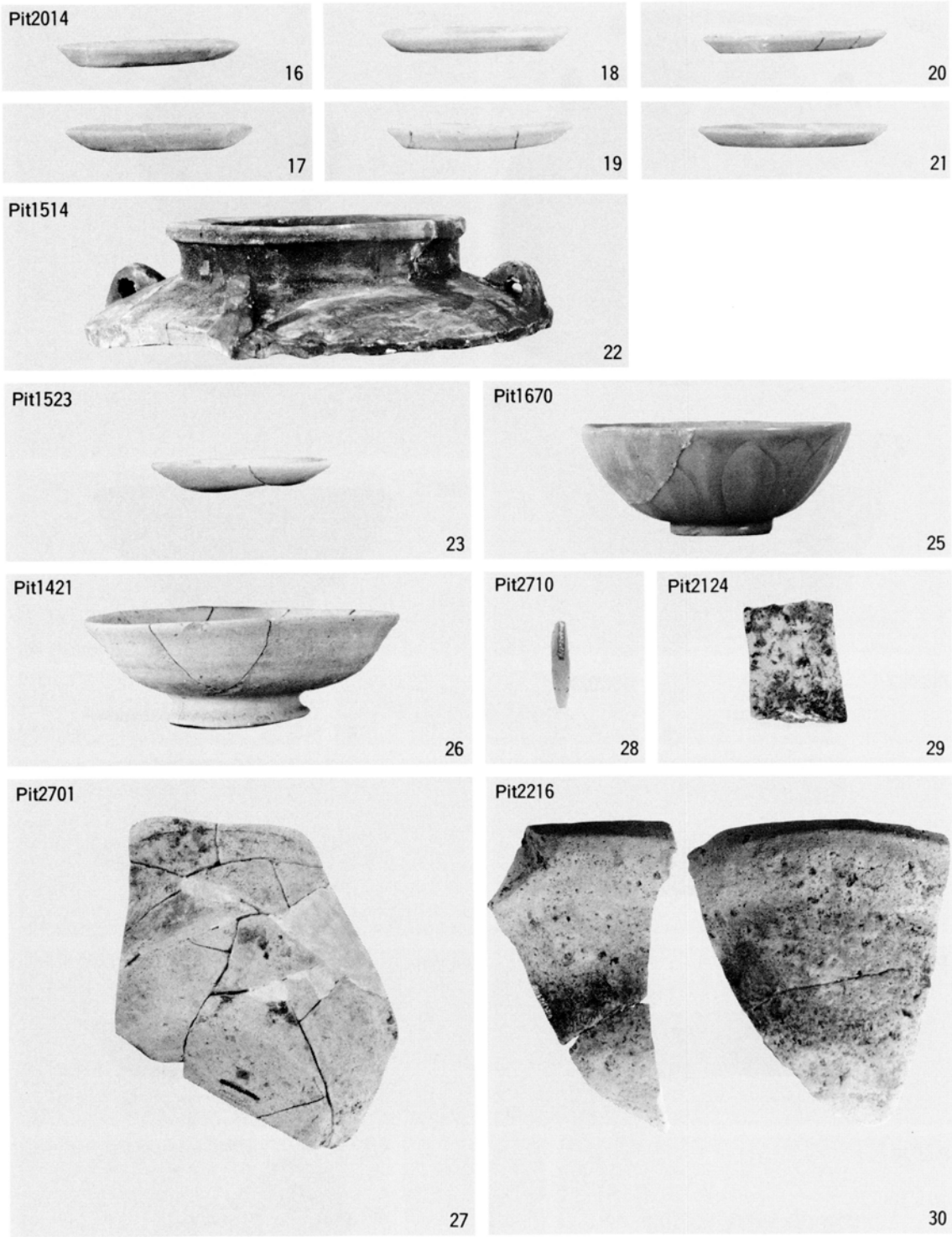
1

2

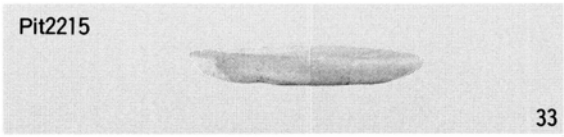
1．SX51（右が北）
2．調査区域と周辺

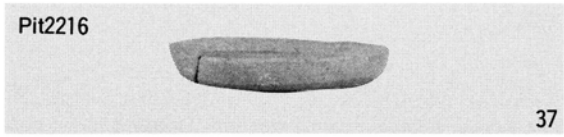


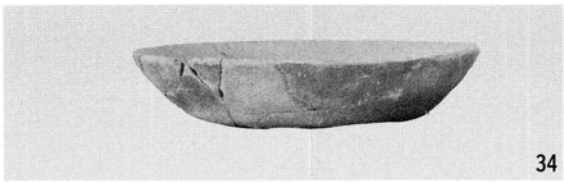
掘立柱建物・Pit 出土遺物

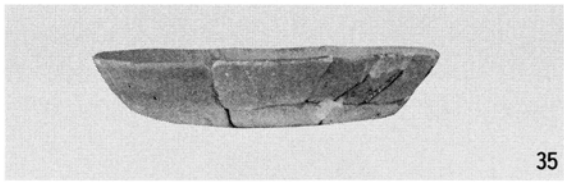

Pit2014
16
18
20
17
19
21
Pit1514
22
Pit1523
23
Pit1670
25
Pit1421
26
Pit2710
28
Pit2124
29
Pit2701
27
Pit2216
30

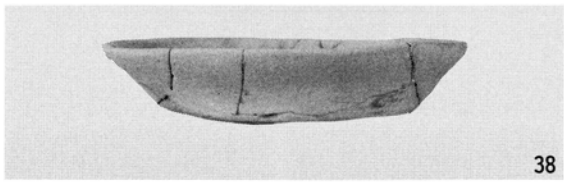
Pit 出土遺物（1）

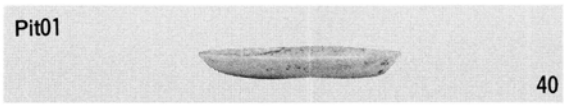


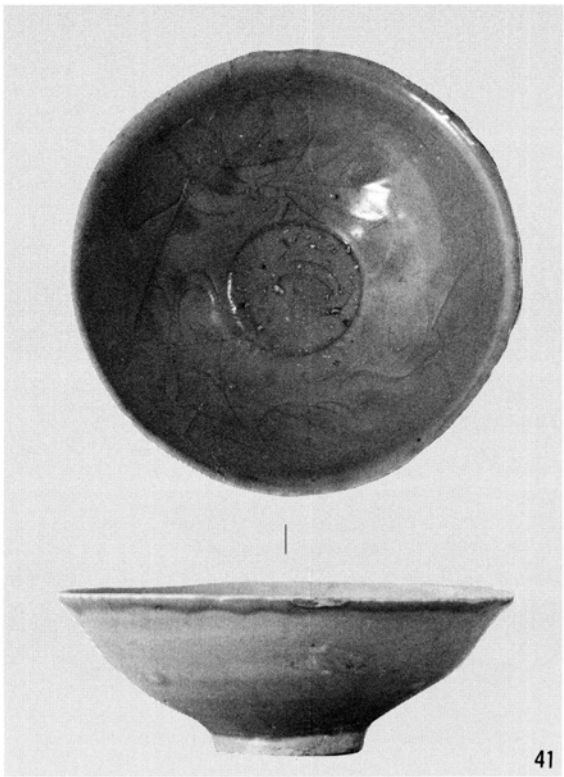


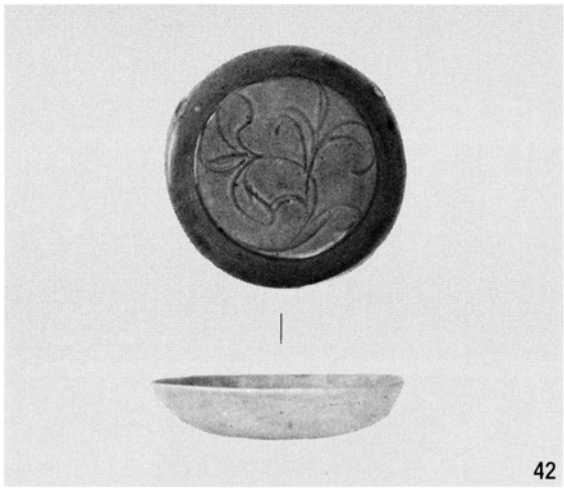


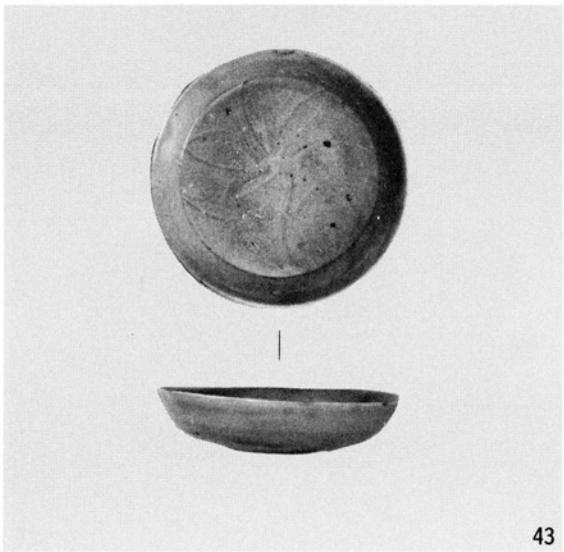










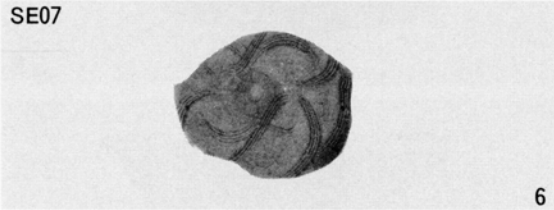


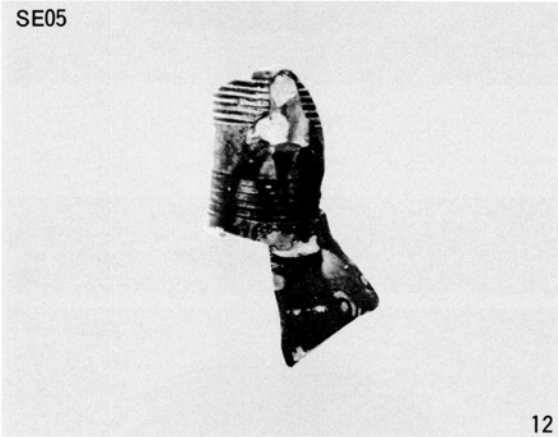
Pit 出土遺物 (2)

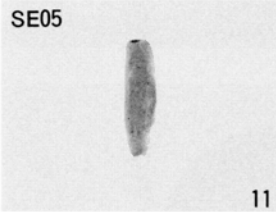
SE01
1

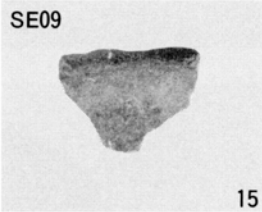
2

3


SE07
6


SE05
12


SE05
11


SE09
15

SE09
16

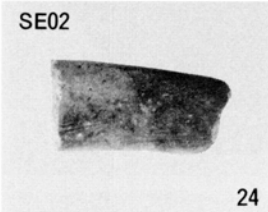
17

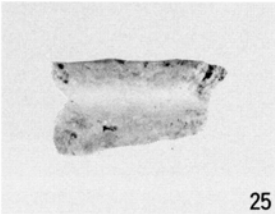
SE10
18

SE02
(SE100内)
20

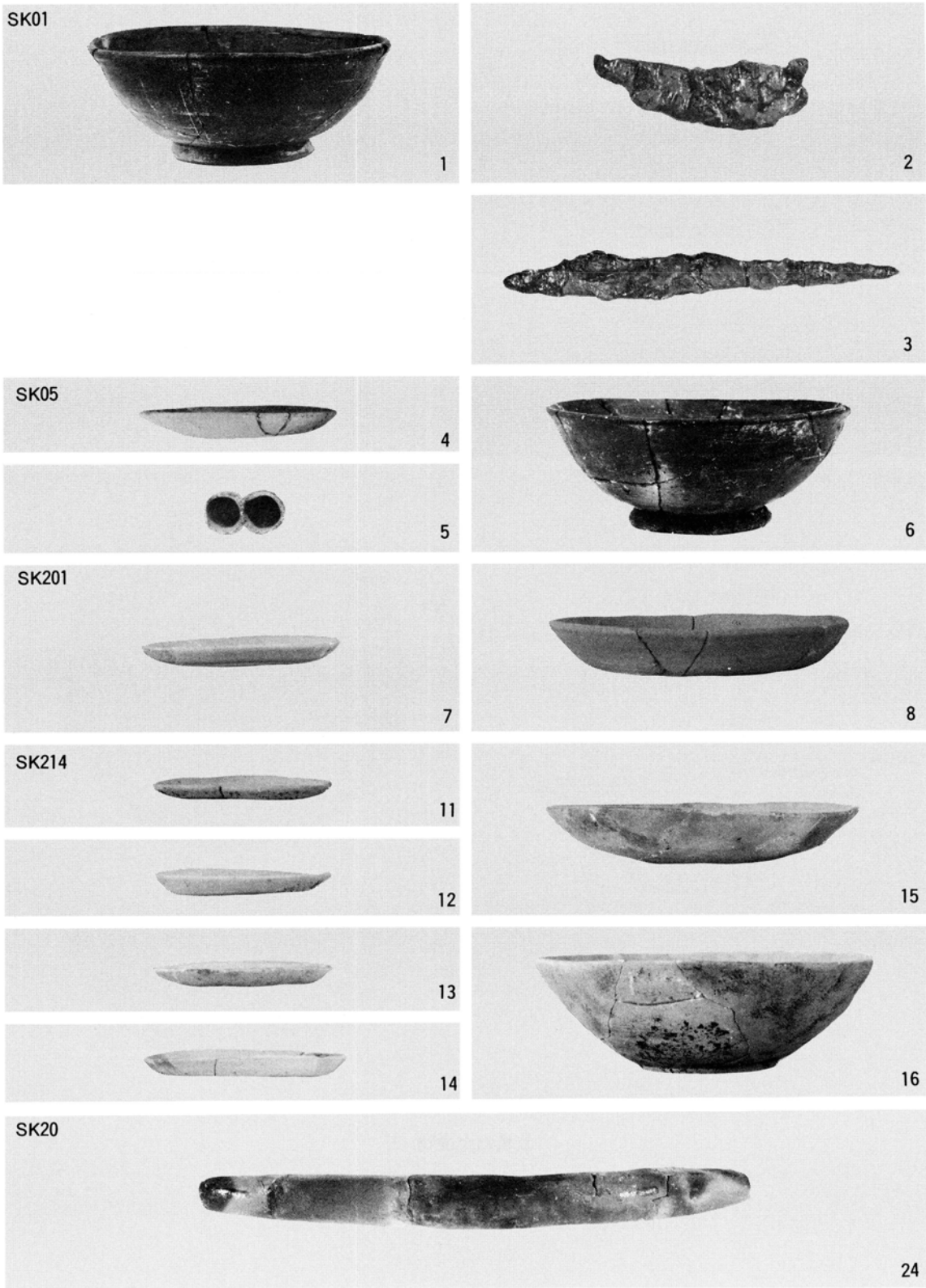
21

SE03
19

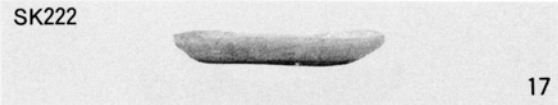

SE02
24

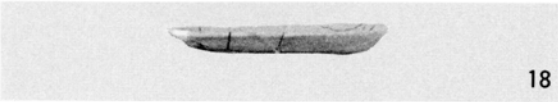

25

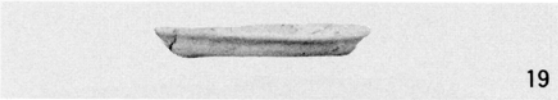
井戸出土遺物

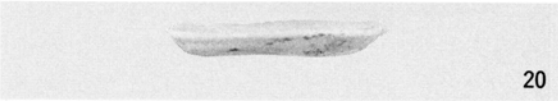


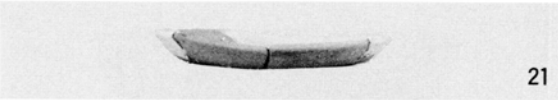
土坑出土遺物（1）

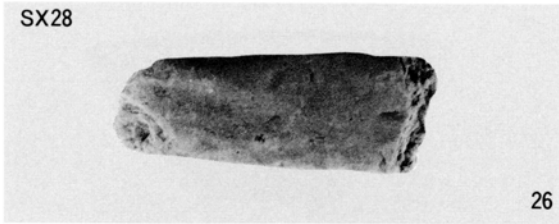


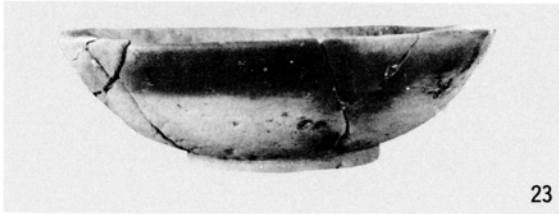


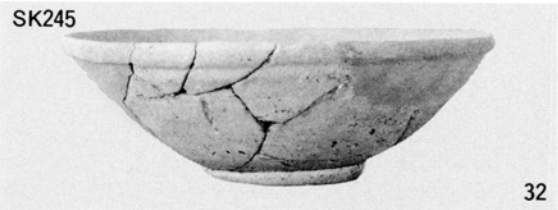


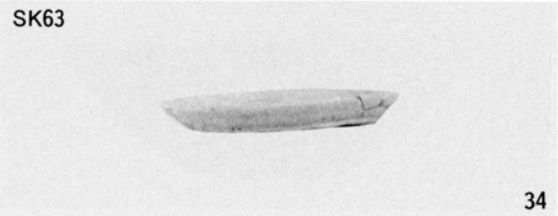


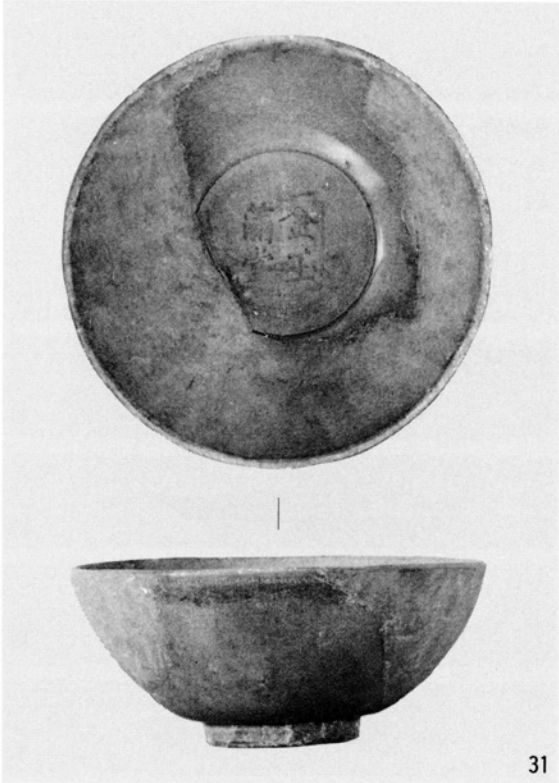




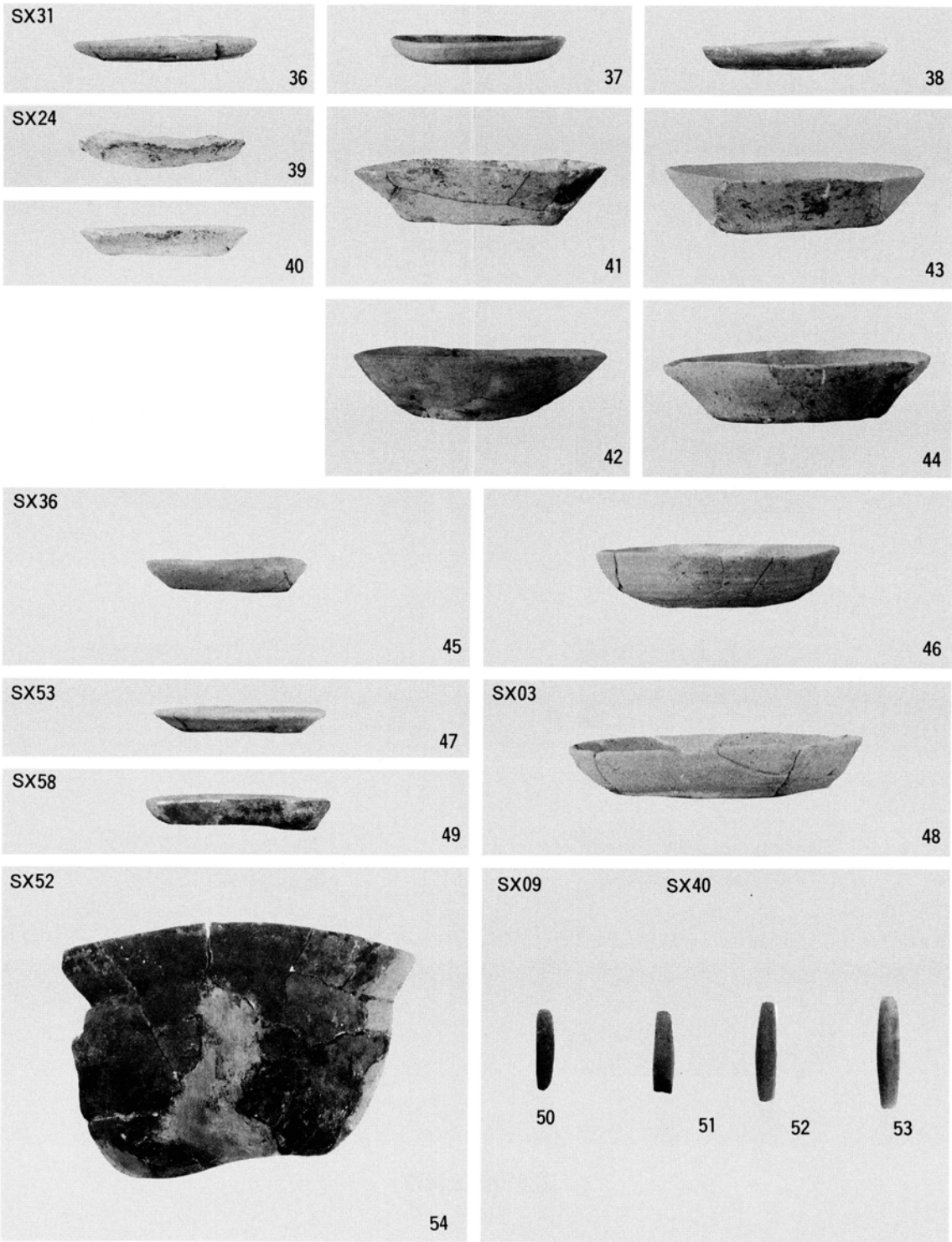




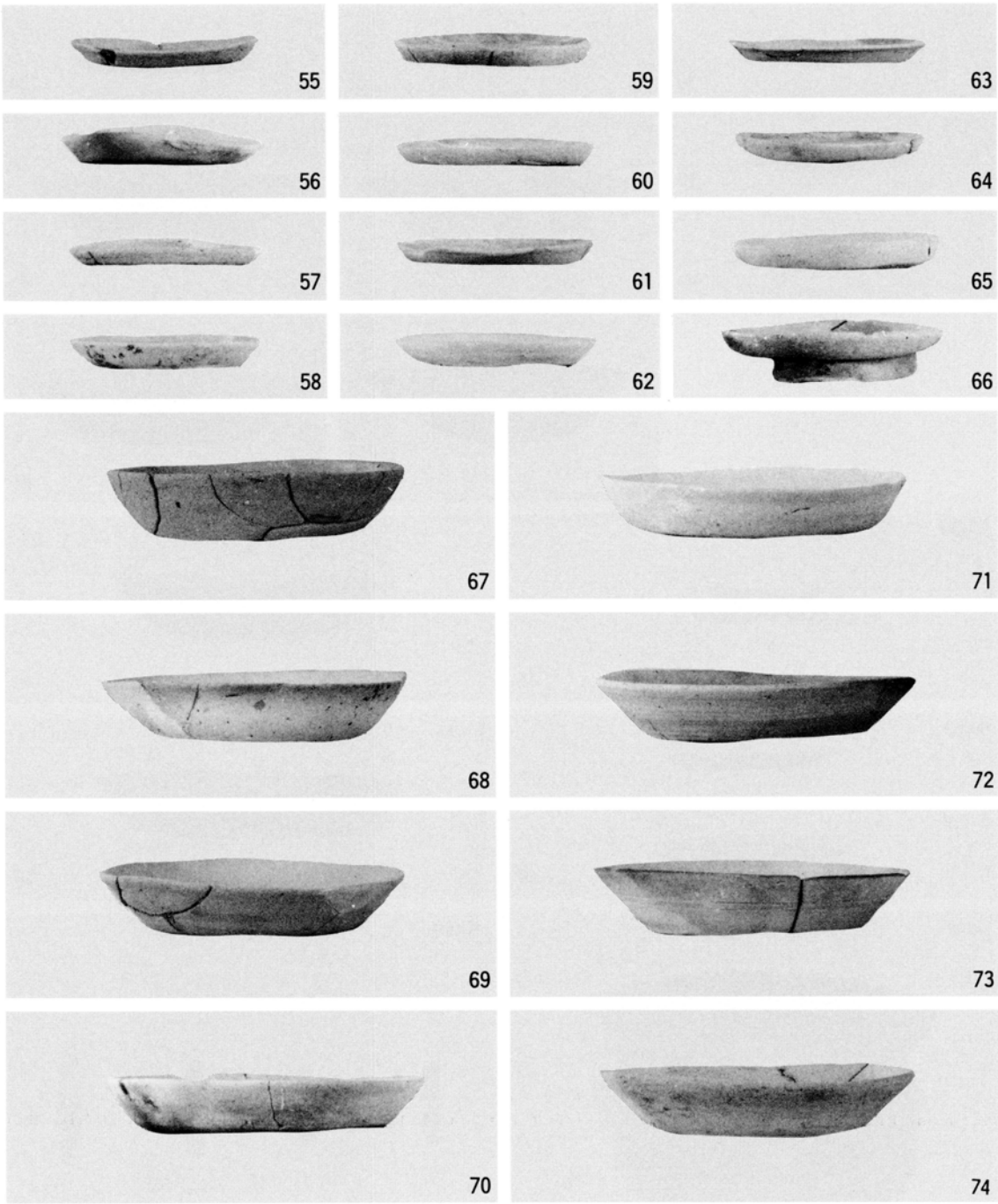




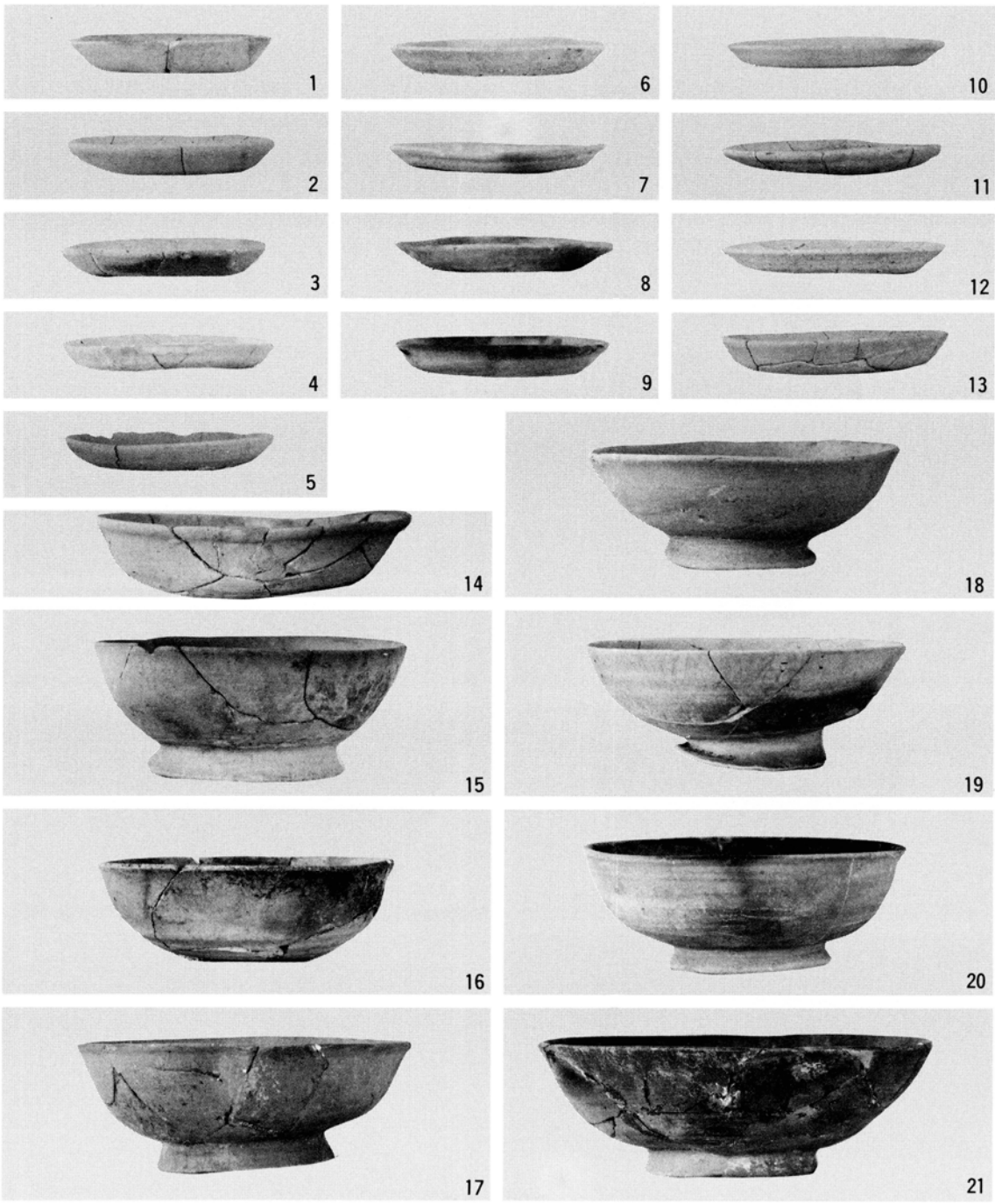
土坑出土遺物（2）


SX31
36
37
38
SX24
39
40
41
43
42
44
SX36
45
46
SX53
47
SX58
49
SX03
48
SX52
54
SX09
SX40
50
51
52
53

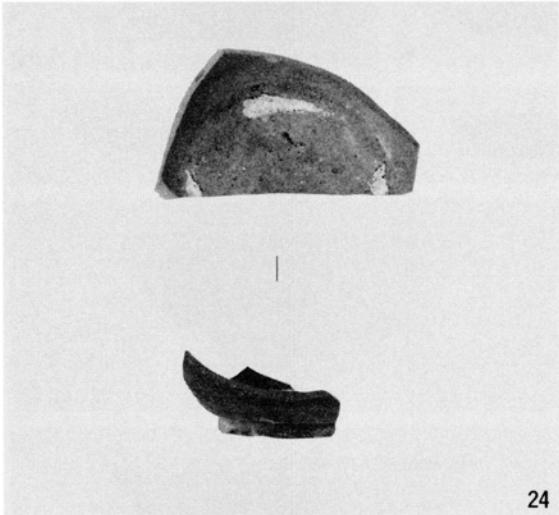
土坑出土遺物（3）

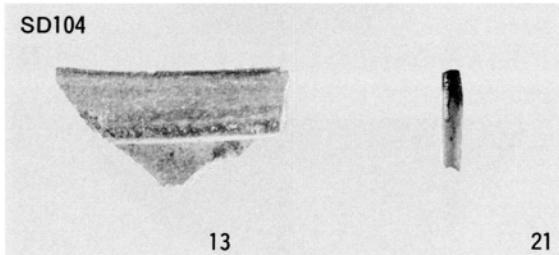


SX51出土土師器

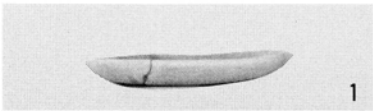


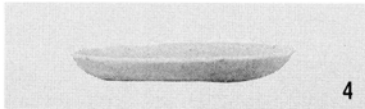
SD01出土土器

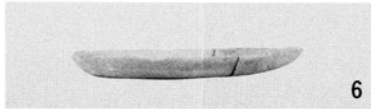




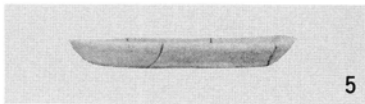
溝出土遺物

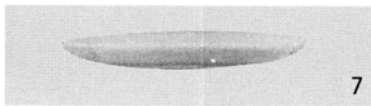

1


4


6

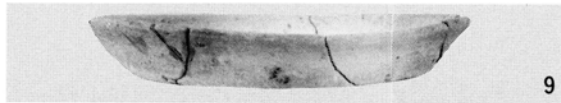
2

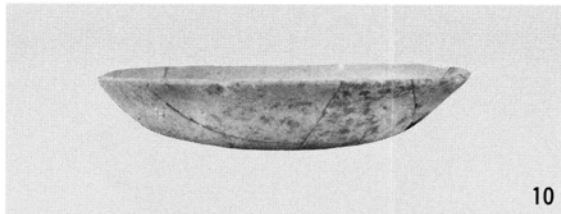

5

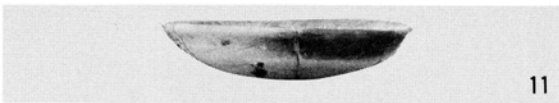

7

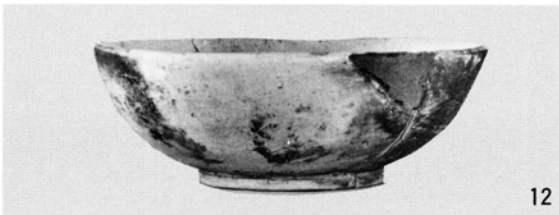
3

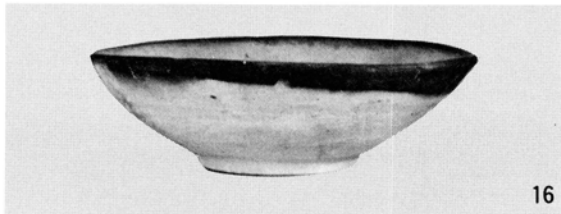
8


9

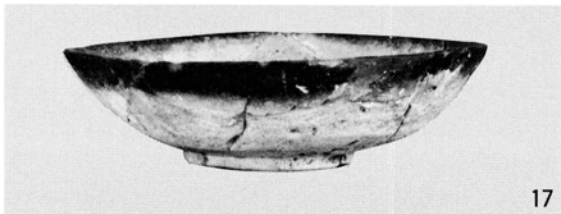

10

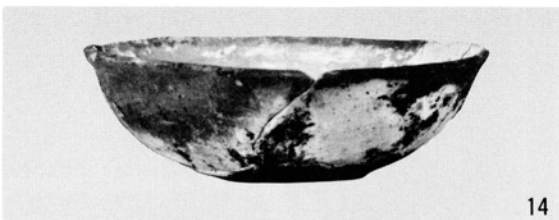

11


12

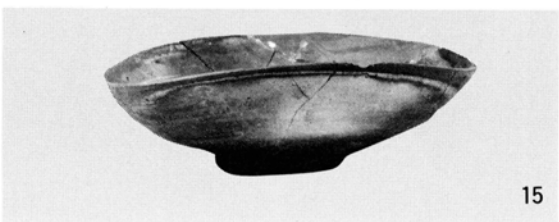

16

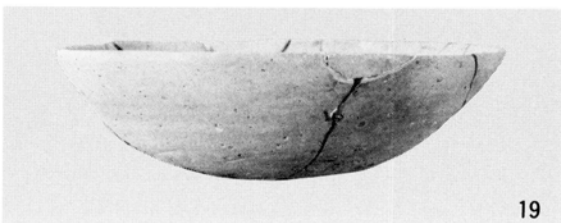
13


17


14

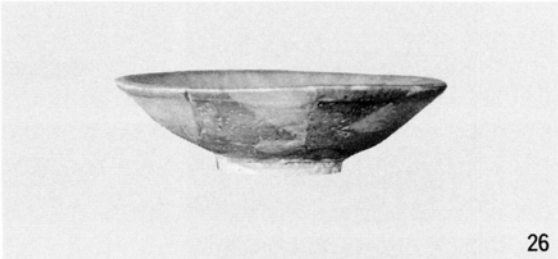
18


15


19

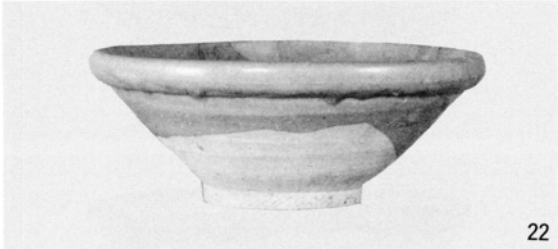
SD100下層出土土器

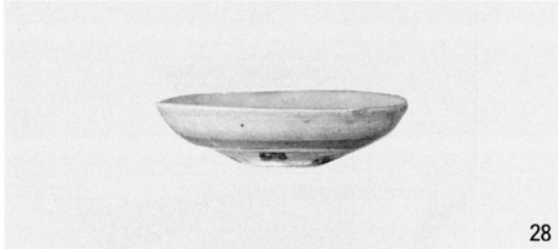
20


26

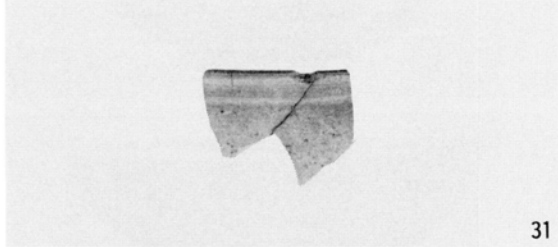
21

27


22


28

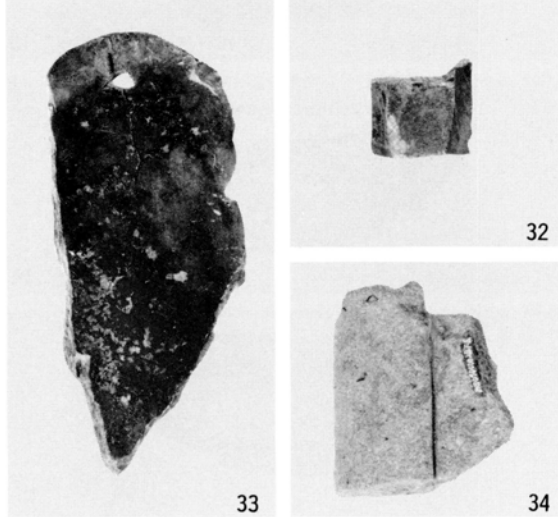
23


31

24

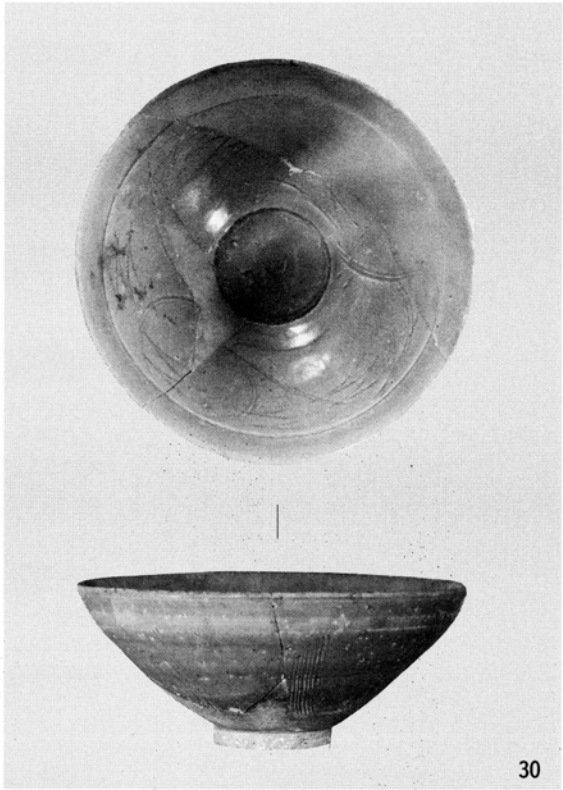
32

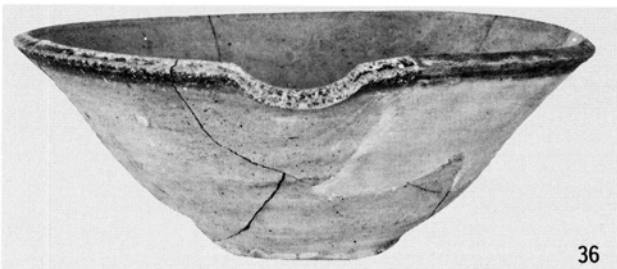
25


33

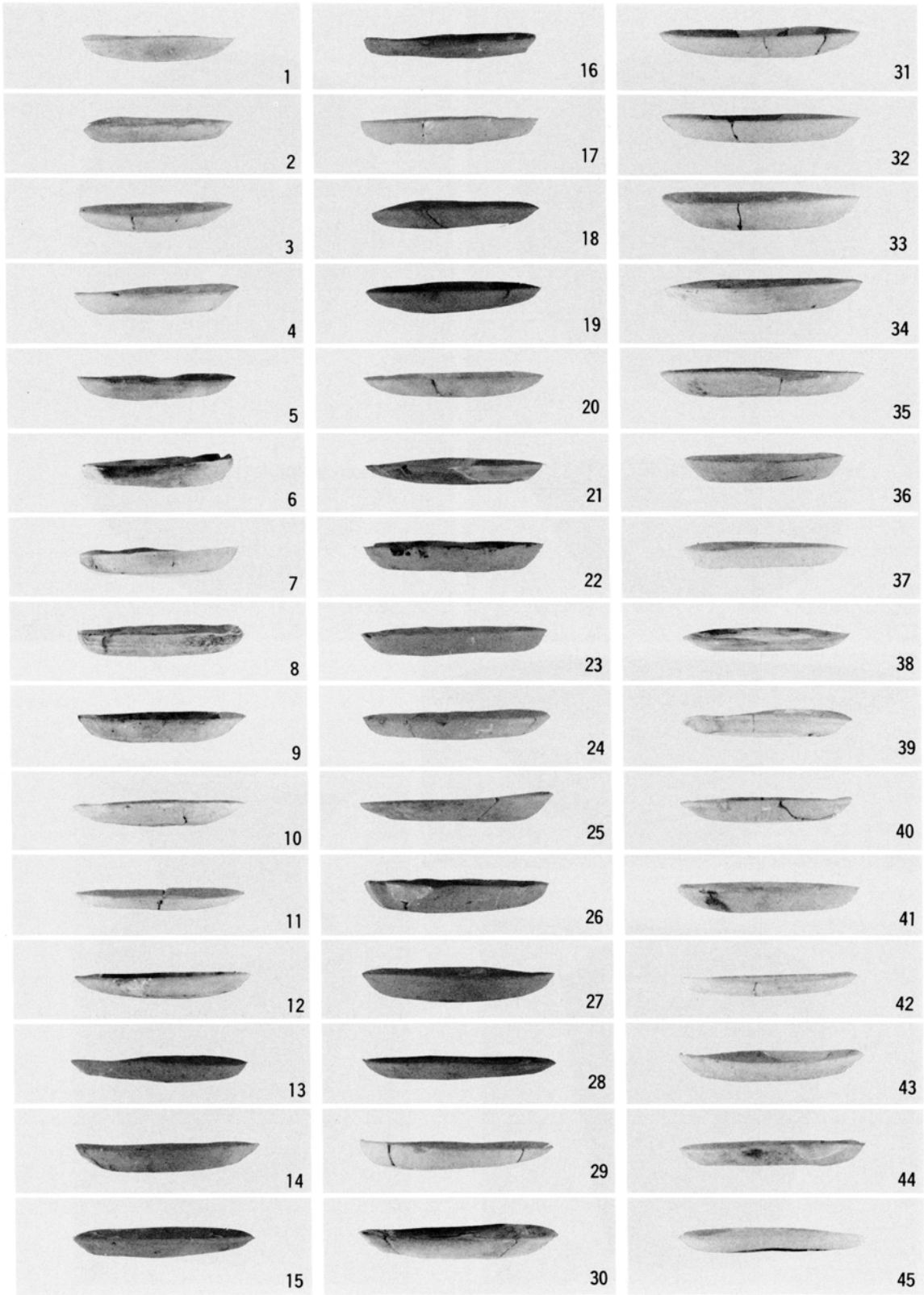
34

SD100下層出土陶磁器・石製品

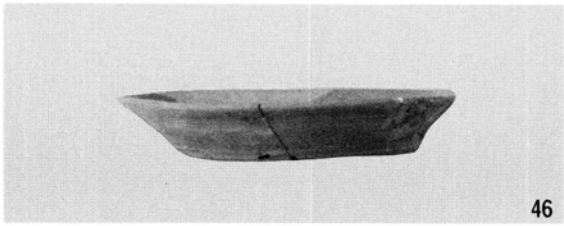


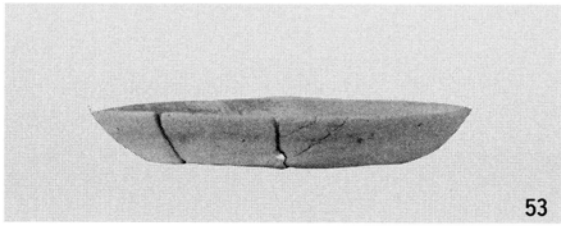


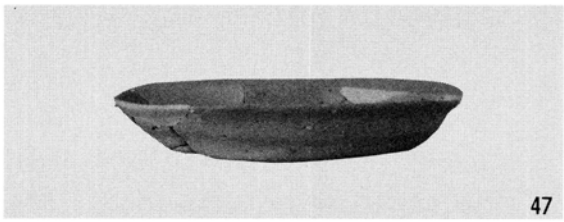
SD100下層出土青磁椀・須恵器

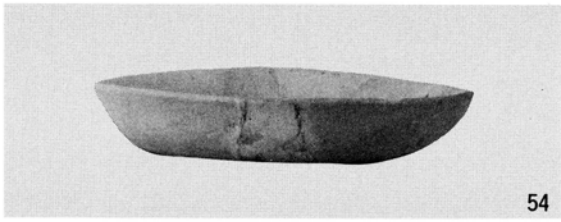


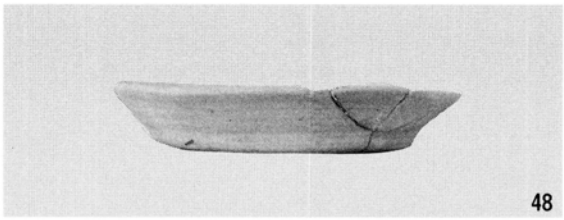
SD100出土土師器小皿

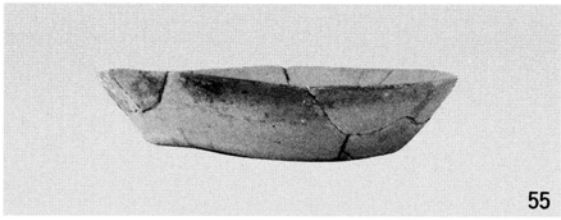

46

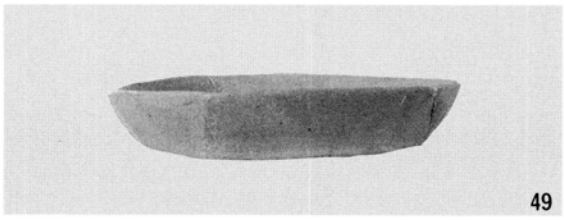

53

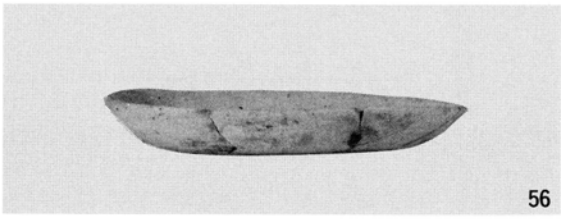

47

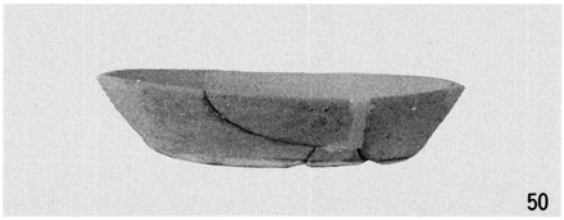

54

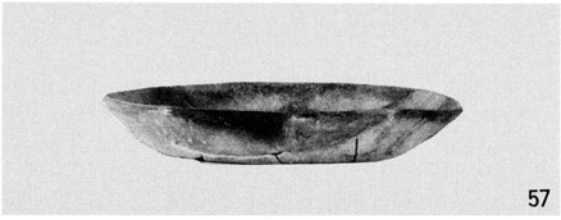

48

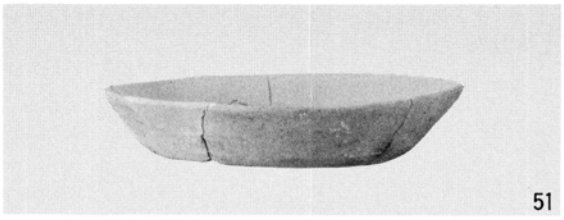

55

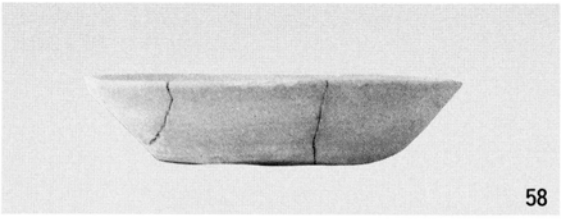

49

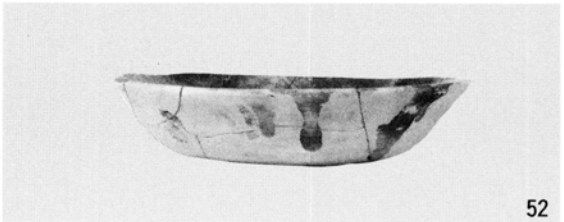

56

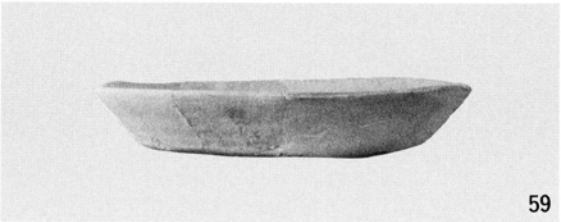

50


57

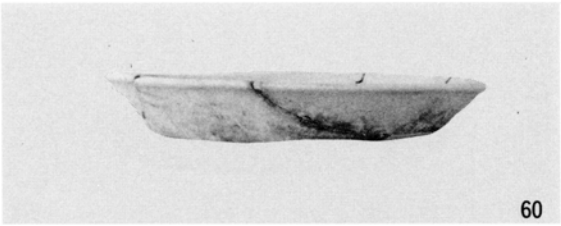

51

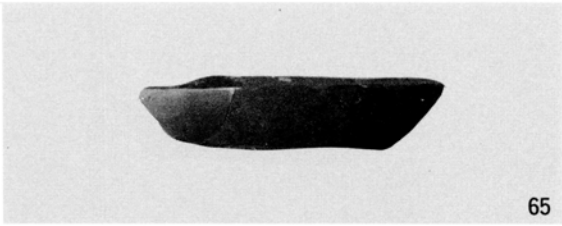

58

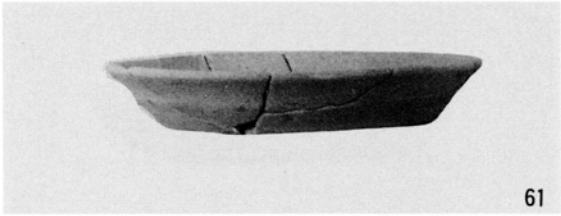

52

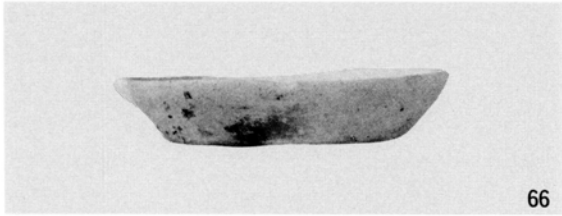

59

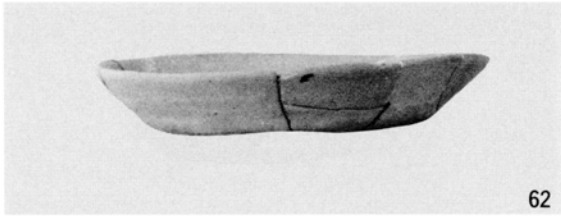
SD100出土土師器杯（1）

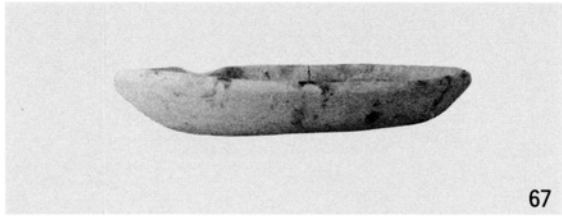

60

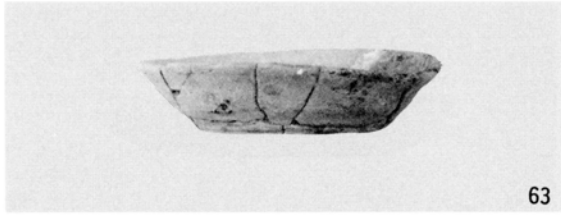

65

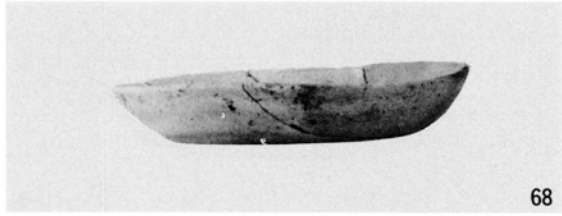

61

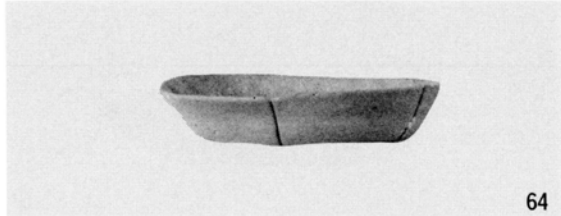

66

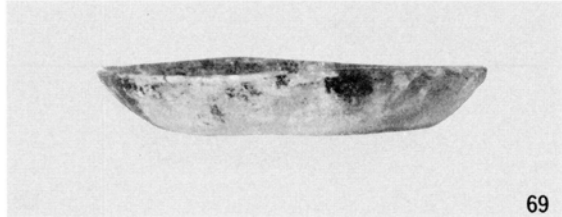

62


67

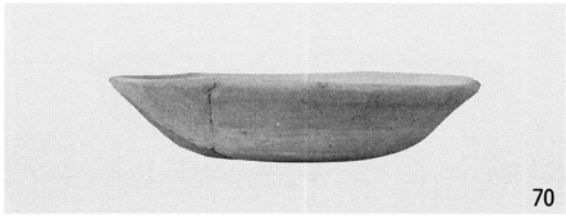

63

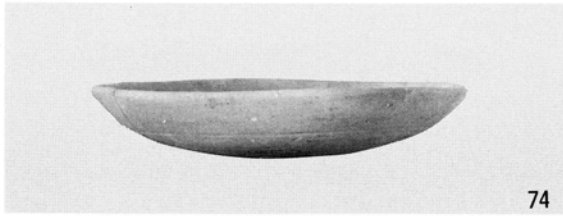

68

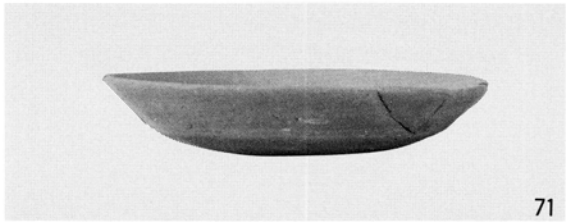

64

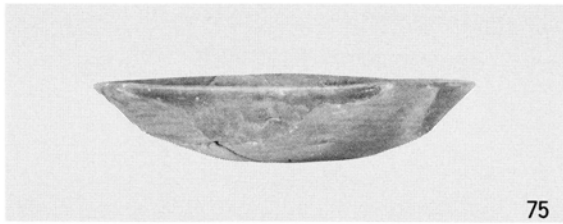

69

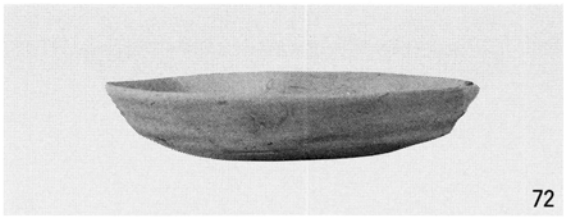
SD100出土土師器杯（2）

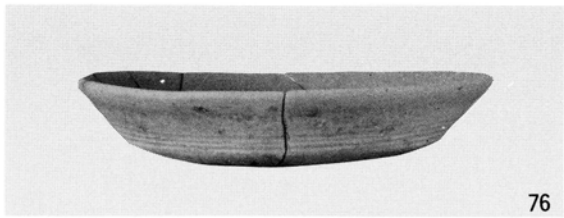

70

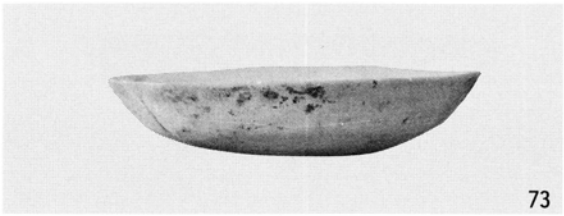

74

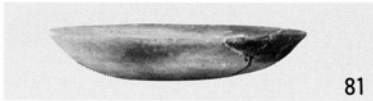

71


75

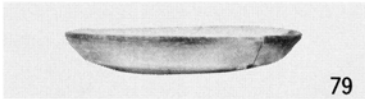

72


76

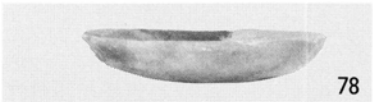

73

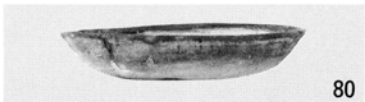

81

77


79

82


78

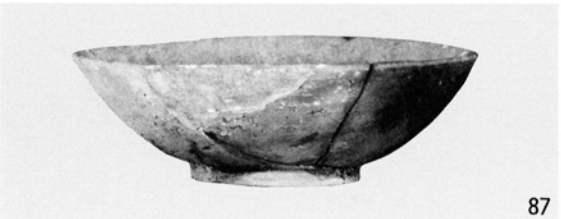

80

83

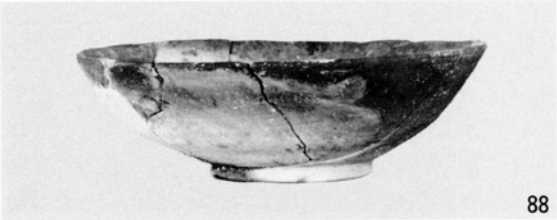
84

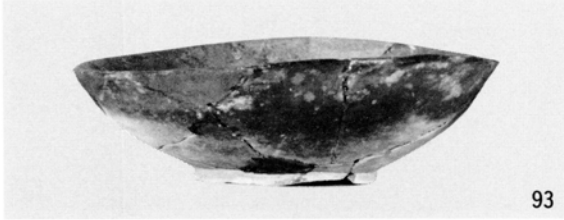
86

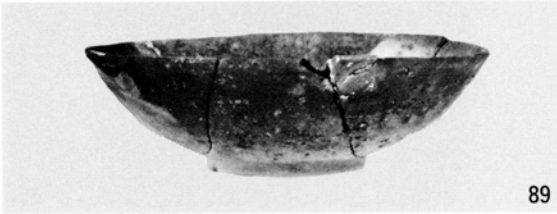
85


87

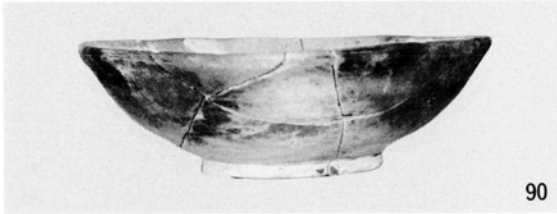
SD100出土土師器杯・小皿・椀


88

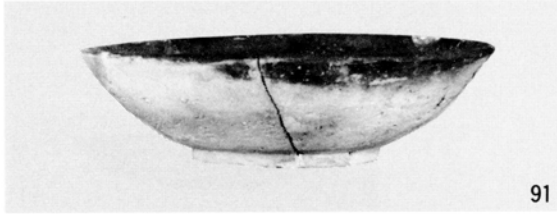

93

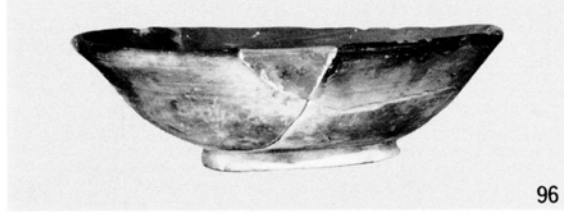

89

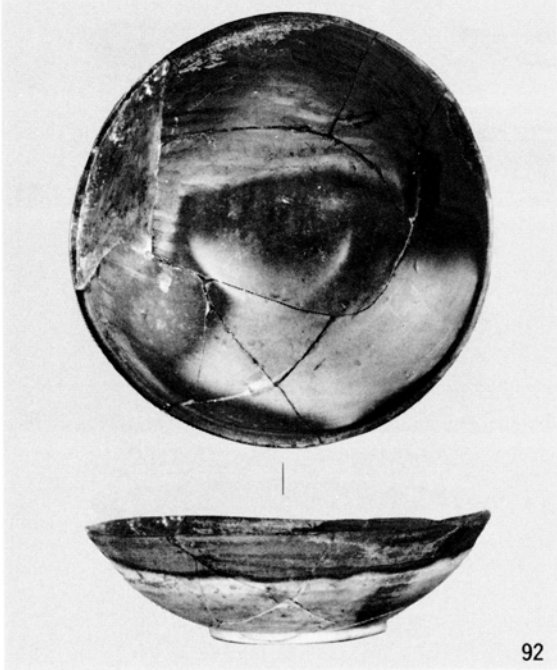
94

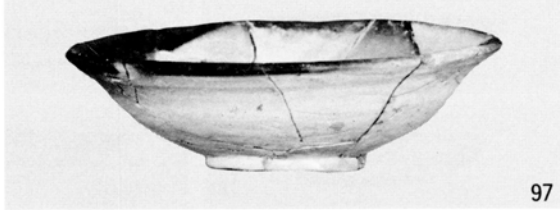

90

95

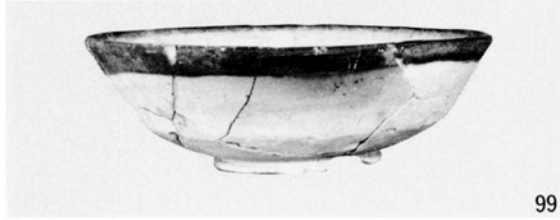

91


96

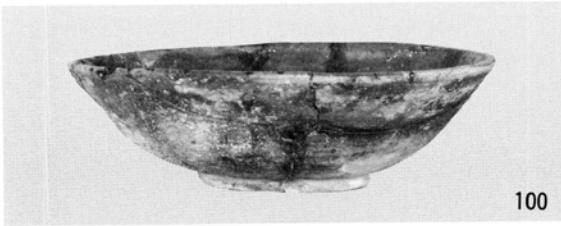

92


97

98


99

SD100出土瓦器椀（1）

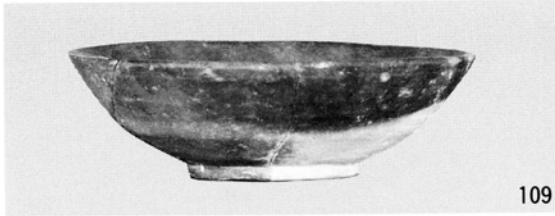

100

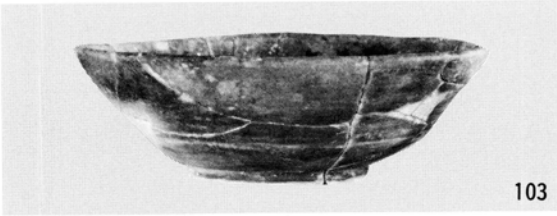
107

101

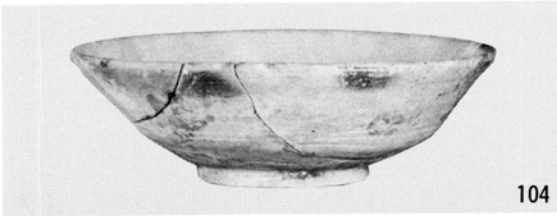
108

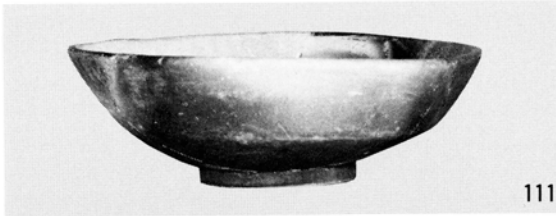
102

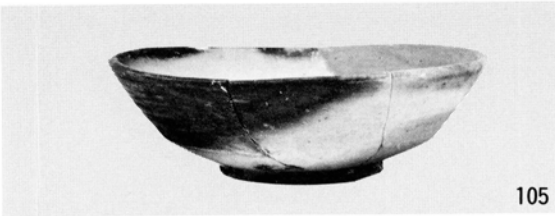

109

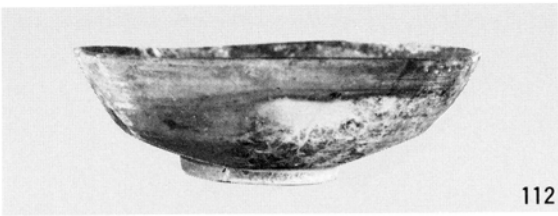

103

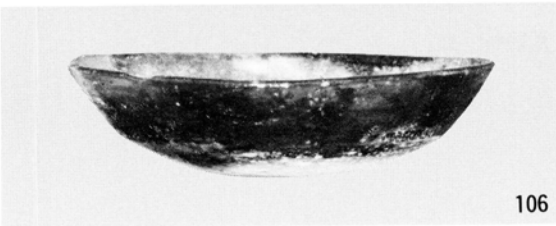
110


104


111


105

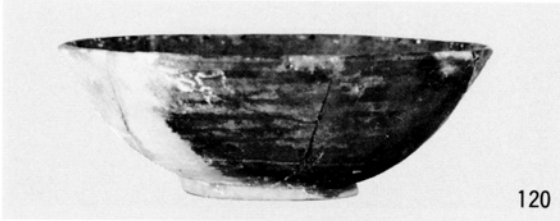

112


106

113

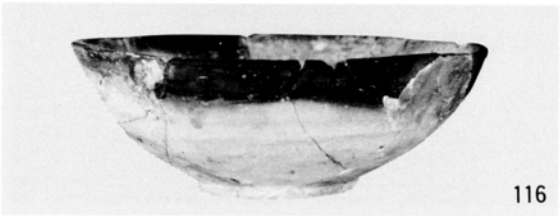
SD100出土瓦器椀（2）

114

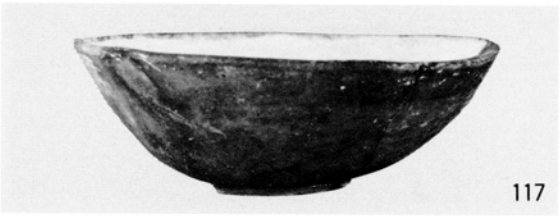

120

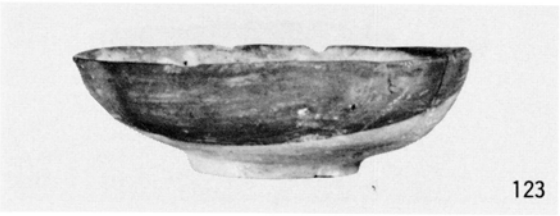
115

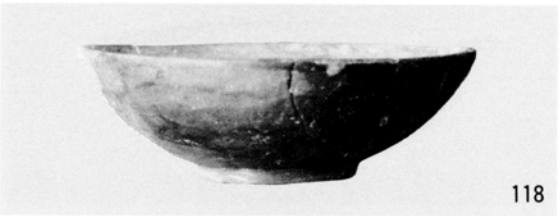
121

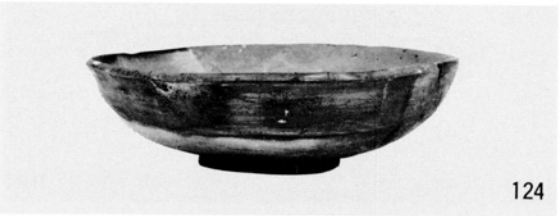

116

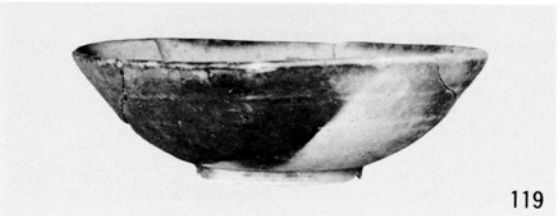
122

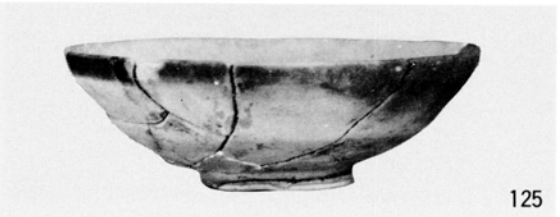

117


123


118


124


119


125

SD100出土瓦器椀（3）

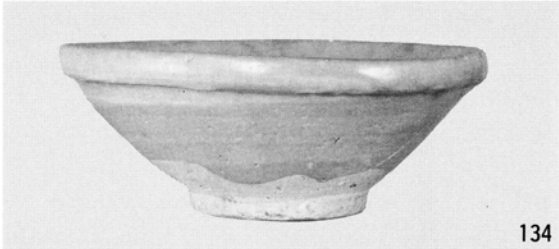
126

132

127

133

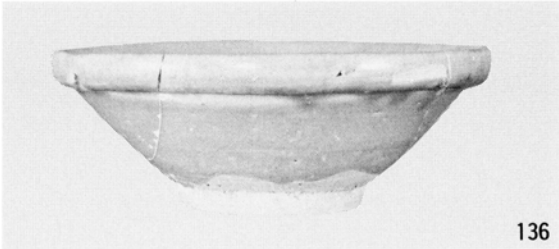
128


134

129

135

130

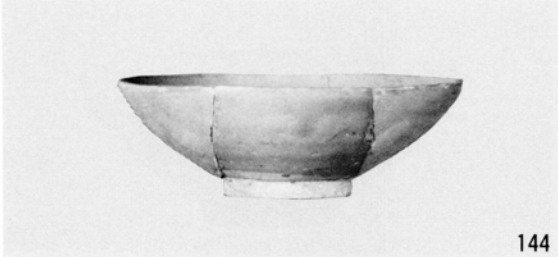

136

131

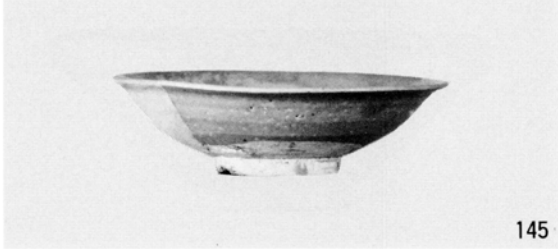
137

SD100出土白磁椀（1）

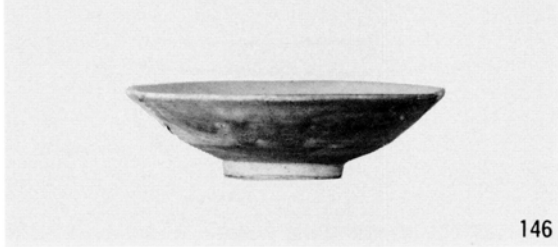
138


144

139

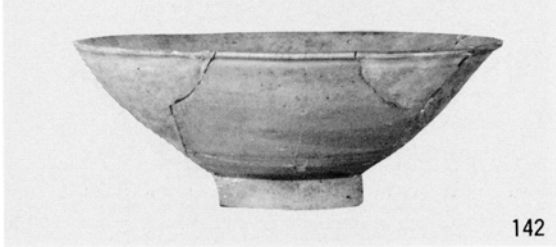

145

140


146

141

147

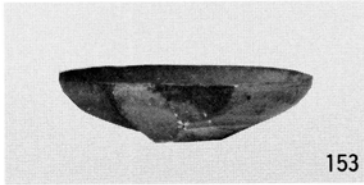

142

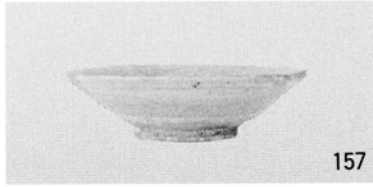
148

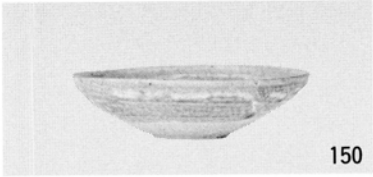
143

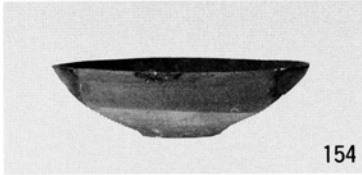
SD100出土白磁椀（2）

149

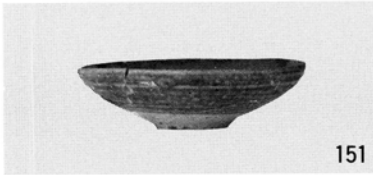

153


157

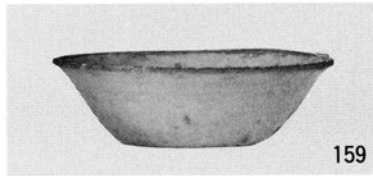

150

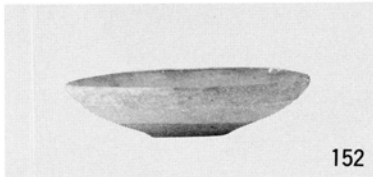

154

158


151

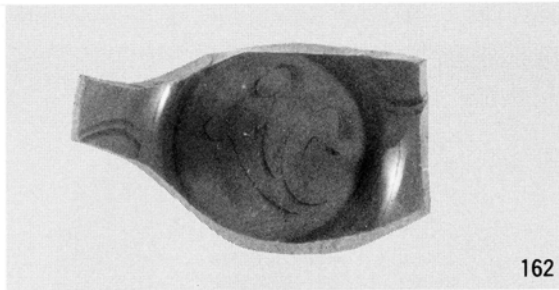
155

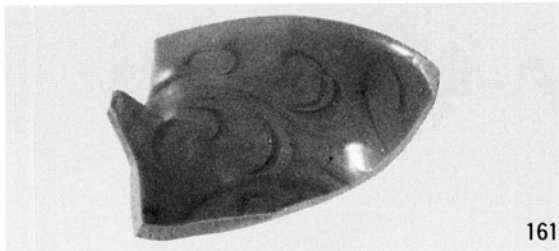

159

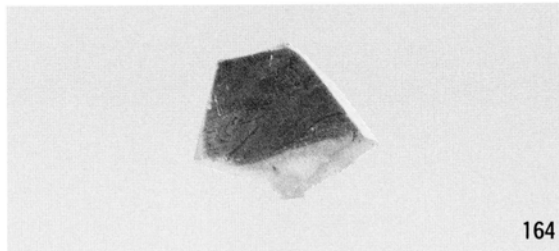

152

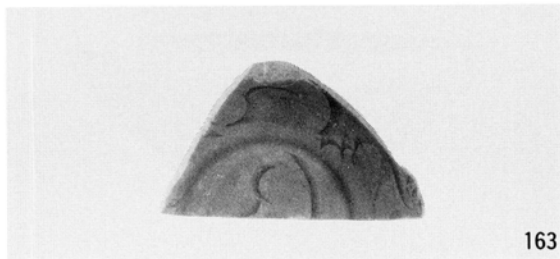
156

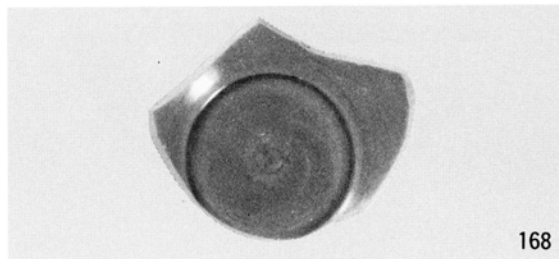
160


162

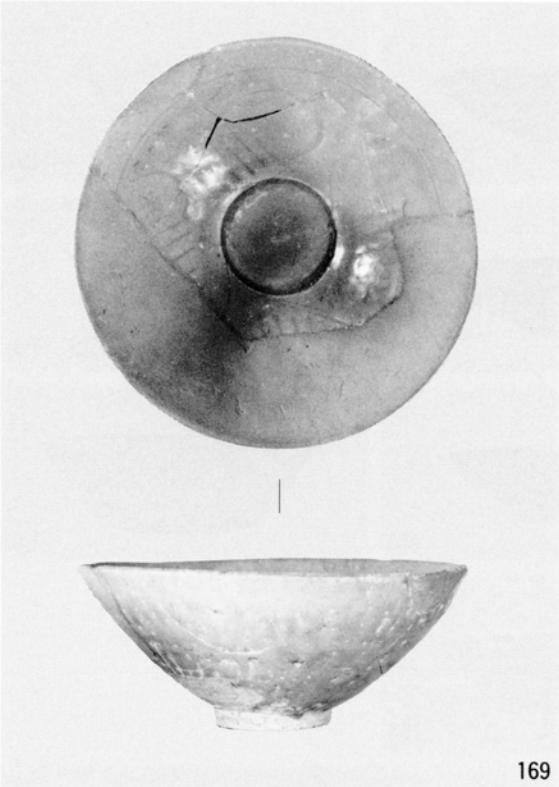

161

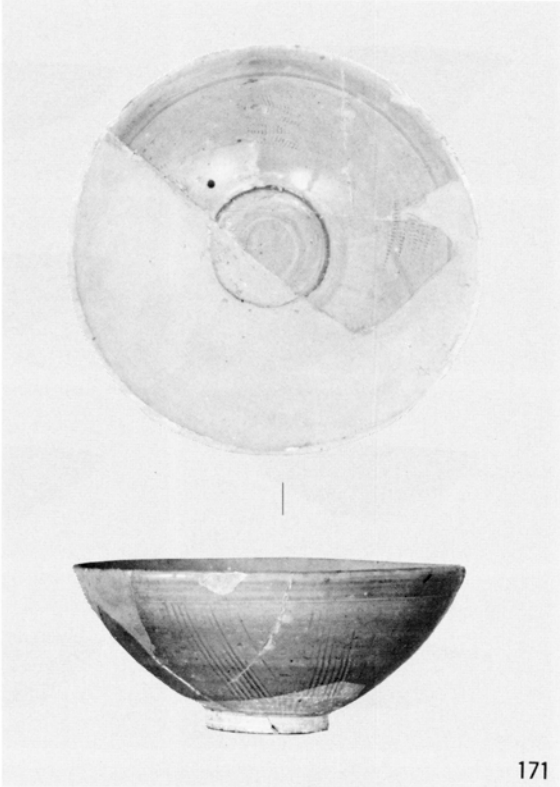

164

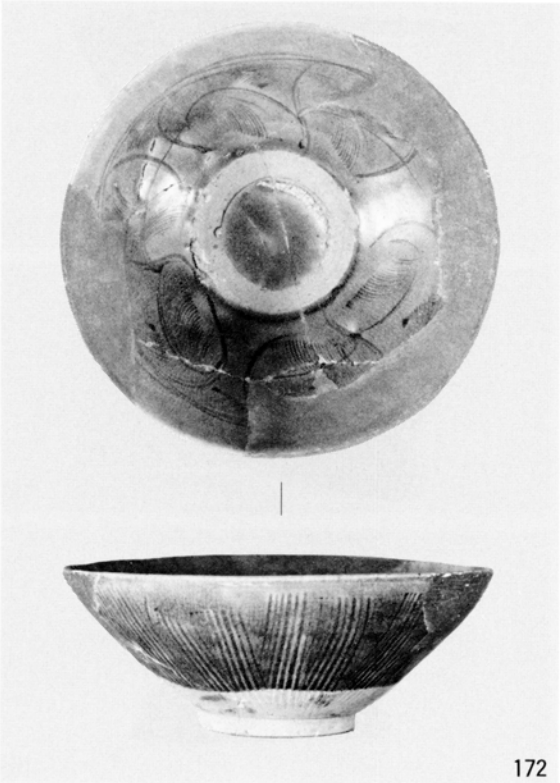

163


168

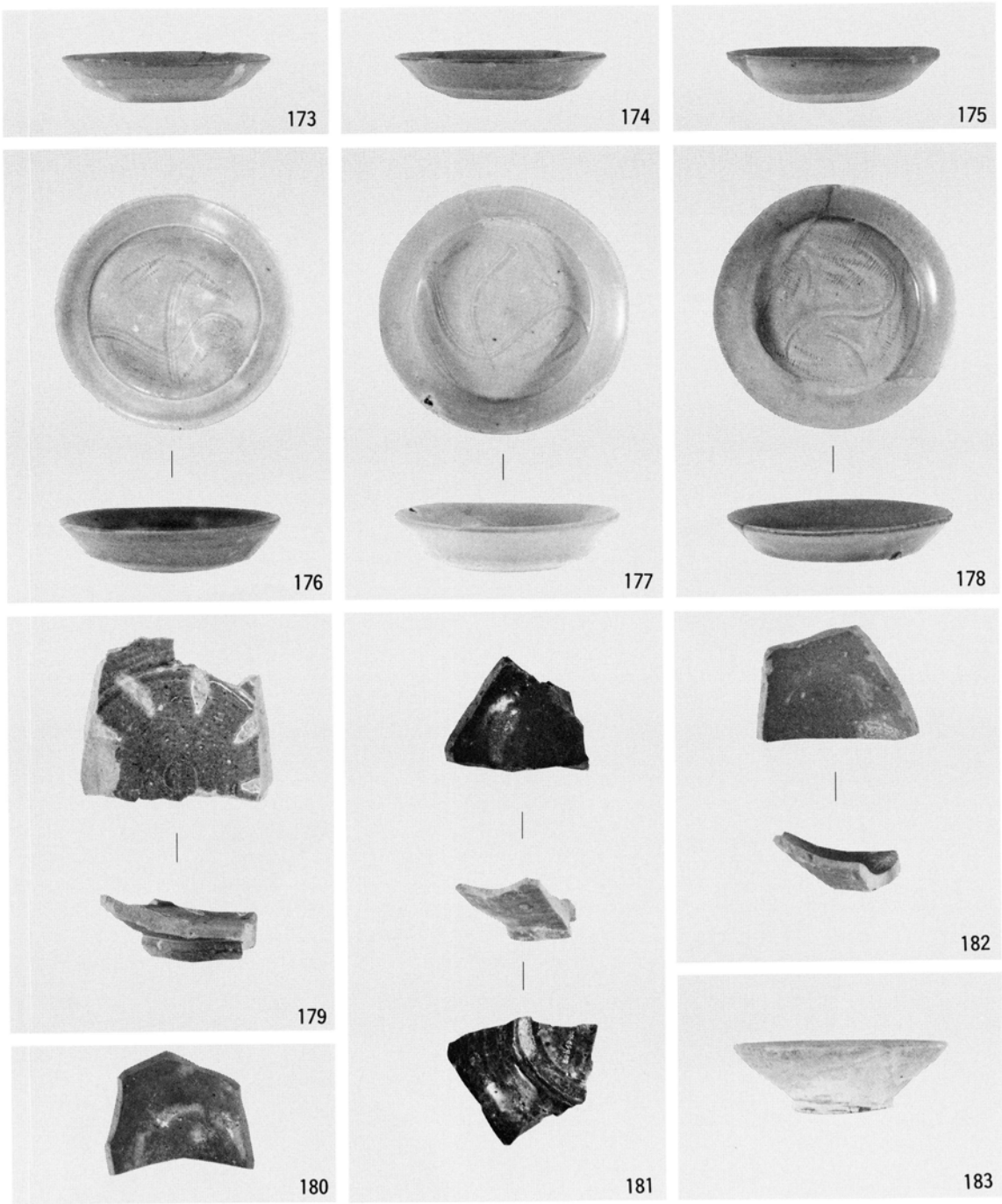
SD100出土白磁皿・龍泉窯系青磁椀





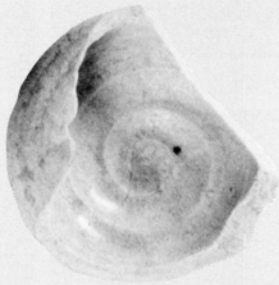


SD100出土同安窯系青磁椀



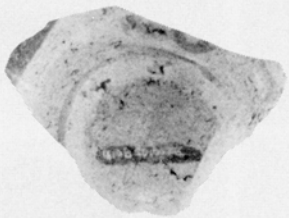
SD100出土同安窯系青磁皿・越州窯系青磁

183

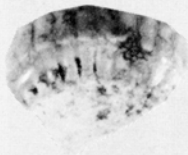


187

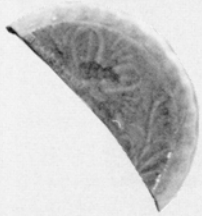
188



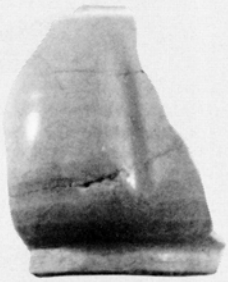
184



189



190

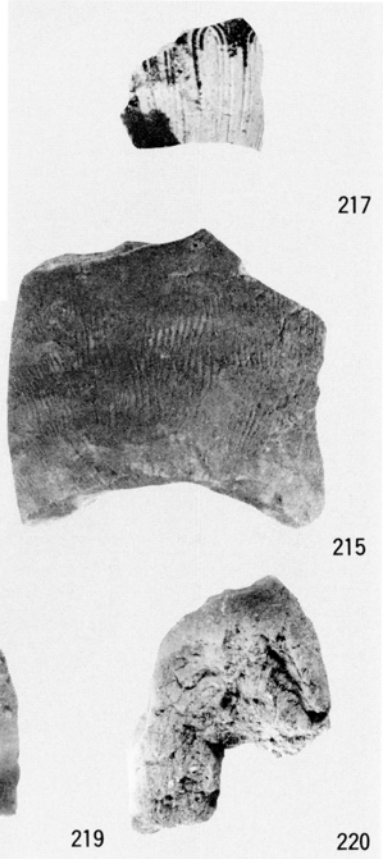


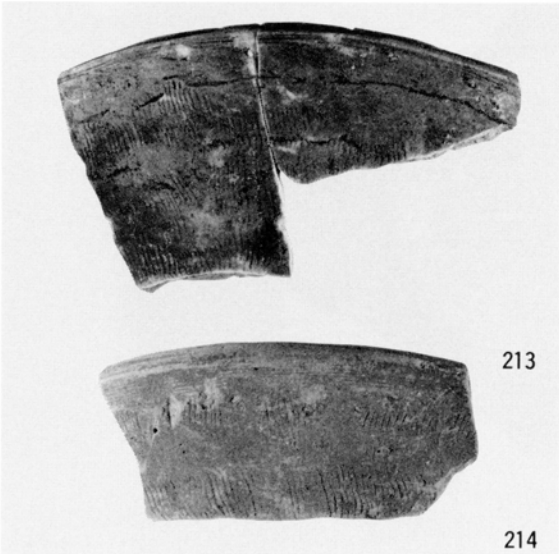
186

194

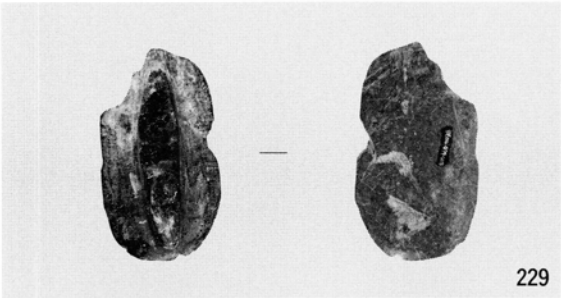
SD100出土陶磁器

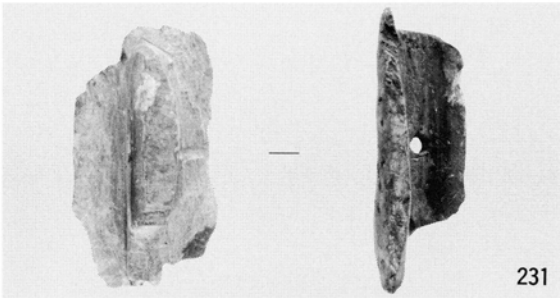
SD100出土高麗青磁

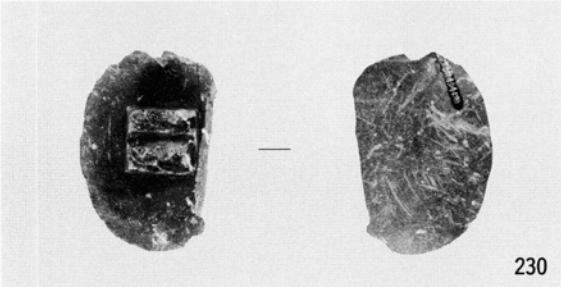


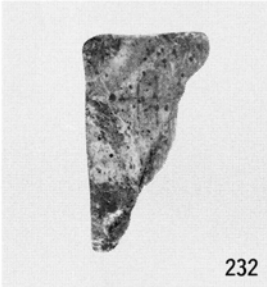


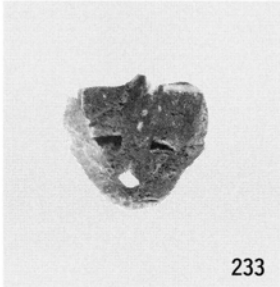
SD100出土陶器・瓦質土器・鞴羽口

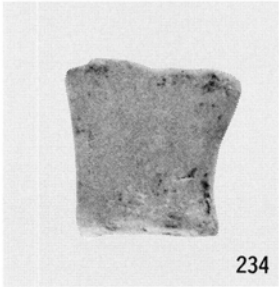


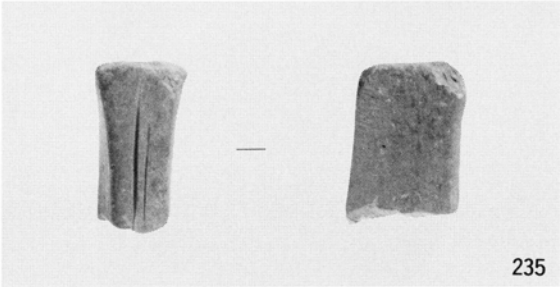


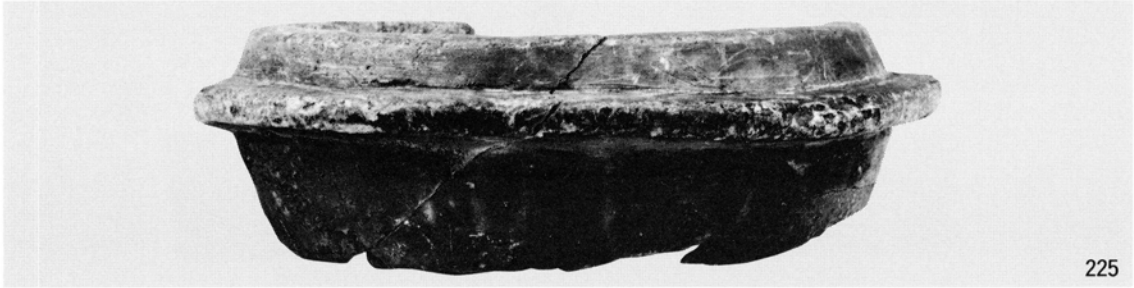


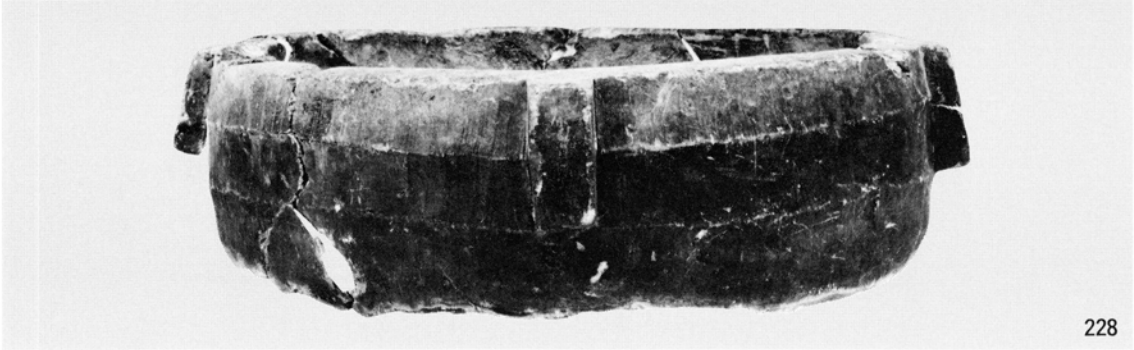




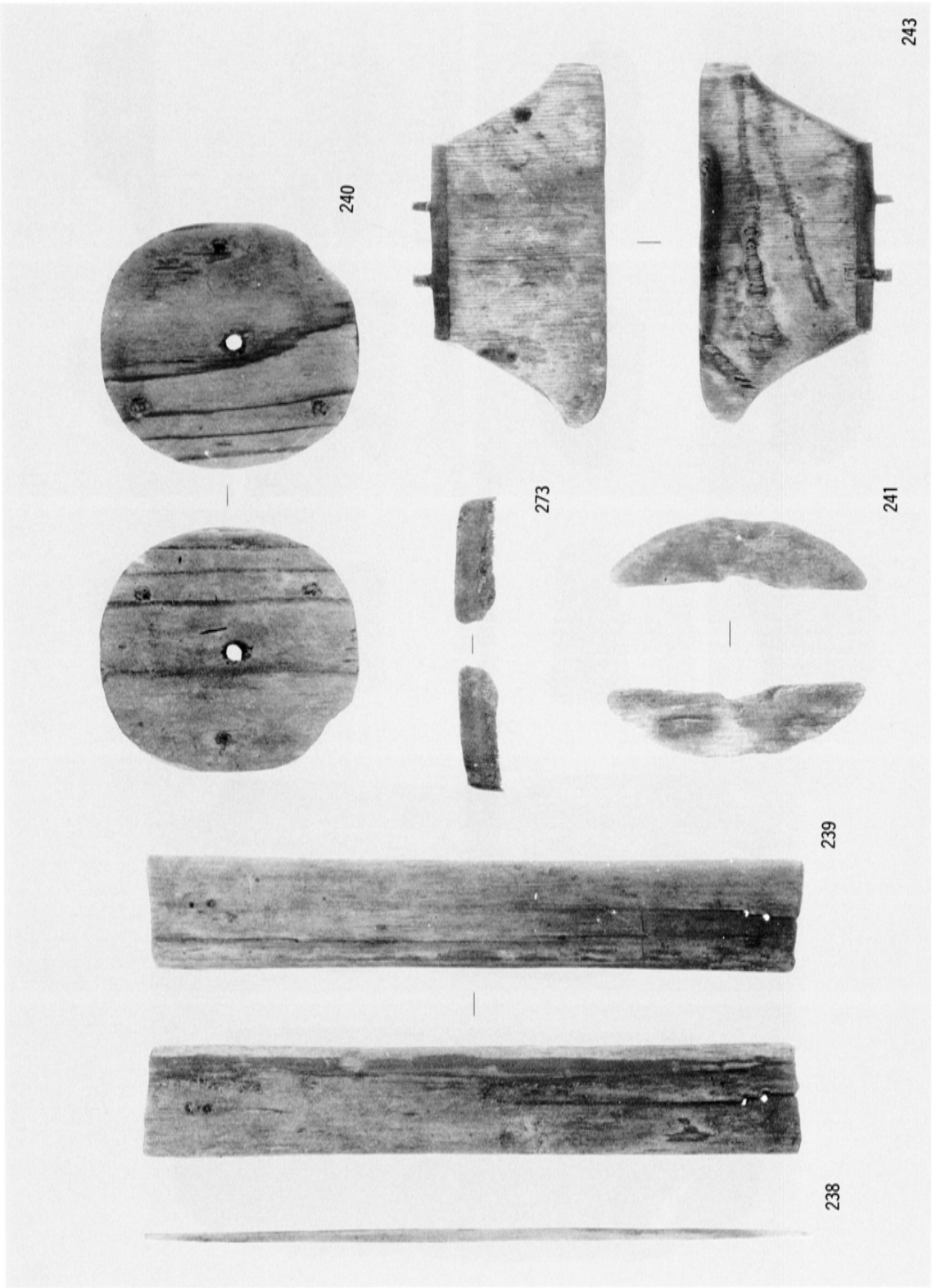




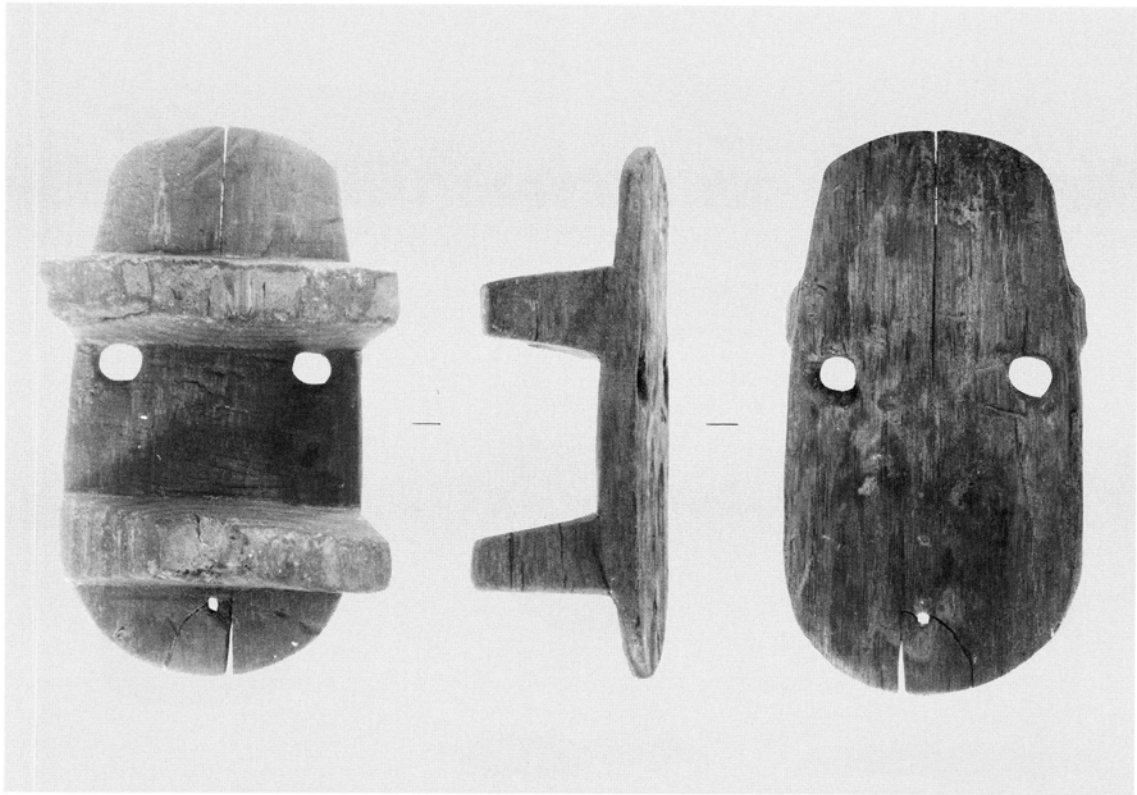


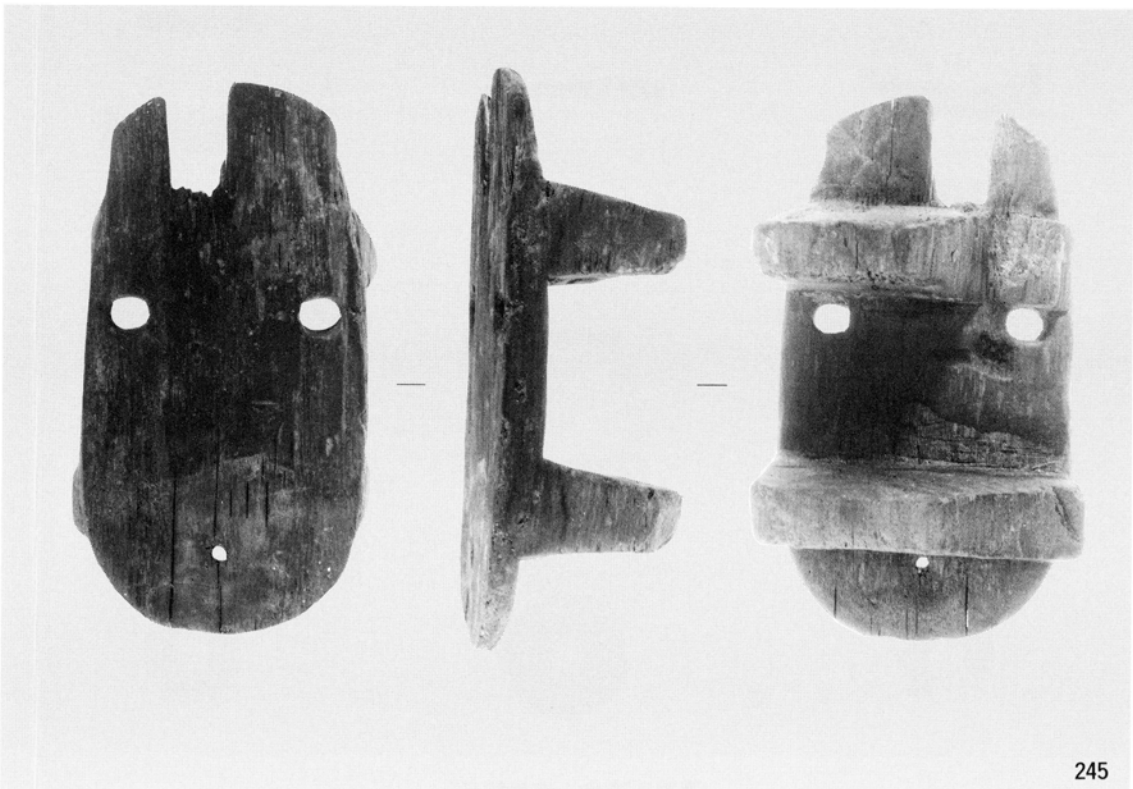


SD100出土石製品

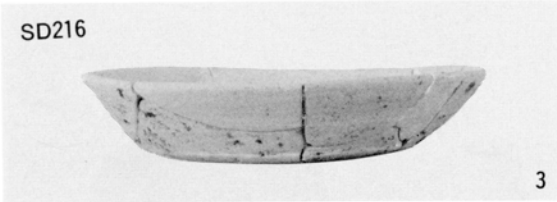


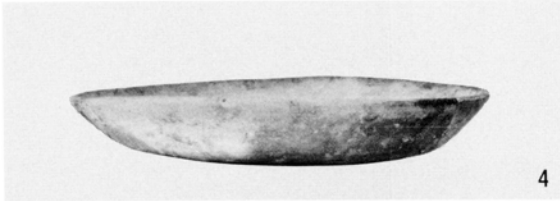
SD100出土木製品（1）

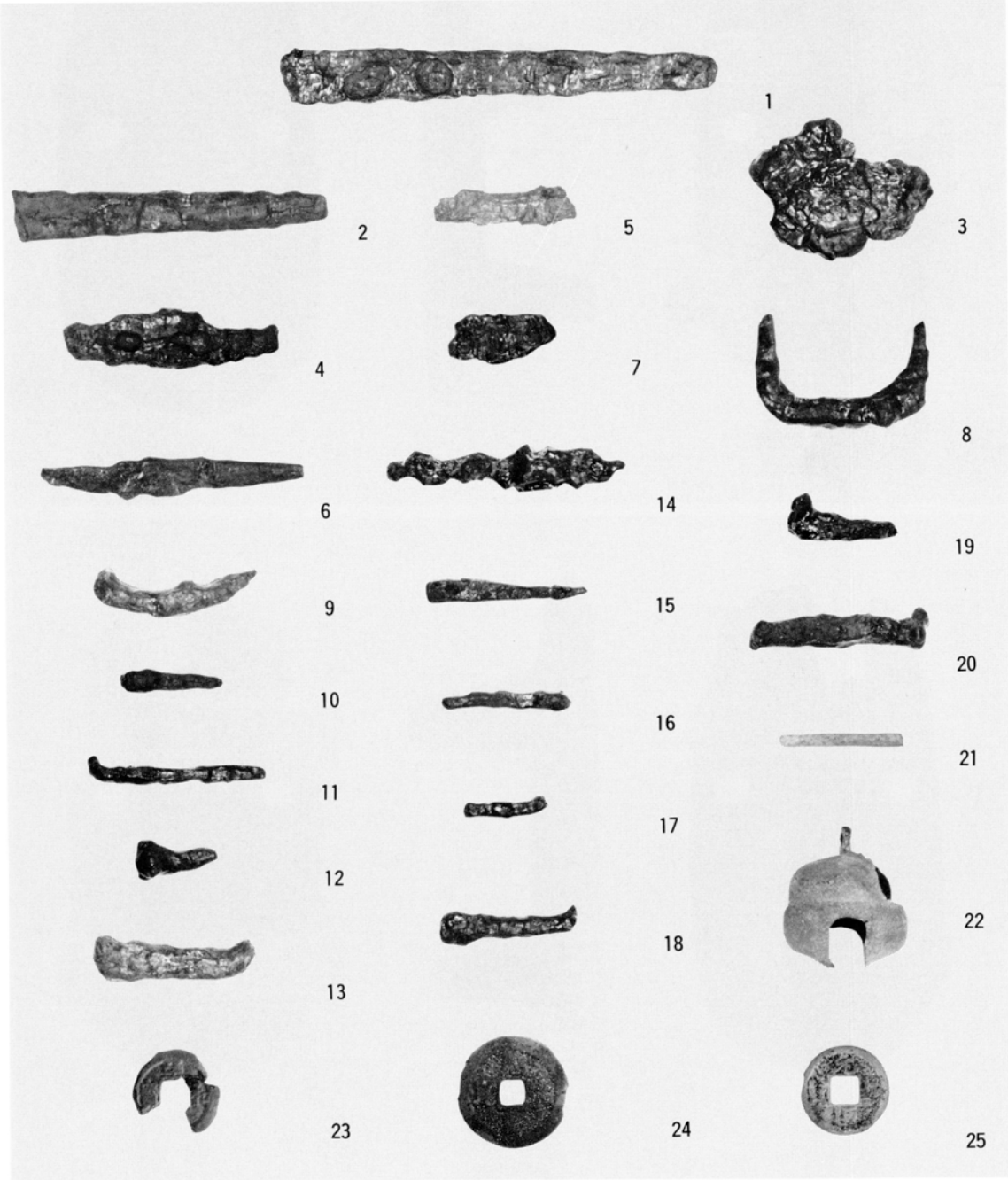




SD100出土木製品（2）







溝出土遺物・金属製品

福岡市早良区
田村遺跡
－V－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集
1988年3月31日

編集・発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10の29
印　　刷　ダイヤモンド印刷株式会社